

魔法少女リリカルなのはINNOCENT ～漆黒の剣士～

夜神

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

西暦20XX年――夏。とあるゲームが衝撃と期待新星爆発のように現れる。その名はブレイブデュエル。その戦いはデュエルと呼ばれ、プレイヤーはデュエリストと呼ばれる。夜月翔はロケテストから参加しているデュエリストであり、ブレイブデュエルの一般解放される日から物語は幕を開ける。※連載中の魔法少女リリカルなのは 黒衣の魔導剣士の INNOCENT版です。また今作は『暁』の方でも連載しています。

目次

第1話	「ホビーショップT&H」	1
第2話	「初来店」	7
第3話	「カードローダー」	15
第4話	「乱入者、そしてデュエリスト」	22
第5話	「放課後、T&Hへ」	28
第6話	「コミュニケーション」	36
第7話	「ダークマテリアルズ」	48
第8話	「小鴉丸からの招待状？」	60
第9話	「八神堂」	69
第10話	「星光の殲滅者」	77
第11話	「スカイドツジ」	87
第12話	「お茶目なシュテル？」	94
第13話	「終盤……だけど」	101
第14話	「親戚、現る」	109
第15話	「T&Hのお姉さん？」	115
第16話	「天才」	120
外伝 第1話	「八神堂の店員」	127
第17話	「チヴィット」	135
第18話	「フロリアン姉妹」	142
第19話	「小学生達の現状」	149
第20話	「T&HエレメンツVS漆黒の剣士」	154
第21話	「歓迎会」	161
第22話	「従妹は思春期」	170
第23話	「従妹VS小狸」	177

第24話	「漆黒の剣士VS白刃の騎士」	184
外伝 第2話	「真夏の公園で」	196
第25話	「星光とのお出かけ」	206
第26話	「好敵手は災いの元？」	215
第27話	「騒がしくても」	225
第28話	「山彦市での出会い」	237
第29話	「憧れと感謝は程々に」	246
第30話	「燃える小学生」	256
第31話	「ふたりは小悪魔？」	267
第32話	「金色の姉妹」	278
第33話	「王さまと一緒に」	288
第34話	「憧れの人」	296
第35話	「真夏のデート？」	304

第1話 「ホビーショップT&H」

ふと見上げれば、いつもと変わらない青空に大きな入道雲が浮いていた。

空や雲に興味があったわけではないが、ここ最近つい見てしまうのは今日から始まるVR技術を用いたゲーム《ブレイブデュエル》の影響だろう。

ブレイブデュエルは簡潔に言えば、3Dで出来たキャラクターを自分の思ったとおりに動かして遊べるゲームだ。ワールドの中には『空』もあるため、大空を自由に飛ぶという現実では味わえない体験ができる。

このゲームを開発したのは、地方都市にいる研究者。ある意味では変わり者と呼べる人物だ。その人物の名前はグランツ・フロリアンと言い、俺の知り合いでもある。知り合いの理由は俺の叔母が開発に携わった研究者のひとりだからだ。彼女も同様に変わり者だと呼べる性格をしている。

「……考え込んでる場合じゃないな」

ここ海鳴市にはT&H、八神堂、グランツ研究所と3箇所ブレイブデュエルが行える場所がある。今日の15時から一斉にスタートするらしいので、行えるという表現はまだ早いのだが。

叔母が開発に携わっていたために、俺はブレイブデュエルのロケテストに参加していた。そのためブレイブデュエルを行える3店舗の人達とは面識がある。今日は開店初日ということもあって、T&Hの店長達から手伝いを頼まれていたのだ。

なぜT&Hなのかというと、他の店舗にはロケテストに参加していた人物や実力者が多くいるのだが、T&Hにはふたりほどしかない。おそらくだが手伝いの内容は、ブレイブデュエルのエキシビジョンマッチや説明になるだろう。

「すみません、遅くなりまし……」

「はいーいごめんよー、どいてどいてー!」

T&Hに入ると、荷物を積んだ台車を勢い良く押す女性の姿が見え

た。彼女を避けた店員達は、一斉に文句を言うが、それに対して彼女は「ごめんね」と軽く謝罪するだけだった。

女性の名前はエイミィ・リミエツタ。T&Hの店員でありチーフを任されている。開店初日ということで忙しいのは分かるが、張り切りすぎではないだろうか。転んだりして余計な仕事を増やすのではないかな不安になる。

「空回りしなければいいけど……」

「そうね」

漏らした独り言に返ってきた言葉に、俺は声がした方へと自然に視線を向けていた。

そこにいたのは緑色の長い髪をポニーテールにしている女性だった。彼女の名前はリンディ・ハラオウン。この店の店長を務めているひとりだ。

「凄く張り切ってるみたいだし……ショウくん、何かあったらフォロ―頼めるかしら?」

「それは構いませんけど……臨時の手伝いにチーフのフォロ―頼んでこれからやっていけるんですか?」

「これは耳が痛いわね」

苦笑いを浮かべるリンディさんから店員が身に付けるエプロンを受け取ると、この場に近づいてくる足音が聞こえた。

「あらショウくん、よく来てくれたわね」

声をかけてきたのは、プレシア・テストロッサというリンディさんと同じこの店の店長を務めている黒髪の女性だ。アリシアとフェイトというふたりのお子さんがあるのだが、子持ちには見えないほど若々しく見える。まあこの点はリンディさんも同じなのだが。

「約束してましたからね」

「ふふ、今日はお願ひね……ただ」

にこりと微笑んだままなのだが、プレシアさんから発せられる雰囲気が変わった。この人の雰囲気が変わるのは、大抵範囲が決まっているのでこれから言われることは予想できる。

「サボって私の娘達とイチャイチャしたりなんかしたら……フッフ」

「はあ……そんなことしませんから安心してください」

「それは娘達に魅力がないということかしら？」

なぜそうなる？

正直に言つて、プレシアさんは親バカだ。その部分が出ると面倒臭くて仕方がない。というか、今の場合は否定したら終わるところだろう。否定してもさらにいちやもんをつけられるのはおかしい。

「プレシア、バカなこと言つてないで仕事に戻るわよ。もう少しで下校時間なんだから」

「バカなこと？ リンデイ、何を言っているの。アリシアはもう6年生、フェイトだつて4年生なのよ。女の子は早熟だつて言うし、好きな子が出来てもおかしくないわ。というか、あの子達に好きな子がいないとしても、あの子達を好きな子は絶対にいるはずよ。だつてあの子達可愛すぎるもの……」

黒いオーラのようなものを感じ始めた俺は、この場から離れたいたいという思いで胸が一杯になった。そんな想いをリンデイさんは察したのか、目で俺に自分がプレシアさんの相手をするからと言つてくる。彼女の好意に素直に甘えることにした俺はそつと歩き始めた。

「フェイトっ。どう？ だいじょうぶっ？」

「うん、ちゃんと動いてるよ」

手荷物を片付けエプロンを身に着けて作業していると、少女と思われる声が聞こえてきた。視線を向けてみると、金髪の少女がふたり視界に映る。背の高い少女は、ブレイブデュエルを行う際に入るカプセル型のシミュレーターに入っており、もうひとりの少女はその目の前に座っていた。

「もうすぐ稼動だからね、きつちりチェックしておかないと」

「そうだね。楽しく遊ぶためにもできることはしておこう、お姉ちゃん」

座っている少女の言葉にシミュレーターに入っている少女が返事をする。

見た目で言えば、シミュレーターに入っている背の高い少女が姉のように思えるが実際は逆だ。座っている少女——アリシア・テストタ

ロツサが姉。シミュレーターに入っている少女——フェイト・テストアロツサが妹である。

これは予想だが、背丈や性格の問題もあって初対面の人間はフェイトのほうを姉だと思うだろう。俺も最初はそうだったのだから。

「あつ……」

ふとフェイトと視線が重なった。俺が手伝いに来るということはリンデイさん達から聞いているはずなので問題はない。

作業の途中ということもあって軽く手で合図してこの場から離れようと思ったが、フェイトの声によって俺の存在に気が付いたアリスアが振り返った。こちらを見た彼女の顔は、先ほどまでよりも一段と笑顔になる。

「シヨウ、おつひさ〜」

手を振りながらそう言った後、アリスアはこつちに来いと手招きをする。

彼女達と面識がないわけでないし、別に行ってもいいのだが……さっきのプレシアさんの様子からして、一緒にいるところを見られると厄介なことになりそうだ。だがここで無視するとあとで絡んできそうだし、そこを見られたほうが面倒臭いような気もする。

「アリスアは今日も元気だな」

「もつちろん。何たって今日の15時から一般解放だからね。元気がじゃないと1日持たないよ」

個人的にずっと元気を振りまいている方が疲れると思う。今の状態をキープできるあたり、さすがは子供だ。俺もアリスアとそう年は変わらないし、ただでさえ彼女は相手から実年齢よりも下に見られることが多い。子供と言うと間違いなく怒るだろう。口にしないのが賢明だ。

「まあ今までになかったゲームだから、かなりの人数が来店しそうだしな」

「そうですね。正直凄いなと思います、このブレイブデュエル。こんなゲームは初めてです」

「ジャンルは体感シミュレーションってやつだね。ゲームが好きな子

はもちろん、身体を動かすのが好きな子も絶対楽しめるよ」

アリシアは会話に参加しながらもきつちりと作業を進めている。何というか、将来は仕事ができる女性になりそうな雰囲気を感じた。余談だが、彼女の傍には愛犬であるアルフと愛猫であるリニス2世がいる。

「うん、私も凄く好きになっちゃったし……色んな人と遊べるといいな」

「その意気、その意気♪ フェイトはうちのエースなんだから頑張ってもらわなくっちゃ」

「う、うん、頑張るよ」

まだ小学生であるはずのふたりだが、考えていることは他の店員と変わらなさそうだ。正直に言っ立派な心がけをしていると言わざるを得ない。プレシアさんが可愛がるのも無理はないと思える。

「頑張るのはいいけど、ちゃんと相手に合わせて遊ばないと客が減るかもしれないよ。何たって君はロケテスト全国2位の実力者なんだから」

「は、はい」

「……まあ言ったものの、君なら問題ないと思ってるけどね。アリシアよりしっかりしているから」

「え……まさかここでわたしが貶される?」

くるりと顔をこちらに向けるアリシア。その顔はどこことなく不機嫌そうだったので、謝罪の意味を込めて頭を軽く何度か叩いた。こういうことにあまり抵抗を感じないあたり、俺の中での彼女はフェイトよりも子供なのかもしれない。

「シヨウってこういう感じで女の子のことたらし込んで?」

「もしそうだったら、今頃ここにはいないと思うぞ」

「だよね、というかシヨウって人付き合いかあまり得意じゃないし」

確かに誰とでも仲良くなれるわけではないが、なぜそれをこの子に断定の形で言われなければならないのだろう。

「お姉ちゃん、それはいくら何でも失礼だよ」

「大丈夫、大丈夫。わたしとシヨウの仲なら……ね！」

「ん、個人的にはそこまで親しくなった覚えはないけど」

「ええっ!？」

アリシア、俺は人付き合いがあまり得意ではないと君が言ったはずだ。

こんなに驚くということは、内心ではそのようなには思っていないなかったということなのだろうか。もしそうなら今よりも彼女への心境は変わるかもしれない。微々たるものである可能性は否定しないが。

「結構おしゃべりしたのに……フェイトと一緒にこのお店の注目デューリストとして頑張っ行ってもらおうと頑張ってたのに」

「……嫌ってるつもりはなかったけど、今ので嫌いになってきたよ」

「ああ、うそそうそ、うそだから！」

立ち去ろうとした俺をアリシアは即座に引き止めた。現状をプレシアさんに見られでもすれば、間違いなく厄介な展開になるだろう。一般解放までの時間も着実に迫ってきているし強引に振り切るべきか。

「分かった、分かったから放してくれ。俺も自分の仕事しないといけないんだ。時間もなくなってきたよ」

「本当に嫌ってない？」

「嫌ってるならそもそも話したりしない」

「ならOK。じゃあお仕事頑張ってね」

「はいはい」

「フェイト、次のテストに行こうか」

「うん……」

「フェイト? ……はは、くん、もうちよつとシヨウとしゃべりたかったんだ」

「ち、違うよ! そんなんじゃ……!」

「ん? どうかしたのか?」

「な、何でもありません!」

第2話 「初来店」

空には雲が確認できるが、太陽を覆ってはいない。それに加えて今の季節は夏。外の気温は、何もしなくても汗ばんでしまうほど暑い。外にいるのはホビーショップT&Hの手伝いが終わった、からではない。店内には大人から子供まで様々な年代の人間で溢れており、現在進行形で手伝いの真っ最中だ。

中が賑わっているのに外にいないことからサボりだと思われるかもしれないが、俺はブレイブデュエルの宣伝と客の案内のために外にいるのだ。充分に仕事と言えらるだろう。

ただ本音を言えば、さつさと快適な温度に空調管理してある店内に戻りたい。だが戻ろうとすれば、すぐにバレてしまう。全く元気の衰えていないアリシアがすぐ傍にいるから。

「ねえねえ、次は誰に声をかけよっか」

「誰でもいいと思うけど」

「良くないよ!」

振り返ったときは笑顔だったが、俺の返事で気分を害したのかアリシアの顔に怒りの色が現れた。彼女は、腰に手を当てながらこちらに身体を向けさらに続ける。

「変な人とか入れちゃったら、わたし達だけじゃなくてお客さんにも迷惑かけちゃうよ。そうになったら、うちの評判が最悪になっちゃうでしょ」

言っていることは正しいが、外見だけで変人だと分かる人間はそういないと思う。外見で判断が付くのなら、ここに来るまでに通報されて捕まっているだろうから。

「シヨウ、ちゃんと聞いてる?」

「聞いているよ。というか……誰でもいいとは言ったけど、そこに変な人は入ってない。年齢は問わないって意味で言ったただけだ」

「それは分かっているよ」

さらつと返事をしてきたアリシアに苛立ったのは言うまでもない。ただ年下……それも女の子に手を出すような真似をするつもりはな

い。ゲームなどなら話は別だが。

構ってほしいのか絶え間なく話しかけてくるアリシアの相手をしつつ、店に興味を示している人間を探していると、不意に服を引っ張られた。

「ねえねえ」

「今度は何だ？」

「あの子達とか良さそうじゃない？」

アリシアが示した先には、私立海聖小学校の制服を着た少女達が見えた。

ツインテールの栗毛の少女は、ひとりだけ遅れて走っていたのか息遣いが荒くなっている。彼女の前には微笑んでいる紫がかつた黒髪の少女。そして活発そうな印象の金髪の少女がT&Hを見て目を輝かせている。

「よくやく着いたわね。ホビーショップT&H、ここで間違いないわ」
何を言っているかはよく分からないが、看板を見ていることからT&Hに用があつてきたのは間違いないだろう。

普通に考えれば、ブレイブデュエルを行いに来たと思われる。アリシアの言うとおり、あの子達に声をかけるのは問題がなさそうだ。

「さっそく噂のすっごいゲームを見に行くわよ」

「うん……でもこんなに大きいと探すのが大変じゃないかな」

「お店の人に案内を頼んだ方がいいかもしれないね」

声をかける相手も決まったため、アリシアに声をかけようと視線を向ける。が、先ほどもまでの場所に彼女の姿はなかった。

いったいどこへ行ったのか、と思い周囲を見渡すと、少女達の元へ向かっているアリシアの姿があった。こちらの返事を待たずにひとりで行くのならば、何故俺に声をかける必要があつたのか疑問でならない。

「ようこそT&Hへ♪ 何かお探しかな？ お姉さんが案内してあげるよ」

アリシアは太陽のような笑顔で話しかけたと思われるが、少女達の返答は沈黙だった。彼女達の表情を見る限り、お姉さんというところ

に疑問を抱いているのだろう。はたから見ても少女達よりもアリスアのほうが背が低いため、無理もない話だ。

「お店のロゴが入ったエプロンしてるけど……」

「お店の子……なのかな？」

周囲に聞こえないように金髪と黒髪の少女が会話しているが、何となく会話の内容は理解できる。会話に参加していない栗毛の少女も分かっているような顔だ。ある意味苦笑いとも言えそうな顔だが。

——というか、何故アリスアは小首を傾げているんだ。少女達の思考は大抵の人間が分かることだぞ。これまでに年下だと間違われたことがないのなら理解できるが、俺の知る限りそれはないはずだ。

話が進まない可能性を考えた俺は足早に少女達の元へ近づいて行く。店の手伝いをしているのか、アリスアの面倒を見ているのか分からないなりにつつあったが、その疑問は胸の深いところに仕舞っておくことにした。

「君達ちよつといいかな？」

声をかけると、全員の視線が一斉にこちらへ向いた。少女達の顔には焦りや緊張の色が見えたが、アリスアと同じエプロンを着けていることで店員だと判断したのかすぐに消えた。

「何だか戸惑ってる感じだったけど、この子が何か変なこと言った？」

「むう、わたし変なこととか言ってるよ」

「君には聞いてない」

俺とアリスアのやりとりが面白かったのか、少女達は笑い声を漏らした。俺達が視線を向けると、怒られるとでも思ったのかすぐに口を閉じ返事を始める。

「あ、あの、別に変なこととは言われてないです」

「ほら、わたし嘘言ってるじゃなかったでしょ。あつ、そういえば自己紹介がまだだったね。わたしはアリスア。アリスア・テスタロッサだよ」

ちんまりとした少女は、言い終わるとこちらに視線で挨拶をするように促してくる。しっかりしているように思える反面、実年齢を知らない人間からすれば背伸びをしているようにも見えなくもない。

「俺は夜月翔」

「もうちよつと愛想良く挨拶できないの？ そんなんじや覚えてもらえないよ」

「覚えてもらわなくていいよ」

俺は臨時の手伝いであつてT&Hの人間じゃない。下手に覚えられると誤解されてしまうではないか。

「そんなんだから友達が少ないんだよ……で、あなた達は？」

「え？ えつと、その……あの」

この子、自由だな。人に悪口言っておきながら他人に名前を聞くか普通。栗毛の子、予想してなかった出来事に完全に焦ってるじゃないか。

というか、そもそも何でアリシアは断定するのだろうか。ロケテストがあつたために顔見知りではあるが、交友関係が分かるほど交流があつた覚えはないのだが。

「高町なのはだよ。はじめましてアリシアちゃん……えつと」

「好きに呼んでくれていいよ」

「あつ、ありがとうございます。じゃあショウさんって呼ばせてもらいます」

好きに呼んでくれていいとは言つたが下の名前か……まあ小学生なら下の名前で呼ぶのに抵抗とかあまり感じなさそうだし普通と言えば普通なのか。

「あたしはアリサ・バニングスです」

「月村すずかです。よろしくお願いします」

「ああ、よろしく」

印象としては全員礼儀正しい……いや、本来は標準レベルなのかもしれない。アリシアという存在がいるせいかな、余計にそう感じてしまっただけ。

「それでなのは達は今日は何を見に来てくれたのかな？」

「えつとね……」

「あたし達、噂の凄いゲームを見に来たのよ」

「でもお店が大きくてどこにあるのか探すのに時間がかかりそうだし、案内してくれると助かるんだけど」

「なくんだ、それなら早く言ってくればいいのに」

言いたくても言えなかったのではないのか。何とまでは言わないが……口に出したらまた脱線する可能性が高いし。

アリシアを先頭にしてT&Hの中へと入り、高町達の目的のゲームがある最上階へと向かう。最上階には、体感シミュレーションゲーム《ブレイブデュエル》を中心に人だかりが出来ていた。外に出る前よりも増えているように感じるのは、ゲームをした人間も帰らずにまだ並んだりしているからだろう。

「最上階のここが当店自慢の体感シミュレーションゲーム、その名もブレイブデュエルが遊べる場所だよー」

「うわー、さすが目玉商品だけあって凄い人ね」

「ほんとに……」

バニングスと月村は人の多さに素直な感想を述べる。まあ他の階層に比べれば人数が段違いなので無理もないだろう。ただ高町だけは、人の数に戸惑いや感心を見せる様子もなく口を開いた。

「これってどんなゲームなの？」

「簡単に言うと、3Dで出来たキャラを自分で身体を動かした通りに操って遊ぶゲームだよ。ぼくちやるりありてい？　って感じの名前だったかな。そういうゲームの種類に入るみたい」

「な、何だか難しそうね」

「私達にできるかな……」

アリシアの説明に金髪と黒髪の少女は不安げな表情を浮かべる。今の説明では、ブレイブデュエルについてあまり理解できていないだろうからおかしくはない。とはいえ、アリシアを責めることもできないだろう。この手のものは口で説明するよりもやってみたほうが理解できるのだから。

「だいじょくぶ！　わたしの妹も凄く上手いんだから。とりあえず遊んでみようよ」

「それじゃあアリシアちゃん、遊び方教えてもらってもいいかな？」

「かしこまりっ♪」

元気に返事をしたアリシアは、周囲を見渡し始める。停止した彼女

の視線の先には、話し合いをしている店員達の姿があった。おそらくゲームのために誰かに協力を頼むのだろう。

関係のない話になるが、少女達はアリシアの年齢を疑っていたはずだ。それなのに彼女の妹がゲームが上手いという点はスルーした。早く遊びたいから気にならなかったのなら理解できるが、違った場合は予想が付かない。

「それでは助っ人さんを……エイミー」

「ん？ はいはい。呼ばれて駆けつけエイミーさんですよ」

こんな軽いノリで登場するのがチーフだなんて誰が思うだろうか。大抵の人間は親しみやすいお姉さんくらいで、チーフは別にいると思っっているのでは？

「右からアリサ、すずか、なのは。ブレイブデュエルを遊びに来てくれたんだって」

アリシアに紹介された3人は一斉にエイミーに挨拶をする。元気な挨拶にエイミーは嬉しそうな表情を浮かべて感想を漏らし、アリシアとハイタッチ。このふたりのテンションについていける自信はない。

「案内を手伝ってほしいんだけど……だいじょーぶ？」

「まっかせといて。ちょうど今手が空いてるところだし」

「よし、それじゃあわたし達がばっちり案内しちゃうから。みんなはしっかり聞いててね」

高町達は仲良くかつ元気に返事をした。それを見たエイミーはしみじみと何かを噛み締めているような表情を浮かべる。その間にアリシアは彼女達にそれぞれ2つのアイテムを渡した。

ひとつは《データカートリッジ》。ブレイブデュエルのプレイヤーの証であり、様々なデータを記録できる大事なアイテムだ。

もうひとつは《ブレイブホルダー》。カードデッキを保存するアイテムであり、例えるならばRPGゲームに登場する道具袋のようなものだ。

「ちなみに、なんとー！」

「両方とも開店サービスでプレゼントしちゃうよー！」

「その代わりたくさん遊びに来てくれるとお姉さん嬉しいな」

「ありがとうございます」

「こうやって入りやすくしてお客を掴むのね……上手い商売だわ」
「もうアリサちゃん……」

最近の子供はマせていると聞くが、高町以外の少女達は多方面にマセ過ぎじゃないだろうか。小学生が商売なんて普通は考えないだろう。家の人が商売人なら話は変わってくるが。

「……エイミーが手伝うのなら俺は別のところに行くから」

「え？ ダメだよ」

おかしいことは言っていないはずなのに、なぜ即行で否定されたのだろうか。3人いたところで説明できる内容は俺が抜けた場合と大差ないはずなのに。

「理由は？」

「なのは達は初めて遊ぶんだよ。だからシヨウは先輩としてアドバイス」

適当な返答が来るかと思っただが、まさかのまともな理由だった。

年齢的にフェイトのほうが適任だと思うが、彼女は今頃エキシビジョンマッチをしているはずだ。アリシアも経験者だが、ゲームの操作をするとなると俺が妥当だろう。

理解した、という返事をしようとした瞬間、遠くから歓声が聞こえてきた。自然と全員の視線が声がする方へと向く。見えたのは興奮して何かを見ている男女達だった。

「いったい何なのよ？」

「ちようどエキシビジョンマッチの最中だったみたいだね。ほら、あそこのスクリーンでプレイ状況が見えるよ」

アリシアが指した先には巨大なスクリーンがあり、黒衣を纏った少女が映っていた。彼女は漆黒の斧のようなデバイスを構え、雷光のような速さで男性プレイヤーに接近していく。

男性プレイヤーが反射的に《シユートバレット》と呼ばれる魔法を放つが、少女は一瞬にして斬り裂いてみせた。距離が近かったこともあって、男性プレイヤーは爆発に巻き込まれてダメージを負う。生じ

た隙を見逃さず黒衣の少女は、《プラズマスマツシャー》という砲撃魔法を放った。その一撃によって勝敗が決した。

「あの子、勝っちゃった……」

「相手は大人なのに」

「あの子はね、うちの誇るエースなんだ。すごいでしょ」

バニングスと月村が驚いたことは理解できるが、ブレイブデュエルはゲームだ。ゲームは腕さえあれば勝てるものであるため、子供が大人に勝つことだって充分にできる。楽しみながらプレイしていれば、必然的に考えることも増えるだろう。この子達もプレイし続けていれば、いつかフェイトのように大人に勝つ日だって来るはずだ。

——それにしても、高町って子だけは違った反応をしているな。見惚れているとも言えはいいだろうか。おかしい意味で見惚れているのではないと思うが……いや、彼女とは今日会ったばかりだ。本人がどう思っているように口を挟める立場じゃない。

「ね、面白そうでしょ？」

「うん」

「それじゃあ、次は必須アイテムを作りに行こうか」

第3話 「カードローダー」

「これは夢のスーパーマシン！」

「その名も《カードローダー》だよ！」

手で対象を注目させながら言われた言葉に少女達は声を漏らす。俺はなぜふたりで言う必要があったのか、と首を傾げる。

……ふと思っただが、俺はアリシア側に立っていいのだろうか。これといって質問されるわけでもなければ、話しかけられるわけでもない。そもそも異性の年上に話しかけるなら、アリシアやエイミイに話しかけるほうが少女達は気楽だろう。やはり俺がこの場にいる意味はないのではないだろうか。

「まずはなのはちゃんからやってみようか」

「あつ、はい」

「ここにカートリッジを入れてみて」

エイミイの指示に従って高町はカードローダーへと入り、カートリッジを差し込んだ。初めて経験する彼女は不安だったのかエイミイに確認を取る。

「これで大丈夫ですか？」

「うん、おっけー。そしたら次に……」

確かこの後は身長に体重、年齢、性別を入力するはずだ。

高町の年代なら身長や性別、年齢も気にしないだろうが、女子は男子よりも早熟と言われている。彼女達も体重を人に知られたくないはずだ。カードローダーは周囲から見えないように作られているが、少し離れていたほうが確実だろう。

「あつ、シヨウどこに行くの？」

「別に少し離れるだけだよ」

「何で？」

「何で……って、他人の個人情報を知る趣味はないからだけど」

俺の言葉に何を思ったのか、アリシアの笑顔が一段と明るくなった。別におかしなことは言っていないはずだが。

「うんうん、良い心がけだね。さすがわたしの彼氏」

アリシアの言葉によつて一瞬全員の動きが止まった。そして、一斉に視線が俺に集まる。

——こいつ、いったい何を言うんだ。高町あたりは反応が薄いのが、バニングスつて子は疑いの眼差しで俺のこと見てるぞ。エイミイなんか……いや、考えてないで耳を塞がなければ。

「か、かかか彼氏!? いいいつから、プププレシアさんは……!」

「エイミイ、落ち着け」

「お、落ち着けるわけないよ。かなりの一大事なんだから!」

「一大事でも何でもなし。今のはアリシアの冗談だ。俺にはアリシアの彼氏になつた覚えはない」

「いやいや一大事……って、冗談?」

今までが嘘のようにエイミイから慌しさが消える。彼女が視線で再度確認してきたため頷き返すと、アリシアへと視線が移つた。それに気が付いたアリシアは、舌を少し出しながら謝る。

「ごめんね♪」

「も、もう……驚かせないでよ」

アリシアが根本的に悪いが、エイミイも驚き過ぎだと思ふ。俺とアリシアの付き合いがどれくらいなのか、彼女はある程度知っているはずなのだから。

とうるか……冷静に考えてみると、年齢的にはそう変わらないがアリシアの背丈は小学校低学年の子と大差がない。俺との身長差はかなりのものだ。一緒にいても兄妹や親戚にしか見えないのではないだろうか。

「えつと、じゃあ話を戻そうか。なのはちゃん、身長とか体重をちやちやつと入力しちゃつて」

「あつ、はい」

「入力し終わつたら動かないでね。カメラがトレースするから」

全ての工程が終了し、無事にカードが完成する。出来上がったカードに少女達は興味深々だ。

「これが私のカード……あのアリシアちゃん」

「カードのこと?」

「うん」

「そうだねえ、わたしが説明してもいいけど……そこにいるお兄さんに説明してもらって。あんまり話してないみたいだし」

気が遣える女、と言いたげな顔をするアリシア。別に俺が説明するのは構わないが、最後の部分は余計だろう。そもそも無理に話す必要がないのなら、話しづらい相手と話させる必要はないと思う。

「あのシヨウさん、説明してもらってもいいですか？」

「ああ、構わないよ。それはパーソナルカードと言って一番の基礎になるカード。ブレイブデュエルではカードの強さが自分の操るキャラクター……《アバター》って言うんだけど、その性能に関わってくるんだ」

説明のときにカードを拝見させてもらったが、高町のカードは制服姿のカードだった。ランクはN+のようだ。

「このN+って言うのは？」

「それはカードの強さを表す《カードランク》だよ」

カードランクには《N》、《N+》、《R》、《R+》の4段階があることが確認されている。この上にも存在しているらしいが、今のところ誰も入手できていない。このこともきちんと言えて、さらに続ける。

「ちなみにNのカードはコレクション用に近いカードだから、ゲームで使うのはN+以上のものを使うようにしたほうがいいよ」

「それって、この武器みたいなものを持つてるからですか？」

「ああ、それはデバイスと言ってゲームの説明や君達の補助をしてくれる。簡単に言えば、相棒と言ったところかな」

プレイヤーデータをリセットしない限り自分のことを覚えていてくれるため、親しみやすいように名前を付けるプレイヤーもいる。

ということも言ってもいいのだが、少女達が早くやりたくて仕方がないとうずうずしているのは見ていて分かる。彼女達の気持ちは理解できるため、説明は最低限に抑えるべきだろう。

「N+にはそれ以外にも防具を着たものがあつたりするし、ランクが高くなればアバターの能力も高くなるからゲームを有利に進められる。ランクを上げるにはカードの合成や強化が必要になる……わけ

だけど、まあ遊んでるうちに覚えるだろうから説明はこれくらいにしようか」

すると、すぐさま少女達は肯定の意思を示す。特にバニングスは何度も頷いていたため、よほどやってみたいようだ。

高町以外のふたりのカードが出来上がると、俺は彼女達をカプセル型のゲーム機に案内し、アリシアとエイミーはそれぞれオペレーター的位置に着いた。きちんと真ん中に立つように伝えると、少女達から元気な返事が返ってくる。彼女達とは今日が初対面であるが、アリシアよりも好感が持てる子達かもしれない。

「あっちの準備はOKだ」

「よっしそれじゃあ……ブレイブシミュレーター」

「スイッチオン♪」

「あっ……私が押したかったのにい
「にへへ」

エイミーはアリシアの肩を掴んで揺らし、揺らされる側は楽しそうに笑っている。

「バカやってないでさっさと進めろよ」

本来ならば高町達のほうに意識が向くはずなのだが、子供じみたやりとりをするアリシア達にそう言わずにはいられなかった。看板娘とチーフがこんなんで大丈夫なのか、と思いましたが今は言わないでおくことにする。ふたりの意識をこちらに向けると少女達が待つことになってしまいうだろうから。

「みんな、どお〜?」

『凄いね。こうふわーっとして』

『まさかゲームで無重力体験しちゃうなんて驚きだわ』

『何だか不思議な感覚……』

高町や月村はいいとして……バニングスは驚いているというよりは楽しそうに見える。3人の中のリーダー格だと思っていたが、案外一番子供なのかもしれない。

アリシアは高町に『3人プレイ』で『フリートレーニング』、『ステージ』、『雲海上空』を入力するように指示した。入力したと返事がある

と、次なる指示を出す。

「おっけー、それじゃあブレイブホルダーを胸の前にかかげてコールしてみてください」

『コレを……』

『胸の前にかかげて……』

『ブレイブデュエルスタンバイ!』

コール終了と同時にプレイヤーズキャンが開始される。アリーナ上のランダムな位置に少女達のアバターが生成され始め、続いて彼女達がそれにダイブされていく。

エイミィの前にあるディスプレイに無事全ての工程が完了したと表示されると、目を閉じていた高町達に指示が飛んだ。

『なっ……』

『え……』

『うそ……』

高町達が驚きの声を上げたのも無理もない。彼女達は今仮想とはいえ、広大な空の上にいるのだ。初めてプレイする人間ならば、大抵彼女達のような反応をするだろう。

『なにこれ……どどどどうなってんの、雲の上じゃない!?』

『わわわたしたち、う、浮いてるよアリサちゃん!』

『……』

栗毛と金髪の子、グランツ研究所の人間が見たら喜びそうなくらいに良い反応をしている。ひとりだけ落ち着いているように見えるが、あれはどちらかといえば呆気に取りられているといったほうが正しいかもしれない。

「新鮮な反応ありがとう。これが当店目玉、体感シミュレーションの最新鋭にして最高峰の《BRAVE DUEL》!」

「なのはちゃんの視覚・感覚は今、シミュレーター中央のアリーナにいるアバターと完全にリンクしているんだよ!」

言っていることはいいとして……なぜ無駄にポーズを決めて言う必要があったのだろう。そんなことをする暇があるのなら少女達に次の指示を出すなりすればいいものを。

……というか、あの子達もあんまりふたりの話を聞いてるようには見えないな。風の感覚を味わってたり、浮いてることに微妙な心境になっっているように見えるし。

「ここまですれば、あとは遊びだけだよ」

『……って言われても』

「大丈夫だよ。デバイスが基本的なことは説明してくれるから」

『あつ、そうでした』

3人はそれぞれデバイスと話し始める。デバイスにも性格があるため、どのような説明の仕方をしているのかは分からないが内容的には同じはずだ。彼女達の性格ならば、理解できなかつた部分はあとで質問をしてくるだろう。

高町は唸っていたかと思うと飛び始め、才能があるのか初めてとは思えないほど自由自在に空を駆けている。月村はそれを見ながらも、デバイスからしっかりと説明を受けているようだ。バニングスはといえば、何を言われたのか剣を振り回しながら高町へと攻撃の意思表示をした。彼女が困惑したのは言うまでもない。

『ちよつと待ってよアリサちゃん』

『問答無用よ！ トリガーを引いてから……鞭を打つ感じで、斬る！』
バニングスが思いっきり剣を振ると、炎の刃が飛び出した。どうやら彼女のカードは炎の属性を持っているようだ。

迫り来る炎の刃に高町は慌てた様子だったが、案外さらりとかわして見せた。思ったよりも簡単に避けれると言ってしまったらしく、バニングスの顔に怒りの色が現れる。ムキなつた彼女に高町は何度も攻撃されるが、ものの見事に全て避ける。

『ちよつと！ 大人しく当たりなさいよ！』

『そんなの無茶だよ！』

『ああもう……これならどうよ！』

一度に3つの炎刃を飛ばすバニングス。さすがにそれには高町も動じてしまったようでその場から動こうとしない。

直撃した——かに思えたが、爆煙が晴れると氷を纏ったシールドを展開している月村が現れた。どうやら彼女が高町を守ったらしい。

『もう、ダメだよアリサちゃん』

『た、対戦ゲームなんだし……いいじゃない練習よ！』

逆ギレしているようにも思えるが、動揺が見えることから先ほどの攻撃はさすがにやりすぎたのだと自覚しているのだろう。

バニングスと月村は攻撃と防御に別れて練習を始めてしまい、残された高町はデバイスと話し始める。何を言われたのか分からないが、彼女は次第に落ち込んでいく。今のところふたりとの違いを上げるとすれば属性の有無だろう。落ち込んだのはそれが原因なのかもしれない。

とはいえ、高町はすぐに元気を取り戻し楽しそうにデバイスと話し始める。立ち直りの早さから問題はないだろうと判断した矢先、アリーナ上に乱入者を知らせる表示が現れた。

「何で乱入者が現れ……最後の部分の説明」

「うん、早く始めたくてすっかり忘れてたよ。あはは」

「いや、お姉さんうっかりしてた」

笑って誤魔化すふたりには、怒りより呆れを感じてしまった。看板娘とチーフがこれでこの店はきちんとやっていけるのか不安になる。

とはいえ、そのことを話し合っても仕方がないため、俺はふたりに3人のサポートをするように言っただけでシミュレーターへ向かい始める。

——開店の初日から乱入なんてするのは腕に自信のあるロケテスト参加組くらいだ。おそらく乱入してきた人間は、同じロケテスト参加組だと思っただけ。そのままじゃ一方的にやられる展開になる可能性が高い。

それが原因である子達に「もうブレイブデュエルをしない」と言われたら堪ったものではない。空いているシミュレーターを探するのは大変だがどうかにかしなけば。フェイトはまだ現状を知らないはず。どうにかできるのは俺しかいないのだから。

第4話 「乱入者、そしてデュエリスト」

甲高いコールがなり始めたのは、私がレイジングハートからプレイ時間も限られているのでアリサちゃん達と遊んだらと助言をもらった瞬間だった。

「な、なにになに?」

「このコールは……乱入者です」

レイジングハートが答えた直後、上空から閃光が降ってきた。最低高度まで到達すると大量の光と煙を撒き散らす。乱入者が現れたことに気が付いたアリサちゃん達は、光が落下した場所へと視線を向けた。

「乱入ですって!?!」

「トレーニングモードにしてたはずだけど……」

「……なんだあ?」

現れたのは深紅の衣服に身を包んだ女の子と布を首に巻いたウサギのような人形だった。

「見ねー連中だな……お前らもテストプレイ組か?」

「テストプレイ組? 何のことよ」

「アリサちゃん凄いや……あの子」

すずかちゃんが凄いやと言ったのは、おそらくRクラスのカードで通り名を持つているからだろう。所属にベルカとあるが、それが何を意味しているのかは説明を受けていないために分からない。ただ彼女の言動やカードから察するに実力者だとは理解できる。

「見たところN+が3人……弱いもんイジメは趣味じゃねえが記録更新のためだ。全力でブチのめす!」

女の子はこちらに向かって接近を始めた。手に持たれているハンマーのようなデバイスで攻撃されるかと思うと……あんまり考えたくない。

「ど、どうしようアリサちゃん。こっちに来るよ!?!」

「対戦ゲームなんだし乱入上等よ。行くわよフレイムアイズ!」

アリサちゃんはこれといって戸惑った様子を見せず、剣を大きく振

り下ろして炎の刃を飛ばした。すぐさま動くことができたのは彼女の性格が大きく影響しているのだろう。

「しゃらくせえ！」

女の子は気合と共に迫ってきていた炎の刃を殴りつけ破壊してみた。回避や防御ではなく、破壊というまさかの出来事にアリサちゃんは驚愕する。

お返しと言わないばかりに女の子は鉄球を数個出現させ、持っていたデバイスで打ち出した。爆発的な加速を得て接近してくる鉄球にアリサちゃんはどうすることもできずに直撃。爆発が収まったときには、彼女は宙に浮いたようにぐったりしていた。

「アリサちゃん！……はれ？ 何だか力が抜けて……」

アリサちゃんに続いてすずかちゃんも倒れてしまった。すずかちゃんは何もされていないように見えたけど、ウサギのような人形が近くにるのは見えた。アレが何かしたのだろう。何をしたのかは現状では良く分からないけど。

「何だ、やっぱ大したことねえ……あとはお前か」

「どつ、どうしようレイジングハート」

「私を相手に向け、こちらのスキルを使ってください」

私はレイジングハートの指示に従って、先端を女の子に向けながらスキルを使用する。

「行くよ……デバイスシューター！」

光の球体が4つ現れたかと思うと、女の子に向かって飛んで行く。避けられることはなかったけど、すずかちゃんがアリサちゃんの攻撃を防いだときのようにシールドを展開されてしまいダメージを与えることが出来なかった。それどころかすぐさま反撃されてしまい、今度はこちらが飛来してくる鉄球の対処をしなければならぬ。

——今の私にできること……それは、レイジングハートが褒めてくれた空を飛ぶことを全力でやることだけだ。

動きを観察しながら逃げ回り始めると、鉄球に誘導性があったこともあって3個が衝突し自壊した。その調子で事は進み、全ての鉄球を自壊させることに成功する。避けきったことに喜びを感じた私は、レ

イジンググハートに話しかけた。

「やったよレイジンググハート」

「上です！」

警告が聞こえた瞬間、私の身体は強い衝撃に襲われて吹き飛んだ。アリサちゃん達同様に動けなくなるかと思っただけど、どうにか生き残ることが出来ていた。

このまま何も出来ないで……負けちゃうの？ 一方的にやられて……そんなのは

「案外しぶてーなお前。だけどこいつでしさいだ」

そんなのは嫌だ！

と、強く思っても今の私には負けが決まるまでは諦めずに頑張ることしかできない。勝つための方法は残念ながらないと言える。

そんなことを考えていると、突如どこかで聞いたような声が私に話しかけてきた。

『制服の女の子、《ストライカーチェンジ》を使って』

「ストライカー……チェンジ？」

『君のデッキにはN+のカードが2枚入っているはず。その2枚を出して……あとは君のデバイスが補助してくれる』

誰かは分からないけれど、私は疑問を抱くことなく指示に従った。

すると制服姿だった私のアバターが白を基調とした衣服へと姿を変え、レイジンググハートも槍を彷彿させる形へ変化していた。

「んげ!? あいつ、セイグリットタイプだったのかよ。どおりでバカかてえと思つた……つて、白とか超の付くレアカラーじゃねえか!？」

女の子が驚愕している理由は今の私には分からない。ただ先ほどまでよりも戦うことができることは何となく理解していた。レイジンググハートの指示に従って最後のカードを使用する。

「ディバイイン……バスター！」

先ほどの攻撃よりも直感的に強力だと分かる光線が女の子を飲み込み、爆発すると同時に大量の煙を発生させた。放つ瞬間に見えた焦った顔から、もしかすると勝つことができたのかもしれない。

「勝つた……の？」

「……………てめええええ！」

緊張感が途切れてしまった瞬間、煙の中から怒りを顕わにした女の子が現れた。多少なりともダメージを与えられたと思っていたけど、先ほどもと変わっているのは帽子の有無だけ。

急激な緊張と戸惑いで身体は硬直してしまい、言葉を発することしかできなかった私は女の子が眼前にまで迫ったとき目を瞑った。次の瞬間に来るであろう衝撃に備えて。

「……………あれ？」

いつまで待っても衝撃は襲って来ず、何か硬いもの同士がぶつかるような音が聞こえた私はそつと下ろしていたまぶたを上げた。

「あつ……………」

私の視界に飛び込んできたのは、自分よりも頭一つ分ほど背の高い人の後姿。どちらかといえば細身の体型をしているけれど、その背中を見た私の中には安心感が芽生えていた。

シヨウ・ヤヅキ。所属はミッドチルダであり、使用しているカードはRクラス。黒のコートに同色のレザーパンツ、手に握られている剣型デバイスも黒。それが元になっているのか彼の通り名は《漆黒の剣士》になっている。

「悪いけど、このへんで終わりにしてもらえないか？」

一切焦りのない落ち着いた声が発せられた直後、金属音が響きシヨウさんと女の子の距離が開けた。彼の姿をきちんと見た女の子は驚愕の表情を浮かべた後、強気なように楽しそうな笑みを浮かべる。

「へ……………冗談言うな。お前の乱入は予想外だったけど、ロケテストの時の借りを返す絶好の機会なんだ。そっちのヤローとまとめてぶっ飛ばしてやるぜ！」

「ヴィータ、お前はロケテストの全国ランキングで6位になった実力者だろ。初プレイの初心者不倒すのは気が引けるはずだ」

「お前だって相当な実力……………初心者あ!？」

好戦的な顔から突如発せられた大声にはさすがに驚いた。

その直後、アリーナ上にスクリーンが現れてアリシアちゃんとエイミーさんが申し訳なきように謝罪する。どうやら現状に至ったのは、

私が適当に押ししてしまったボタンが原因だったようだ。説明してくれなかったのも悪いとは思うけど、疑問に思ったのに聞かなかった私も悪いので何も言わない。

この場にいる全員が事情を理解したものの、同意もなしに対戦をやることはマナーを考えると良くないと言える。

とはいえ、いきなり戦いが始まると不安だった私は無意識にシヨウさんに隠れながら女の子に話しかけていた。

「えっと、その……」

「……油断してたとはいえ、あたしに一撃入れたんだ。次は手加減しねえかな」

「戦いたいなら俺が相手をしてもいいが？」

「気が削がれたし、またの機会にする。お前に勝つにはもつと準備したほうがいいだろうしな」

女の子はそれを最後に消えてしまった。初めての光景に戸惑ってしまった私は、シヨウさんのほうへ自然と視線を移す。彼は穏やかな表情を浮かべており、手馴れた動きで剣を振るって背中にある鞘に納めた。この人にとっては何気ないことなのだろうが、スクリーンで見ただあの女の子と同じように私は見惚れてしまう。

「ん？ その、ごめんね」

「え？」

「ちゃんと説明してればこんなことにならなかったからさ……ブレイブデュエルを嫌いにならないでくれると助かるんだけど」

シヨウさんはアリシアちゃん達以上に気にしているのか、こちらの様子を窺うような顔で私のことを見ている。

——初めてのデュエル……びっくりしたり戸惑ったりしたし、あの子に負けそうになったときは悔しかった。でも

「あの、楽しかったです。凄く楽しいって思いました。これからもやりたいです！」

「……そっか」

彼が穏やかな笑みを浮かべた瞬間、ちよつとだけ恥ずかしさのようなものごみ上げてきて視線を外しそうになってしまった。今日

会ったばかりなので緊張でもしているのだろうか。

「なら、今日から君もデュエリストだね」

「デュエリスト?」

「ああ、そういえば言っただけだね。ブレイブデュエルの戦いのことはデュエル、プレイヤーのことをデュエリストって言うんだ」

そっか……私もデュエリストなんだ。

胸の中に様々な想いが込み上げてくる。その中には、いつの日かさっきの子とまた対戦したいという思いもあった。

「……それとさっきの子のことなんだけど、許してあげてくれないかな? 勝負にこだわりすぎるところがあるけど善い子だし、悪いのはこっちだからさ」

「あつ、はい……あ、あの、ありがとうございます」

「……言っただろ、悪いのはこっちだって。礼はいらないよ」

シヨウさんの返事は素っ気無かった。でも表情を見る限り、素直になれない性格なのか照れ隠しでそう言ったように思える。

友達であるアリサちゃんにも似た一面があるため、ちよつとだけ可愛らしく思ってしまった。年上、しかも男の人にその手のことを言うのはダメだと思うので口にはしなかったけど。

不意にシヨウさんは私から視線を外したけれど、すぐにこちらに戻した。どことなく優しい表情を浮かべている彼はいったい何を考えているのだろうか。

「プレイ時間も残り少なくなってるし、外で君達に謝りたそうにしてる子がいるみたいだからさ……一度外に出てもらっていいかな?」

視線をシヨウさんからスクリーンのほうに移すと、アリシアちゃんによく似ている女の子が申し訳なさそうにしていた。おそらくアリシアちゃんのお姉さんで、先ほど私に指示を出してくれた子だろう。

「はい、分かりました……あの、あとでまた出来ますか?」

「それはもちろん。まあ少し待ってもらおうことになるだろうけどね」

第5話 「放課後、T & Hへ」

ブレイブデュエルの一般解放が行われた次の日の放課後、俺はホビーショップT & Hへと歩いている。T & Hに向かっている理由は、昨日は手伝いをしていたためにほとんどデュエルを行うことができなかつたからだ。

今日も大勢の人間が来店するだろうが、昨日と違ってプレイヤー同士で教えあつたりするはずだ。店員達も多少は昨日よりも楽が出来るのではないだろうか。

だが、また手伝つてくれと言われる可能性は充分にある。ただ昨日見ていた限り、T & Hに実力のある人間はテストタロツサ姉妹くらいしかいない。そのためデュエルをしたとしても本気でやることはないと思われる。ブレイブデュエルに関するこの手伝いならば引き受けるのも悪くない。

「……あれは」

前方にどことなく見覚えのある後姿が4つ見えた。

1つは……背丈や髪の特徴からしてフェイトだろう。残りの3つは、昨日出会ったあの子達ではないだろうか。

かばんを背負つたままの少女達は、歩いている方向と昨日の様子から判断してT & Hに向かつていると思われる。小学生が放課後にゲームをプレイしに行つても良いのだろうか、と思ひもしたが、中学生でも大差がないといえばないため、すぐに頭の中からその思考は消し去つた。

追いつくつもりはないのだが、歩幅の違いからか徐々に距離は縮まつていく。距離を保とうかとも考えたが、下手をするとストーカーに間違われるかもしれない。そもそも、別に知らない相手でもないため話しかけられたなら話せばいいし、何事もなく追い抜けたのならそれはそれで問題ない。

「まさか会つた次の日に転校してくるなんてね」

「しかもうちのクラス。すっごい偶然だよね」

「うん、嬉しいな」

どうやらフェイトは高町達と同じクラスになったらしい。その事実に安心感を覚えている自分がいた。他人の俺が思うのもあれだが、個人的にフェイトのことは心配だったのだ。彼女はデュエル中は凜とした印象なのだが、普段はどちらかといえば内気な子だと言える。そのため、学校やクラスに馴染めるのか不安に思ってしまったのだ。

昨日出会ったばかりだが、あの子達が悪い子ではないのは分かる。フェイトも彼女達と一緒にならば楽しい学校生活を送れるだろう。

これは余談だが、フェイトが転校したということは必然的に姉であるアリシアも転校していることになる。だが彼女のことは、性格が性格なので全く心配していなかった。

「私も……転校はやっぱり不安だったから。みんながいてくれて凄く嬉しかった」

「フェイトちゃん……お家も近いみたいだし、これからは一緒に学校に行って、一緒にお昼ご飯を食べて、一緒に遊ぼうね」

フェイトは穏やかな笑みを浮かべていて嬉しそうに見える……が、隣にいる高町のほうが嬉しそうに見えるのは俺の気のせいだろうか。現状では横顔しか見えないわけだが、何とか発せられている雰囲気気がバニングスや月村とは明らかに違うように思えるのだが……。

「それにしても、今のフェイトってブレイブデュエルの時とまるつきリイメージ違うわね」

「そう……かな？」

「初めて見たフェイトは凄いデュエリスト！　って感じだったし」

「大人の人に勝ってたもんね」

大人だからといって、全国ランキング2位のフェイトに勝てというのは厳しい注文だろう。

それにしても、会話が充分に聞こえる距離まで近づいているというのに気づかれないというのは、俺の存在感がないということだろうか。まあ存在感があるほうだとも思っていないし、話すことに夢中になっているようなので別に構いはしないのだが。

「なのはに至っては、初めて見たときとかぼーっとしてたわよね。学

校でもずっとフェイトのこと見てたみたいだし」

「いやっ、あの……カツコよかったなあとか綺麗だなーって考えてただけで」

否定しようとしたんだろうが、この子墓穴を掘ってるな。いきなり
のことで動揺して言ってしまっただけなのだろうが。

「う、うん、ありがとう」

「うう……もうアリサちゃん、ここでそれはひどいよ。私、フェイト
ちゃんのことばかり考えてないのに」

「へえ……ああ、それもそうよね。なのはにはあの人もいたわけだし」
「あの人？」

フェイトのことばかり考えていないと自分で言ったのにも関わら
ず高町は首を傾げている。近しい人間であるバニングスに心当たり
があるのだから、彼女自身が知らないことではないはずだが……天然
なのだろうか。

「何とぼけてるのよ。シヨウさんよ、シヨウさん……あんたにとって
王子様みたいなものでしょうが」

「にやっ!？」

奇妙な驚きの声を上げた高町は顔を赤く染めているのだろう。耳
まで赤くなっているのだから、顔が赤くなっていないはずがない。

——今のくらいで赤くなるなんて純粹なんだな……何か俺まで恥
ずかしくなってきた。そもそも王子様なんて柄じゃないし。という
か、この子は俺の存在に気づいてて一緒にからかっているんじゃない
のか？

「あのさ」

声をかけると、少女達の視線がこちらに集まった。バニングスは慌
てた素振りを見せながら声を上げ、高町は体調が心配になるほど赤面
する。

「シヨ、シヨウさん、いいいつの間?!？」

「さつきから私達の後ろにいたよ。ねえ？」

「うん……私が気が付いたのはさつきだけだ」

「何ですって!?! ……って、さすがにフェイト、知ってたんなら教えな

さいよ！」

バニングスはやる側かと思っていたが、実際はやられる側なのかもしれない。この反応の良さを見ると、俺でもからかってみたい衝動を覚えるのだから。

それと……月村って案外性格悪いんだな。見た感じ大人しそうで気遣いのできそうな子だから少々意外だ。

「シヨウさん、あの……カツ、カツコいいとは思いましたし、王子様と言われたら王子様っぽいなあって思ったりするんですけど！　って、そうじゃなくて……いや思ったのは本当であって！」

「……とりあえず落ち着こうか」

落ち着いてもらわないとこちらとしても困る。あまりこの手のやりとりはしてきたことがないため、正直に言っただけで恥ずかしい。救いなのはこの子が年下であり、小学生であるということだ。同い年だったならば、俺まで赤面していたかもしれない。

「自分で言っておいてなんだけども……ここまでやられると面白さを通り越して同情するわね」

「だったら最初からやらないであげようよ」

「ここまで反応するとは思わなかった……というか、さすがが早くシヨウさんがいるって教えてくれてたら言っただけでよかったわよ」

あそここのふたりは仲が良いな。パーソナルカードは炎と氷っていう正反対の属性持ちだったのに……って、このへんは関係ないか。

でもふたりの性格の方向は明らかに違うよな。下手したらいじめの側といじめられる側になってもおかしくなさそうなくらいに……高町がいたことでそうはならなかったのかもしれない。とはいえ、目の前の光景が現実であり、もしものことを考えても意味がない。「そういえば……あのシヨウさん」

「ん？　今度は俺のことをからかうの？」

「ち、違います。そもそもシヨウさんって、からかわれてもあつさりかわせるタイプじゃないですか」

そのようにはつきりと言われるほど接してはいないはずだが……アリシアとのやりとりを見ていたら、そう思われてしまってもおかし

くはない気がする。ただ

「バニングス、君に教えておいてあげるよ……人っていうのは慣れる生き物なんだ」

アリシアに八神堂の主に叔母、真面目そうに見えるあいつも似たタイプだよな。意味は違つてくるけど、プレシアさんも面倒なときがあるし……俺の知り合いって厄介な人間ばかりな気がしてきたぞ。

負の思考が駆け巡りそうになったとき、ふとバニングスの視線に気が付く。彼女の瞳から伝わってくるのは、元氣を出してくださいと
いったニュアンスのものだ。

「あの……えっと、その、さっきも言おうとしてたんですけど、私達の相手してていいんですか？」

言動から察するに、俺は完全にこの子に気を遣わせてしまっている。大人びた一面がある子だとは感じていたが、小学生に気を遣われるというのは年上として精神的に来るものがある。

「気を遣わせて悪いね」

「いえ……その、それを抜きにしても気になつてたことですから」

苦笑いを浮かべる彼女を見ながら思考を走らせると、店員ではなく手伝いだということを書いていなかったことに気が付く。事実を伝えようとした瞬間、ほんのわずかだが俺よりも早く口を開いた人間がいた。

「アリサ、あのね……ショウさんはT&Hの店員じゃないよ」

「え、そうなの？」

「うん……ショウさんはロケテストに参加してたデュエリストのひとりなんだ。それに昨日はブレイブデュエルの一般解放。どれくらい来店するか分からなかったから手伝ってもらったんだ」

フェイトの説明にバニングスは納得の表情を浮かべる。

この表情を見た限り、今以上の説明は不要だろう。まあバニングスは聡明な子のように思えるし、フェイトの説明は要点を抑えつつ簡潔な説明だったので補う部分はこれと違ってないのだが。

そんなことを考えていると、誰かが隣に来た気配を感じた。視線を向けると、こちらを見上げている黒髪の少女が視界に映る。

「どうかした?」

「えつと、ふと気になったことがあるんですけど質問いいですか?」
「どうぞ」

「フェイトちゃんは確かロケテストで全国2位だったんですよ。シヨウさんはどれくらいだったんですか?」

俺がフェイトよりも下だった場合、中学生が小学生に負けていることを意味する。普通に考えれば、それは相手に嫌な思いをさせかねないだろう。

月村は純粹に気になっているだけであって他意はなさそうに見えるが……こんな風に深読みするからアリシアなどに色々と言われてしまうのかもしれない。

「俺には全国で何位って称号はないよ」

「そうなんですか?」

「ああ……君達よりも経験があるってただだから、王子様みたいな言動を求めないでくれると助かるよ」

「それって恥ずかしいからですか?」

「まあね。そういう扱いを受けたことがないし、そもそも柄じやないから……正直、俺よりもフェイトのほうが王子様っぽいだろう?」

月村はきよとんとした後、くすくすと笑い始める。何気ない仕草に上品さを感じられるあたり、彼女は育ちがいいのかもしれない。

「シヨウさん、フェイトちゃんは女の子ですよ」

「それは……いやまあ、女の子に王子様ってのも変な話だけど。ただデュエル中のあの子は凛としてるから」

「その気持ちは分かりますけど……やっぱり女の子は王子様よりはお姫様扱いされたいと思いますよ。それにシヨウさんにだっていつかは誰かの王子様になるんでしょうし、今から頑張ってたほうがいいんじゃないですか?」

……この子、本当に小学生か?

背丈や服装はともかく、言動からは俺の学校の女子よりも大人っぽさを感じる。いったいどういう風に育ったならば、この年でここまでしっかりした子に育つのだろう。この子の性格をアリシア達に分け

てやりたい。

「月村はすっかりしてるね……それとどこことなくイイ性格をしているように思える。まあ、あのふたりと一緒にいたのなら理解できなくもないけど」

「最初のはまだしも、性格あたりからって絶対良い意味で言ってますよんよね。私はシヨウさんのほうがイイ性格してると思いますよ」

「……君って大人しそうに見えて意外と言うね」

笑いながら言うと、月村は「そんなことないですよ」といった感じに微笑み返してきた。

この笑顔の裏にはいったい何があるのやら……今はまだしも、未来のこの子のことを考えると場合によって恐怖を感じる。

「なのは、さすががあんたのシヨウさんにちよっかい出してるわよ」

「ア、アリサちゃん、シヨウさんは別になのはのじゃないよ!」

「あのシヨウさん、もし良かったら今日色々教えてもらっていいですか?」

「すずかちゃん、そういうのはみんなで教わろうよ!」

「……シヨウさんが教えるなら私は他のこととしてようかな」

「フェイトちゃんからも色々教わりたいと思ってるからそんな顔しないで!」

「君らさ……高町で遊ぶのはそのへんにしてあげろよ」

見ていて面白くはあるが、俺も高町と同じようにかかわれたりすることがある。彼女のように見ている面白くと思わせる反応はしない——いやできそうにないが。

俺の言葉にからかった側の小学生達は元気な返事を返し、からかわれた側は「みんなひどいよお……」とポツリと漏らす。これが彼女達の日常的なやりとりなのだろうが、かわいそうに思った俺は高町の頭を軽く叩きながら話しかけた。

「まあ……元気出せよ」

「いや、その、別にいつものことですからそこまで気にしてないとか!?!」

「ならいいけど……顔が異常に赤いけど大丈夫?」

王子様といったからかいもあつて恥ずかしがつているのは分かるが、蒸気が出ていそうなほど真っ赤になつてゐる姿を見るとさすがに心配になる。実際に高町の額を触つてみると、ほんの少しではあるが熱があるように感じた。

「ちよつと熱いようだけど」

「だ、大丈夫です！ そそそれよりも早くお店に行きましよう！」

「……行つちやつたな」

「シヨウさん、シヨウさんこそなのはで遊んでるじゃないですか」

「いや遊んだつもりはないんだけど……」

「慣れないうちは心配になるくらいはの反応ですからね。まあなのはちやんなら、すぐに落ち着くと思いますよ。伊達にアリサちゃんにからかわれてませんか」

「すずか、何でそこであたしを出す必要があんのよ！」

高町とは別の理由で顔を赤く染めたバニングスは月村へと接近するが、月村は笑いながら謝りつつ高町のあとを追うかのようにT&Hに向かつて走り始めた。彼女はもちろんあとを追つて行つたため、この場には俺とフェイトだけが残される。

「……面白い子達だね」

「そうですね……あの、何で笑つてるんですか？」

「いやね、君に言われたらあの子達良い反応しそつだつて思つて」

「え、いやその……今のは秘密にしてもらえませんか？」

「それは別に構わないけど、意外とすんなり言う日が来るんじゃないかな。あの子達と一緒にいるときの君は楽しそつだし、出会つて間もない割に打ち解けてるように見えるから」

「そうですね？」

「さあどうだろうね」

「え？ 言つたすぐ傍から惚けるのはひどいですよ」

「その調子できちんと言えるなら問題ないさ。それより俺達も急ごうか。多分あの子達、先に着いても中に入らないで待つてるだろうし」

第6話 「コミュニケーション」

合流した後、フェイトを先頭にしてT&Hの5階へと向かった。昨日はオープン初日だったために解放されていたのはシミュレーションルームだけだったが、ブレイブデュエルを楽しむための部屋はひとつではない。

「T&Hの5階、ここがその……」

フェイトが説明を始めると、遠くからこちらに向かってくる足音が耳に届いた。迫ってくる気配とこれまでの経験からある人物が俺の脳裏に浮かぶ。

「フェイト……来るぞ」

「え？」

「フェイト！」

俺の言葉に首を傾げた次の瞬間、フェイトは黒髪の女性に思いつきり抱きつかれた。彼女が驚きによって身体を震わせたのは言うまでもないだろう。

「学校は大丈夫だった？ 帰り道で変な人に会わなかった？ あなたは大人しいから母さん心配で心配で……」

この人は今日も親バカ全開だな……というか、ある意味あなたが変人なのではないか？

と、フェイトの顔を触りながら一気に言葉を投げかけるプレシアさんに対して思ってしまったのは普通のことだろう。彼女と初対面である高町達は、予想外の展開に呆気に取られてしまっているが。

「あ、あの……母さん大丈夫。なのはたちと一緒にだったから……それにシヨウウさんもいたし」

「え……？」

プレシアさんの視線がフェイトからこちらへと移る。彼女の表情を見た限り、今ようやく俺達の存在に気が付いたようだ。

子供のことを心配するのは分かるが、この街は治安が悪いわけではない。むしろ良いほうに入るだろう。それなのにここまで心配するとは……過干渉・過保護は子供の成長に対して良くないと思うのだ

が。

それに今はまだしも、中学生くらいになれば性格の良いフェイトでも反抗期になってもおかしくない。今のままでは、その時期を迎えてしまったらこの人は立ち直れないほどのダメージを負うのではないだろうか。

「ようこそT&Hへ、フェイトの母で店長のプレシアよ。今日は何をお求めかしら？」

場の雰囲気や高町達の表情から察するに、彼女達は今きつとこう思ったに違いない。な……なかつたことにした!?! と。

プレシアさん本人は問題なさそうだが、娘であるフェイトの顔は夕日のように真っ赤になってしまっている。プレシアさんのような母親、というよりは親バカの一面を他人に見られるのは恥ずかしいものだろう。彼女の反応は当然だと言える。

「プレシア……急に消えたと思ったたら」

「なのは達困ってるよ」

テスタロツサ親子に対して思考していると、新たにふたりの足音が聞こえてきた。ひとりはフェイトそっくりの高町達とも面識のある少女。もうひとり子供のことになる仕事と仕事を投げ捨ててしまうプレシアさんとは違ってしっかりとしている女性だ。

「はじめまして、ようこそ当店へ。プレシアと同じく店長のリンディよ。よろしくね」

「やつほー、みんな」

「ア、アリシアあ」

プレシアさんは、人目があると理解しているはずなのにフェイトに続いてアリシアに抱きついた。長女は次女よりも慣れがあるようで「はいはい」と軽い反応をするだけ。体格に差があるせいかわつ苦しそうではあるが。

——にしても……プレシアさんを相手するアリシアは面倒臭そうに見えなくもないが決して邪険に扱わないよな。人のことをからかってきたり、変な甘え方をしてくる彼女に対して多々思うところはあったが……この部分だけは尊敬できるかもしれない。俺があつた立

場だったら多分軽くでも拒絶の言葉を発しているだろうから。

立ち話もなんだということであ達は《コミュニケーション》と呼ばれる部屋へと移動した。

ブレイブデュエルはどうしても順番待ちになってしまったため、この部屋は自分の順番が回ってくるまでの時間潰しとして利用する部屋だ。そこにある軽食コーナーに俺達はそれぞれドリンクを持って座っている。

「おふたりで経営なさっているんですね」

「この店、雰囲気とか凄く良い店だと思います」

「あら、ありがとう。これからも気軽に遊びに来てちょうだい」

「娘達共々よろしくお願いするわ」

大人達ときちんと話す月村にバニングスの存在は驚きであるが、つい視線は幸せそうにドリンクを飲んでいる高町とアリシアに行ってしまう。

高町は純粋で良い子だからあれだけど、アリシアもこうしてれば可愛げのある子供なだけだな。口にしたら中途半端に怒るだろうけど。

「フェイトちゃんとアリシアちゃんはやっぱり姉妹さんだったんだね」

「当たり前」

「私とアリシアは似てるから分かりやすいよね」

確かにこのふたりの外見はパツと見て姉妹だと分かるほど似た部分が多い。

それにしても……高町の言い方から察するにフェイトが上でアリシアが下だと思っっているんだろうな。まあフェイトのほうが背が高いし落ち着いているから無理もないけど。

「ふたりともお店の手伝いしてて偉いというか凄いよね。特にアリシアちゃん」

月村の言葉にアリシアはきよとんとした顔を浮かべ、疑問の声を発する。どうやら彼女は月村が言いたいことを理解していないらしい。

「私達よりも小さいのに偉いなくってみんな話してたのよ」

「……あのさ、みんなは4年生だよね?」

「うん、そうだよ」

「わたし……6年生なんだけど」

告げられた真実にフェイトを除いた4年生達の顔は驚愕で染まり、しばしの沈黙が流れる。これから来るであろう出来事に備えて俺は静かに両耳を塞いだ。それとほぼ同時に少女達から大声が上がり、アリシアは涙を浮かべながらフェイトに寄りかかる。

「また間違われた……」

「しょ、しょうがないよアリシア……」

「それっ! それだよフェイト!」

泣き顔から一変して力強い声を発したアリシアにフェイトは戸惑いを見せている。彼女の心境が理解できてしまうあたり、俺もそれなりにアリシアの相手をしているということか。

「何で最近お姉ちゃんって呼んでくれないの。そうすれば間違われな
いのに!」

「そ、それは……みんなの前だと……何か恥ずかしいし」

もじもじしながら小声で呟くフェイトにアリシアは頬を膨らませ、『対フェイト用ひみつへくき』と書かれた一枚の紙を取り出した。それを見たフェイトの顔に動揺の色が現れる。

「私のお姉ちゃん——1年B組フェイト・テストロッサ。私にはアリシアという大好きなお姉ちゃんがあります。お姉ちゃんは私と違って明るくて元気で……」

「わっ、わっ、わっ!? 何でそれをお姉ちゃんが!?!」

何でって、それはどう考えてもプレシアさんが渡したからに決まってるだろう。ふたりのやりとりを見ながら恍惚とした顔を浮かべているし、紙に小さくだが『b y 母』と書いてある。

フェイト、こんな姉と母親を持つて大変だとは思うが強く生きろ。愚痴くらいならいつでも聞いてやるから。まあ優しい性格の彼女がアリシア達の愚痴を言うとは考えにくいが。

「アリシア、そのへんでやめてやれよ」

「むう……シヨウは何かフェイトには甘いよね。わたしには厳しいと

「うか冷たいのに」

年上に対して平然と呼び捨て……これはいいとしても、理由もなくからかったりしてくる奴を甘やかせというのは無理な話だろう。それに

「そんな風に膨れるから余計に子供っぽく見えて姉だって思われられないんだろ」

「もう、シヨウは大人気ないよ。年下をいじめて楽しいの！」

「いや、俺と君ってそんなに離れてないから。それに普段君って俺のこといじめてるよっ。」

「え？ いじめてないよっ。」

やる側とやられる側で認識にズレがあるからいじめてなくならないんだろ。まあ俺とアリシアの場合、世間で問題視されるようないじめじゃないけど。

内心でやれやれ……と思っていると、くすくすと笑い声が聞こえてきた。俺とアリシアのやりとりがおかしかったのか4年生達が笑っている。個人的に笑うほどおかしい光景とは思わないのだが。

「みんな、何で笑ってるの？」

「いやね、ケンカしているように見えて……」

「ふたりって仲が良いんだなって思ってる」

その言葉に俺とアリシアは顔を見合わせる。

俺がアリシアと仲が良い？ 好感度で言えばアリシアよりもフェイトや高町達のほうが上なのだが。会話する回数は積極的に話しかけてくるアリシアが一番ではあるが。

「まあ、わたしとシヨウの仲だからね！」

「どういう仲だよ」

「シヨウくん……アリシアとはどういう関係なのかしら？」

「それは俺が聞きたいです」

なぜ俺はテストタロツサ親子にここまで絡まねなければならないのだろうか。毎度のようにこうも絡まれると他の店に行きたくなくなって仕方がないのだが……。

「ハイハイ、ふたりともそこまでよ。今日はなのはちゃん達にお店を

案内するんでしょ？」

「あ、そうだったそうだった」

「ご、ごめんねみんな……私のせいで何かおかしい方向に話が行っちゃって」

「謝らなくていいよフェイトちゃん。フェイトちゃんがお姉ちゃん子だったって知れたし」

高町の言葉にフェイトの顔が赤く染まった。浮かべられている笑顔を見る限り、プレシアさんのように意図的に辱めようとしているわけではないようだが、それはそれで怒ったりできないために性質が悪い。

店長であるリンデイさんとプレシアさんは仕事に戻ることになり、高町達のこととはテストタロツサ姉妹に任せられた。のだが、リンデイさんは心配なのか全員のことを俺に頼んできた。

店の中に変質者がいるとは思えないが、可能性で言えばゼロではない。そのためリンデイさんに肯定の返事をする、彼女は笑顔を浮かべて去って行った。

「そ、それじゃあ気を取り直して……この部屋《コミュニケーション》について説明するね」

「BDシミュレーターはどうしても順番待ちになっちゃうでしょ。ここはその間に楽しんでもらう部屋なんだ」

「ということは、フェイトちゃんが言っていた部屋ってここだったんだ」「その割に見た感じ普通の休憩所って感じじゃない？ デパートのフードコートみたいな感じだけだ」

「そうだね。自販機にテーブル……あつ、でも窓の方に何かあるかも」月村の発言にフェイトが説明しようとする素振りを見せたが、アジアがそれを制止し順番に回りながら説明することになった。口だけの説明より実際に見ながらの説明の方が分かりやすいからだろう。

まず最初に向かったのはブレイブデュエルのデッキ考案スペースだった。ここは装置にブレイブホルダーとデータカートリッジを挿し込むことで、デッキに入れるスキルカードを選んだりアバターのステータスを確認できる場所だ。

次に向かったのは自販機と軽食コーナー。これといって説明する必要はない場所ではあるが、このカレーはある人物のレシピを元にこだわりのある逸品に仕上がっているらしい。俺はまだ食べていないが、ブレイブデュエル関係で考えると知り合いの顔が浮かんでくる。

その間にも話は進み、カードローダーへと場所は移っていた。誰でも1日1枚新しいカードがもらえることになっており、バニングスが「何て太っ腹な……」と呟いていたが俺も同意見だ。小学生達はそれぞれカードローダーを使用し、新たなカードを手に入れる。

「ノーマル+ゲット!」

「あ、私も」

「私はスキルのカードだ」

高町を除いてノーマル+のカードを手に入れたようだ。ということとは、初期デッキに入っていたカードと合わせることで彼女達もストライカーチェンジが可能になったということになる。

初期デッキについて説明しておく、全員共通で4枚のカードが入っている。パーソナルカード以外はランダムであるため、高町のようにパーソナル1枚、N+カード1枚、スキルカード2枚というのはラッキーなパターンだ。セイクリッドのレアカラーだったことも含めて、彼女は何かしらに愛されているのかもしれない。

最後の部分を除いた内容をアリシア達が高町達に説明すると、すぐさまバニングスが口を開いた。

「できるならさっそくあのカツコいいのに変身したいわね!」

「でもシミュレーターを使うなら順番待ちをしないとイケないんじゃないかな?」

月村が疑問の言葉を紡いだ後、「ふっ、ふっ、ふっ……」といった笑い声が上がった。視線を向けるとまぶたを下ろしているアリシアと両手でテーブルを指しているフェイトの姿があった。

「そこで活躍するのがこのテーブルさんです」

アリシアの言葉に高町達は「え……コレが?」といった顔を浮かべた。まあ、このテーブルのことを知らないのだから当然だろう。

個人的には、テーブルや高町達の反応よりもアリシアの浮かべていた『どや顔』のほうが気になった。別に大層な話でもなければ、彼女が作ったわけでもない。自慢げに言うようなことではないと思う。

思考を巡らせている間にアリシアはテーブルのスイツチを押しただようで、テーブルは簡易シミュレーターに姿を変えていた。

「これこそ卓上でもブレイブデュエルを楽しめちゃう簡易シミュレーター、その名もエンタークン！」

「円卓……まんまね」

「そのまんま……だね」

「にやはは」

もつとさらつと説明していたならば、少女達は苦笑いしなかったのではないだろうか。しかし、根本的なことを言えば、このテーブルを開発した人物がもう少し商品らしい名前をつけていればよかつただけなのだろう。

苦笑いを浮かべている高町達に気にすることなくテスタロッツサ姉妹は説明を続け、バニングスと月村はエンタークンにブレイブホルダーをセットした。エンタークンの起動が完了すると、小さなアバター達が出現。ふたりの「リライズアップ！」という掛け声で姿を変える。

「あつ、服がすごく可愛くなってる」

「さすがのはプロフェッサータイプ。援護・索敵はもちろん、スキルの豊富さでは一番のタイプだね」

氷の属性を持つていたからか、それともただの偶然か月村のアバターは青色を基調とした衣服だ。髪型も普段とは違ってポニーテールになっている。

個人的な意見になるが、彼女は3人の中で最も冷静かつ気配りのできる性格をしていると思う。性格とアバターのタイプを考えると良い組み合わせだと言えるだろう。

ただスキルが豊富ということはメリットであると同時にデメリットにもなりうる。複数の選択肢の中から状況に合わせて最善の手を選ぶのは容易なことではないのだ。それにレベルの高い対戦になれ

ば最善の手は読まれやすい手であるため、さらに考える必要が出てくる。まあ今すぐ言うことではないが。

「すっごい、コレがあたしのアバター!？」

「アリスのはフェンサータイプだね。中・近距離向きでトリツキーな機動が最大の持ち味かな」

バニングスのアバターのタイプは、手にしていたデバイスが剣型であったので何となく予想できていた。赤色を基調とした動きやすそうな衣服は彼女にとっても合っていると思う。まあ月村の方も大人しいというか淑女的で彼女に良く合っているが。

「おお、アリスよかったね」

「え……何が?」

「それはね、そこにいるお兄さんはアリスと同じフェンサータイプなのですよ」

バニングスだけでなく、少女達の視線がこちらに向いた。

アリスア……人の許可もなくアバターのタイプをばらすなよ。そのへんの情報はゲームの勝敗にだって関わってくることなんだから。この子達に知られたところでさすがに本気でやったのなら負けることはないだろうけど。

「そうなんですか?」

「まあね」

「付け加えでもうひとつ、みんなは知らないだろうけどこのお兄さんはすっごいデュエリストなんだよ」

「ああうん、確かロケテストに参加してたんだよね。フェイトちゃんみたいに全国で何位つてのはないらしいけど」

月村の言葉にアリスアはきよとんとした顔を浮かべ、そのあとこちらの方に意味深な視線を向けてきた。これから彼女が何を言おうとしているのか予想できた俺は、そつと視線を外すのだった。

「シヨウ、もう少しきちんと言明するべきだと思っなあ」

「嘘は言っていないだろ」

「それは言っていないけど」

「えつと、どういうことなのかな?」

「そうよ、あたし達にも分かるように言っただけよ」

「簡単に言うと、このお兄さんはランキング戦に出てたなら全国で一番になってもおかしくなかった実力者だったこと」

刹那の沈黙。そして絶叫にも似た声が響いた。

最初は疑問を抱いていたようだが、アリシアだけでなくフェイトも肯定したことによって少女達の顔からは疑問の色が消えていく。それと同時に輝いて見える瞳がこちらに向けられた。正直に言っただけ、俺はこの手の目を向けられるのが苦手だ。

「そんなすごいこと何で黙ってたんですか」

「いや別に黙ってたわけじゃ……そもそも」

「シヨウレベルの人間の謙遜はかえって相手に失礼だと思うなあ」

この小さな6年生は俺をヒーローか何かには仕立て上げたいのか。ロケテスト時に上位の実力があつたとしても、すでにそのときから大分時間が経過しているんだぞ。今やれば順位の変動だって充分に起こりえるはずだ。

「そういえば……昨日乱入してきた子がシヨウさんに借りを返すとか言ってたような」

「多分だけど、個人戦だけで言えば大抵の人がシヨウに借りがあると思うよ。勝敗が五分五分だったのは全国1位さんくらいじゃないかな?」

「あたし達って何気に凄い人と知り合ってたのね」

「うん。でもそれって良いことだね。特にアリサちゃんは教えてもらえること多いだろうし」

尊敬と期待に満ちたバニングスの瞳が再度こちらに向く。無意識の内に後退りしていたが、バニングスはこちらが下がった分だけ接近してきたため距離に変化はない。ずけずけと近づいて来ない辺り、俺のことも考えてくれてるように思える。

「アバターの話をしてたんじゃないの? まあボクのが1番カッコいいけど」

突如聞こえた第3者の声に俺達の視線は自然と引き付けられた。視界に映ったのは、青色の長髪をツインテールにしている俺と同じ天

中央学校の制服を着た少女。大盛りのカレーを食べているが、個人的にはスプーンをきちんと持っていないことのほうが気になる。余談になるが、俺は彼女の知り合いとクラスが同じだ。

「レヴィ!? どうしてここに……」

「あ……へいと」

「フェ・イ・ト!」

「へいと?」

「だから……フェイトだってば」

きちんと名前を言わない……もしかすると言えないレヴィにフェイトは肩を落とした。やりとりを見た限り、会う度に同じようなやりとりをしているのにも関わらず『へいと』と呼ばれているのだろう。

まあレヴィは親しい人間をあだ名で呼ぶところがあるからな。フェイトに対する呼び方もその類なのかもしれない。あとでフェイトに教えておくか。

「お久しぶりだねレヴィ。今日は何しに来たの?」

「ん〜つとね……ごちそうさまでした。高町なにははつてのに会いに来ただけど……」

口に含んでいたドリンクを飲み込もうとしていた俺は、レヴィの間違いに思わず嘔き出しそうになった。周囲に少女達がいる手前、どうか我慢することが出来たが盛大にむせる。

「高町なのはだよ、な・の・は!」

「なによ……何でもいいや」

「良くないよ!? というか、みんなして笑うなんてひどい!」

笑っては悪いと思うが、『へいと』と比べると破壊力が段違い過ぎる。そもそも付き合いの長いバニングスや月村が笑っているのだから、笑うのを我慢しろというのは無理な注文だろう。本気で悪いとは思うが……。

「あれ? ショウダ。何してるの?」

とレヴィは尋ねてきた。尋ねるまでもなくブレイブデュエル関係だと普通は分かるはずだが。

いや、そんなことはどうでもいい。なぜこいつは人目があるのにも

関わらず抱きついてくる。人目がなかった良いというわけでもないが……なんて考えている場合でもない。

「ん？ ショウが泣いてる……いったい何が」

「お前の間違いのせいでむせたんだ。というか離れろよ」

「うーん、別にいいじゃん。ボクとショウの仲間だし」

どういう仲だ、と言いたいところではあるが……叔母が知り合いだったこともあって、レヴィを含めた4人とは前からの知り合いなんだよな。頻繁に顔を合わせるようになったのはブレイブデュエルが本格的に始動してからだけど。

「良くない」

「何で？ ボクはショウと一緒にいたいし遊びたいけど……ショウはボクと一緒にいたり、遊んだりするの嫌なの？」

「いや、嫌とかじゃなくて……」

俺が言いたいのは距離感を保って接してほしい、ということだ。幼児や小学校低学年の子供が抱きつくのならば微笑ましい光景に見えるだろうが、現状はそんな光景には見えていないだろう。その証拠に高町達の顔は驚愕で染まっている。

「ちよつとレヴィ、色仕掛けでショウを誘惑するなんて卑怯だよ！」

「色……ねえショウ、アリシアは何を言ってるの？」

「まあ簡単に言うと、さっさと離れろってことかな」

「そっか」

「……理解したのなら離れろよ。お前、俺じゃなくて高町に用があつてきたんだろ？」

「はっ!? そうだった」

俺から離れたレヴィは、人差し指で高町の方を指しながら口を開く。

「ヴィーたんをやっつけたっていう実力、このボクにも見せてもらおうか！」

「え……ええええええッ!？」

第7話 「ダークマテリアルズ」

フロア内の照明が落とされているが、一部だけスポットライトで照らされている。そこには制服から衣装換えしたT&Hの看板娘が円形の台の上に立っており、彼女を中心に人ごみが出来上がっていた。その理由は、今まさに口を開こうとしている看板娘の方から説明があるだろう。

『れでいーす&じえんとるめん！ みなさん、こんにちわ。ホビーショップT&Hの看板娘、アリシア・テスタロッサです。昨日から稼動したブレイブデュエル、みんなで仲良く楽しんでますか？』

アリシアの問いかけにフロア中から肯定の返事が発せられる。

フロアにはざっと見ただけでも数百人に上る人間が存在しているため大音量に聞こえる返事だった。デュエル中ならばそちらに集中するため気にならないだろうが、まだ始まっていない今はどうも胸の内が落ち着かない。

『今日はみなさんにブレイブデュエルの新しい魅力をお伝えしちゃうべくイベントデュエルをばくと行いたいと思います』

アリシアのやつ……よくノリノリで司会進行ができるな。俺だったらあんな風にやるのは無理だから、こういうときの彼女だけは素直に尊敬する。

今回行われる勝負は昨日から行われていたフリーバトルではなく、ファーストステージと呼ばれる《スピードレーシング》と呼ばれるものだ。

アリーナに表示された障害物コースを進み、チェックポイントを通ってゴールする。ブレイブターゲットと呼ばれる物体を破壊することで追加ポイントを得られる。主なルールはこのふたつくらいであり、着順のポイントとターゲットのブレイクで得られるポイントの合計で勝敗が決するデュエルとなっている。

『補足解説のチーフスタッフ、エイミィです。このデュエルにはスピードの他に飛行技術と攻撃精度、このふたつが重要になってくるんですねえ』

『なのです』

エイミーの言っていることは間違っていないが、チーフスタッフの部分は必要だったのだろうか。まさかだと思うが、チーフスタッフだと思われていないから宣伝しているのでは。

『さて……それでは本レースの参加デユエリストを紹介しましょう。まずは当店のエースで我が妹、フェイト・テストロツサが率いるチームT&H!』

「アリシア……」

「ノリノリね」

自分の部分を強調された説明だったからか、フェイトは顔を手で覆っている。他の3人は呆れているといった感じだろうか。

『対するはインダストリーからの刺客! ロケテスト中の全国ランキング4位!』

「雷纏……強いぞ、すごいぞ、カツコイイ! ダークマテリアルズ斬り込み隊長、レヴィ・ザ・スラッシャーとはボクのことだ!」

レヴィはアリシアの司会に負けず劣らずノリノリで名乗りを上げた。

彼女の補足説明をするならばスタイルはインダストリーでカードのレア度はR。通り名は《雷刃の襲撃者》である。

『おおーと、コレは凄い名乗りですね。こちら辺はうちのチームにも頑張っしてほしいものです』

フェイト達がレヴィのように名乗っていたら異常な光景に見えるし、人はそれぞれ性格が違うのだから、レヴィのような名乗りを求めるのは良くないと思う。

『気を取り直して……知っている人は知っている、知らない人はまあ知らないでしょう。昨日はT&Hのお手伝いだったが、今日はダークマテリアルズの助っ人!』

「なあアリシア、説明がどこもなく悪意に満ちてないか?」

『などと、いつもわたしに冷たい返しをする中学生で名前は夜月翔です。まあでも、好きな子にいじわるをして気を引きたいといったころでしょうから気にしてません♪』

思わず顔を手で覆ってしまった。

何で俺がアリシアに気があるようなでたらめな発言を大勢の前で
するかな。誤解でもされようものなら、この店に来るのが億劫になる
んだが……いやあまり気にしないでおう。俺があまり意識してい
なければ、アリシアが適当に言ったと思われるはずだから。

「……ん？」

不意に衣服の一部を引っ張られるような感覚を覚えた俺は視線を
落とした。すると実際の背丈よりもずいぶんと小さなレヴィの姿が
視界に映る。

この小さなレヴィの正体は、フレンドNPCといってチーム戦で人
数が足りないときに手持ちのカードから呼べる助っ人だ。今回の勝
負はT&H側が4人、こちらが2人ということでレヴィが自分のカー
ドから2体呼んでいる。

なぜ小さなレヴィ……チヴィが俺の注意を引いたかというのと、どう
やらもう1体が持っているアメを自分もほしいと訴えたかったから
のようだ。レヴィのNPCだけあつて食い気がある。

「悪いけど我慢してくれ」

アメを出すことは出来ないため、チヴィの頭を撫でながらそう言っ
た。効果があるとは期待していなかったが、どこか犬っぽいところが
本人にあるせいかチヴィは笑顔になる。

そんなことをしている間にステージの説明は終わり、レースの開始
が近づいていく。ふとT&H側に視線を向けたとき、バニングスが何
か考えている素振りをしているのが見えた。

何を考えているか分からないが、今回の勝負を俺まで勝ちに行くの
は経験の差を考えても卑怯だろう。あの子達の面倒でも見ながらや
ることにするか。

『みんな位置について……スピードレーシング、レディ〜GO!』

開始の合図と共に一斉にスタートする。

まず先頭に立ったのはレヴィだ。彼女のアバターは《ライトニン
グ》タイプと呼ばれるスピード重視の高機動型であるため、この競技
に優れているアバターだと言える。また本人の技量も相まって俺達

との距離は徐々にだが確実に開いていった。

『まず飛び出したのはレヴィ選手……後続をどんどん引き離していますが、ブレイブターゲットは全て無視していますね。これは作戦でしょうか？』

ボク自身は1番でゴールを目指して、ショウやフレンドのボクらがポイントを取る。おそらくレヴィの頭の中にはそんな考えがあるのだろう。

俺がいるから作戦として問題ないだろうが、レヴィはフレンドNPCしかいない状態でも同じような作戦をしそうだよな。元のプレイヤーが同じフレンドNPCだと考えまで似たようなものになって弊害が起こることがあるし。

『おおーと、そんなレヴィ選手に近づくとひとつの影が……T&Hのフェイト選手だ！』

と、アリシアは実況した後で「うちの自慢の妹もライトニングタイプ。スピードでは引けを取りません」と個人的なことを言う。おそらくだが、フェイトはきつと恥ずかしくて顔を赤くしていることだろう。

実況によるとレヴィは直線的な軌道、フェイトは空中ドリフトを駆使したなめらかな軌道で進んでいるらしい。同じライトニングタイプでも実に対極的なスタイルだ。まあ性格自体もふたりは真逆なので自然なことかもしれないが。

『ふたりから少し遅れて追いかけているデュエリストが……って、何このコース取り!?!』

アリシアの驚愕の声の間こえたかと思うと、何かが盛大に壊れる音がコース中に響いた。実況の説明によると、高町が障害物のビルを壊してショートカットしたらしい。

——初心者ならでは……というか、大抵の人間は考えない発想だな。これを見ている多くの人間が驚いているに違いない。ロケテストの経験者なら特に……それにしても、スキルでビルを壊すなんて高町は意外とパワフルだな。

『あれ？ 軌道から察するにもしかしてアリサは空を飛んでないの

？』

「浮かぶだけならまだしも……人間が、空を飛べるわけないじゃない」
『頭固いよアリサ』

「うっさいー！」

などとアリシアと会話しながらも、バニングスは見事な跳躍で進みながらターゲットを破壊していく。

飛行しない……今のところできないが正しいか。スタートからこんな調子だったから、この子がきちんと進めるか心配だったがとりあえず問題はないみたいだな。ただ……

「次のターゲットは高い位置にあるけど大丈夫？」

「あつ、はい大丈夫です。すずか」

「了解、アリサちゃん」

月村はスキルカードを発動させ氷の盾で段差を作った。それをバニングスは素早い身のこなしで昇って行く。

攻撃スキルが豊富なバニングスがターゲットの破壊で、月村は彼女の補助。レヴィ達に追いつけないと理解して自分のできることに専念なんて、ブレイブデュエルを始めて間もない子供ができることじゃないんだけどな。

彼女達の年代の子供は基本的に自分が活躍したがるものだろう。きちんとチームプレイができている彼女達は同年代よりも成熟しているのかもしれない。

そんなことを思っている内にバニングス達はターゲットを破壊し下り始める。飛行できないバニングスは飛び下りるのかと思ったが、月村がきちんと抱えていた。

「君達は本当に仲が良いね」

「友達ですから……あの、さつきから思ってたんですけど」

「私達と話してていいんですか？」

「良いか悪いかで言えば悪いかな。でもまあ……先輩として後輩がきちんとゴールできるか心配だったからさ」

「……アリサちゃん、早く飛べるようにならないと」

「い、言われなくても分かってるわよ！」

顔を真っ赤にしているバニングスと微笑みを浮かべている月村を見守りながら並走していると、チヴィ達がひとつのターゲットに固まっているという実況が耳に届いた。フレンドNPCではたまにあることであり、また元のプレイヤーがレヴィということもあって何ら不思議ではない。

さて……このままゴールするとレヴィに文句ばかり言われるだろうな。バニングス達には悪いけど、ここいらで見守るのは終わりにしよう……って、見守るっていうのも舐めてるようで失礼か。

「このままだところつちが劣勢になりそうだから……残りのターゲットはもうよ」

★

前半戦はレヴィが圧倒的な速さを見せ付ける形で1位を獲得したが、バニングス達のターゲット撃破や高町達の好プレーにより、82対83とT&H側が優勢という結果になった。

今は後半戦に入る前の休憩時間だ。T&H側は作戦会議を行っているようだが、こちらは頬を膨らませた子供の相手を行っている。

「もう、シヨウが真面目にやらないからボク達負けちゃってるじゃん！」

「ロケテストに参加して俺達が全力で初心者を叩き潰してどうするんだ。そもそもレヴィは高町の力量を確かめに来たんであって、自分の実力を見せ付けに来たわけじゃないだろう？」

「それはそうだけど……負けるのは嫌だよ。王さま達にも悪いし」

こいつも何も考えていないようでちゃんと考えているんだな。まあ前半戦である子達も問題ないって分かったし、後半はレヴィのためにも真面目にやるか。あの子達には悪い気もするけど、あまり手を抜き過ぎるのも良くないだろうから。

「2周目も私となのはが高順位を狙って……」

「あたしとすずかが」

「ターゲットをきっちり狙う作戦だね……ただ問題はシヨウさんだよね。さつきも後半は全て取られちゃったし」

「すずかちゃん、弱気になっちゃダメだよ」

「うん。ショウさんは凄いデュエリストだけどこれはチーム戦。私やなのはもできるだけターゲットを破壊すれば勝てる可能性は充分にあるはず」

「どんなことを言っているのかはよく分からないが、雰囲気からして作戦が無事に決まったのは分かる。」

可能性として、基本的に前半と同様だがフェイト達も出来る限りターゲットを狙う作戦が高いな。レヴィは先ほどと同様に1位を狙ってもらうのが妥当だから必然的にターゲットは俺の担当……だが全員でターゲットを狙われるとなると厳しい部分があるな。

高順位を狙える速度でターゲットを破壊して行ってもいいが、それだとフェイトとの勝負になる。速度ではあちらが有利であり、彼女は全国ランキング2位の猛者だ。ポイント差をつけるのは難しいだろう。チヴィ達が先ほどのように固まってしまったら……

「くっくくく……一度成功したからといって策も練らず、相手の力量も熟知しておらんというのに同じ策に頼る。人はそれを短慮と言うのだ、このうつけめが！」

突如ステージ内に響いた声に俺達の視線は上へと向いた。太陽の位置の関係ではつきりとは見えないが、ふたつの人影がビルの屋上にあるのは分かる。

「だ、誰?！」

「ふん……貴様らに名乗る名前などないわ！」

「やっほ〜」

あの軽い感じ……ひとりにはアリシアか。もうひとりには声や口調からして彼女だよな。

などと思っていると、ふたつの人影はビルから飛び下りる。空中にいた間にそれぞれライズアップを行い、着地と同時にポーズを決めた。それと同時に、ステージ内にアリシアの代わりに進行を務めることになったエイミイの声が響く。

これは関係ないのだが、ド派手に登場した姉に対して恥ずかしさを覚えているのかフェイトの顔は赤い。その隣にいる高町は拍手をしている。本当にこの子は純粋な子だ。

「というわけで後半戦は私アリシアと、ロケテスト時のチャンピオンチームのリーダーであるディアーチエを加えて行いたいと思います！」

おいおい、プレイする側になったのに実況するのかよ……。

これを言葉に出さなかったのは、外でエイミーが実況の仕事を奪わないでほしいと言ってているのが聞こえたからだ。

何故かエイミーの隣にプレシアさんがいるのも見えたが、またサボってるのだろうか。もしそうならリンディさん大変だな……何か彼女が黒い笑みを浮かべた後に叫び声を上げたような気配がした。プレシアさんの身に危険が迫っているのではないか、と思ったが結論から言うと彼女の自業自得であるためどうでもよかった。

「王さま！」

「ぬおっ!？」

「王さま、王さま！」

「えええい、うっとおしい！」

ディアーチエの腰付近には元氣溢れるレヴィが抱きついているため、彼女から出た言葉は当然のものだろう。俺もレヴィに抱きつかれることがあるため、彼女が感じているであろう鬱陶しさは良く分かる。

「抱きつくでない……ん？」

「ごめん王さま……前半負けちゃった」

「……このたわけ」

呆れつつもどことなく優しい声色でそう言いながら、ディアーチエはしょんぼりしたレヴィの額を指で弾く。レヴィは悲鳴を上げて額を手で押さえたが、そこまで強くやったようには見えなかった。心配するようないことは何もないだろう。

「前半の負けがどうした。我と貴様が揃ったのだ、ちびひよことその一味なぞ恐るるに足らん。大差をつけてひっくり返してくれようぞ！」

「う、うん！」

ディアーチエの励ましによってレヴィは元氣を取り戻したようだ。

普段はあの元気の良さにうっとしさを感じたりするが、元気がないとそれはそれで嫌だよな。元気がないレヴィは見ていて心配にしかないし……つと、ふたりの視線がこっちに向いたな。

「大体ショウが真面目にやらなかったから悪いんだぞ！」

「おいおい、失礼だな。俺は真面目にやってたぞ」

「真面目にやってたら負けてないよ！」

「レヴィ、やめんか。ごちやごちや言ったところで現状は変わらん」

俺に詰め寄ってくるレヴィに制止をかけながらディアーチエは視線をこちらに向けてきた。彼女の瞳には、前半戦に關することで責められるような思惑は見えない。何かを促すような気はしなくてもないが。

「悪いなディアーチエ」

「その謝罪はどっちの謝罪だ？」

どっちという言葉に惑いを覚えた俺は、一瞬ではあるが理解が遅れる。それによってディアーチエは呆れた表情を浮かべ続けて言った。

「我が理解しておらぬとも思っておるのか。さつさとせぬと後半戦が始まるぞ」

真意を理解した俺はきつと驚きの顔を浮かべていたことだろう。そうでなければ、目の前の彼女が「我を誰だと思っておる？」と言いたげな微笑を浮かべるはずがない。

——さつきのレヴィへの言動もそうだけど、本当にディアーチエは人の気持ちを読み取ることに長けてるよな。俺がやろうとしていることなんて普通なら怒ってもいいはずなのに。

「……お前には敵わないな」

「ふん、伊達に長く付き合っておらぬわ」

「え？ え？ 何だかボクだけ仲間はずれにされてるような……」

微笑を浮かべる俺達をよそにレヴィだけは困惑した顔を浮かべている。が、今は彼女に構っている時間はない。

「エイミー」

『はいはく、どつたのショウくん？』

「後半戦だけど俺は参加しないから」

『ほいほい了解……ええっ!？』

さらりと承諾したように見えたのもつかの間、エイミイはすぐさま驚愕の表情を浮かべた。予想外の事態に今のような反応をしたのだろうが、何故かエイミイがやるとわざとやっているようにも思える。日頃の行いが大事というのは、こういうときに疑われなかったために言われているのだろう。

『ちよっ、これからさらに盛り上がるってところだよ。じよ、冗談だよね?』

「冗談じゃない」

『……マ、マジっすか?』

「マジだよ」

俺が口を閉じると同時に、モニター越しに見えるエイミイはキョロキョロと周囲を見渡す。何をやっているのだろう、と見ていると彼女はぎりぎりまで顔を寄せて小声で話しかけてきた。

『こ、これから何か用事があったの?』

「何でひそひそと話す?」

『いやほら……デートとかだったらこの場で聞くのは不味いかなと思いまして』

そういう気遣いが出来る割に、顔には「あとで聞くけどね」って書いてあるように見えるんだが……人の恋路を心配する前に自分の方を気にするべきだろうに。

「そんなんじゃない。大体、仮にそうだったとしても別に不味くはないだろ」

『え……シヨウくんて意外と——』

「誰と行くとか絶対に今でも後でも言うつもりないし」

『——気さくに話してくれる……って、やっぱり君は私の思ってたとおりの子だったよー!』

何をひとりで盛り上がっているのだろうか。というか、そんなに声を張ったら今までのやりとりの意味がなくなるのでは。

「エイミイ、どうかしたの?」

『聞いてよアリシアちゃん。シヨウくんが後半戦に出ないって!』

エイミイに話しかけたアリシアだけでなく、T&H側全ての視線が

俺に集中した。テストタロツサ姉妹は理由についてある程度予想がついているように見えるが、あの初心者3人組には疑問しか見えない。「シヨウさん……何か用事があるんですか?」

「それは……あるとは言えないけど」

「だつたらどうして……」

「簡単なことよ」

少女達の声を遮ったのはディアーチエだった。腕組みをした状態で彼女は少女達を真つ直ぐ見据え、淡々とした口調で話し始める。

「我らと貴様達とは実力が違うのだ。シヨウが参加しているは一方的な展開にしかならんだろう」

「なっ……そつちがどれだけ凄いのか知らないけど、こつちにはフェイトやアリシアだつているのよ! ふたりも黙つてないで何か言つてあげなさい!」

と、話を振つたバニングスだったが、テストタロツサ姉妹は微妙な表情を浮かべている。それに彼女が戸惑いを覚えたようで、表情から怒りが薄れて見えた。

「どうしたのよ?」

「……正直に言つて否定できない」

「な、何ですよ?」

「それはねえ……実際のところ、レヴィとシヨウだけでも厳しいんだよね。前半はシヨウが本気じゃなかったから勝ち越せたつてのはアリサも分かるでしょ?」

「それは……」

「それに……ロケテの時のチーム戦、対ダークマテリアルズでの私達の勝率つて2割くらいなんだ。全国で1位になれたかもしれないシヨウが入った状態で本気出されたら……言わなくても分かるでしょ?」

T & H側に暗い雰囲気漂い始めるが、俺やディアーチエがフォローする前にテストタロツサ姉妹が動いた。

「まあ実際のところ、勝敗がどうこうつて前にシヨウはダークマテリアルズの一員じゃないからね。みんながちゃんとできるか心配だつ

だから参加しただけみたいだし……というか、それならこっち側で参加すればいいじゃん！」

「アリシア……そこで怒るのはおかしいんじゃないかな？」

「おかしくないよ！ ショウがあっちに取られちゃったら今後やばいんだから。それにフェイトだってショウと一緒にの方がいいでしょ？」

「え、いや別に私は……ショウさんがこっちに入ってたならレヴィが厳しくなってただろうし」

「もう、フェイトは気を遣いすぎ……そんなんじや誰かに取られるよ」

アリシアが何か耳打ちするのと同時に、フェイトの顔は真っ赤に染まった。俺に文句を言うアリシアをフェイトが宥めるという構図に見えていたのだが、いったいどういう会話に発展したのだろうか。

「べべ別に私はショウさんのことなんて……！」

「あれ、お姉ちゃんはショウなんて一言も言っていないんだけどなあ」
「うう……」

「ライバルは……割と多いんだから頑張らないとね」

アリシアはほんのわずかな時間だが視線を高町のほうに向けた。距離が離れていたため、そのように見えただけかもしれないが。

「え……そうなの？」

「さあ？」

「……あんた達、話が逸れてるような気がするんだけど」

「ロケテじゃ5回に1回くらいしか勝てなかったけど今はみんなもいるし、それにわたし達もあのとときよりもレベルアップしてるからね。頑張れば勝てないことはないよ！」

「何か強引に戻した!？」

「うん、みんなで頑張ろう！」

「何で疑問もなくそうなるのよ!？」

「なんだかんで、みんないつもどおりだね」

第8話 「小鴉丸からの招待状？」

T & H対ダークマテリアルズの対戦の結果だが、僅差ではあるもののT & H側が勝利を収めた。

後半戦が始まった当初は、ディアーチエの大魔法によってターゲットの大半が殲滅されダークマテリアルズ側が有利だった。しかし、2周目に出現した巨体型と高速型のエクストラターゲットによって状況は一変することになる。

高速型は高町が魔力弾を使つて殲滅し、巨体型はアリシアがハリセんで粉碎。その姿に触発されたレヴィがゴールを目指すのやめてターゲット破壊に向かつてしまい、T & H側が上位を占めることになった。結論から言えば、レヴィのミスでダークマテリアズは負けてしまったということになる。

——まあこんな日もあるよな。

対戦を終えた俺達は軽食コーナーへと移動した。ディアーチエは月村のことを気に入ったらしく、現在は楽しそうに話している。その姿を見ているバニングスはどことなく面白くなさそうだ。やきもちでも焼いているのだろうか。

再度意識を会話中のふたりへ向けると、ディアーチエと目が合った。だが彼女は少し慌てたように視線を月村へと向けてしまう。

対戦が終了してからというもののディアーチエはこのような反応ばかりしている。おそらくだが自分達でも勝てると言い切ってしまったのに負けたことが原因だろう。俺が彼女の立場だった場合、恥ずかしさとか何かしら言われるのではないかと不安に思い同じような反応をするに違いない。

ただ俺としてはディアーチエに何も言うつもりはない。どんな強者でも必ず勝利を収められるわけでもないし、対戦内容は充分に観客を沸かせるものだった。彼女のチームメイトでもない俺が責めたりするのはお門違いだ。

「ばあっー」

「ぶっ……ぶっ……ぶっ、ぶっ、ぶっ！」

隣の方から聞こえた声に釣られて視線を向けると、むせているバニングスが視界に映った。彼女の隣には「につしつし」と笑っているレヴィがいる。どう考えてもレヴィが脅かしたに違いない。

「な……何なのよもう。なによはならあつちよ」

ここであえて『なによは』と言うあたり、この子も月村同様イイ性格をしている。まあ彼女ののように笑顔の裏に何かがありそうなタイプではないので怖いといった感情は抱かないが。

「王さまは気に入った子と話すの好きだからね、イタダキマス」

レヴィ、それは謝るどころかバニングスの言葉に対する返事ではないぞ。というか、対戦前に食事はしたはずなのにまた食うのか。しかもさつきと同じカレーを。

彼女がよく食べる人物であることは知っているが、せめて違うメニューを頼めよと思ってしまふ俺は間違っていないだろう。

「アレでしょ、えくと……焼きオモチ？」

「やきもちよ！ って、ちつ、違うわよ。すずかに友達が増えることは良いことだし……！」

誤魔化そうとしてるけど必死すぎて墓穴を掘ってるな。まあ普段はからかってる側みたいだし、慣れてないんだろう。

そう思う一方で、バニングスは素直になれない子なんだろうとも思う。個人的に彼女は悪い子ではないと思うため、そのへんも可愛らしく思えてしまう。会話相手のレヴィは、カレーを食べることに夢中で全く話を聞いていないが。

「第一私は……聞きなさいよ！」

「ん？」

「何なのよもう……その制服」

レヴィを見ていたバニングスの顔が俺のほうへと向いたが、彼女が何を考えているのか予想がついた俺は無反応を決め込むことにした。

「もしかして……シヨウさんと同じ私立天央？」

「んう？ そだよ……そういえば自己紹介がまだだったね。ボクはレヴィ・ラツセル、天中央学校の留学生さ！」

元気なのは良いことではあるが、中学生なのだから小学生よりも状

況に合わせた対応をしてほしいものだ。まあバニングスはレヴィの性格、容姿がフェイトと似ていることもあって同年と思っていたのか、やばいと思った顔をしているので彼女の元気を煩わしいとは思っていないようだが。

「ちなみに王さまもおんなじガツコだよ」

「どうもご丁寧に。私立海聖小学校4年のアリサ・バニングスです」

お辞儀までするバニングスのほうがレヴィよりも格段に丁寧だろう。

それにしても、小学生にしては綺麗なお辞儀だな。彼女くらいの年で礼儀作法がここまでのレベルとなると……どこかのお嬢様という考えが真っ先に浮かぶな。

ただバニングスの言葉遣いを考えるとその考えに霧がかかってしまう。月村ならば問題なく納得ができるのだが。口にするのは失礼だろうし、今会話しているのはバニングスとレヴィだ。第3者の俺は大人しく静観しておこう。

「えーと……レヴィさん？ それともレヴィ先輩って呼んだらいいですか？」

「レヴィ先輩？」

レヴィは先輩という呼び方が気に入ったのか、瞳を輝かせながら笑顔を浮かべた。彼女はバニングスに眼前まで顔を近づけながら返事をする。

「センパイ……なんかカッコイイ。ボク、センパイがいいな！」

「はあ……それがいいなら……」

レヴィの反応にバニングスは呆れてしまっている。おそらく「この人……何でこんなに喜んでるんだろう？」とでも思っているのだろう。

先輩呼びにテンションが上がったレヴィは、強いだの凄いだの先輩だの言いながら凄まじい勢いでカレーを食していく。喋りながら食べているせいで口の周りが汚れてしまっているのは言うまでもないだろう。

「やれやれ……」

俺はレヴィの隣へと移動し、空いているイスに腰掛けながらレヴィの顔をこちらに向けた。彼女はきよとんとした顔を浮かべたが、俺は気にせず取り出したハンカチで口の周りを拭き始める。

「食べながら喋るなよ」

「えへへ、ありがと〜」

無邪気な笑みを浮かべるレヴィの顔は何ら昔と変わらない。それだけに、体はきちんと成長しているのに精神年齢は変わっていないように思えてならないのだが。

ふと視線を横にずらすと、レヴィ越しにだがこちらを眺めているバニングスの姿が見えた。表情を見る限り、何かを思い出しているような感じである。

「前言撤回、やっぱりレヴィって呼ばせてもらおうわね」

「なんでえ〜！ センパイ、センパイがいい！」

レヴィの駄々をバニングスは華麗に聞き流している。

この子、会ったばかりのはずなのにレヴィの扱いが上手いな。もしかして家で犬でも飼ってるのだろうか。レヴィは人間だけど犬っぽいところがあるし。

「シヨウ、何でこの子はボクのことをセンパイだって呼んでくれないの！」

それはお前に先輩だつて呼べる要素がないから。

と、言ってしまうのは簡単であるが、レヴィはこう見えて傷つきやすい子だ。ぼっさり切り捨ててしまうと下手をすれば泣いてしまうかもしれない。現状で泣かれるのは困るので、俺は彼女の意識をカリーのほうへ戻すように促した。

作戦が功を奏したのか、自棄食いを始めたのかは分からないが結果から言つてレヴィは再びカレーを食べ始めた。

「レヴィの扱い慣れてるんですね」

「まあね。こいつやディアーチエとは昔からの付き合いだから」

「そうなんですか……あれ？ でもレヴィって留学生って言ってましたよね。ということは出身は海外のはずなんじゃ……」

バニングスの疑問は最もだ。

俺の名前はレヴィと違って漢字が用いられているし、見た目も黒髪に黒目。留学生である彼女と付き合いがある理由は気になって当然だろう。

「ああ……俺の叔母が彼女達と知り合いだったんだよ。だから昔から何度か会う機会があつてね」

それに俺は、少し前まで海外で両親と一緒に暮らしていた。ただ生まれた頃からというわけではなく、小学生の途中からだ。

海外で暮らすことになった理由としては、父親が叔母やグランツ博士にも負けない技術者であることに加え、母親がそれなりに有名なパティシエだからということが挙げられる。

日本に戻ってきたのは俺だけであり、両親は今も海外で暮らしているわけだが、別に一人暮らしをしているわけではない。父さんの妹、つまり叔母と一緒にだ。

叔母は技術者としては優秀なのだが、家事といった能力は極めて低い。下手をすればそのへんの子供の方が上なのではないかと思うほどに。そのため俺は彼女のために日本に戻ることになったとも言える。まあ純粋に日本の方が暮らしやすいことと、ブレイブデュエルの件があつたのも理由ではあるのだが。

「へえ、シヨウウさんって帰国子女だったんですね。日本語以外にも話せたりするんですか？」

「少しは……でも暮らした時間がここもあつちも微妙だから。それに空いた分の勉強もしてる真っ最中だから、そのうちあつちの言葉は忘れるかも」

「何ていうか……大変ですね」

「まあね……今度勉強を教えてもらえると助かるんだけどな」

「あたし小学生なんですけど……」

「さつき言ったように俺は途中から海外だったからね。小学生で習う範囲のことが抜けてたりするんだよ」

「あつ……じゃあ、あたしに分かる範囲でいいなら。その代わりブレイブデュエルのこと教えてくださいよ」

「助かるよバニングス先輩」

「そっちのほうが先輩なんですから先輩はやめてください」

やめろと言われたものの少女の顔には笑みがある。出会ってから1番話していなかったことに加え、年が離れているために不安もあったが、どうやらそれなりには打ち解けられたらしい。

私生活や学校生活、ブレイブデュエルといった話題で話している内に名前で呼ぶことを許可された。向こうから呼べと言っているのに呼ばないのもあれなので素直にアリサと呼ぶことにする。ただ急に変えるのは難しく、何度もバニングスと呼んだり言いかけてしまったが。

「な、なのはー!」

突然発せられた声に俺は意識を向ける。そこまで大きいものでもなかったのだが、声を出した人物がフェイトだけに気になったのだ。

「お、お願いがあるとか話か……あるんだけど」

「う、うん」

「わ……私のチームメイトになってくれないかな?」

その言葉に内心驚いた。

俺はT&Hのチームに入ってほしいと誘いの言葉を言われたことがある。だがそれは全てアリシアからのもので、フェイトから誘われたことは一度としてない。そんな彼女が自分から人をチームに誘うとは、高町に思うところがあつたのだろうか。まあ才能がある子だとは俺も思っではいるが。

「あっ……ブレイブデュエルは元々個人競技と5人で一組のチーム競技があつて。T&Hは私とアリシアしかいないから。それで……なのはと一緒になりたいんだけど……:…:ダメかな?」

「ダメじゃないよ。ダメじゃないけど……私、フェイトちゃんみたいに上手くないし」

「そんなことない。さっきのデュエルだって凄かった。とても2回目だとは思えないし。何より空を飛んでるなのはの姿は凄く楽しそうでもとても素敵で……だから一緒にっ!」

……おかしい。

あの子達は女の子同士であるはずなのに、どうしてか王子様とお姫

様のように見える。それにあそこから発せられる雰囲気も何と
か甘く感じる。俺の感覚が狂っているのか、それともあの子達が狂わ
せているのか……。

「はいはいそこまで。ふたりの世界に入らないの」

「あやつらは……何だ……いつもこうなのか？」

「えーっと、会ったときからあんな感じだった気がするから……そう
かも?」

聞こえてきたディアーチエ達の会話からすると、俺の感覚は正常の
ようだ。

乱入の一件の後はあの子達のことにはフェイトに任せて店の手伝い
をしてたけど、その間に今みたいな感じになってたんだな。今はまだ
からかわれるくらいで済むだろうけど、大きくなってからもあれじゃ
あ周囲にだって本気で誤解する人が出てくるだろうな。

アリサ、さつきからかわれたからかイイ顔してるな。まあフェイト
もああ見えて良い反応するし、高町については言うまでもない。……
にしても、何でレヴィはアリサに乗っかってるんだ？

「五人一組つてことは、あとふたくり足りないんでしょ？ あたした
ちは誘ってくれないのかしら？」

「誘ってくんないの〜?」

「そつ……そんなことないよ！ 2人にもお願いしようってアリシア
と話して……って、レヴィはもう別のチームに入ってるでしょ!」

慌てふためいてるときにフェイトは元気だな。普段からあれくら
い元気なら周囲から人間関係やらで心配されることも少ないだろう
に。まあ個人的にはアリシアほど元気なのは困るので今のフェイト
のままでもいいのだが……。

ふと思ったが、アリシアはいつたいどこに行っただろうか。先ほ
どから妙に静かだとは思っていたが、周囲を見渡しても彼女の姿はな
い。

「なあディアーチエ」

「——っ!? きゅ、急に話しかけるでない!」

「……悪かった」

「いや、別に怒ってはおらん……それで用件は何だ？」

「ああ、アリシア見てないかって思ってたさ」

「ちびひよこか……そういえば先ほどから見かけんな」

デイアーチェが見ていないなら一緒にいた月村も見えていないだろう。ふたりだけの世界に入っていた高町とフェイトは当然見えていだろうし、やきもちを焼いていたアリサや食事に夢中だったレヴィも見えていないはずだ。

いつもは必要もないのにそのへんをウロチョロしているのに、こういうときに限っていないと不安になってしまう。何かしらの問題に巻き込まれた可能性は低いだろうが可能性はゼロではないのだから。「フェイトお、アリシア……アリシアがいないの。店内カメラのどこを……どこを見てもアリシアがいないのよ」

突然現れたプレシアさんに一番驚いたのは、彼女に抱きつかれたフェイトだろう。

「もしかしたら誘拐なんじゃないかって……いいえそうだわ。こんな急に消えるなんて」

「そ、そんなまさか……」

「アリシアの可愛さだもの……充分にありえるわ。あつ、もちろんフェイトも可愛いわ。母さんなら両方お持ち帰りだけど。でもアリシアの方がコンパクトだし……」

娘の姿が見えなくて不安なのは理解できるのだが、店内カメラでずっと娘の動向を見ているような発言や自分ならふたりとも連れ帰るといふ発言からして危ない人だと言わざるを得ない。

——何かブツブツ呟き始めたし、本格的にやばくなってきたよな。気の弱いフェイトじゃ正気を取り戻すのは難しいだろうし、俺がやると変な方向に拗れる可能性がある。こういうときあの人がいってくれたら助かるのだが。

そう思った直後、普段よりも格段に低い声でプレシアさんと呼ぶ声があった。その声の主は彼女の首根っこを掴むとこの場を去り始める。「まったく……娘のことになるとこれだから」

「ちよつと待って！ 待ってちようだいリンディ。アリシアがいない

の。本当に一大事なのよ！」

「それなら心配ないわよ。フェイトさん、そこに置いてある手紙を見てちょうだい。居場所が分かるわ」

「あ、はい」

「ふえいとおく、お姉ちゃんのことよろしくね」

「ほら、事務処理とか溜まってらんだからさっさと歩け！」

リンデイさん……本当に苦労してるな。

慣れのある俺はそのように思うが、他のメンツはというと呆気に取られてしまっている。プレシアさんの娘であるフェイトは、恥ずかしく顔色を赤くしているが。

気を取り直した俺達は、とりあえず置かれている手紙を見ることにした。内容はというと

『いとしの王さまと剣士さんへ。T&Hの看板娘、八神堂が頂戴しました。by小鴉丸』

といったものだった。

八神堂の主の絵と「返してほしいなら遊びに来てね」というセリフも書いてあるのだが、アリシアが危ない目に遭っていないと分かったので遊びに行かなくても問題はないだろう。

でも遊びに行かなかった場合、あとで確実に文句を言われるだろうな……って考えてないで耳を塞いでおかないと。

「……あのうつけええええええっ！」

第9話 「八神堂」

手紙に激怒したディアーチェだったが、なんだかんだ言いながらも小学生達を連れて八神堂へ赴くことを選んだ。

その道中で俺は八神堂の主への愚痴を聞かされたが、昔からの付き合いがあつたためにその手の話はこれまでに何度も聞いている。加えて、ディアーチェは人の愚痴を俺くらいにしか言わない。

——個人的な推測だが、元氣過ぎるレヴィや真面目そうに見えてお茶目な一面のあるあいつの相手を昔からしてきたもの同士だから、俺には弱いところを見せてもいいと思ってくれているのだろう。

ある意味では俺にだけは甘えてくれているとも解釈できる。そのためディアーチェの愚痴に付き合うのは個人的に嫌いではないし、俺の愚痴も聞いてもらったりするため全く苦ではない。

「ようやく着いたか」

「とうちやくく!」

ホビーショップT&Hから八神堂までは、それなりに距離がある。気温は落ちてきているものの、徒歩で移動したため体力を消費しないわけがない……はずだが、レヴィだけは全く疲れを感じさせない。本当に彼女は元氣だ。まあだから人一倍食べても体型に影響しないのかもしれない。

「ここは……本屋さん?」

高町の疑問に答えるとすれば肯定の返事になる。入り口から見える店内は、どこからどう見ても本屋なのだから。

八神堂への反応を見る限り高町やアリサは初めて訪れたようだが、くすくすと笑っている月村はここを知っているようだ。

おそらくだがこの店の主がディアーチェに酷似した容姿をしていることを知っているのだろう。そして、ふたりを見たらきつと驚いたりするだろうな……とでも思っているはずだ。本当にこの子はいい性格をしている。

「どうしたのすずか?」

「う、うん、ちよつと……ショウさん、どうかしましたか?」

「いや別に……」

「そう言われると逆に気になっちゃうじゃないですか」

「……君みたいな子は嫌いじゃないって思っただけだよ」

「え……ふふ、私もシヨウさんみたいなのは嫌いじゃないですよ」

月村はこの中で最も清純そうに見えるが小悪魔系かもしれない。今はまだ乗っかる程度でやっているだけかもしれないが、今後の育ち方によっては多くの男達が騙されそうな気がする。

勝手な想像で何とも言えない恐怖を感じつつも、とりあえず返事をしようとした矢先、ディアーチエが店内に向かって声を上げた。

「来たぞ小鴉！ さっさと出迎えんか、このうつけ！」

ここまでの道中で散々俺に愚痴をこぼしていたはずなのに、これほど怒声を出すとは俺の知らないところでディアーチエは八神堂の主からストレスを感じさせられているのかもしれない。

などと考えている間に、店内からたぬきのような耳が付いたフードを被った少女が出てくる。その後ろには長い銀髪の女性。少女のほうは俺達の前まで来るとフードを外しながら口を開いた。

「どうも八神堂にいらっしやうい♪」

「……いくつですかアナタ？」

「おおつ、分かる人おった」

どうやらアリサは、八神堂の主が行ったことが何なのか理解しているらしい。彼女よりも長く生きている俺は正直に言っさっぱり分かっていない。まあ俺だけでなく高町達も分かっていないようだが。

「やつほく、小鴉っち」

「久しぶりやね〜」

「小鴉、我を使い走りにするとはいい度胸だの」

「そう言いながらちやんと連れてきてくれるから王さま好きやよ〜」

八神堂の主は、満面の笑みを浮かべてディアーチエに抱きつく。ただ現在は一方的な好意なのか、ディアーチエからは嫌がられている。

ディアーチエは、基本的にスキンシップを取りたがるほうじゃないからな。口調とかは尊大だけど、人一倍羞恥心があったりするし。

「我は嫌いだ。ええい、はなせ！」

「ええーと……」

「ああ、ごめんな。八神堂の店長で八神はやて言います。こっちは家族のラインフォース」

「いらつしやいお嬢さん達。私のことはアインズと呼んでおくれ」

家族と称してはいるが、ふたりの容姿は似ても似つかないし、名前もはやてとアインズでは大分違う。一般的にディアーチエとのほうが血の繋がりがあると思われるもおかしくない。まあ家族というのが血の繋がりでだけで決まるものとも思わないが。

「まったく……」

「お前も大変だな」

「そう思うなら助けぬか」

「あの手のやりとりは毎度のことみたいだし、邪魔するのも悪いかと思っただけ」

「貴様、ただ単に面白がっておるだろ」

「それは……まあ否定はできないな」

素直に答えるとディアーチエは俺に呆れたような目を向け、「貴様は本当にあやつと似ておるよな」などと言ってきた。あやつというのは、ダークマテリアルズに所属している全国ランキング1位を指しているのだろう。個人的にはあいつよりはマシな性格していると思う。

「えつと……ふたりは姉妹なのかな？」

「そんなことあつてたまるか、おぞましい！」

「ええ、ひどいわあお姉ちゃん」

「誰がお姉ちゃんだ！ よいか、我と小鴉は赤の他人だ。まったく関係ない！」

このような反応をするからはやてにからかわれるのだろう、と思いながら俺は肩で息をするディアーチエを落ち着かせる。もちろんはやてに視線で話を進めるように促すのも忘れない。

「まあおんなじ顔は世界に3人はおる……つてやつやね。フェイトちゃんもレヴィもそうやし。なのはちゃんも会えるかもしれへんよ？」

高町と同じ顔……ああ、あいつのことか。個人的にフェイトとレ

ヴィ、はやてとディアーチェは似ていると思うが、高町とあいつはそこまで似ていないと思うんだけどな。

「ああ……あれ？ 私の名前」

「お噂はかねがね聞いたよ。なあさすがかちゃん」

「うん、こんにちわはやてちゃん」

予想していたとおり月村はここを知っていたようだ。ただ俺もよく利用していたり、店の手伝いをする事があったが彼女を見かけた記憶がない。目的の本が毎日あるわけでもないで偶々そうだっただけだろうが。

「さすがが最近通ってる面白い本屋ってこのことだったのね」

「うん、すごく素敵なお店なの」

「いつもご贖戻してもらってます」

「……あつ、そういうえばディアーチェちゃん達と知り合いってことはもしかして」

「ディアーチェでいいというのに……」

そうしてほしいのなら聞こえるように言えばいいのに。まあディアーチェらしいが。

「そのとおり、うちもブレイブデュエルやっとるんよく。さすがかちゃん達のこと私が誘おうと思ってたんやけど一足遅かったなあ」

実にちやつかりとしている子供だ。まあ飛び級してすでに社会人だから当然と言えば当然かもしれないのだが。

それにしても、今日は俺には絡んでこないな。ディアーチェや月村達がいるからそつちを優先してるだけなのか……何も起こらないから楽でいいけど。

「八神堂はヴィータが所属してるベルカスタイルのBDオーナーなんだ。ちなみにT&H（うち）はミッドチルダスタイルのBDオーナーだよ」

「へえ〜」

「スタイルの説明は今度するとして……はやて、アリシアがここにいらって書き置きを見てきたんだけど」

「おおっとそうやった。立ち話もなんやし中に入って入って」

はやての店内へと促す言葉には何の問題もない……が、俺の腕に抱きついてきたことについては問題がある。

「なあはやて」

「何かな？」

「こんなことをされなくても入るんだが……」

「私がしたいからしとるだけや♪」

何とも自分勝手な理由だが、この手のことはアリシアやレヴィイで慣れがある。それにははやてを無下に扱うとアインスの機嫌が悪くなってしまうため、このままにしておいたほうが無難だろう。

「こ、小鴉、何をしておるのだ！」

「店の中に案内やけど？」

「そんなことを言っておるのではない。貴様、分かかってふざけておるだろ。我が言いたいのは、なぜ腕を組む必要があるかということだ！」

「私とショウウくんの仲なんやから別にええやん」

付き合いがないわけではないが、普段から腕を組む仲ではなかったと思う。

話は変わってしまうのだが、なぜダイアーチェは慌てたように怒っているのだろうか。俺がこのようなことをされるのはアリシアやレヴィイで見慣れているはず。

もしかしてやきもち……いや待て、冷静に思い返せば小さい頃からレヴィイが抱きついたりしてきたら怒っていた。ダイアーチェは常識人として節度を守れと注意しているのだろう。

そう考えるのが自然のはずだ。というか、そうでなければ変に意識してしまってダイアーチェと上手く話せなくなってしまう。

「そこまで親しい関係だと聞いたことは一度としてないわ。そもそも貴様より我の方が……」

「……王さまのほうが？」

「な、何でもないわ！ ショ、ショウも変な勘違いするでないぞ！」

「分かっているから落ち着け」

会話をしているうちに店の中に入っているのだから騒ぐのは不味

いだろう。表向きの八神堂は本屋なのだから。

——にしても、小学生組はクールとかドライとか……俺達の会話にまるで無関心だったな。高町とフェイトは心配なのか何度か視線を向けていた気もするけど、アリサと月村においては本を見て回ってたよな。

「ほんと王さまはショウくんのが好きやなあ」

「な……こ、小鴉！」

「あはは、冗談や冗談。そんなに怒らんといて」

「貴様が怒らせるようなことを言っておるのだろうが！」

気が付けばおいかけてこを始めたふたりに、俺は呆れつつも温かな目を向けていた。

このふたり、本当に仲が良いよな。これを言ったらダイアーチエは即行で否定しそうだけど、なんだかんだで無視せずに相手をしてるわけだから少なくとも嫌ってはいないだろう。

そんなことを考えていると、誰かが近づいてくる気配がしたので視線を向けてみると、申し訳なさそうな顔をしたアインスが立っていた。

「すまないね。君の前だと主はいつもよりも子供らしくなってしまうよ」

「別に気にしてないし、むしろあいつは子供なんだから良いことじゃないか」

「そう言ってもらえると助かるよ……また背が伸びたかい？」

「さあ？ 頻繁に測らないし……まあアインスがそう思うんなら伸びたんじゃないか。時期的にも伸びる時期だし」

アインスは八神家でも大人しいというか無口なほうだ。こうやって話せるのは、これまでに何度も店の手伝いをしたおかげかもしれない。ただ彼女の出す雰囲気はとても穏やかなので、会話がなくても気まずさといったものは皆無なのだが。

近況報告のような世間話をしていると、ふとはやてがこちらを見ているのに気が付いた。

「どうかしたのか？」

「べつにく、ただええ雰囲気を出すなあと思っただけや」

「な……あ、主、別にそんなことは！」

アインス、ここで慌てたらかえって逆効果だ。からかわれるのに慣れていないのは分かるが。

というか、何でからかったんだ。アインスが通っているのは夜間学校で年齢的に大学生。俺は中学生なので、彼女からすれば子供もいいところだ。一般的に恋愛の対象としては見られないだろう。

「シヨ、シヨウ、君も何か言ってくれ！」

「とりあえず落ち着いたら？」

「私にじゃなくて主にだよ！」

アインスが落ち着けば終わると思うんだけどな……とはいえ、はやてに言わないことにはアインスの状態が変わらないだろう。

「はやて、あまりアインスをからかうなよ」

「それもそうやな。今日はアリシアちゃんのことを含めて案内せなあかんし……じゃあ上の店番よろしゅうな」

はやてはアインスとカウンターの傍にいたザファイラに店番を任せると、俺達に四角く区切られている床の上に立つように指示を出した。準備ができたことをアインスに伝え、俺達の周囲を柵が囲む。安全のためにあるものなのだろうが、逆に不安を煽りそうでもある。

ジェットコースターみたいなものかどうか確認しようとした矢先、体が浮遊感に襲われた。それと同時に沸き起こる少女達の悲鳴。1名ほど楽しんでる者もいるようだが、人物が人物だけに深くは考えないでおく。

「どや？・ちよつとすごいやろっ？」

「すすす〜いどころじゃないわよ！・何よコレ！」

「はえ〜」

「博士め……悪ノリしおって」

このジェットコースターのような設計にしたのはグランツ博士なのか。普通に考えてれば、こういうところに力を注ぐなら別のところに注ぐべきだろうに。そもそもこの設計は心臓に悪い。

「グランツさんにはお礼せんとなあ〜……とか言ってる間に終了や」

「だ、大丈夫アリサちゃん？」

「……ダイジョウブヨ」

「グランツさんってブレイブデュエルを開発した人だよな？　どんな人なのかな」

「ハカセ？　ハカセはすごいよ〜」

「まあ少々変わってるところがあるのだが……」

「あれは少々なのか？」

「……とにかく立派な学者で人格者だ。どこぞの店主にも見習ってほしいわ」

「耳が痛いわ……さて到着」

目の前には八神堂と書かれた巨大な鉄の扉。少女達が「でかつ!?!」と口にしたのは言うまでもない。開く方法が音声認証だったのだが、ここに至るまでに驚きの連続だったこともあつて感覚が麻痺したのかどうでもよくなっていた。

第10話 「星光の殲滅者」

八神堂の地下アリーナに到着した俺達を出迎えたのは、バニーガールの姿をしたアリシアだった。何やら円盤のようなものに乗って司会を行っている。

アリシアの説明によると、イベントデュエルが行われるようだ。競技は2ndステージとも呼ばれる『ゲートクラッシュャーズ』。競技内容はプレイヤーが一本道の端と端からゲートを壊して進み、真ん中にあるターゲットを先に破壊したほうが勝ちという簡単なものだ。

「何やってるのお姉ちゃん……何か飛んでるし」

「いや、さつきT&Hさんのデュエル見とったらうちもやりたくなつてなあ。飛んでる原理は企業秘密や」

普通に考えればグラント博士が絡んでいるのだろう……いや、もしかすると俺の叔母が関わっているという可能性も。身の回りに技術者が多いと余計なことを考えてしまうから困ってしまう。

「せっかくなからこの特等席で見つてーな」

ここで断る理由もない俺達は、イベントデュエルを観戦することにした。

行われる競技は分かっているが、それを誰が行うのかはまだ分からない。八神堂のイベントなのでひとりは八神家の一員である可能性が高いが、もうひとりは一体誰だろうか。

『さて、ここで参加選手の紹介です。八神堂の常連さんはご存知、鉄槌の騎士ヴィータ選手！』

『今日こそ負けねえかな』

紹介と同時に客席から歓声が沸き起こった。ヴィータは全国ランキングで上位に入る実力者であり、はやて曰く近所の小学校の人気者らしい。まあ人気者なのは前者のことが理由かもしれないが。

『続きまして、ロケテスト時個人戦全国1位！ ダークマテリアルズ、シユテル選手！』

ヴィータの対戦相手の名を聞いたとき、俺は思わず声を詰まらせた。

ロケテストでの勝率が五分五分であったことから、俺達は互いのことをライバルとして認識している。これはシユテルからライバル宣言のようなことを言われたことがあるので間違いないだろう。

ただ俺がロケテストのランキングを決める個人戦に出なかったことが原因で、シユテルとは今仲違いをしている。

彼女もディアーチエ達と同じ学校、つまり俺と同じ学校に通っているため、嫌でも顔を合わせてしまう機会がある。視線が合うだけで顔を背けられてしまったりするため、非常に気まずい。ディアーチエ達が言うには別にもう怒ったり拗ねたりしていないらしいのだが……。

『ぶつつぶせええっ！』

ヴィータの気合の入った声によって意識がデュエルへと戻る。どうやら彼女はデバイスの形態を推進力を得られる形態に変えて、直接ゲートを破壊して行く方法でターゲットへ向かっているらしい。

『これはすごい！ ヴィータ選手、分厚い門を物ともせず先に進んでいくー！』

「ヴィータちゃん、すごい」

「うん、これなら……」

「甘いね」

「ああ、この程度では揺るがんな。我らが槍は無敵だ」

ディアーチエが口を閉じるのとほぼ同時に、デバイスを構えていたシユテルの周囲から光弾が飛んで行き、ゲートの中心部を捉えた。

『屠れ、灼熱の尖角……』

放たれた集束砲撃《ブラストファイア》は、一瞬にして全てのゲートを走り抜けた。

あまりの威力に煙が立ち込めてターゲットが見えなくなっていたが、晴れていくと近くにヴィータの姿が見えた。ただターゲットを撃ち抜いた砲撃に巻き込まれたようで、衣服がボロボロになっている。少しの間後、気絶してしまったのは言うまでもない。

「ダメやったか〜」

「一回の攻撃であんな威力なんて……」

「今のは誘導弾との合わせ技と言ったところだ」

「ビームの道を小さな穴で開けてドドンンって感じ！」

レヴィの説明は擬音語があつたりして分かりづらくもあるが、まあ今回は実際に光景を見ているので少女達も理解できただろう。

「一直線上に誘導弾を当てて……そこに直射砲を通す精密射撃」

「どれだけやればそんなことができんのよ……」

「それを軽く魅せるが我が槍、我が臣下！」

「人呼んで星光の殲滅者、シュテル・ザ・デストラクター！」

凜と佇むシュテルの姿には、まさにデュエリストの頂点とも言える貫禄がある。ロケテストのときよりも格段に腕を上げていると窺えるほどに。今の彼女に勝つためには、俺の持てる全ての力と技を用いて挑むしかない。それでも勝てるかどうかは分からないのが現実だが。

デュエルが終わって間もなく、ヴィータがシュテルに納得いかないと文句を言い始めた。それを見たはやては、すぐさま現場へと向かう。

「何だよ今の。卑怯だもつかいやれよ、このむつつりメガネ！」

「勝ちたければもう少し柔軟な思考を養ってきてください。私はイノシシを苛める趣味は持っていませんので」

何を言っているかまでは分からないが、ヴィータの気に障るようなことを言っているのは長年の経験から理解できる。

顔を真っ赤にさせたヴィータが動こうとした瞬間、はやてが彼女の頭を撫でながら話しかけた。実にナイスタイミングだ。

「まあまあヴィータ」

「は……はやて〜」

「はいはい、おしかったなあ……どうやらシュテル、武士の情けや思っ
てりターンマツチのテイク2とか」

「動物愛護の精神によりお断りいたします」

「あたしをイノシシ扱いすんじゃないねえ！」

あいつも年下相手に容赦がないな、と思っていると、アリシアがシュテル達の元へと飛んでいくのが見えた。もしかするとデュエルが予定よりも早く終わってしまったのかもしれない。アリシアと会

話したシユテルはしばし考える素振りを見せ、返事をした。

「そういうことでしたら……仕方ありませんね」

「越後屋……おぬしもやりおるのう」

「いえいえお代官さまほどでは……」

周囲の反応を見る限り、八神堂にとってプラスのものだったと思われる。

ただ……アリシアとはやては何をこそそと話しているのか気になる。ふたりの性格が性格だけに、良くない話をしているんじゃないだろうか。

「その代わり……」

「その代わり？」

「次の対戦相手には、タカマチナノハを入れていただきましょう」

俺達の存在に気が付いていたのか、シユテルは振り返らずにこちらを指差した。

対戦の指名を受けた高町が最初驚愕したものの、すぐにわくわくしているような素振りを見せ始めた。全国1位から指名される経験は大抵の人間ができないことであり、ブレイブデュエルを始めたばかりの彼女にとってはまだ見ぬ世界を見れるチャンスなのだから当然といえは当然だと言える。

「なのはちゃんを入れるって言い方からしてチーム戦ってことやな？」

「そのとおりです」

「ヴィータはリターンマッチしたいやろうから入れるとして、あとのメンバーはどないする？」

「そうですね……」

シユテルは考える素振りをしながら視線を這わせる。高町達の近くに立っていたこともあって、俺も彼女と目が合ったのだが、すぐに視線を外されてしまった。

これまでに何度も謝ったし、ランキング戦の埋め合わせはいつでもするとも伝えた。だがずっと今のような反応をされてしまう。全く話しかけないと「あなたの誠意はその程度なのですか？」といった目

を向けられるのだが……シユテルは俺にどうしてほしいんだ？

「タカマチナノハの近くにいたふたりとあなたでどうでしょうか？」

「別に構わへんよ。そっちのチームはどないする？」

「ディアーチェとレヴィだけで構いません……と言いたいところですが、ちようど暇にしている人物もいるようですし、彼を加えることにしましょう」

どうやら両チームのメンバーが決まったようで、シユテル達がこちらへと足を運び始めた。ただ、俺はおそらく選ばれていないだろうから客席で観戦しようとその場を離れ始めると、すぐに呼び止める声が発せられた。

「どこに行くつもりですか？」

声の主はシユテル。予想していなかった人物だけに俺は戸惑ってしまった。だが返事をしないわけにもいかなかったため、頭をフル回転させてどうにか言葉を紡ぐ。

「ど、どこって客席だけど……何か問題があるのか？」

「問題があるかないかで言えばあります。あなたはこちらのチームメンバーですから」

あまりにもさらりと言われたために理解が遅れてしまった。

いつの間に俺はシユテルと同じチームになったのだろう。いや、その前にこちらの意思を確認せずに決定するのはどうなのだろうか。

というか……シユテルは俺のことを避けてるんじゃないかなかったのか。前から時々何を考えているのか分からないときはあったが、最近ばかり神がかったている気がしてならない。

「それで、これがシユテルご指名のパーティー編成ってわけだね」

考えている間にチームごとに別れていたようで、こちらのメンバーはダークマテリアルズ+俺。対戦チームは最近ブレイブデュエルを始めたばかりの小学生組にはやてとヴィータとなっている。

「チーム名は……ダークマテリアルズ+漆黒の剣士と、あるじと愉快な仲間達ってところかな」

「そのへんはどうでもいいけど、なんで他のショップの奴らと組まなきゃならねえんだよ。はやてとふたりで充分だ！」

「不服ならやめても結構ですよ」

「うぐっ……」

八神堂側からシユテルに頼んでいる以上、立場は彼女の方が上だ。ヴィータは戦うためには指示に従うしかないだろう。

あちらのチームはヴィータを除いて楽しそうだが、こっちは……レヴィ以外は何とも言えないな。シユテルは無表情だし、イスに座っているディアーチェは無気力そうな顔をしている。シユテルからチームメンバーに選ばれた俺は、言うまでもなくこの状況に落ち着けるわけがない。

「あれれ〜？ 王さま、何だかやる気がないね」

「あー……我はそろそろ夕餉の支度に帰りたいのだが」

ディアーチェの言葉に腕に着けていた時計で時間を確認すると、確かに夕食の準備をし始める時間帯だった。

俺もディアーチェと同様に食事の用意をしなければならない立場にある。

作るのが遅れたからといって叔母から文句を言われたりすることはないだろうが、彼女は何日も平気で徹夜で仕事に没頭できる人なのだ。その間はまともに食事を取らなかつたりするため、これまでに何度も倒れられたという話を聞いたことがある。

叔母の健康管理も兼ねて日本に戻ってきた以上、俺が責任を持ってきちんと彼女に食事を取らせなければならぬ。倒れられるのは正直に言って困る。

「王……お願いできませんでしょうか？」

シユテルはディアーチェの前に跪き、メガネを外した状態で懇願した。先ほどまでの彼女と違い、今の顔には感情が溢れている。

見つめられているディアーチェは、おそらくシユテルを無下に扱うことはできない。言動とは裏腹に昔から彼女は近しい人間には甘いのだ。

「ぐぬぬ……ええい、分かった。だが一度きりだ、よいな！」

「王さまって結構甘いわね」

「あつ、分かる〜？」

「見てれば大体ね」

先輩という呼び方がいいと駄々をこねていたはずだが、今ではすっかりいつものレヴィに戻っている。もしかして一瞬とはいえ先輩と呼ばれていたことを忘れてしまったのだろうか。彼女は子供のように目先のことに集中してしまうので、ありえない話では決してない。

「その代わり、夕餉の支度を手伝うのだぞ」

「喜んで」

「あ、あの……私はどうしたらいいのかな？」

シユテルにそう問いかけたのはフェイトだ。彼女はどちらのチームメンバーにも選ばれていないようなので、行動としては当然だと言える。可哀想なことにシユテルからは顔を背けられてしまったが。

シヨックを受けたフェイトは両膝を抱えた状態で座り込んでしまった。そんな彼女を見たアリシアは、頬を掻きながら話しかける。

「フェ、フェイトはお姉ちゃんと一緒に解説でもしよっか。シユテルも考えがあるんだろうし」

「それは……分かってるけど」

高町を対戦相手に指名したことからもシユテルに何かしらの考えがあると思う。ただチーム戦は5人一組で行うものだ。こちら側にはあとひとり分の余裕があるのだから、こちらのチームに加えてもいいのではないだろうか。

単純な戦力で考えれば俺を加えてる時点で過剰になっているだろうし、フェイトが入ったところでそう問題はないはず。でも待てよ、彼女の性格を考えると色々とアドバイスをしそうな気がする。それをされたくないからシユテルはフェイトを外した可能性も……。

「……あれ？ フェイト達はどこに行ったんだ？」

「ん、ふたりやったらお色直し中や。服装もきちんとな揃えてたほうがええやろうし」

確かにそのとおりでとは思っ……が、アリシアがバニーガールの格好をしていただけに嫌な予感しかない。恥ずかしがり屋のフェイトは大丈夫なのだろうか。

「あなたはぜひふんと妹氏のことを気にかけているようですね」

「え……別にそこまで気にかけてるつもりはないけど。でもアリシアと違って内気な性格をしてるから心配になることは多いさ」

「それは気にかけているのと同義だと思いますがね」

「そう言われると……」

否定できない、と言おうとしたときにふと気が付いた。今俺は前のようにシユテルと会話してしまっている。決して悪いことではないがこれは俺からすればの話であって、シユテルからすればどうなのかは分からない。

「どうかしたのですか?」

「いや、その……」

「……こちらから話しかけてもそのような反応をするのですか」

いや、むしろシユテルから話しかけてきてるから今みたいな反応をしていると言えるんだが。

「いい機会ですから言っておきますが、私はランキング戦のことをとやかく言うつもりはありません」

「え……でも」

「あなたの言いたいことは分かりますが、最近はおあなたが私と目が合うと気まずそうな顔をしていたから会話をしようとしなかっただけです」

……つまり、シユテルは俺のことを気遣って素っ気無い態度を取っていたと。それを俺が違う解釈をしまっただけで今までのことが起きていたというのか。

「あんなシユテル……」

「何です?」

「そういうことは……言ってくれないと分からないんだが。ずっと怒ってるんだとばかり……」

「私とあなたは昔ながらの付き合いです。冷静に考えれば、あなたが理由もなく参加しなかったとは思えません。正直に言えば、ずっとあなたとデュエルしたかったのですよ」

穏やかな微笑を浮かべるシユテル。そんな彼女を見た瞬間、俺の中にあつたもやもやしたものが消えていくような気がした。

「俺だつてずっとお前とデュエルしたいと思つてたよ」

「何でしょう……謝罪ついでに言われていたせいにか心に響きませぬね」

「……上げて落とすのやめてくれないか？ 怒つてないんだろ？」

「とやかく言うつもりはないと言つただけで、思うところがないとは言つていません」

「は？ ……なのに一緒にデュエルするのか？」

「あれはあれ、これはこれです」

ドヤ顔を浮かべるシユテルに対して、やっぱり俺とこいつは似ていないと思つた。だがその一方で、前にも似たようなやりとりがあつたことを思い出す。

そういえば昔からシユテルのお茶目な一面には度々困らされてきたっけ……。

ここ最近も似たようなことを考えていた気がするが、改めて考えると何となく笑えてきてしまった。そんな俺を見てシユテルは首を傾げている。

「やれやれ、ようやく仲直りしたか」

「今ので仲直りできたのかは分からないけど改善はできた気がする。心配かけて悪かつたな」

「ふん……心配などしておらんわ」

素っ気無いが、ディアーチェが素直に心配したと口にするとは思えない。というか、俺が本気で悩んでいたときにシユテルのことを教えてくれたのだから心配していないというのは嘘だろう。心配していないのなら、そのような行動を取るわけがないのだから。

とはいえ、ここで茶化すのはディアーチェに悪い。これ以上は何も言わないでおこう——と思つた瞬間、誰かが急に抱きついてきた。

「つと……レヴィか。脅かすなよ」

「みんな仲良くが一番だね」

こちらの言葉に対する返事にはなっていないが、レヴィの言葉は最もだ。ただ抱きつくのだけはやめてもらいたい。現状だと周囲に面倒な人間が多すぎる。

「……デアアーチエ、ここは私達も行くべきなのでは？」

「——っ、真顔で何を言っておるのだ貴様は！ 普通はレヴィを引っぱがすところであろう！」

「とか何とか言っつて、王さま本当は行きたいんじゃないの？」

「それは貴様のほうであろうが！」

「え、行っつてええの♪」

「ダメに決まっておる。というか、いい加減にせんかこのうつけ共！」

第1話 「スカイドツジ」

『れでいーす&じえんとるめん！ 大変長らくお待たせしました』

ハツラツとした声と共にライトが円盤のような乗り物の上の人物達を照らす。そこにいるのは、チアリーダーのような衣装をしたアリシアとフェイトだ。

『ここからのデュエルは、実況は引き続きアリシア・テスタロッサと』
『解説は私、フェイト・テスタロッサでお、お送りします』

アリシアは全く動じずにノリノリでやっているが、フェイトの顔ははたから見ても分かるほどに赤面している。まあ部活動でもないのにチアリーダーの格好をすれば大抵の人間があなるだろうが。彼女の性格を考えれば、あれを着てあそこに立っているだけでも褒めてあげたい。

『それでは、さっそく3rdステージであるスカイドツジのルール説明をしたいと思います』

『お、いいいいいよ、フェイトもやる気満々だね』

いや、どう考えても恥ずかしさを解説を頑張ることで誤魔化そうとしているだけだろう。アリシアだってそれくらい分かるはずだろうに、なぜフェイトを刺激するような真似をするんだ。あまりやりすぎると黙り込んでもおかしくないのに。

『今までのデュエルと比べるとちよつとルールが多いのがこの競技。なので図を使って説明するよ！』

『まずは各チーム、コート内に《アタッカー》を3人。コート外に《バックス》を2人配置して始まります』

『コートは自陣と敵陣で範囲が決まっているけど、上のほうには自由に飛び回ってOK。空の上で戦うのがこのデュエルの醍醐味かな』

『競技は《ボールスフィア》という球を自コートから敵に向かって投げ

……』

『ちよつとたんま。そこから先はこつちで実演しながら』

『説明した方がよいかと……ですがその前に』

『カードスラッシュや』

ふたりはリライズアップを行ってアバターを変化させた。制服姿だったシユテルは、高町と同じセイクリッドタイプ——その色違いである紫を基調とした防具を纏う。一方はやてはというと

「なあなあ〜どやった？」

「すぐくカツコよかったよ。あれ？ そのアバター……王さまと一緒に？」

「お、さすがさすがちゃん」

何がさすがなのだろうか。色の違いしかないのだから見れば誰だって分かると思うのだが……。

『はやてのもディアーチェと同じ《R・O・G》タイプ。その純正カラ―って言ったらしいのかな』

「「へえ〜」」

R・O・G―ロード・オブ・グロ―リーは希少な技能を持つと言われているタイプだ。例を挙げるならばディアーチェの場合、紫天の書の特殊能力によってスキルを所持制限を超えて持ち込み発動させることができる。同タイプであるはやても似たような技能を持っているはずだ。

『ちなみに王さまの《暗黒甲冑（デアボリカ）》は、ユーリの愛盛りだくさんの超☆魔改造品だよ』

「や、やかましいー！」

愛が盛りだくさんという言葉が恥ずかしかったのか、ディアーチェの顔は赤くなっている。

ユーリというのは、ディアーチェ達と同様にグランツ研究所にお世話になっている留学生の名前だ。他のメンツと比べると日本語に慣れていないようで、難しい言葉だと理解に時間がかかる。それに体があまり丈夫ではないため、学校には通わずに研究所で手伝いをしていたはずだ。

「大体小鴉、貴様は姿形だけでなくアバターまで真似しおってからに……」

「偶然やも〜ん♪」

「なのはとあっちの全国1位さんも色違いよね」

「うん、びつくり」

高町にシユテル、フェイトにレヴィ、はやてにディアーチエと容姿が似ているものは今のところ同じタイプになっている。

カードを作る際には色んな情報を打ち込んでいるはずだが、まさか容姿だけでアバターのタイプが決定してはいないだろうか。

「……セイクリッド」

「え？ なになににヴィータちゃん」

「オメーのはあのむつつりと同じギガレアなセイクリッドタイプだつて言ってるんだよ！」

タイプの特徴としては、防御が堅い上に豪火力。チーム戦の場合は遊撃を担当することで真価を発揮するだろう。

「しかも、なのはちゃんのはさらに珍しい限定色なんよ」

「オメーに一撃もらったのは性能のおかげっつーことだよ。勘違いすんなよな！」

「う、うん……？」

「おんやあく、相性や性能なんて戦い方でどうにでもなるく言うとなのは誰やったかな？」

「は……はやてえ」

はやての容姿はディアーチエによく似てはいるが、性格はかなり違うよな。まあ全く同じ人間なんていたら怖いけど。

「アバターやスタイルとの出会いは運命や。どう育てていくかはみんなの腕次第やし。楽しんで強くなろうってことやね」

「なるほど」

高町の瞳ははたから見ても分かるほどに輝いている。これまでの対戦からも分かるとおりに、彼女には才能がある。それにアバターの性能にも恵まれているため、きつと近いうちに有名なデュエリストになるだろう。

楽しむのが一番だけど、先輩として簡単に負けるわけにはいかないよな。あの子達もある程度ブレイブデュエルについて分かってきただろうし、これからは自分で考えて行動するようになるだろう。俺も自分のために動き始めるとしよう。

「ねえねえ、そろそろ始めようよ」

「おっと、そうやったそうやった」

「それでは僭越ながら、実演も含めてスフィアとルールのご説明をいたします」

シユテルはスカート裾を摘んで一礼。いつ見ても淑女さを感じさせる動きだ。お茶目な部分がなく、もっと愛想が良かったならば非の打ち所もない少女だっただろうに。まあ彼女のことをよく知っている人間からすると、それはもうシユテルではないと思えるだろうが。

「まず……ゲームの開始はサーブから」

綺麗なフォームから打ち出されたサーブがレヴィへと向かっていく。強烈かつ正確無比なそのサーブに、慣れないものならば腰が引けてしまうだろう。しかし、レヴィはあのダークマテリアルズの一員だ。あれくらいのサーブならば、片手でも捕球でき……

「あつ……」

……ああうん、まあここで落とすのもレヴィらしいよな。

このゲームにおいては、ボールに反応して手を出すと《クラブシールド》というものが発生してキャッチ判定される。片手でも上手くすれば取れるのだが、油断すれば今のレヴィのように落とす。

「敵が捕球しそこねると自陣に1得点。この時、ボールがそのままコートを出ると3得点となり、被弾者はバックスに下がることとなります。なお、最初からバックスの場合はこのタイミングで《バック》のコールをすることで《アタッカー》になることができます」

「15点の先取、もしくは敵コート内の選手がゼロになった時点で自軍が勝利。あと、ボールの投げ返しは捕球した者のみの権利となるので覚えておけ。自軍アタッカー同士のパス回しは禁止だ」

「ちなみに補足。キャッチや打ち返しの時だけはデバイス使ってもええねんよ♪」

「いつ、今言おうと思っておったのだ!」

「デバイスでの打ち返しは成立後、投げ返したことと同義になりますのでご安心を」

シュテル達の説明に、初心者の方3人はなるほど頷いている。直後、キャッチを失敗して落ち込んでいたレヴィが急に「変身！」と叫んだ。バニングスがすぐさま「アバターが変わった!？」とツッコんだが、マントがなくなっただけのようなもので変身と言えるかは微妙である。

——投げるのに邪魔だったんだろうが……あいつには羞恥心つてものがないのか。って、あるわけないか。あるなら会うたびに抱きついてきたりしないだろうし。

「こうやって……投げた後に魔力を込めると! ……あ」

シュテルに向かって投げたはずのボールは、大きく左に曲がって月村へと飛んで行った。予想外の事態に誰もが動けなかったが、月村は見事にグラブシールドを出現させて、バック宙を決めつつキャッチして見せた。

それを見たバニングスはさすがだと褒め、はやてやヴィータは感心している。人は見かけによらないというが、あの子の場合はそれが多い気がする。

「要領は誘導弾と一緒にだかな。イメージの正確さとタイミングが重要だ」

「《魔力》を込めれば威力と速度は上がるけど、魔力には《限界値》があるから気をつけてなあ」

「説明は大体こんなところでしようか」

『ありがとう。ダークマテリアルズはメンバーあとひとりどうする?』

「よし、ここはボクのチヴィを!」

「待てい! 今回は我のを出す。前回の二の舞になってたまるか!」

ディアーチェの発言にレヴィは文句を言うが、シュテルは表情はあまり変わってはいないがホツとしているようだ。

コイントスの結果、ダークマテリアルズが先制でゲームがスタートすることになった。アタッカーはシュテル、レヴィ、ディアーチェ。バックスは俺とディアーチェのNPC——通称《王ちやま》だ。対する相手側は、アタッカーが高町、バニングス、ヴィータ。バックスに

月村とはやてである。

「そんじやいづくぞー!」

レヴィは笑顔でボールを高々と放り投げると、あとを追うように跳躍する。

「滅殺! 零七七式真・雷光サーブ!」

零なんたらの部分はともかく、まさしく雷光に等しいサーブは甲高い音を撒き散らしながら……高町とバニングスの間を通って敵陣のコートに着弾した。間近を通った高町の顔が一瞬「え? ……何これ」のようになつた気がした。

「ありや……当たんなかった」

『これはスゴい! まさに電撃サーブ!』

「ななな何よ今の……」

「わく……」

バニングスは怒り、高町は放心気味だ。ゲームとはいえ勝負なのだから……とも思いもするが、確かに始めたばかりのプレイヤーに放つサーブではない。

敵側が誰も捕球できなかつたため、再度こちらのサーブになる。なおサーブは順番制なので、次のサーブはシュテルだ。

「では……参ります」

シュテルから溢れた魔力が灼熱の炎へと変化しボールを包み込んでいく。属性込みに加えて集束までかけるとは……レヴィよりも大気ない。勝負事に熱くなる奴だとは知っているけれども。

放たれた炎球は大きく曲がりながらバニングス達へ襲い掛かる。潰せるところから潰せるのは定石ではあるが、全国1位が初心者をはじめでいいものだろうか。

考えていることは大体分かるが……まあ実力を見せるのも務めではあるか。俺は今回は同じチーム、それも助っ人というか人数合わせでいるようなものだから静観していよう。

「アイゼン!」

バニングス達を助ける……ゲームに勝つためかもしれないが、ヴィータはデバイスを手に炎球に接近し、デバイスを思いつき叩き

つけた。だがシュテルのサーブの威力のほうが勝っていたようで、ヴィータは外野へと吹き飛んでいく。

これはアウトか、と思いましたが、凄まじい勢いで追いかけてきたバニングスが制止をかけたことで、ヴィータはコース内に留まることのできた。

バニングス達に良い感情を抱いていないように見えたがヴィータだが、今バニングスに向けている顔は穏やかだ。助けてもらったことに礼を言っているのかもしれない。微笑ましい光景だとは思うが……あの子達はボールのことを忘れているのではないだろうか。

「……って、ボール!？」

「やべえー! このままコート外に出ちまうと……」

やはり、というべき反応をしたふたりだったが、間一髪のところでは高町が捕球した。先ほどはサーブに安心していたというのに、とつさにボールを追って空を駆けられるのは感心する。

高町は滞空したままボールに魔力を込め、シュテル目掛けて投げ返した。初めてにしては良い球ではあるが、あれくらいのボールではシュテルを仕留めることは……

「アクセルッ!」

「ツ……!?!」

高町の掛け声と共に、ボールは強烈な加速し左右にブレた。初心者が放てるものとは予想すら難しいそれに、シュテルも反応が遅れたのか側頭部に被弾。まさかの事態に、レヴィやディーアーチエからは驚愕が漏れ、敵側には驚きや喜びの反応が沸き起こる。

「……高町なのは……本当に面白い子だな」

第12話 「お茶目なシュテル？」

全国No.1デュエリストの称号を持つシュテルのヒット&アウトという大金屋で、混成チーム優勢で始まったスカイドッジ。ダークマテリアルズはシュテルの抜けた穴を埋めるために、俺と共にバックスをしていた王ちやまをアタッカーに移すことにした。

補足しておく、スカイドッジでは各チーム2回まで《バックス権》を使用することができる。これはバックスが2名以上いるときに使用でき、外野から内野に移動していい権利だ。また他にもバックスが敵のアタッカーを撃破することができる、バックス権を使用せずに自陣のアタッカーになることはできるが、ストックすることはできない。「レヴィをよろしくお願いします」

アタッカーに移ろうとする王ちやまに真剣な顔で話しかけるシュテル。彼女を見たディアーチェの顔は、どことなく呆れているようだった。

こちらのチームのバックス権は残り1回。あちらは2回。数だけで言えばあちらが有利の状況だ。ただシュテルが撃破されたことで、ディアーチェ達は本気になったようである。現在作戦会議をしている。個人・集団においての戦力を考えた場合、あちらのチームに余裕はないだろう。

そんなことを考えていると、隣にシュテルがやってきた。普段よりも距離感が近いように感じるのだが、まあ気にすることはないだろう。現実ではメガネを掛けているシュテルだが、ゲーム内ではメガネがない状態だ。現実でメガネを掛けないときの彼女もこれくらいの距離感なので、別におかしくはない。

「あれは初見じゃ厳しいよな」

「厳しい？ あなたならば避けられたのではないですか。反応速度は私よりもあなたのほうが上なのですから」

確かに近接主体の俺のほうが射撃主体のシュテルよりは反応速度に優れているだろう。だがどうして少し刺々しく言うのだろうか。

このデュエルに俺を引き込んだのはシュテルのほうだよな。過去

のことに思うところはあっても言っておくけど、それはそれでこれはこれらしいし。

「……………」

「……………」

「……………何で付いて来るんだよ?」

「あなたと話すためですか?」

「いやいや、話すだけならもっと距離があってもできるよな。どうしても今みたいにびったりと隣をキープする必要がある。」

「……………そうか。でもこの距離感で話す必要はないよな?」

「いえ、ありますよ。思わぬ撃破に私の心は傷ついています。なので慰めてください」

「全く傷ついているように見えないんだが?」

「というか、内心は笑っている気がする。高町の潜在能力の高さにデュエリストとしての血が騒いでいそうだし。」

「傷ついています。方法は……………そうですね、頭を撫でるといったもので構いませんよ」

「お前……………真顔で何言ってるの?」

シユテルは昔から付き合いのある奴だけど、未だに掴めない部分がある奴だ。俺がおかしいのか、それともシユテルがおかしいのか……………多分後者だよな。俺は至って普通の中学生だし。

『ちよつとちよつと、デュエル中にイチャつくのはどうかと思うんだけど』

「姉氏、別にイチャついてはいません。私達なりのコミュニケーションンです」

『そうか、って何でそこで腕に抱きつくの!? 明らかに挑発というか意識向けさせてるよね?!』

「何のことでしょう? 私と彼の仲はあなたも知っているはずですが?」

うん……………知っているとは思いますが、俺と同じで友人同士って認識だと思ふな。腕を組むような関係では決してないぞ。というか、からかうためだからって引つづくのはやめろ。一応俺だって男なんだから。」

それにさ、さつきから凄くディアーチエが睨んでるんだけど。真面目にやれって感じで。レヴィは何か羨ましそうな顔してるし。お前は現実のほうで会うたびに引つ付いてるだろ。少しは我慢しなさい。「こらシユテル、わたしのシヨウくんは何してるんや！抱きつくのはわたしの特権なんやで〜！」

反対側の外野から両腕をブンブン振りながら怒ってますと言いたげに声を上げるはやて。俺から言わせてもらおうと、はやてのものになった覚えもなければ、はやてだけに抱きつくことを許した覚えはない。

「はやて、私の記憶が正しければシヨウは誰のものでもありません。故に今は同チームであり、隣にいる私のものです」

「シユテル、何でお前は時折ぶつとんだ理論を出すんだ？ どう考えてもそれはおかしいだろ」

「私にこうされるのは嫌なのですか？」

シユテルはディアーチエにお願いしたときのように上目遣いで聞いてきた。嫌か嫌じゃないかでいえば、別に嫌ではない。嫌ならば近くにいるのを許していいだろうし。

「嫌じゃないけどさ……」

「ええい、いい加減離れぬか。今はデュエル中ぞ！ それに小学生も居るのだ。人目はちゃんと気にせぬか！」

「ディアーチエもあ言ってるしさ」

「大丈夫です。ディアーチエは嫉妬からあのようになっているだけですから。前に寝ているときにですが、枕を抱きしめながらあなたの名前を呼んでいたことが……」

「な、ないことを捏造するではない！」

と言っている割には顔が赤いな。まあ寝るときだから否定できない部分があるからな。でもあのディアーチエだし……多分シユテルの嘘だろう。

『ダークマテリアルズ、真面目にやってくれないとデュエルが進まないじゃん。実況できないよ！ フェイトも何か言ってるよ！』

『えい!? えつと……その、仲が良いのは良いことだと思うけど……今

「はデユエル中だから……」

『そうだよ。大体シヨウはフェイトのなんだから取っていいのはわたしだけ』

『ちよつ、お姉ちゃん!? ベベべ別にシヨウさんはわ、私のじゃないから。それに姉妹だから取るのはダメだよ!』

フェイトはともかくアリシア……お前も真面目にやるつもりないだろ。シユテルに対抗意識燃やしてるみたいだし。

時間が止まったかのように沈黙が流れ始めたので。俺はそつとシユテルを引き剥がすとボールを持つていた高町に話しかけた。

「あー高町」

「え、あつ、はい」

「こつちから言うのもおかしいんだが、続きやっていいぞ」

「ああ、はい。……それじゃあ、高町なのは行きます!」

言い終わると同時に大量の魔力をボールに込める高町。その魔力に俺を含めた経験者組は内心驚いたことだろう。

豪火力で鉄壁のセイクリッドに加え、飛行のセンス、それにあの魔力量か。潜在的な能力だけで言えば、隣にいる全国1位さんよりも上かもな。こいつはそんなに魔力が多いわけじゃないし。可能な限り無駄をなくすことで鉄壁と火力を得てる技巧派タイプだから。

『なのは、あんまり込めすぎると……!』

「妹氏、あなたは解説であってセコンドではないはずですが?」

『フェイト、シユテルの言うとおりだよ。さすがにずるっこ』

シユテルとアリシアの言葉に肩を落とすフェイト。ただ今回ばかりはふたりのほうが正しいので、彼女にフォローの言葉を掛けてしてやることはできない。

そうしている間にも高町は魔力を込め続け、その込められた魔力量にヴィータは驚きの声を上げている。ただこちらの内野はというと

「なによはってもしかしてシユテるんとおんなじ?」

「うむ、魔力集束の技術があるようだな」

——ただただ現実を直視しているようだ。だが身構える様子はな

い。先ほどまでは油断があつたかもしれないが、今のディアーチエ達ほどの程度かは分からないが、多少なりとも本気になつている。シユテルのときのようなことは起こらないだろう。

「それじゃ……行くよ、セーのー！」

「お、ボクか……よっ、甘い甘しい！」

高町が放つたアクセルシユートは初心者とは思えない速度と誘導性のある玉だが、レヴィは機動性に優れたライトニングタイプ。それに全国で一桁に入る実力の持ち主だ。実況では紙一重で避けていると言っているが、本人からすれば余裕だろう。顔も笑っていることだし。

今のままでは当たらないと思つたのか、高町はさらにボールを加速させた。それにはさすがのレヴィも驚いたようだが、直後には強気な表情が浮かんでいた。

「そんじゃボクも凄いのやっちゃうもんねー！」

ボールが当たる直前、レヴィの姿が消える。いや正確には消えたのように見えたというべきだろう。彼女は《スプライトムーブ》と呼ばれるスキルを発動させ、残像が見えるほどの高速で移動している。

今のレヴィに攻撃を当てるのはシユテルやディアーチエでも難しいだろうな。俺も動きは何とか追えるけど、防御はともかく反撃は厳しいし。

超高速移動のレヴィを高魔力のボールで追いかけることで、高町の魔力はみるみる減少していく。それは目に見える形で現れ、高町はどことなくふらつき始める。このゲームにおいて魔力は精神力でもあるため、枯渇すれば気絶してしまう。

「それならー！」

今は当てることができないと判断したのか、ボールは急遽レヴィから向きを変えてディアーチエに飛んで行った。しかし、ディアーチエは動こうとはせずに指一本で高町の剛速球を受け止めた。止められた高町が驚愕の表情を浮かべたのは言うまでもない。

「悪魔の門より来よ闇の宵風……返礼だ！」

詠唱のとおり、闇に飲まれたボールは悪魔のような門から射出され

て高町に襲い掛かる。俺の記憶が正しければ、確か《デモンゲイト》と呼ばれる魔法だったはずだ。

直撃を受けた高町は凄まじい勢いでコース外まで飛んでいき、盛大に起きた爆発に巻き込まれた。場所を移動していなければ巻き添えになっていたかもしれない。彼女を心配したチームメイト達は急いで駆け寄って行く。

『シユテル、DMSとの全開勝負なんて初心者なのは達にはまだ荷が重いよ。いきなりこんな差のある勝負なんてしちゃったら……!』
フェイト、高町を心配する気持ちは分かるが今の君は解説のはずだろ。それと……シユテル、お前はうんざりとしたような顔をするな。その顔よりはまだ無表情のほうがマシだ。

「黒ひよこ、貴様は自分の仕事を続けよ」

『でも!』

「もう一度言う。よくモニターを見て仕事を続けよ」

デイアーチェの言葉にフェイトの意識は再度高町のほうに向いた。そこには、コース外には飛ばされたもののしつかりとボールをキャッチしている彼女の姿がある。フェイトに気が付いた彼女は、大丈夫と言わんばかりに拳を突き出してアピールをした。その後、元気にバックスに移動し始める。

「過保護にするだけでは雛鳥の成長を妨げるだけ……ということですよ」

『私はただ……みんなのことが心配で』

「過保護・過干渉は煙たがれますよ」

……シユテル、お前フェイトに何かあるのか。さつきから妙に冷たいというか、言動がひどいように思うんだが。

というか、何でフェイトと会話しているのに俺の髪を触ったり、頬を引つ張ったりしてたんだ。いやまあ何となく分かるけど、暇だからって人で遊ぶなよ。NPCとは違うんだから。

「向かい風の中でしか見えない景色もある。その景色の中で羽ばたく彼女達の姿を私は見てみたい……」

「……シヨウ、あなたはエスパードですか？」

「いや、こういふときのお前の内心は割りと分かるから。それより、い
い加減俺で遊ぶのやめろ。これ以上やるならさすがに怒るぞ」

第13話 「終盤……だけど」

試合は混成チームがバック権を使用し、月村がアタッカーに加わったことで再開された。

月村はまだまだ初心者であるが、話してみた感想としてはあの中でも頭が切れる部類に思える。小さな狸さんにも何か吹き込まれていたようなので油断は大敵だろう。

アリスアの実況が進行する中、月村はアタッカー達に何か吹き込む。その間サーブを行うレヴィは、これといって気にした様子もなく、体の至るところでリフティングして時間を潰していた。余談だが、彼女の頭の上には王ちやまが乗っている。

『レヴィ選手のサーブから試合再開です。またも真・雷光サーブが火を噴く……もとい鳴り響くのでしょうか!』

「モチのロン、当たり前エダのクラッカーだね♪」

……あいつは何を言っているのだろう。

と、思っている間にレヴィは踵でボールを高々と打ち上げた。彼女はすぐさまあとを追っていく。無論、頭の上に居た王ちやまも一緒だ。チラリと敵コートに視線を送ると、アタッカー達は強気な表情を浮かべていた。

「ボクと王ちやまでオーバーレイ！ 裏七七式、極・雷光サーブ
！」

レヴィと王ちやまのふたり掛かりで放たれた雷光は、先ほどのサーブより格段に高い威力を誇っているように見える。全国ランカーが初心者に向かって放つには、正直大人げない。まあここに至るまでに、大人げないことは多々あったのだが。

混成チームは慌てずに行動を起こす。

まず月村が氷の盾を何重にも展開して雷光の威力を落とすが、相殺することができなかった。それを見たバニングスは、己の拳に魔力を集中させ勢い良く振り抜き、雷光を上打ち上げる。ヴィータが宙を駆けて後を追う、最上段からデバイスを使った一撃を叩き込む。

「どんな球が来ても……あれ？」

避けようとしたレヴィが突然へたりこんでしまった。ここまでの状況を振り返るに、おそらく魔力が切れてしまったのだろう。

流星のような返球が迫る中、レヴィは諦めたように立ち尽くす。そこに現れる小さな影が現れる。

「王ちやま!?!」

そう、小さな影の正体は王ちやまだったのだ。きつとシュテルに言われた言葉を守ろうと、自分の身を犠牲にしてレヴィを守ろうとしているのだろう。

王ちやま……お前って奴は。

と想いを馳せていたのだが、あまりの返球の威力に王ちやまは弾き飛ばされレヴィにも直撃した。ふたりがノックダウンしたことで、相手チームに一挙に6点もの点数が入る。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……無視ですか?」

いや、無視はした覚えはないんだが。気が付いたら傍に立っていたし、視線を向けてみても反応がなかったから黙ってただけで。

「今度は何の用だよ?」

「いえ、大したことではありません。ただ……あなたも見守ってばかりではなく、少しは楽しんだらどうかと思ひまして」

一応俺は全国ランキング1位さんと同等の実力があると評価されているし、本人からライバル扱いされている。ついこの間始めたばかりの小学生相手にそれは……、と思ったりもした。だが

——確かにシュテルの言うとおりかもな。あの子達はシュテル達のを目を当たりにしても、屈することなく立ち向かい続けている。成長の早さから考えて、きつと近いうちに強敵となって目の前に現れる違いはない。

俺達デュエリストは、切磋琢磨して更なる高みを目指す存在だ。彼女達が目指したいと思う高みを示すことも先輩としての役目ではな

いだろうか。

……いや、あれこれと理由を並べるのはよそう。

俺はディアーチエ達からシユテルと似ていると言われることがある。普段は否定しているが、デュエリストとしての想いや思考に関しては似ているところが多いのも事実だ。彼女達が向かい風の中でどのように羽ばたいてくるのか、俺も見してみたい。

「ふふ……」

「何だよ？」

「別に何でもありませんよ」

そう言つてシユテルは、静かに微笑みながら俺の元から離れて行く。

訳が分からない……わけじゃないけどな。俺はあいつと同じデュエリストなんだから。シユテル、ありがとな。

ロケテストに参加したことで、俺はどこか遠慮してしまっていたのかもかもしれない。

自分は一般の人よりも先輩なのだから教える立場なのだと。いきなり強い力を見せてしまうと萎縮してしまう人々がいるのではないかと。

力を持つ者には責任が伴う。

アニメや漫画でも時折耳にする言葉だ。それらに出てくる力に比べれば、俺の持つ力なんて微々たるもの。はたからの評価なんてゲームが上手い中学生といったものだ。

だがそれでも、俺は力を持っている。見る者に憧れや興奮を抱かせることくらいはできるはず。

目立つことは正直に言つて苦手だ。だがすでに俺はアリシア達のせいで十分に認知されてしまっていることだろう。ならば開き直つて純粋にゲームを楽しんだほうが得策と言えるだろう。

そう思う一方で、もしかすると嫉妬や恐怖のような感情を抱かせるかもしれないという想いはある。だが俺は神ではなく、ひとりの人間。ただのデュエリストなのだ。全ての者から好かれるわけがない。

思考する間にもデュエルが進む。進むに連れて俺の脳内はクリア

になっていき、ロケテストの時に抱いていた感情だけが残った。

……そう、俺はただのデュエリストだ。テストプレイヤーだったからどうこう……、なんて考える必要はない。ただ、ひたむきにデュエルに挑むだけだ。

『さあ、デュエルも終盤に入ってきました。現在、コート内に残っているのは混ぜっこチームがアリサ選手にわずか選手、そしてはやて選手。対するDMSはディアーチエ選手とショウ選手です！』

アリシアの実況に補足説明を行うと、互いにバック権を1回ずつ残しており、サーブを行うのは俺だ。

さて……誰を狙うか。

定石で考えれば、経験値の少ないバニングスか月村を狙うべきだ。より可能性を高めるならば、防御力に劣っていそうなバニングスを狙うべきだろう。

だがこれまでの流れを見る限り、ディアーチエがシュテルのために膳立てを行っている節がある。加えて、俺は今回ダークマテリアルズのおまけとして参戦している身だ。

あいつは別にそんなつもりはなかったんだろうが、全力じゃなく少しは楽しめと言われた以上、ここはあの小狸を狙うべきだよな。さつきから構ってアピールしてて少しウザいし。

「いやん、そんな見つめられたら恥ずかしいやないか」

「はやて……あんた余裕ね」

「はやてちゃん、何だかショウさんの機嫌がどんどん悪くなっていつてるように見えるんだけど」

「大丈夫、大丈夫。ショウくんは一見冷たいように見えるけど、優しい性格をしとるんや。それに照れ屋というか、素直に感情表現せんところがある。何よりわたしとショウくんの仲や。何も問題……」

話している途中で投げけるのもどうかと思ったが、ああもベラベラとナチュラルに馬鹿にされては苛立ちもする。年齢で言えばはやては小学生だが、ああ見えて大卒の社会人だ。俺は中学生なのだから何も問題あるまい。

俺はボールに魔力を込めつつ鋭く放つ。本来ならば高町のように

急加速や旋回を取り入れたり、シユテル達のように集束や属性を付与して攻撃力を上げるところだ。が、俺は一刻も早くあの小狸の口を閉じたかったので、あえて直進するだけのボールを放つことにした。

俺の魔力を吸い込み黒い閃光と化したボールは、迷うことなくはやてへと突き進み直撃。彼女のオーバーとも言えそうな悲鳴がコート内に響いたのは言うまでもない。コート内に居たバニングス達が心配の声を上げるが……

「ぐす……わたし、傷もんにされてもうた。もうお嫁に行けへん」

などと、小狸はしっかりとボールを抱き締めながら泣き真似をする。チラチラとこちらの反応を窺ってくるのが実に癪に障る。

「おい、誤解を招くようなことを言うな。身も心もお前は健康だろう」
今小学生から《乳魔人》、《わがままボディ》と呼ばれる連中の耳に入ったらどうするつもりだ。あいつらは主LOVEなんだぞ。下手したらボコボコにされるだろうが。

「何を言うとするんや。今のでわたしのハートは……シヨウくんに撃ち抜かれてもうたんやで」

「ええい、いつまで小芝居をするつもりだ！ さっさとボールを投げぬかー！」

「大丈夫、安心してや王様。わたし、王様のことも好きやで」

「誰がそんなことを申せと言った！ 我はボールを投げろと言っておるのだ！」

「もう素直やないなあ。そんなんじやシヨウくんはわたしがもらってまうで」

「——っ、ベベ別に我はシヨウのことなど何とも思っておらん！」

ズキッ！ という音が胸に響く。

わけもない。これまでこのようなやりとりはたくさんあったのだ。いちいち反応してはきりがない。

だからディアーチエ、俺の反応を窺うな。小学生達は目を輝かせたり、恥ずかしそうに顔を赤くしながらも聞きたいなってアピールはやめろ。

「とまあ、ふざけるのはここまでにしよか。これ以上は王様だけやの

うて実況さんからも怒られかねへんし……行くで！」

気合の声と共に、はやての顔がのほほんとしたものから凜としたもの変わる。これは本気で来る！　と思っただ次の瞬間――

「シヨウくん、わたしの気持ち受け取って〜♪」

――満面の笑みで放たれたボールは、実にふわ〜という効果音が似合うほどゆっくりとしたものだった。魔力が込められているようにも見えず、ただ投げただけとしか言えない。

俺は静かに右手で漆黒の愛剣を抜き放ち、肩の高さで構え限界まで引き絞る。今放とうとしている魔法は、炎熱変換も同時に掛かるため集束される魔力が深紅色に変化する。

「え、ちよっ……!？」

はやてが慌てたように声を漏らし、身振り手振りで落ち着けと訴えてくる。だが俺は止まりはしない。

前後に大きく開いていた両足で思いっきり地面を蹴り、生じた加速を回転力に変化。背中を経由させて右肩に伝え、回転を再び直進運動に変える。

魔法名《ブレイズストライク》。

ガードの固いセイクリッドタイプであろうと確実にダメージを与え、時として戦況を一撃で決め得るほどの威力を誇る魔法だ。真紅の魔力刃が刀身の約2倍ほどまで伸びるため、片手直剣にはあるまじき射程距離を誇る。限界まで伸ばされる右腕のリーチを含めれば、長槍型さえも凌駕する射程になるだろう。

撃ち出した剣は、深紅の奇跡を描きながらボールを直撃。ふわりと飛んできていたボールは、まるでジェットエンジンで加速されたかのように爆発的に速度を増し、慌てふためくはやてへと向かう。

「うー……」

腹部に赤い彗星が直撃したはやては盛大に吹き飛び、転げ……：仰向けの状態で力なく寝転がる。心優しい小学生達はそんな彼女に近寄り、代表してヴィータが彼女を抱きかかえた。

「ほやっー」

「……みんな……あとは頼んだで……ガク」

直後、ヴィータの声がこだまする。

何やら俺が悪役の空気になりつつあるが、どう考えてもあそこで死に逝く仲間を演じている馬鹿のせいだよな。本当に気絶する奴は「ガク」なんて言わないし。

もしかしてあいつ、今の演技をするためにわざと受けたんじゃ……そう考えると、あいつのいい様に動かされた感じがして癩に障るな。見ている人間は楽しんでるだろうが。

『さすが《漆黒の剣士》の通り名を持つショウ選手、本気の一撃はハンパないです。そのあとの展開については……まあこのふたりのやりとりは夫婦漫才みたいなのがありますし、観客の皆さんは気にせず楽しんでください』

「もう、夫婦なんて照れるやないか」

『あ、はやて選手、イベントを盛り上げてくれるのはこちらとしても嬉しいんですけど、あまりイチャイチャされるのも困りますからね。イチャつくならデュエルが終わってからにしてください』

「りよ〜かい♪」
はやては何事もなかったように立ち上がり、集まっていたチームメイト達をコートの方へと戻す。

スカイドツヂは無事に再開されたわけだが、どうにも緊張感が足りない。だがそれは俺だけのようで、先ほどの一撃のせいか、コートに残っているバニングスと月村の顔には緊張の色が見て取れる。

「全国レベルだったのは聞いてたけど……」

「そうね……ちよつと大人気ない気もするけど」

「悪いな、今の俺はダークマテリアルズの一員なんだ。王に仇名す者に容赦はできない」

変に緊張されて実力を発揮されないのも困るので場の空気に乗っけてみたのだが、慣れがないため内心恥ずかしく思ってしまう。けれど小学生達に効果はあったようで、緊張感を持ちながらも笑みを浮かべている。

「……ふと思ったのですが、今のはディアーチエへの告白なのでしよるか？」

「んな——シユテル、貴様は何を言っておるのだ！　せつかくの緊張感が台無しではないか！」

「すみません、ですが気になったもので」

ドヤ顔で言われても全然謝られてる気がしない。何ていうか……このメンツでの真剣勝負って今の段階じゃ無理なんじゃないのか。

第14話 「親戚、現る」

八神堂でのスカイドツヂは、混成チームの勝利に終わった。

詳しく説明すると長くなるので簡単に言うと、俺とディアーチエがシュテルだけに任せてバックスに回り、彼女が目指すべき高みを体現していたのだが、混成チームの持てる全ての力を掛けた一撃を受け止めきれずに場外に出てしまったのだ。

高町はシュテルからライバル認定されてたし、高町を含めた小学生組は今度グランツ研究所に來いって誘われたっけ。その前にチーム名を決めないといけないとか言ってたけど。

近々あの5人がチームになるのか……良いチームになるだろうな。アバターのタイプもバラバラであるし、やる気や不屈さも充分にある。普段の仲の良さも考えれば、近いうちにチーム戦でも活躍するようになるのではないだろうか。あのダークマテリアルズに潜在的な力は認められているのだから。

「あの子達が有名になればT&Hも活気付く。八神堂やグランツ研究所にはすでに有名な連中がいるわけだから……ますますブレイブデュエルが世の中に広まるだろうな」

そう思うとロケテストに参加し、叔母が開発に関わっていた身としては実に嬉しい。その一方で、あの子達にまでチームに入ってほしいと言われ始めるのでは……、と思うと少し憂鬱になる。

……いや、大丈夫かな。チームは5人1組だし、あの子達はちょうど5人なんだから。

そのため誘ってくるのはダークマテリアルズくらいでは、と思いたいところだが、八神堂のことを考えると人数が居ても誘ってくる可能性はある。まあT&Hはアリシア、八神堂ははやと特定の人間だけだろうが。

ディアーチエが誘ったことはないし、レヴィもじゃれついてくるくらいでチームに入れとはあまり言わない。シュテルは共闘も楽しそうではあるが、敵対するほうが楽しいと思っていそうな奴だ。あそこのチームが1番誘ってこないかもな。

「ということは、これまでとほとんど変わらないかもな」

良いことのように思えるが、考え方によっては味わう苦勞も同じということだ。素直に喜べない。これ以上考えても気分が向上するわけではないので、コーヒーを飲みながら今日の予定を考えることにした。

確かレーネさんは帰りは遅くなる、最悪帰ってこないかもしれないと言っていた。食事は自分の分だけを用意すればいい。ならいつも以上にブレイブデュエルに時間を割いてもいいかもしれない……。『ショウ、デュエルをするなどは言わんがきちんと食事は取らぬか！ どうして貴様は時折だらしなくなるのだ！』

ふと脳裏にディアーチエが出てきてしまった。年齢的には俺のほうが少し上なのだが、昔から面倒見の良い性格だった彼女には時々説教されていたのだ。言っていることが正しいだけに反論できた覚えはない。

最近はなくなったが……こっちに戻ってきてからは食事に誘われることがあるな。あいつの料理は上手いから食べたくはあるが、あそこは人数も多いし、たくさん食べる奴もいるからな。手間を増やしたくないって思うんだよな。

これをディアーチエに言ったところで、気にせず食べに来いというニュアンスの返事があるだけだろう。しかし、俺も家事をしている身であり、日頃の彼女の家事を除いた苦勞も理解できるため、あまり甘えたくはない。

「……ん？」

不意に室内に高めの音が響いた。来客を知らせるインターホンの音だ。

記憶を辿ってみても、今日誰かが来るという話は聞いていない。突発的に訪れそうな人間の心当たりはいくつかあるが……海外にいる両親が何か送ってきた可能性もある。ネガティブに考えるのはよそう。

「やつほー」

俺が玄関を開けると、来客が明るく無邪気な声で話しかけてきた。

乳白色とでも言うべき肌に鮮やか赤い瞳。長く伸びたストレートの髪は紫黒色だ。背丈は同年代と比べると小柄なほうに入るだろう。

目の前にいる少女の名前は東雲悠樹。普段はユウキと呼んでいる。彼女は俺の母方の親戚であり、幼い頃から度々顔を合わせている間柄にある。運動はあまり得意ではないのだが、ゲームにおいては天性の才能を持っており、俺よりもあとに始めたはずなのにいつの間にか追い抜かれていたということが数え切れないほどあった。

この説明から分かるだろうが、俺とユウキは知らない間柄ではない。

それにも関わらず、俺が固まっちゃってしまっているのはユウキが住んでいるのがこの街ではなく海外だからだ。突発的に遊びに来ることは考えにくい。

「久しぶり……どうかした？ 僕の顔に何か付いてる？」

「いや……急に来たから」

「え？」

なぜユウキは驚いているのだろうか。……もしや

「レーネさんから聞いてないの？ 今日来るって言ってあったと思うんだけど」

やはりそうか。

俺が今一緒に暮らしているレーネという人物は、天才的な頭脳の持ち主であるのだが、一度仕事を始めると不眠不休で働くような仕事中毒の一面を持っている。そのため家事全般は不得意であるし、このように連絡事項を伝え忘れることが多々ある。

現状では俺の保護者的な立場にあるはずなんだが、彼女のことを知っている人間からすれば、俺が保護者の立場にいるように見えるのではないだろうか。すでにイイ大人なのだからもう少ししっかりしてほしいものだ。

「はあ……」

「え、僕まずい時に来ちゃった？ それとも来ること自体迷惑だったかな？」

「ああいや……レーネさんに思うところがあるだけで、お前にどうこ

うってわけじゃない。にしても、えらく今回は荷物が多いな」

「それはそうだよ。しばらくこの家でお世話になるんだし」

「……………は？」

この家に世話になる？　つまり泊まるってことか。まあ親戚だから問題ないと言えはないわけだが……………しばらくって言葉が気になつて仕方がない。

「しばらくって……………いつまでだ？」

「僕の父さん達がこっちに来るまでだね」

「……………いつ来るんだ？」

「うーん……………分かんないや。できるだけ早く来るって言ってたけど」

ユウキがここに来た経緯が上手く理解できない俺は素直に事情を説明し、詳しいことを聞いてみた。

ユウキが言うには、彼女の父親が転勤でこの街に来ることになったらしい。ただ残っている仕事があるため、すぐには行けないとのこと。ならば一緒に来れるまで待てばいいのではないか、と思いついてみると――

「だって暇なんだもん。シヨウもシユテル達もみんなこっちに行っちゃってたし。それに2学期からシヨウと同じ学校に通う予定だからね。この街のこととか勉強とかしとかないといけないから」

「……………最大の理由は？」

「ブレイブデュエルがやりたいから！」

だろうな……………それでこそ俺の知るユウキだ。

ってことは、俺はユウキの両親が来るまで彼女の面倒を見なくちゃいけないってことか。期間は最長で2学期が始まる前まで。いくらレーネさんも一緒だからって、ほとんど仕事でいないわけだし。年頃の男女が長い時間一緒に暮らすのはまずいだろう。

かといって、すでに話は通っているようなのでユウキを帰すわけにもいかない。レーネさんにはあとで説教しておくとして、とりあえず家に上げよう。いつまでも玄関で話すのもあれだ。

「お前が来た経緯については分かった……………まあ上がれ」

「うん……………その手は何？」

「荷物をよこせってことだよ。運んでやるから」

「いいよ別に」

「いいから」

俺は半ば強引にユウキから荷物を受け取った。普通このような真似をすれば怒られたりするだろうが、まあ俺とユウキには多少なりとも血の繋がりと共に過ごした時間がある。それに彼女は最近は何も聞いていないが、昔はよく体調を崩していた。それだけに重たい荷物を持たせたくない。

「僕も一応女の子なんだけどな」

「安心しろ、お前くらいにしかしてないから」

「それって僕だけ特別扱いしてくれてるってこと？」

からかうような笑みを浮かべているユウキの額に、俺は無言で振り返るとでこピンを入れた。なかなか良い音がしたので痛かったらしく、彼女は両手で額を押さえる。むすつとした顔をこちらに向けてきたが、相手にしないことにした。

「もう、そういうところがシヨウの悪いところなんだよ。だから彼女が出来ないんだ」

「あいにく自分を偽ってまで作りたいたいと思ってる。長続きはしないだろうし、作ったら騒ぎそうな人間がいるしな」

「ふーん……ま、シヨウらしいね」

興味なさそうな返事だな。お前の興味はブレイブデュエルのほうに行ってるわけか……まあ追求されるよりはマシだけど。親戚の異性と恋愛について語るなんて考えただけでも無理だ。

「そういうえば、こつちに戻ってきたから新しい友達とか出来た？」

「ん？ まあ……仲良くなった子は何人かいるな。店の手伝いとかで初心者の面倒とか見たりすることがあるし。最近だと小学生達と親しくしてたかな」

「女の子？」

「そうだな」

「……シヨウウってロリコン？」

何で小学生と親しくしてただけでそうなるんだよ。俺だつてつい

この間まで小学生だったし、低学年と親しくしているわけじゃない。歳の差はあまりないんだぞ。

「ユウキ、お前俺に恨みでもあるのか？」

「別ないけどさ、やっぱり小学生の異性として聞くと……」

「お前と一緒にいるのをはたから見られれば、同じように思われると思うんだがな」

「僕はそんなに小さくないよ！」

「はいはい、そうだな。ユウキはまだまだこれからだもんな」

「もう伸びないというか、小さな子供をあしらうような言い方しないだよ。僕、シヨウと同じ年なんだから！」

そうなんだよな……こう見えてユウキって俺と同じ年なんだよな。シユテル達のような年下がいるせいかな、年下のように思ってしまうのが現状だけど。言葉遣いもレヴィに似たところがあるし……これが最大の理由かもしれない。

「分かった分かった」

「もう、適当な返事ばかり……」

「グダグダ言ってるで、さっさと荷物片付けるぞ。ブレイブデュエルしに行きたいだろ？」

「え、ああうん！」

こうやって話題がすぐに逸らせるあたり、やっぱりレヴィに近い感覚を覚えてしまう。まあ異性に対する意識はきちんとあるので心配はしていないが。

……1番の心配はブレイブデュエルの腕だよな。こいつの才能からすれば、圧倒的な速度で全国ランカーに匹敵するレベルに上り詰めそうだし。過去の戦績だとユウキに負け越してから……今まで以上に頑張らないとやばいかもしれない。

今度……ブレイブデュエルの総本山であるグランツ研究所に行つたほうがいいのかもれないな。

第15話 「T&Hのお姉さん？」

俺はユウキを連れてホビーショップT&Hを訪れた。八神堂やグランス研究所にも追々連れて行くつもりだ。まあ彼女は子供ではないので、別に一緒に行く必要はないかもしれないが。街を自由に見て回りたいこともあるだろうから。

海外に住んでいたユウキには全てのものが珍しく見えるらしく、目を輝かせながら周囲を見渡している。一緒にいる身としては恥ずかしくもあるのだが、気持ちは分からなくもないので我慢することにした。

ブレイブデュエルが設置してある最上階に到達すると、他のフロアより一段と人で溢れていた。今日も相変わらず賑わっているようだ。人ごみやそこから聞こえてくる歓声に驚いてしまったのか、気が付けばユウキが俺の服を軽く握っていた。

——…まあ初めて来る場所だし、この街自体が馴染みのない場所だもんな。

はぐれたりしたことを考えると不安になるのは無理もない。何でも言い合えるような間柄ではあるが、周囲の注目はデュエルのほうに向いているし、しばらくはこのままにしておいてやろう。

「お、思ってたより賑わってるみたいだね」

「まあな。日に日にプレイヤーの数は増えてるだろうし……まずはデュエルするのに必要なデータカートリッジとブレイブホルダーをもらいに行くか」

そう言っただけ歩き始めると、進行方向とは逆に力が働いた。ユウキが服を掴んだまま出遅れたので引っぱられたのだ。自分で掴んでいることに気が付いていなかったのか、俺が視線を向けると彼女は頬を赤らめながら慌てて手を放した。

これまでの経験からして、ここでユウキに話しかけると状態が悪化する可能性が高い。ここは黙って彼女がデュエルをできるように話を進めるのが無難だろう。

そう思った俺は、フロア内を見渡して店員を探す。この店の人間と

はほとんど知り合いではあるが、話しやすさで言えば店長達と店長の
子供達、それとチーフが圧倒的に高い。多忙な彼女達に話しかけるの
は躊躇われもするが、ユウキの今後を考えると頼れる人間を作ってお
くのも大事だろう。

「えーと……ああ居た居た」

カードローダーの前へ去って行く小学生達に手を振っているエイ
ミイを見つけた。状況から考えるに、新たなデュエリストの誕生を手
伝っていたのだろう。近づいていくとこちらの存在に気が付いたよ
うで、人懐っこい笑みを浮かべながら挨拶をしてきた。

「いらっしやい……あれ？ 今日のみんなど一緒にやないの？」

「俺はあの子達の保護者じゃないんだけど」

「とか言う割りに気に掛けてるくせに……とところで」

エイミイの視線が俺の後方へと向く。距離感から近くに居たユウ
キを俺の知り合いだと理解したらしい。

「その子は……まさか彼女!？」

芸人並みのリアクションで驚くエイミイに俺は呆れると共に、周囲
から視線を向けられていないか気になってしまった。だが後ろのほ
うからエイミイに負けない声が響いてきたため、それどころではな
かった。

「え、ち、ちち違うよ！ ぼ、僕はショウウの彼女なんかじゃなくて……
！」

先ほどの一件が尾を引いていたのか、ユウキはディアーチエに負け
ないレベルの反応をしている。

人間という生き物は、必死に否定されると疑いたく習性を持ってい
るものだ。エイミイのように人の恋愛やらを見て楽しもうとする人
間は特に。

「いやいやいや、こう見えてもお姉さんはショウウくんの交流関係には
詳しいほうだからね。仲の良い女の子は大体知っているのですよ。
だけど君は見たことがないし、ショウくんは彼女が出来ても私には言
わないって言っていた。つまり、君はショウくんの彼女さんなんだよ
！」

な、なんだって!?

とは誰もならないよな。むしろ危険な人物に思われそう……なん
で俺の周りにいる年上ってまともな奴が少ないんだろう。

「だから違うってば! 話を聞いてよお姉さん。僕はこの街に来るの
も数年ぶりだし、シヨウに会うのだったって久しぶりなんだよ……もう、
シヨウも黙ってないで何か言つてよ!」

「エイミイ、最近クロノとはどうだよ?」

「クロノくん?」

「少しは進展はしてるのかと思つてさ」

「あはは、何言ってるのさ。クロノくんは弟みたいなものだよ。進展
なんて……って、話を逸らされてる!? それに、この子が言つてほし
かったことつて今みたいなことじゃないよね!」

いや、エイミイみたいな奴にまともに言つても効果がなさそうだつ
たから。というか、お前がそこにツツコミを入れるんだな。

「今日もエイミイは元気だな」

「うん、まあ元気がないとお仕事できないからね……じゃなくて、何
で私は君に年下扱いされてるようなことを言われなといけないの
かな。私、君よりお姉さんなだけ!?」

「お姉さん?」

「何で首を傾げるの!」

「それは……同年代と話してるような気分だから」

ガーン! といった効果音が合いそうな顔をエイミイは浮かべる。
涙のようなものが見える気がするが、まあ顔芸のようなもので気
にしないでおこう。

「よし、エイミイも落ち着いたな」

「いやあ……落ち着いたというより落ち込んでるんじや」

「気にするな。すぐに回復するし、気にしたらこの街じややってい
けない」

真剣に言うとうウキは怯えるように後退りながら顔を引き攣らせ
た。この街で生活できるか不安を募らせているのだろう。後ろでエ
イミイが「私は変な人じゃないよ!」とアピールしている気がするが、

やはり気にしない方向で行く。

「じゃあ、改めて紹介と行こう。この人はエイミー・リミエツタ、このスタッフのチーフの自称お姉さんだ」

「よろしく、困ったことがあればいつでも声を掛けてね……って、自称じゃないよ!? 君とかからすれば普通にお姉さんだよ!」

こういう反応するあたりが自称を付けたくなる理由なんだけだな。落ち着きもあるほうじゃないし、クロノから小言を言われているのも何度か見たことがあるから。

「こっちは俺の親戚で東雲悠樹」

「ど、どうも東雲悠樹です。いつもショウがお世話になってます」

「いえいえ、こちらこそショウくんにはお世話になってます」

保護者のような挨拶をするユウキにも思うところがあるが、彼女と同じように頭を下げるエイミーもどうなのだろう。確かに俺はたまに店の手伝いをしているわけだが、トータルで見れば大した時間働いているわけではないのだが。

「それで今日は何しに来たの? 彼氏彼女じゃないってのは分かったけど……むふふ、デートですか?」

「ユウキ、この人に頼ろうとした俺が馬鹿だった……」

「ごめん、ごめんってば。もうふざけないからお姉さんを頼ってよ!」

うん、やっぱり年上のようには見えない……ふと思ったが、シユテルと似てるって言われるのはこういうところが原因なのだろうか。そう考えると直したほうがいいような……。

「お客様、今日は何の御用でしょうか?」

「……ふざけてるのか?」

「ふざけてないよ、私真面目にやってたよね!」

それはそうだけど、エイミーのキャラ的に真面目な口調で話されたほうがふざけたように感じるから。

「まあいいや。今日はユウキがブレイブデュエルを始めたと言って言うから来たんだ。ホルダーとか設備の説明してやってほしいんだけど」
「それはもちろん喜んで……あれ? でもショウくんが教えてもいい

んじゃ……」

「ユウキはこの街にはほとんど知り合いがない。だから交流関係を広げる意味でも、頼れる人間を作るためにもお願いしてるんだよ」

俺の言葉を聞いたエイミイは、何度かまばたきを繰り返すと急に満面の笑みを浮かべる。そして、レヴィのような元気を撒き散らしながら話し始めた。

「そっかそっか、冷たいことを言ったりするけどショウくんは私のこと信頼してくれてるんだね。うん、この子のことは私に任せてよ！」
「分かったから叩くのはやめてくれ。本気で痛いから」

まったく……年下に頼られただけでこんなに喜ぶか普通。にしても、背中がヒリヒリするな。あとで腫れたりしないか不安になってきた。

そんなことを考える俺をよそに、エイミイはいつの間にかデータカートリッジとブレイブホルダーを両手に持ち、それをユウキに渡していた。エイミイの勢いというか熱さが凄まじいせいか、彼女はどことなく引いているように見える。だがエイミイは気にしていないようだ。

「よし、じゃあどんどん説明していくよ。ついて来てユウキちゃん！」

「は、はい！」

「ユウキ、俺は別のところに行つて大丈夫か？」

「大丈夫じゃないよ。最後まで一緒に居てよ！」

第16話 「天才」

「よし、やっと僕の番だね。シヨウ、ちゃんと見ててよ」

無邪気な笑顔を浮かべながらユウキはシミュレーターの中に入っていく。ここに至るまでにそれなりに長い時間を有し疲労していたはずだが、デュエルが出来るとなれば吹っ飛んだらしい。

エイミイの熱血っぷり凄かったもんな。一通り教えた後なんか燃え尽きてたし。まだ仕事があるんだから考えろとも思ったけど、まあユウキのためにはなったから感謝するでしょう。

スクリーンに意識を移すと、徐々にフィールドが映り始める。デュエルを行う場所はシンプルな空のようだ。初心者であるユウキにはありがたい場所かもしれない。

『おお……つて、空あああ!?!』

と思ったのだが、ブレイブデュエルでは視点と感覚がアバターと完全にリンクするため、空の上に立っているような気分を味わうことになる。高所恐怖症ではない人間でもいきなりあそこに放り込まれれば、ユウキのような反応をするのも無理はない。

とはいえ、ユウキはあらゆるジャンルのゲームで天性の才能を発揮する奴だ。エイミイから説明を受けていたこともあつて落ち着きを取り戻したのか、すでにそよ風を味わっているように見える。

「それにしても……」

最初のカードローダーでRを当てるなんて運が良いよな。一般の初心者、いや上位の人間が聞いても羨ましがることだろう。

防具の類は胸にある黒曜石のようなアーマーくらいであり、その下にあるチュニツクとロングスカートは青紫色だ。腰には黒く細い鞘があり、同色の剣が納められている。

剣を所持していることから分かるとおおり、ユウキのアバターは接近戦タイプだ。スタイルがベルカだったので、俺やアリサ以上に近接での戦闘能力は高いと思われる。まあアバターの性能がデュエルの勝敗を必ず決めるわけではないので、初デュエルである今の戦闘力はそのへんの初心者と変わらないだろうが。

「……何か嫌な気配がするな」

普通は複数の初心者がまとまってフリートレーニングに参加し、感覚を養ってからデュエルへと移行していく。だがユウキが映っているスクリーンには、彼女の周囲に他のプレイヤーは確認できない。経験から推測するに……他のプレイヤー達はフリートレーニングを行っているが、彼女だけは普通にデュエルをやっているのではないだろうか。

直後、忍のような騎士服に身を包み、赤いマフラーを巻いた少女がユウキの前に姿を現した。

……嘘だろ。

スタイルの良い体に刺激が強そうな騎士服。艶やかな長い黒髪をポニーテールまとめた大和撫子のような少女には心当たりがある。俺の記憶が正しければ、『風雪の忍』という通り名で知られ始めている中堅デュエリストだったはずだ。

本気でデュエルをされたら、いくら天才のユウキであっても敵うはずがない。しかし、乱入は許可されていないと思われるので助けに入るのとは不可能だ。そもそもシミュレーターが埋まってしまっている。

『ん、お姉さんが僕の相手？』

『……そう』

『そっか。にしてもお姉さん、凄いい格好してるね』

ユウキの言葉に忍者の頬が真っ赤に染まる。どうやら本人も気にしているというか、人並みの羞恥心は持っているらしい。ただアバターとの出会いは運命のようなものでどうすることもできない。

馬鹿……お前は自分には似合いそうにないって意味で言ってるのかもしれないけどな。スタイルが良い人間ってのは、意外と自分のスタイルにコンプレックスがあったりするんだぞ。知り合いの乳魔人さんとかわがままボディさんがそうだし。

ユウキの言葉は、おそろく火に油を注いだようなものだろう。彼女はこれまで数多のゲームをやってきたため、ここで負けたからといってブレイブデュエルをやめたりはしないだろうが……今の俺にできることは見守ることだけか。ひどく負けたならば、慰めるくらいのこと

とはしてやろう。

『えつと、お姉さんを倒せば僕の勝ちになるんだよね?』

『そう……勝てたらだけど!』

忍者はクナイのような魔力弾を出現させたかと思うと、ユウキ目掛けて投擲した。ユウキは持ち前前の常人離れた反応速度で回避したものの、まだ上手く飛べないため宙を転げるように移動していく。

『うわあ、びつくり……って、ちよっ!?!』

敵を倒すことがルールの単純なデュエルであるため、連続で攻撃を仕掛ける忍者の行動は咎められるはずがない。ただ彼女は、ユウキが不恰好ながらも攻撃を避け続けているせいから少し苛立っているように見える。

『えつと……確か移動は飛びたい方向に意識を集中だっけ!』

ユウキの背中に半透明な黒い羽が生えたかと思うと、これまでの転がるような回避と一変して高速移動で避け始める。強張っていた顔が笑みに変わっていつているあたり、今の状況さえ楽しんでいられるらしい。

ユウキの最も優れた才能は、どんな状況でさえも楽しむことができることかもしれないな。

スクリーンで見えていても、圧倒的な速度でユウキの技術は上昇していつているのが分かる。おそらく相対している少女は、彼女の異常と言えそうな成長速度に恐怖を覚えていることだろう。故に――

『なら………これで!』

――これまで以上に攻撃を加えるのも必然とも言える。

女忍者は両手にクナイ状の魔力弾を持ち、微かな時間差を付けて投擲する。ユウキはすぐさま回避行動を起こすが、これまでのクナイとは違って追跡を行っている。

飛び続けるユウキは魔力を消費し続けるし、ホーミングする魔力弾を維持する女忍者も魔力は消費する。消費している魔力で言えば、攻撃していた女忍者のほうが上だろうが、あれは保有魔力が優れているからこそ取れた行動ではないだろうか。通り名を持つほどのデュエリストが考えもなしに攻撃を続けるとは思えないのだから。

『逃げてばかりじゃ勝てないよね』

ユウキの口元がわずかばかりだが動いた気がした。何を言ったのかまでは分からなかったが、彼女の行動には内に秘められている思考が顕著に現れていた。

彼女は急停止を掛けたかと思うと、左腰にあつた剣に右手を伸ばす。振り向くのと同時に抜剣し、飛来していた最前に魔力弾を迎撃――いや《斬った》。返した剣で2発目を斬り捨てると、流れるような剣技で全ての魔力弾を無力化した。

発生した煙によつてユウキの姿が隠れるが、偶然にも突風が吹いたのか一瞬で煙は霧散する。同時に現れた彼女の顔は笑っている。女忍者に対する恐れを微塵も感じさせない不敵な顔だ。

ユウキは不敵な笑みを崩すことなく、黒曜石のような色合いの剣の先端を女忍者に向けながら口を開いた。

『お姉さん、今度は僕から行くよ！』

言い終わると同時に、ユウキは女忍者に向かって飛翔する。女忍者はクナイ状の魔力弾を放つが、それは稲妻のような速度で煌く剣によつて粉碎されてしまう。通常の魔力弾ではユウキを止めることは不可能だろう。

『ならば……！』

女忍者は左手でクナイ状の魔力弾を放った後、右手で腰にあつた刀を引き抜き、鎖鎌のような形態に変化させる。魔力弾の迎撃に意識を裂かれたユウキは、それに一瞬気づくのが遅れてしまい、気が付いたときには鎖が彼女の周囲を円を描くように飛び回っていた。

『ぐっ……』

急激な方向転換で回避しようとしたユウキだったが、鎖のほうが早く彼女の左腕を捕らえた。直後、女忍者は追撃を加えようと左手に魔力を集め巨大な手裏剣を生成する。

『沈め！』

投擲された巨大な手裏剣は、回転を強めながらユウキへと向かっていく。当然ユウキは回避しようとするが、左腕を捕縛されているため大した行動ができない。手裏剣にもホーミング機能が付加されてい

るらしく、回避することは絶望的に思える。だが——ユウキの目は死んではない。

『僕は絶対に……！』

ユウキは両足を大きく開きながら右腕を肩の高さで引き絞る。黒曜石のような刀身に魔力が集束され、徐々に紅蓮の炎へと変化。それを飛来する手裏剣に向けて撃ち出す。雷のような速度のせい、赤い稲妻が疾ったかのように見えた。

彼女が放った技は《ブレイズストライク》。俺が愛用する単発重撃技であり、餞別として俺が彼女に渡しておいたスキルカードだ。強固な防御力を誇る敵にだろうと有効なダメージを与える技であるだけに、手裏剣を粉碎することは可能だろう。

だがしかし、敵が放っていた手裏剣にもそれなりの魔力が込められている。強力な魔法のぶつかり合いは、必然的にそれ相応の爆発を引き起こすものだ。目の前で爆発が起こるユウキは無傷ではすまない。

爆発と轟音。

生じた大量の煙によってユウキの姿が確認できなくなる。エリア内に終了の表示がされないことから、戦闘不能にはなっていない。だが大規模な爆発だっただけに、彼女が負ったダメージはかなりのものなのだろう。

『……最後まで諦めたりしない！』

煙を突き破るように現れたユウキの騎士服は、誰から見てもボロボロとしか言えない状態だった。しかし、彼女の瞳には鋭い気迫が宿ったままだ。

先ほどの一撃で魔力を大きく消費したのか、女忍者は投擲できているのはクナイ状の魔力弾だけだ。だがそれではユウキを止めることはできない。

女忍者は逃げようとする素振りも見せるが、ユウキはほぼトップスピードに乗っている。勝負を決めようと大攻撃をしたせいで一時的に速度がゼロになっていた彼女では、今から加速して逃げ切ることは不可能だろう。

『やあっ！』

女忍者の眼前に迫ったユウキは、気合を発しながら愛剣を雷のような速度で振るう。圧倒的な速度で襲い掛かってくる刃を女忍者も防ぎきることはできず、ついに体勢を崩されてしまった。

そのチャンスを逃すことなく、ユウキは通常攻撃を連続で放ち……そして。

『これで決める!』

バックモーションの少ない垂直斬りから上下のコンビネーション、最上段から決めの一撃を放った。高速4連撃《バーチカル・フォー》ス》。

絶え間ない斬撃の嵐を受けた女忍者は、静かに空から消えて行った。ユウキが勝利し、デュエルが終了したのだ。

……マジかよ。

ユウキのセンスは誰よりも知っている。でもだからといって通り名を持つデュエリスト相手に初プレイで勝利できるなんて思っていなかった。彼女の才能を俺は侮っていたのだ。

「シヨウ、勝ったよ!」

小走りでやってきたユウキは笑みを浮かべながらVサインをした。そんな彼女を見た俺の胸中には、呆れの混じった驚愕と、強敵の出現による歓喜があった。

俺はユウキに近づくと、微妙な笑みを浮かべながら彼女の頭を何度か軽く叩いた。

「まったく……お前を見てると、一緒のゲームはやりたくなくなるな」「ええー!? 僕は他の誰よりもシヨウと戦いたいのに。やめたら絶交するからね!」

「やめるかよ。昔から思ってたんだ、お前に勝ちたいって。それに俺のことをライバルだと思ってくれてる奴もいるし、何より他のゲームはまだしもこのゲームに限っては誰にも負けたくない」

スピードレーシングやスカイドッジでは小学生達に負けてしまっているわけなのだが、あくまであれはおまけや人数合わせで参加したようなものだ。正式に俺に対して挑まれたなら負けるような戦いをするつもりはない。

「はは、シヨウがそういうこと言ってくれるのは初めてだね。すつごく嬉しいよ。でも僕は、誰よりもシヨウに勝ちたいからね。今すぐは無理だと思うけど、必ず勝ってみせるよ！」

「そうか、じゃあ俺も負けたくないから今後は別行動ということだ」「うわああ、待ってよ！　僕、まだここに慣れてないんだからひとりにしないでってば！」

外伝 第1話 「八神堂の店員」

「飛び級で大卒の社会人!？」

店内に響く高い声。意識を向けてみると、この店の主の前にふたりの小学生の姿があった。ひとりは前からよくここを利用していた月村すずかという子だ。もうひとりは、最近来るようになった彼女の友人でアリサ・バニングスといったか。

聞こえてきた言葉からして、この主の経歴を聞いて驚いているんだろうな。まあ俺も最初は驚いたし、気持ちはよく分かる。

「恥ずかしながら社会人1年目。古書店店長をやらせてもらってます」

「だからずっとお店にいたんだね」

「そうなんよ。あつ、ちなみにマテリアルズの3人も飛び級の中学生さんや」

はやてののんびりとした言葉に金髪の少女が驚愕の声を上げる。わざとやっているわけではないだろうが、リアクションの大きい子だ。はやての漫才の相手としてはちょうどいいのではないだろうか。

本棚の整理を少し進めて意識をまた向けてみると、バニングスという子は絶望しているかのような顔をしていた。いったい何を考えているのだろうか。別に飛び級云々であんな顔をするような年齢ではないと思うのだが。

「ま、まさか……あたしのヴィータもスーパー小学生ってことは」

「あたしはふつーの小学生。だいたい、いつからアリサのになったんだよ」

「それは……」

「いや、やっぱ答えなくていい。話の続きだけど、はやて以外はふつーにみんな学生だよ。シグナムは大学行きながら剣道場の師範代。シヤマルは医大生、アインスは夜間学校で建築学の勉強中」

うーん……俺の感覚だとアインスはともかく、シグナムやシヤマルは普通ではないと思うんだけどな。普通に分類される学生は剣道の師範代なんてしてないし、医大に入れる人間って割りと限られてるか

ら。

だが彼女達が凄いののは、きちんと自分の進みたい道を決めていることだ。俺も今は決めてはいるが、高校生の頃は毎日適当に過ごしていた。そのうえ、3年の頃に自主退学してしまっている。まあ体や金銭面と色々な問題があったわけだが。ただ単位はほとんど取っていたので、先生の勧めもあって、高校卒業程度の学力はあると認定される試験を受け、無事に合格している。

「実はな、アインスが建築学を勉強してるんはいつかわたしに理想の家を作ってくれるて……」

途中で、はやての言葉を遮るように誰かが大声を被せる。

声を発したのは、おぼんでおやつを運んできていたアインスだった。どうやら自分の夢を誰かに知られるのが恥ずかしかったらしい。可愛らしく思える一面だ。

アインスは何事もなかったかのように振舞いながら話しかけるが、どこか笑みがぎこちないものに見えた。

「さ、さあみんなおやつのおはぎだよ」

「これがヴィータの言ってた」

「アインスさんも目がない……キガうまおはぎ！」

おはぎに小学生ふたりは大喜びのようだ。はたから見てもいつも以上に数がある。おそらくはやてがふたりが来るということで多めに作ったのだろう。あの歳でよくあそこまで家事全般がこなせるものだ。1人暮らしの身からすると、彼女の家事能力が羨ましく思う。

余談だが、はやての後ろでおはぎを食べているヴィータをアインスが揺すっている。あまり人に言わないでくれ、とアインスは言いたいのだろう。

「リョウくん、一緒にどうや？ リョウくんの分も作つとるんで」

意識を向けているのを食べたいと思われたのか、はやてが話しかけてきた。小学生達のことを考えると、あまり親しみのない俺が近くに行くのは躊躇われたのだが、ヴィータに「早く来いよ。じゃないとアインスがお前の分も食べちまうぜ」と言われてしまっでは行くしかあるまい。

「少しだけお邪魔させてもらおうよ」

金髪と黒髪の小学生に声を掛けて、はやてとアインスの間に座らせてもらった。はやてや小学生達は笑顔で迎え入れてくれたが、アインスはヴィータの言葉が恥ずかしかったのか俯いてしまった。

「えっと、そういうえば君達ときちんと話すのは初めてだったよね。俺は白石涼介、よろしく」

「こちらこそ、よろしくお願いします。あたしはアリサ・バニングスと言います」

「私は月村すずかです。よろしくお願いします白石さん」

年齢の割りにしつかりとした挨拶をする子達だ。お嬢様のような雰囲気があるので、もしかすると英才教育を受けて育っている子達なのかもしれない。

「あの白石さん」

「何かな月村さん?」

「すずかでいいですよ。私のほうがずっと年下ですし」

「なら俺も下の名前で構わないよ。はやてやヴィータ達にも下の名前と呼ばれているからね」

彼女の隣に座っているバニングスにもそう伝えたと、ならば自分も名前で呼んでもらって構わないと返事が来た。こうも簡単に名前で呼び合えるところが子供の凄いと感心するところかもしれない。年を重ねるほどこのような真似はできなくなる人間が多いのだから。

「じゃあ、えっと涼介さんでいいですか?」

「ああ。それで何が聞きたいんだい?」

「その、はやてちゃん達とはどういう関係なんですか? 結構前からここで働いてますよね?」

働いている、というのは少しニュアンスが違ってくる。俺はただ暇な時間が多いから手伝いをしているだけで、別にバイトをしているわけではないのだ。

「確かに気になりますね。はやてもくん付けで呼んでましたし」

「はやては誰にでもそんな感じだと思うんだけどな。ほら、デュエルが上手いって言う中学生の男の子。確か夜月くんだっけ? あの子

も年上だけどくん付けで呼んでたでしょ?」

「ああ……確かに」

「誤解されるんは困るなあ。わたしが特別扱いしてるんは、シヨウくんとりヨウくんだけやで」

そこは夜月くんだけに絞ったほうがいいんじゃないだろうか。そうすれば、もう少し彼もここの勧誘を受ける気にもなってくれそうと俺は思うのだが。まあふたりの関係を見てみると、その程度のことでは何も変わらないようにも思えるが。

「えつと、はやて達との関係だったよね。まあ……簡単に言えば、暇な時間が多いから手伝いをさせてもらってる感じかな」

「え、結構毎日のようにいる気がするんですけど。そんなに暇な時間多いんですか?」

「俺の通ってる学校は種別で言えば専門学校なんだけど、基本的に1日にあたり3、4時間くらいしか授業がないところなんだ」

「それでも大変やろうし、わたしは無理して手伝わんでええって言うてるんやけどな」

「俺が好きで手伝ってるんだから手伝わせてくれよ。ここの手伝いは楽しいし、今みたいに美味しいものがありつけるんだから」

素直な気持ちの口にしてみると、食い意地が張っているや現金な奴だといったニュアンスの言葉を次々と言われた。自分でもそう思ってもするが

「仕方ないだろ。ひとり暮らししてるから多少は料理作れるけど、はやての味には到底敵わないんだから」

「もう、そう言われると作ってあげたくなくなるやないか」

「はは、そう言ってくれるのはありがたいけど……そういうのはいつか出来る大切な人だけに言うべきだよ」

「ひどいなあ、わたしはリヨウくんのこと大切に思ってるで」

「大人をからかうのはやめなさい」

俺は、からかうような笑みを浮かべているはやての口にスプーンに刺していたおはぎを押し込んだ。そのあと俺もおはぎを自分の口に運ぶと、「間接キスやな」という言葉が聞こえてきたが、俺はすでに成

人している。小学生くらいの年代の子と間接キスをしたからといって何とも思いはしない。

「リョウ、あまり主とイチャつくのは頂けないな」
隣から鋭く冷たい視線を浴びせられる。

忘れていた……アインスははやてのことが大好きな——愛しているといっても過言じゃない奴だった。いったいどうやって彼女の機嫌を直せばいいだろうか。

「リイン、そう妬かんと。リョウくんのが好きなんは分かるけど」
はやてのさらつと放った一言に俺は理解が追いつかなかつたのだが、アインスは一気に赤面した。

「ななな何を言っているんですか!? ベ、ベべ別に私はリョ、リョウのことを……!?!」

「アインス、少し落ち着いたら……」

「こつちを見ないでくれ!」

思いつきり突き出されたアインスの手が、相撲の突っ張りのような形で顔に入った。

おはぎを口にしていなかったから良かったものの、もしも口に含んでいたのならばどうなっていたことだろうか。

などと考えている余裕はなかった。あまりに強い衝撃を受けてしまったため、イスごと倒れてしまい床に打ち付けられてしまったのだ。

「え、あ、すまない!」

俺が床に倒れたのを見て我に返ったのか、アインスが近づいて俺を起こそうとする。整った顔立ちと豊満な胸が眼前に迫り、女性特有の甘い匂いに鼻腔をくすぐられた俺の体は一気に熱くなった。

「いや、心配するな。大丈夫だから!」

「だが……本当にすまない」

「……ああもう、あまり自分を責めるなよ。別に怪我もしてないし、お前のそういう顔は見たくないんだから」

「リョウ……」

せこい言い方だったかもしれないが、今のようない方でなければ

アインスは止まってくれなかつただろう。

アインスは普段は大人しくて優しい性格なのだが、どうも人一倍恥ずかしがり屋であるため、人からからかわれたりすると今のような行動を取ってしまうことがある。今のところ物理的なダメーシを受けたことがあるのは俺くらいだろうが、夜月くんあたりにいつか被害が出ないか不安になる。

——怪我をするほどじゃないが……結構痛いからな。被害者が俺だけで済むのならそれに越したことはない。

「あのふたりええ感じやろ?」

「うん、確かに」

「性格的にも相性良さそうだし、お似合いかも」

「あたしはそういうのあんま分かんねえ」

「ヴィータは分からなくていいの。いつまでも今のままのヴィータで居て!」

いつの間にか小学生達が密集して話している。

ヴィータとそのあとのアリサの声しか聞こえなかったが、経験からしてあまり良くないことを言っていただろうな。それ以上にアリサの発言が気になって仕方がないが……ある意味では変態とも取れそうな発言だし。

何はともあれ、落ち着きを取り戻した俺達はきちんとテーブルに座り直し、おはぎを食べ始める。話題は俺のことからアリサ達のことへ移った。

「そういえば、すずかちゃん達チーム名で悩んでるんやって?」

「うん……みんなで相談したんだけどまとまらなくて」

「あたしも考えてみたんだけど浮かばなくてさ」

なるほど、それで彼女達をここに連れてきたわけか。

なぜこのように分かったかというところ、アリサがここに連れてきてくれたと言いなながらヴィータの頭を撫で始めたからだ。

ヴィータは強気な性格で口の悪いところもあるが、根は優しい良い奴だからな。今ではタメ語で話すけど、俺にも最初は敬語で話してたからな。

「うーん……パツとは浮かばんなあ。アインスは何かええ案ない?」

はやてに投げかけられたアインスだったが、おはぎに夢中のように聞こえていないようだ。俺が肩を揺さぶって状況を教えてやると、再び顔を赤くしながら慌てた様子で話し始める。

「え……こほん、君達はシヨップの代表チームだからね。お店の名前を入れるのもひとつの手なんじゃないかな?」

「そういえば、八神堂さんも《チーム八神堂》でしたよね」

「そのまんまといえばそのまんまだけど、ピタツとはまってカッコいいのよね」

それは分からなくもないが、このチームの構成が八神家だからというのも理由に入っている気がする。八神堂のようにそのままというのは、アリサ達のチームには合わないのではないだろうか。

「アイディアを採用したら代わりにおはぎを要求されるぜきつと」

「それは困るわね」

「ヴィ、ヴィーター!」

はやてやヴィーターといった下の子からも弄られ、シグナムといった同年代からも弄られる。ある意味では愛されているとも言えるが、アインスが大変なのが変わりはない。頑張れアインス、俺は応援しているぞ。

「涼介さんは何かありませんか?」

「ん、俺? うーん、あまりそういうのは得意じゃないからな。おはぎの件は俺がどうにかするから、遠慮なくアインスのアイディアを使ってくれていいよ」

「ひどい、リヨウは味方だと思っていたのに! シグナムといいリヨウといい、最近いじわるだ!」

シグナムと一緒にされるのは困るんだが。あいつはああ見えて、親しい人間のことはからかったりする一面がある奴だし。俺は別にからかうつもりで言ったんじゃないんだが。

「リヨウくん、アインスの機嫌が悪くなってもうたで。はよ機嫌なおして」

「俺が? 事の発端はヴィーターなんじゃ……機嫌を直すたって言って

もな」

「今度アインスをデートにでも誘ったらええやん♪」

はやての言葉に俺とアインスはほぼ同時に「デ、デート!?!」と口にし、必然的に顔を見合わせた。

デートというからにはふたりでどこかに行くということだろう。ふたりつきりというのは、これまでに何度も経験しているが、それは八神堂内での話。八神堂内と外では話が違ってくる。

お互いに似たような想像をしたのか、俺達の頬は赤く染まった。俺の目に確認できるのはアインスのだけだが、顔の熱さから言って赤くなっているに違いない。

「あ、ああ主、何を言っているのですか!? だ、大体私には店の手伝いが……」

「それは大丈夫や。シグナム達も協力してくれるやろうし……まあアインスが何が何でも嫌ってことなら仕方ないけどな」

「べ、別に嫌ということとは……」

そこで再び視線が重なる。俺がすぐさま顔を背けてしまったのは言うまでもないだろう。俺はアインスのことを友人として好きだし、異性としてももちろん意識しているのだから。

「ああもう、ふたりとも可愛いな。いつそのこと付き合っただけなのに♪」

「はやて、頼むからもうやめてくれ。これ以上されたらまともに話せなくなる!」

「ええやないの〜」

「ダメよ、ダメダメ!」

「さすがリョウくん、ノリがええな」

「やらないとお前は余計に悪ノリしてくるだろ!」

「それは心外やな。もう1回ええ?」

「嫌に決まってるだろ、恥ずかしい!」

第17話 「チヴィット」

デュエルに夢中になったユウキは、気が付けば俺がいなくても問題なく動き回るようになっていた。ただ街そのものに慣れたわけではないため、家からT&Hといった限定的な場所だけではあるのだが。まあ彼女の性格ならば学校に通い始めるまでには俺がいなくても大丈夫になっているだろう。

今日俺は、ひとりでグランツ研究所を訪れている。何でも小学生達のチーム名が決まったとのことで、ユーリやディーアーチエがお祝いをしたいそうだ。その手伝いをしてほしいと頼まれたのである。

ユウキも連れて行くかと思っただが、最初のデュエルで通り名のあるデュエリストを撃破。その後も凄まじい勢いで勝ち続ける彼女にホビーショップT&Hからオフアーがあっただらしい。何でも小学生組の代わりにイベントデュエルに出てほしいとのこと。

「結果的に引き受けたそうだが……」

多分エイミーあたりに押し切られたんだろうな。まあ何でも楽しむ奴だから問題ないだろうけど。リンデイさんとかにもユウキのこととはお願いしておいたし。

とはいえ、ここ最近常に一緒に居たせいか心配になる。張り切り過ぎて失敗しそうなエイミーに何か迷惑を掛けられていないだろうか。エイミーに電話して釘を刺しておくべきか……クロノに頼んでおいたほうが確実かもしれないな。

そんなことを考えている間に、グランツ研究所の玄関が見えてきた。青空が広がっているだけにここまでの道中は暑かった。さっさと中に入って涼むとしよう。

「……ん？」

中に入ると、見慣れた少女達の姿が見えた。内訳としては制服を着た小学生が5人に制服姿のディーアーチエ、それと私服のユーリだ。

ユーリは高町と話しているようだが、なぜ顔を赤らめているのだろうか。転んで鼻でも打ったのだろうか……割と転ぶ子なのでありえなくはないな。でも盛大に転んだのならディーアーチエが慌ててるだ

ろうし……転びそうになったところを高町が受け止めたのかもな。

「なのはさんとまた会えて嬉しいです」

「うん、私もまた会えて嬉しいな」

笑顔で会話するふたりの姿は見ていて微笑ましくある。のだが、彼女達を見ているフェイトとデイアーチエは微妙な顔をしている。フェイトは高町を、デイアーチエはユーリを大切に思っているようなのでやきもちでも妬いているのだろう。

遠巻きで見ているのもあれなので、俺はひそひそと話しているアリシア達に近づく。

「アリシアちゃん、あのふたりって……」

「色々あるんだよ、イロイロと……」

「見た目に反してよく分かってるな」

気配は殺さずに近づいたつもりだが、そのへんを歩くスタッフとでも思われたのかアリシアとバニングスの体が一瞬震えた。全く動じなかった月村は俺に気が付いていたようだが……。

「うわ、びつくりした……何でショウさんがここに」

「別にここに来てもおかしくはないと思うんだけど？」

ここはブレイブデュエルの総本山だし、ここの人達とは前から付き合いがあるんだから。

「うん、まあショウもデュエリストだからね。ここに来るのはおかしくないし、わたし達を見て自分から挨拶をしてくれたのは嬉しいことだよ。でもね……さっきのはどうなのかな、さりとわたしのこと侮辱してたよね！」

「侮辱？ 失礼な言い方だな。小さくて可愛いつてことを暗に表現しただけだろ」

「まだこれから大きくなるし。というか、暗にじゃなくて素直に表現してよ！」

頬を膨らませてそっぽを向くアリシアの頭を「悪かった」と言いながら軽く何度か叩く。完全に機嫌は直らなかったが、まあ口を利いてくれないことはなさそうだ。

意識を他に向けてみると、アリシアが大きな声を出したせい視線

が集まっていた。俺とアリシアのやりとりが大体の人間が知っているのも基本的に問題はないのだが、留学中の中学生に関しては問題があるようだ。不機嫌そうにこちらを睨んでいるし。

ディアーチエ、お前の言いたいことは分かる。いくら親しい間柄でも礼儀を弁えろとか、小学生だからといって異性に気軽に触れるなつて言いたいんだろ。気を付けるから機嫌を直してくれ。

長年の付き合いがあるだけに言葉がなくとも俺の気持ちを理解したのか、顔を逸らされてしまった。普通は悪化したように思えるかもしれないが、あれは「今後は気を付けろ」といった表現だ。なので問題ない……はず。

「話が本筋から逸れてしまっているな。ユーリ、言うことがあるのだろうか」

「あつ、はい……みなさん」

真剣な顔で小学生達に話しかけたかと思うと、「えいつ」という掛け声と共に何かのスイッチを押した。

すると、天井に付けられていたくす球が開き、『祝 チームT&Hイレメンツ結成おめでとう』という文字が現れる。同時に周囲から拍手が起こり、小学生達は慌てながら感謝の言葉を述べ始めた。

「ささやかながらようやく殻の取れた雛鳥への祝いだ」

「みなさんに贈り物もあるんです」

ユーリの後ろにあった巨大な箱から現れたのは、小学生達のチヴィットだった。

チヴィットは本来ブレイブデュエルのAI—NPCなのだが、グラント博士が現実でも遊ばせたいとそれぞれに専用のロボットを作ってしまったのだ。なぜ知っているかと言えば、前に来たときにシユテル達のチヴィット達と遊び、そのときに話を聞いたのである。

「わあ」

「可愛い」

「この子達ってまさか……」

「はい、皆さんのデータを元にして作らせていただいたチヴィットです」

「給仕のみならずデュエルサポートを行える優れもので。ありがたく受け取るがいい」

小学生達の声が一段と元気になる。その声や表情を見る限り、とても喜んでいようだ。作ったユーリ達も嬉しそうである。

いつの間にか保護者的な立ち位置で見ている自分にツツコミを入れた矢先、誰かにズボンの太ももあたりを引っ張られた。視線を落としてみると、そこには小学生達のチヴィットとは別のチヴィットが居た。

「お前も来てたのか」

足元に居たチヴィットを俺は抱きかかえて目線の高さまで持つてくる。

他の素体に比べて愛想のない顔立ちに黒ずくめの衣装……そう、俺のチヴィットである。名前は確か《クロ》だったか。

いつもはユーリに抱きかかえられたり、シユテゆ達の面倒を見ていた気がするが……今日は小学生達のチヴィットの面倒を見てたのもな。

そう考えると微笑ましい気持ちにもなるが、無愛想とはいえクロはチヴィットだけあって可愛い姿をしている。それだけに中学生の俺が持っているのは少々恥ずかしい。手の空いているユーリかデイアーチエに渡そうと思った直後、こちらをじっと見ている少女が居た。

「それ……シヨウさんのですか？」

その少女は高町のチヴィットを抱きかかえているフェイトだ。顔を赤らめているが、それは高町のチヴィットを抱き締めたときからなので、おそらく人前で可愛いものを抱き締めている姿を見られるのが恥ずかしいのだろう。

しかし、恥ずかしくても可愛いものに触りたい。そんな感情がフェイトの中にはあると見えた。まあアリスアよりも大人っぽいけど、彼女も小学4年生。そういう気持ちはあって当然だろう。

「ああ……触る？」

「い、いいんですか？」

「もちろん、自分で自分のを抱いてるのも何かあれだし」

ということで俺はフェイトにクロを差し出す。ただ2体のチヴィットを持つのは、まだフェイトには無理なようなので彼女が抱いていた高町のチヴィットを預かる。

「あ……あの、この子抱き締めても大丈夫ですか？」

「大丈夫だと思うよ。ユーリとかによく抱き締められてるみたいだし」

俺がそう言うとフェイトは一度深呼吸し、そつとクロを抱き締めた。一般的なチヴィットならば笑顔を浮かべる状況なのだろうが、クロは照れたような顔でそつぽを向いている。俺のデータを使っているだけあって、素直に喜べるタイプではないようだ。

「……にしても」

俺なんかを持たれて嬉しいのかね。

抱きかかえている高町のチヴィットは、何が嬉しいのかずっと笑顔を浮かべている。頭を撫でたりしているわけではないのに……いや、彼女のチヴィットと考えれば何となく理解もできるか。

「なのは……あんたのチヴィット、シヨウさんが持つてるわよ」

「え……」

「なのはちゃんのチヴィット、すごく嬉しそうだね」

「ち、ちが……そんなんじや!」

あそこの小学生達は何を騒いでいるのだろうか……1名顔が異常に赤いのだが。それに俺のほうをやたらと見ては、視線が合うと顔を背ける……という行動を繰り返している。

……ああ、自分のチヴィットが男に持たれてるっていうのが恥ずかしいのか。確かに俺もクロが誰かに持たれてるのを見ると恥ずかしいな。ここはフェイトに返す……のは無理そうだな。何だかクロに夢中みたいだし。となると……

「……ディアーチェ」

「ん？」

「この子預かってくれ」

「は？ なぜ我なのだ。ユーリの手も空いておるだろう」

「いや、お前ってこういうの好きだと思って」

実年齢よりも大人びているが、ディアーチエもまだまだ年頃の女の子だ。可愛いものに興味はあるだろう。

そう思つての発言だったのだが、誤解をさせてしまったのかディアーチエは顔を真っ赤にしながら怒り始める。

「ば、馬鹿者！ わ、我はもうそのようなものを愛でるような年ではないわー！」

「あれ？ ディアーチエ、このまえ……」

「なっ!? ユ、ユリ見ておつたのか。ちち違うぞ、あれはあちらのほうから構つてほしいと近づいてきたのだ。決して我から近づいたというわけではなく……！」

相変わらずディアーチエはユリに弱いな。……という俺もユリには弱いのだが。一般的に恥ずかしいこともストレートに言う子だから。

「……この子どうするかな」

「シヨ、シヨウさん、私の持つてるフェイトちゃんのと変えましょう！」

「え、ちよつなのは！」

「止めないでフェイトちゃん！」

「ううん、止めるよ！」

……この子達は何をしてるんだろうか。

自分のチヴィットをそんなに持たれたくないのか。まあ早い子なら思春期を迎え始める頃かもしれないし、年上の男に持たれるのは嫌かもしれないが。

でも……それならクロを俺に返してくれれば丸く収まると思うんだよな。そんな簡単なことが分からないほど慌てるみたいだけど。俺が話しかけると余計にパニックになりそうだし……。

「アリシア達、誰かチヴィットを変えてくれ」

「しようがないなく、ならわたしのチヴィットと変えてあげよう。わたしのチヴィット可愛いでしょう？」

「そうだな」

「うんうん……わたしは？」

「アリシア・テストアロッサ」

「そのとおり！　って違うよ、可愛いかどうか聞いたんだよ。分かってて惚けるのはひどい！」

「ああ……カワイイカワイイ、小さくてカワイイ」

「投げやりに言うなああッ！」

第18話 「フローリアン姉妹」

アリシアが落ち着きを取り戻した頃、特撮のヒーローのような掛け声が響いてくる。声がした方へ顔を向けると

「グラントツ研究所へ」

「ようこそくん♪」

と、海聖小学校の制服を着た少女達が立っていた。

毛先にウェーブの掛かっている少女のほうは至って平気そうな顔をしているが、もうひとりの赤毛の少女は顔を真っ赤に染めている。

そんな彼女達を見ている俺達は、全員呆気にとられた顔をしている。理由は単純にして明快だ。

目の前にいる海聖小学校の制服を着た人物達は、高町達のように海聖小学校に通う児童ではない。エルトリア・ガールズ・ハイスクールに通う学生なのだ。ハイスクールという言葉から分かるとおり、彼女達は高校生。

つまり、今俺達の目の前には小学生のコスプレをしている高校生が立っていることになる。初対面であろう小学生組はもちろん、長年の付き合いがある俺やデИАーチェ達でも何とも言えない気持ちになるだろう。

「どどどうするんですかキリエ！ あなたが親睦を深めるには同じ格好をするのが一番よん♪」と言うからこんな格好をしました。が、みなさん呆然としてるではありませんか！」

「あれくん？」

「おふたりとも」

「年をわきまえよ」

「はう！ ……シヨ、シヨウさん、無言で立ち去らないでください！」
いやいや、ここで引き止めずに立ち去らせてくれよ。小学生のコスプレをする高校生と知り合いだなんて思われたくないんだから。まあ話しかけられた時点でアウトなんだろうけど。

「……いいか君達、ああいう大人になっちゃいけないぞ」

「あう！ シヨウくん、ですからこれはキリエが……」

「お姉ちゃん、確かに言ったのは私だけど、着ることを決めたのはお姉ちゃんの意思よん。人のせいにするのはどうかと思うわ」

「そ、それはそうですが……というか、なぜキリエはそんなに平然としているのですか！」

「恥ずかしくないからに決まってるじゃない。私のキャラ的にお姉ちゃんに向けられる反応はされないし」

確かにアミタよりはキリエのほうが違和感ないけども……もう少し羞恥心は持ったほうがいいと思うのだが。まあ研究所の周りにある花壇を褒めたりすると照れるんだけど。

「お姉ちゃんと違って若いからねん♪」

「わ、私だってまだ若いです！」

「でもこの中では最年長よ」

「それはそうですが、私はまだ高校2年生です！」

そうだな。アミタは高校2年生だから世間で言えばまだまだ若いよな……でもさ、俺やディアーチェは中学生だからまだいいとして、高町達からすれば高校生って結構年上だと思っただよな。小学生のコスプレをするのはどうかと思う。というか、着替えるか話を進めるべきじゃないかな。

俺と視線が合ったキリエはこちらの内心を察したのか、アミタに話を進めるように促した。

「あ……改めまして、グランツ研究所へようこそ。私はアミティエⅡフロリアン。ディアーチェ達の就学の手伝いをしている家のものです。気軽にアミタって呼んでください」

「私はキリエⅡフロリアンよ。いわゆるザ・ホストファミリー、T・H・Fってやつね」

「は、はじめまして……」

「なんでうちの制服を……」

「むしろどこで手に入れたかのほうが気になるわ」

うん、バニングスの言葉は最もだな。原本は海聖小学校に通わなければ手に入らないはずだし、高校生サイズのもが売っているとは考えにくい。もしかして……

「それは言いつこなしでお願いよん。すずかちゃんにアリサちゃん」

「何で私達の名前を？」

「ま、まさか……」

「海聖小学校のマニアだったのか？」

それならば制服を手作りしてしまうのも、月村達の名前を知っているのも頷ける。俺の言葉にバニングスは大いに共感してくれているようだし、これは

「違います！ ショウさん、いじめるのはやめてください！」

いじめるだなんて失礼な。アミタがコスプレなんてしたのがそもそもの原因だろうに。

というか、年下相手に弄られるのはどうなのよ。赤面に加えて目元に涙が見えるからこれ以上はしないけどさ。

「まあまあお姉ちゃん落ち着いて。ショウ君はあまり人のことをいじめたりする子じゃないのよ。考え方を変えれば、お姉ちゃんは特別つてこと。ほら、気になる子には素直になれずにいじめちゃう子つているじゃない」

「なななな、いや確かにそのような方もいらっしやるとは思いますが……シヨ、シヨウさんがわわ私を」

キリエ、落ち着けて言っておきながらからかうのはやめろよ。と
いうか、誤解を招くようなこと言わないでくれるか。別に好きな相手にいたずらしたりしないから。素直じゃないって部分は……まあ認めなくはないけど。

「アミタ」

「は、はい！」

「……とりあえず落ち着こうな。別に特別扱いとかしてるつもりはないから。今の場合は弄ったほうがこの子達に受け入れられるかと思つてのことだし」

「ショウ君、それはかえつてお姉ちゃんを傷つけてるんじゃないかしら」

それをきつぱりと言つたキリエのほうがアミタを傷つけてると思
うぞ。そもそも、お前が変なこと言わなければ今のも口にしてないか

ら。最も悪いのはお前だぞ。

「話がおかしな方向に逸れているが、ここはブレイブデュエルの総本山とも呼べる場所だ。当然急上昇中の新チームの情報は入ってくる。仮にも貴様らは我らに土をつけたのだからな。注目されるのも当然と言えよう」

「うちに来る子達にもなのはさん達はすごく人気なんですよ」

「ディアーチエとユーリが見事にフロリアン姉妹が壊してしまった空気を修復してくれる。さすがは我が校でも屈指の優等生と頑張り屋な子だ。シユテルやレヴィ、フロリアン姉妹と癖の強い人間が多いのにここが無事に回っているのは彼女達の頑張りがあつてこそだろう。」

「そうなんです！ ですからみなさん、ぜひ遊んでいきませんか！」

「いいんですか？」

「もちろん、熱烈歓迎です！」

「アマタさん、今日も熱いですな……さすがは学校で風紀お姉ちゃん《あみたん》の名称で慕われているだけのことはある。ちなみにこの手の情報を教えてくれるのはキリエだ。」

別に俺は聞きたいと思っていないのだが、何かあればすぐに教えてくれる。はたから見れば、アマタをからかうための下準備なのだろうが、キリエはなんだかんだでアマタのことが好きな子だ。アマタと接するためにそういうことをしているのだろう。

「あらん、シヨウ君そんなにお姉さんのこと見つめちゃって。もしかしてお姉さんの魅力に気づいちゃったのかしらん？」

「何言ってるんだよ。キリエの良いところは前からそれなりに知ってる」

「え、あつ……その返しは考えてなかったわ」

キリエは言い淀んだあと、こちらに背中を向けた。おそらく俺の返答を予想していなかったため、照れているのだろう。今までに散々玩具にされたことがあるだけに、俺もどのよう返せば効果的か理解しているのだ。まああまりやると誤解を招きかねないので、いつもはできないうが……

「そこは何をイチャついておるのだ」

……うわあ、何か王さま怒ってるよ。付き合いが長いだけに声だけで、見なくても表情が分かってしまう。ここ最近やたらと睨まれたりしている気がするけど……。

まさかディアーチエは俺のことを……そんなわけないよな。あいつが怒ってるのって、アリシアとかはやてとかシユテルとか、男女の距離感を意図的に無視して接してくる連中と関わってるときだけだし。今のも集団の和を乱してるから言っただけだろうからな。

「あらん、王さまやきもちかしらん」

「や、やきもちなぞ焼いておらぬわー！」

「あらそう。でも、ディアーチエとシヨウ君って少し前まで許婚じゃなかったかしらん」

……キリエ、仕返しとばかりに何て話題を持ち出すんだ。俺やディアーチエだけでなく、恋愛に興味津々な小学生達の表情も変わってるじゃないか。せつかく落ち着いたのにまた騒がしくなるぞ。

「ええ、ちよつとそんなの聞いてないよ。いったいどういうことなの！」

「ちびひよこ、落ち着かぬか！」

「落ち着けるわけないでしょ。そりゃ前から何だか距離感近いなあつとか思ってたけどさ。シヨウは将来うちのお店を担っていく大切な人なんだからね！」

アリシア、落ち着けないのは分かるが、最後のはいくらなんでもおかしいだろ。勝手に人の将来を決めないでほしいんだが。

それとフェイト、今のはアリシアが勝手に言ってるだけだから鵜呑みにしないでくれ。別に君やアリシアと結婚したりする話なんて出てないから。

そもそも、プレシアさんに娘さんをくださいとか言えないからね。今でさえ何だかマークされてるんだから。というか、リンデイさん達だっているんだからクロノとエイミィあたりがやっていく可能性が1番高いんじゃないかな。

「後半部分に言いたいことはあるが、よく聞け。我とシヨウがい、許婚

という関係にあったことは一度としてない。我らの親が知り合いだった故に、酒の席でそのような話が冗談で出ただけだ！」

「冗談？ 割と本気だったんじゃないの？」

「そのようなことは……」

「本気であれ冗談であれ、許婚の話はなかったことになっている。それが事実だ」

「ディアーチエが怯んでしまったので代わりに答えたが、話の内容が内容だけにアリシア達は納得してくれていないようだ。」

「信じてない目をしてるな。その話をしていたのは俺達の父さんで大分酔ってたと聞いているし、前に俺がはつきり許婚の件については断ってる。俺もディアーチエも自分の相手は自分で決めるってな……ディアーチエには確認してなかったけど」

「いや……我も同じ考えだ。それにすでに終わった話なのだから、今更あれこれ言っても仕方がなからう」

「ありがとな」

「ふん、別に礼を言われるようなことではないわ」

昔からだけど本当に素直じゃないよな。まあこういうところもこいつの可愛いところだし、これぞディアーチエって感じなんだけど。

これで一段落……かと思いきや、まだまだ小学生組は納得してないみたいだな。どうしたものか……

「……あ、桃子さんに聞いてみればいい」

「え、桃子さんって……私のお母さんですか？」

「ああ。俺の母さんもパティシエしてて、確か君のお母さんとは昔からの知り合いだったはずだ。最近はあるけど前は年に何度かは訪ねてたはずだし、この話についても知ってると思うけど」

必要以上のことを話されてしまう可能性もあるが、まあ桃子さんは常識人だしさじ加減はきちんとしてくれるだろう。

「……というか、今日はこんな話をしに来たわけじゃないだろ。いい加減に話を進めないか？」

「あ、はい、それもそうですね。では、奥のほうへと向かいましょう！」
「あ、私は着替えてくるから先に行つといてねん」

「わ、私も着替えてきますので皆さん後ほど！ チヴェットは受付で
預けちゃってください！」

第19話 「小学生達の現状」

その後、フローリアン姉妹の策略によりチームT&Hエレメンツは急遽イベントデュエルに参加することになった。

対戦したのはディアーチェ&ユーリにチヴィット達。デュエルの内容はスピードレーシングでコースは大森林だった。このコースは視界を遮る木々の存在にどう対応してターゲットを破壊するのか技量が問われる。また自然破壊を行うとペナルティがある。

ちなみにT&Hの少女達は、自然を燃やせないなど発言したり、プロテクションしながら進むのは無理そうだな、という顔を浮かべたりしていた。可愛い顔をして物騒な思考をする子供達である。

勝敗については……あまり触れると機嫌を損ねそうな人物がいるので大声では言えないが、勝ったのはT&Hだ。その際、王さまがシユテル達がいれば……いやユーリだけということに不満があるわけではないぞ。と、ユーリへのLOVEが分かるやりとりがあったりした。まあ彼女のユーリへの愛は誰もが知っていると思うのでこれ以上は触れない。

「ふむ……そろそろ開戦のようだな」

現在、俺はディアーチェと共に小学生達のデュエルを観察している。

ここに至った経緯は、小学生達が壁を感じていると相談してきたため、ディアーチェが研究所にある《プロトタイプシミュレーター》と呼ばれる新しい設定を盛り込む際に使われる機械に内蔵されている《エクストラトレーニングモード》を使わせることにしたのだ。

ちなみにこのモードは、現在フリーバトルしか行えないが技の出力やアバターの状態といった様々なデータをプレイヤーも確認することが出来る。

各々の持ち味を確認するため、高町とアリシアはアミタ&モモキリ。バニングス、月村、フェイトはキリエ&ユーリ&王ちやまとデュエルを行うようだ。場所は前者が空中で後者が地上である。

「空中戦と地上戦に分けたんだね。各々の持ち味を再度確認するため

のステージ選択といったところかな」

「ん？ 博士いらつしやったのですか」

画面を覗き込んでいた俺達のところには現れたのは、ディアーチェの博士という言葉からも分かる通り、ここの責任者であるグランツ博士だ。研究熱心なせいか痩せ気味ではあるが、人の良い人物である。知っている人も多いだろうが、アミタ達の父親でもある。

「データ取りは僕にしても助かるからね。微力ながらお手伝いに来たのさ。まあ君としてはユーリが居てくれたほうが良かったかもしれないが」

「なっ……何を言いますやら！」

「ははは、冗談だよ。ここにはシヨウくんもいるしね」

笑いながら発せられた言葉にディアーチェの顔はさらに真っ赤になる。先ほど許婚やらで良い意味でも悪い意味でも盛り上がったいただけに、この手の話題はクリティカルしやすいようだ。

「博士、俺達をからかうのはやめてください。大人なんですから」

「はは、手厳しいが正当な意見だね。あ、それよりディアーチェはそろそろ準備に行ったほうがいいんじゃないかい？」

「む、もうそのような時間でしたか」

グランツ博士に促されたディアーチェは、俺達にデータ取りを頼むと準備が済み次第迎えに来ると言って出て行ってしまった。この場に残された俺はというと、必然的に博士と共に小学生達のデュエルを見ることになる。

「いやはや楽しみだね。さて、デュエルのほうはどうなっているかな」
意識を画面に戻すと、アミタの射撃を避け後方に回っていた高町の姿が見えた。彼女はそのまま攻撃を加えようとしたが、アミタが背後を確認することなく精密な射撃を行ったため、回避を余儀なくされてしまった。

そんな高町にアリシアが声を飛ばしながら、アミタの銃撃を防ぎ懐に飛び込む。しかし、モモキリが現れて攻撃を許さない。すかさずアミタが銃撃を加えるが、アリシアも魔法を展開してガードしてみせる。高町が強烈な砲撃を放つが

「このタイミングでは通らないだろうな」

俺の予測どおり、放たれた桃色の砲撃はアミタによって斬って捨てられた。ビームを斬るなんてさすがは風紀お姉ちゃん《あみたん》である。

嘘、冗談だ。ここに学校での愛称は関係ない。純粹に彼女のデュエリストとしての力量が高いだけだ。

一方他の3人はというと、見事なまでに消耗していた。対しているキリエ達の顔は涼しいままだ。

『わくお、ビーム斬っちゃった。砲撃・銃撃戦は派手よねえ』
『青にピンクに綺麗です』

などと、あちらのデュエルを気にする余裕さえある。

その言葉にこれまでのように攻めても無駄だと判断したのか、小学生達は小声で何か話した後、一斉に動き始める。

まずはバニングスが炎を鞭のようにしなせながらキリエを攻撃。しかし、命中率は0パーセント。それに苛立ちを覚えたバニングスが声を上げるが、キリエ曰く「お姉さんへのタッチは簡単ではないのよらん」とのこと。

ならばと月村がキリエの足を凍らせて機動力を奪い、バニングスがフェイトと共に追撃を掛ける。だがその攻撃もユーリと王ちやまに防がれてしまった。

「ふむ……ショウくん、君は彼女達をどう評価するかな？」

「俺ですか？　そうですね……まずアリシアですが、臨機応変な対応力はさすがだと言えると思います。センターガードとして活躍できるでしょう……でもガンナータイプという特性上、やはり決定力に欠けますね」

モモキリがガードを固めながら真正面から突撃しているのだが、アリシアは止められていない。このように力押しで来られたときにどうするかが今後の課題だろう。

「僕も同意見だね。次になのはくんはどうか？　彼女はシユテルと同じセイクリッドタイプのようにだけど」

「あの子は空を飛ぶことに関して才能があるみたいですからセイク

リッドと相性が良いと思いますよ。まあ現段階ではスペックの高さが仇となつているのか、位置取りが甘くて思いきりが足りてませんね。まだまだ隙が多いです」

「ははは、君は本人がいないとズバズバと言うんだね」

「本人がいても言つてほしいなら言いますけどね」

言わないのだけが優しさではないって母さんも言っていたし。

今関係はないけど、俺の母さんってよく考えると不思議な人だよな。感じとしてはシグナムに近いのにパティシエやつてるんだから。まあ父さんがだらしが無い人だから相性は良いんだろうけど。今でも「ごちそうさま」って言いたくなる言動してるし。

下が増えるなんて未来もありそうだよな……もしもそんな未来がきてしまったらどうするか。年齢が離れているだけに……仮定の話を考えても仕方がないか。

「次にアリサくんだけけど、一言で言うなら切り込み隊長やこれぞフォワード！ といったところかな」

「ですね。もう少し視野を広く持つてリスク管理できないとダメでしょうけど」

「そうだね。僕個人としては彼女のようなプレイは好きなんだけど」

「まあ俺も好きですよ」

デュエルを始めた頃の自分によく似ているし。今では先輩としてあれこれ教えている身であったり、何でもこなすような位置でプレイしているけど、本来の俺のスタイルは攻撃は最大の防御って感じだからな。まあシュテルくらいにしかそのへんは見せたことないんだけど。

「フェイトくんはキリエと同じワイドウィング……のレヴィよりかな？ 視野は比較的広いみたいだし、機動に関しては文句のつけどころがないね。ただ」

「仲間に合わせすぎて遊撃としては微妙なところですよね」

まあ彼女の性格を考えると無理もないと思うが……もうチームメイトなんだから、あの子達にくらい自分の正直な気持ちをぶつけてもいいと思うんだがな。

「最後にすずかくん、ポジションはユーリや王ちやまみたいにデイフェンダーなんだろうけど……動体視力や身体能力が高いんだろうね。普通はあそこまでサポートできないよ」

「ええ、ある意味一番ギャップがあります。……けど、それ故に仲間——今回の場合は特にバニングスへ意識を大きく割いている印象があります。まあ付き合いの長さや性格を考えると分からなくもないですが」

ちようどデュエルも終わったらしく、アマタが俺と博士のような解説を次々と述べ始める。しかし、見事にボロ負けしたT&Hの面々には聞こえていない。アマタ、熱血は君の良いところだけでもう少し冷静さも持ちましょう。

「さて、僕はまだあの子達と顔を合わせたことがないし挨拶にでも行ってこようかな。シウくん、君はどうする？」

「行ってもいいですけど、そろそろユーリ発案のお祝い企画の第2部が始まるでしょうし、俺もそっちの準備に取り掛かりますよ」

「そうかい。……ところで、今日はいったいどうするつもりなんだい？ 僕としては、久しぶりに君の全力全開を見てみたいんだがね」

全力全開が意味するのは、シユテル戦でしか使ったことがないアレを見たいってことだよな。あまり人前では使いたくないんだが、今後に待ち受けているユウキとのデュエルを考えればもつと練度を上げておく必要がある。まあ……

「それは……あの子達次第ですね」

第20話 「T&HエレメンツVS漆黒の剣士」

「ディアーチエちゃんの計らい？ によって、私達は夕食のあるダイニングに向けてグランツ研究所の所員の方々とデュエルを行った。予定では次のデュエルで最後だ。」

「やっと次で終わるわね」

「そうだね。まったく手が出ないわけじゃないけど、所員の人達凄かったね」

「フェイトちゃんの言うとおり、対戦した所員の人達は作ってる側だから今の私じゃ考え付かないような動きを取ってきた。色んな動きを見ることが出来て楽しかったし、何より勉強になった。」

「うん、動くポジション取るのが上手い人もいたよ。あんな風に動けたらなあ……」

「私はあの槍を持ったお姉さんが印象的だったわ。少し躊躇っただけで接近されてやられちゃったし。マンツーマンでの対応も今後は必要よね」

「だね。でも……ひよんなことから上手くタイミングがあつたりして」

「なのはちゃんとアリサちゃんは難しい顔を浮かべながら唸っている。やることは見えてきたけど、その解決策というのは簡単に浮かぶものでもない。それは私だけでなくなのはちゃん達も同じようで、肩を落としたり「むきー！」と声を上げている。」

「まあ……みんなもうお腹ペコペコだもんね。無意識に動いたりしちゃってただろうし」

「うん。次で最後だし、ご飯を食べた後でみんなに相談してみたらいいんじゃないかな？」

「そうね。みんな、次でラストなんだから全力で行くわよ！」

「次で終わりということもあって、全員拳を突き上げながら元気良く声を出す。疲れや空腹はあるけど、この団結力なら最後は良い感じに終われそうな気がする。」

「次の相手がどんな人なのか、どういうデュエルを行うか話し合いな」

がら先に進んでいると、角を曲がった先にシヨウさんが壁に寄りかかっていた。

「あれ、シヨウじゃん。どうしたの？ あっ……もしかして、わたしに会いたくなつて来ちゃったとか？」

「5人の中で言えば、お前には1番会いたくないな」

切れ味鋭い返事にアリシアちゃんは両手で胸を押さえる。見た目はあれだけど、私達よりシヨウさんと年齢が離れていないこともあつてこのような漫才染みたやりとりができるのだろう。

シヨウさんのほうは少し嫌そうな顔をしてるけど……多分演技だよな。そうじゃないとアリシアちゃんが可哀想だし。

「もう、今のわたしは疲れてるんだよ。少しくらいデレてくれたっていいじゃん」

「これから戦う相手に笑顔振り撒いてどうするんだよ」

シヨウさんの言葉に私だけじゃなく他の子達の表情も固まる。聞き間違いでなければ、今シヨウさんは私達とデュエルすると言った気が……。

「あ、あの……私達の最後の相手ってシヨウさんなんですか？」

「ああ。ただ……疲労と空腹で無理ってことならしなくてもいい。このまま奥に進んで食事しよう」

優しいな声で言われた内容は、今の私達にとっては非常に魅力的なものだ。だけど、私はシヨウさんとデュエルがしたいと思った。

シヨウさんとはこれまでに何度かデュエルをしたことがあるけど、それはあくまでチーム戦の手伝いって感じだった。多分今回が初めてシヨウさんって存在にぶつかるデュエルになる。

実力はシユテルちゃんレベルだって話だけど、今の私じゃシユテルちゃんの底を知ることができない。だから多分私——ううん、私達とシヨウさんとの間にはいくつもの差があるんだと思う。

勝てるかどうかは分からない。でも、やりたい。

誰もがそんな気持ちを抱いているのか、私達は真っ直ぐにシヨウさんを見つめた。

「確かに疲れてるしご飯も食べたいけど」

「せっかくシヨウさんとデュエルできるんだから」

「やらないなんて選択肢はないわよね」

「シヨウさん、全力全開で行くので」

「よろしくお願いします」

以心伝心したかのように順番に気持ち传达了私達に、シヨウさんは優しいな笑みを向けてくれた。なのはちゃんやフェイトちゃんは何か顔を赤くしてるけど、ふたりの気持ちは分からなくもない。

シヨウさんってあまり笑ったりする人じゃないから、今みたいな顔されるとドキツとするよね。まあ私達がいつも女の子ばかりでいるから男の人に慣れてないだけかもしれないけど。

ただ……なのはちゃんは助けてもらった日からシヨウさんのこと意識してるよね。フェイトちゃんは性格なのか、昔から付き合ってるみたいだし特別な想いがあるのかはつきりしないけど……まあこういうのは見守るのが1番だよな。

「じゃあ、元氣のあるうちに始めようか」

そう言つてシヨウさんは近くのシミュレータのある部屋へと向かう。私達をすぐあとを追い、それぞれシミュレータに入ってブレイブホルダーを胸の前に抱えた。

次の瞬間には、私達は制服からそれぞれのバリアジャケットに姿を変え、四方を崖で囲まれた平地に舞い降りる。障害物の類は存在しておらず、純粋なデュエリストの腕が試されるフィールドだ。

少し遅れて私達よりも頭ひとつ分ほど高いデュエリストが現れる。やや長めの髪と鋭い瞳は共に漆黒。黒革のようなロングコートに身を包み、手には指貫きのグローブ、足にはブーツ。背中には一本の長剣型のデバイス。《漆黒の剣士》という通り名にふさわしいアバターだ。

シヨウさんは静かに背中にある剣に右手を伸ばしてゆつくりと抜き放つ。ただの開戦の準備としか言えない動作だったが、私は気が付けば両手を握り締め身構えていた。

——これが……本当のシヨウさん。

シヨウさんのこれまでの印象は、どこか不器用そうで表情に乏しい

ところがあるけど、優しいお兄さんといったものだった。

デュエルするときも敵対している私達を気にしてくれていたため、感じる雰囲気もどこか優しいものだった。

でもこうして敵として向き合って……実力がある程度高まった今だからこそ分かる。

シヨウさんはただ剣を持って自然体で立っているだけ。一見隙だらけに見えるけれど、迂闊に攻撃すれば次の瞬間には返り討ちに遭っているビジョンしか見えてこない。

体から発せられている圧力は凄まじく、もしも自分ひとりでこの場に居たとすれば、気が付いたときにはデュエルが終わっている……なんてことになっていたかもしれない。それくらい個人的な力量の差を肌と感じた。

直後。

1発の魔力弾が静寂を破る。それは真っ直ぐにシヨウさんへと向かい……漆黒の長剣に斬り裂かれた。

「いきなり顔を狙うなんてえげつないな」

「あつさり斬ったくせによく言うね。けどまあ許してよ。みんな疲れもあってシヨウの圧力に怖気づいてたみたいだし」

「小さくてもお姉さんだな」

「小さいは余計だよ」

アリシアちゃんは頬を膨らませる。これまでに何度も見た光景に緊張は薄れ、私だけじゃなく他のみんなの顔にも笑みが現れる。

突然発砲するから驚いたけど、私達のためにやってくれたんだ。やっぱり私達より早く生まれてるだけに、こういうときは頼りになるなあ。

「みんな、シヨウなんかさつきとやつつけてご飯を食べよう！」

「そうね。あんまり長引かせてたら空腹で倒れそうだな。一気に決めちゃいませよー！」

「アリサ、焦りは禁物だよ。さつきの攻撃、不意打ちに近かったはずなのに簡単に防がれた。私達よりも格上なのは間違いないよ」

「でもそれで怯んでたら勝利なんてものは訪れないよ。胸を借りるつ

もりで、全力全開で挑もう！」

「うん、私は精一杯サポートするね！」

大きく頷きあつた私達は、それぞれ行動に移った。まずアリサちゃんはシヨウウさんに向かって真正面から接近。フェイトちゃんは横に回りこむようにしながら移動する。ふたりから意識を遠ざけるべく、アリシアちゃんが銃を構えた。

「シヨウ、行くよー！」

アリシアちゃんは次々と魔力弾を放つて牽制する。が、シヨウさんは迫り来る魔力弾を全く力感のない動きで全て叩き斬る。かなり重量のありそうなデバイスに見えるのに、あれだけ滑らかに斬撃を放てるのは彼の努力の賜物か。

しかし、シヨウさんがどんなに優れたデュエリストでも目の前で爆発が起これば一瞬視界がゼロになる。そのタイミングでアリサちゃんは見事に飛び込んでいた。

「そこっ！」

アリサちゃんの剣型デバイス《フレイムアイズ》の先端がシヨウさんの胸部を捉えた――

「っ……っ！」

――ように思えたが、シヨウさんは圧倒的な反応速度で体を捻ってアリサちゃんの攻撃をかわす。彼の動きはそれだけに留まらず、素早く体勢を整え剣を構えた。回避から攻撃までのタイムロスがなさすぎる。

「やらせないー！」

気合のこもった声と共にフェイトちゃんが間に割って入り、漆黒の長剣を受け止めた。だが体重の差からか、フェイトちゃんのほうが押し返される。

でも動きが止まった。このタイミングで……！

私は動きを止めようとシヨウさんの足元を凍らせ始める。あともう少して足を取れる！ と思った矢先、再び彼は超反応を見せ、強引にフェイトちゃんを押し返すと、剣を地面に突き立て跳躍した。

前にフェンサータイプはトリッキーな機動が持ち味と教わったが、

シヨウさんの動きはこれまでに見たどのフェンサータイプよりもトリッキーだ。

ただどあんな無茶な避け方をした直後なら、そう易々と連続で回避行動は取れないはず。

「ダイバイイン……バスター！」

私達の中で最も火力のあるのはちゃんの砲撃がシヨウさんを狙い撃つ。簡単に直撃をもらってくれるとは思えないが、少なくとも今浮かんでいる彼の顔には焦りのような感情が見える。

だが——次の瞬間。

シヨウさんの瞳には諦めではなく抗いの意思が宿っていた。

彼は迫り来る桃色の閃光を見つめながら可能な限り体勢を整え、右腕を引き絞るように肩に引き付ける。それとほぼ同時に漆黒の刀身に集束されていた魔力が弾け、紅蓮の炎へと姿を変えた。

シヨウさんの愛用している魔法《ブレイズストライク》。時として一撃で勝負を決め得る威力を秘めているだけになのはちゃんの砲撃を食い破る可能性は高い。

「う……お……い！」

かすかに漏れた雄叫びと共に真紅の流星が宙を翔ける。なのはちゃんの砲撃とは全く関係のない方向に。

狙いをミスしたのかと思ったが、今のシヨウさんは空中に居る。強力な魔法というのはそれ相応の反動があるもので、撃ち出す方向とは逆向きの力が働くものだ。踏ん張りを効かせずに放てば、必然的に体はその方向へと進み始める。

結果から言って、シヨウさんはブレイズストライクの反動で砲撃の範囲から脱出した。ただ反動が強すぎるあまり、すぐに止まることはできず、何度も地面を転がる。

人によつては無様な避け方だと言うかもしれないが、なのはちゃんの砲撃は防御魔法を使ってもなかなか受け止めきれものではない。攻撃範囲から逃れるのが最も効果的だ。だからといって、普通のデューリストはあの状況下で回避という選択肢は取れないだろう。

私達が呆然と立ち尽くす中、シヨウさんは剣を地面に突き刺して制

止を掛け体勢を立て直した。こちらの動きに注意を払いつつ剣を地面に刺したまま立ち上がると、体のあちこちを叩き始める。

「やれやれ……ついこの間始めたばかりだって言うのに。……これは俺も本気でやらないと勝てそうにないな」

本気。

その言葉に驚愕と動揺が走る。

デュエルが始まって間もないが、シヨウさんの実力の高さは充分に理解させられた。先手を譲ってもらえたことで有利に運べたわけだが、あちらから攻められたらどうなるか分からない。

なのに彼にはまだ余力があるというのか。もしそうならば、私達の勝てる可能性は限りなく低くなる。

そんな私の思いとは裏腹に、シヨウさんは左手を背中のように伸ばし始める。すると左肩あたりに新たな剣が出現。それをしつかり握ったかと思うと、ゆっくりと鞘から抜き放った。

刀身部分は薄く、レイピアほどではないが細い。刃の色は1本目の剣とは対照的に純白であり、眩い光を放っている。柄の部分は青味がかった銀色。簡潔にこの剣を表現するなら『やや華奢で美しい剣』といったものになるだろう。

シヨウさんは突き刺していた漆黒の剣を右手に取る。左右の手に握った漆黒と純白の剣をクルクルと回転させ——握り締めたと思っただ直後、一気に切り払った。

「……行くぞ」

低い声が耳に届いたかと思うと、シヨウさんは右足を大きく踏み出し、まるで砲撃で撃ち出された如き速度でこちらに迫ってきた。

第21話 「歓迎会」

「コングラッチレイション！」

「お疲れ様でした」

デュエルを終えた俺達を迎えてくれたのは、レヴィとシュテルだ。彼女達がこうして出迎えたということは、どうやらあちら側の準備は済んでいるらしい。

全員腹を空かせてるだろうし、デИАーチエの料理を目の前にしたらがつつきそうだな。

と思って視線を小学生組に向けてみると、何やらアリシアが怯えた様子でシュテル達を見ていた。いったいどうしたのだろうか。

「まさか……最後にふたりとデュエルなんてことは」

ああなるほど、そういうことか。確かに研究員ではない俺ともデュエルをしたので、今のようになってしまうもおかしくはない。

「ええ!? 流石に限界よあたしたち。主に兵糧的な意味で!？」

俺とのデュエルを終えた時点でぐったりしていたのだからそうだろう。ここに来るまでの足取りもかなり重たいものだったし。

にしても……バニングスは小学生の割りに難しい言葉を知ってるな。普通小学生は兵糧なんて言葉は使わないだろうに。

まあそれは置いておくとして、さすがにデュエル好きのシュテルやレヴィでも今からやろうとは言わないだろう。そんな俺の思考をあげ笑うかのようにシュテルは小さく笑い、ブレイブホルダーを構えた。

「今の私達は云わばコンシエルジュ……お望みとあらば一戦交えますが?」

真剣な顔で何を言っているんだこいつは。どこからどう見ても小学生達は疲れてるだろ。おそらく冗談で言ってるんだろが……高町だけは目を輝かせてるな。可愛い顔して意外と戦闘狂なのだろうか。まあお兄さん達が武術をしているから可能性はゼロじゃないだろうけど。

「ええっ!? ボクもお腹空いたよシュテるん。み、みんな……ご飯

ゆーせんだよね?」

慌てたレヴィの問いかけにアリシアとバニングスは大きく首を縦に振りながら、シユテルの耳にも届くであろう音量で腹の虫を鳴らした。

「ふふ、小粋なジョークといったところですよ」

「いや、今の状況じゃ笑えないだろ」

「まあまあ気を取り直して、会場にご案内〜!」

レヴィを先頭に会場に入ると、そこには豪華な夕食が並べられていた。空腹が限界まで来ていた小学生達の表情が煌びやかなものに変わったのは言うまでもない。

「よくぞ辿り着いた」

「ようこそいらっしやいました」

ディアーチェエやユーリが代表で歓迎の言葉を述べてくれたが、フロリアン姉妹やグランツ博士の姿もある。足りないメンツはいないようだ。

「ディアーチェエ、えらく頑張って作ったな」

「え……これディアーチェエちゃんか?」

「別に我ひとりで作ったわけではない。それに急で時間もなかったのな。あまり豪華なものを用意できなかった、許せ」

ターキーまで用意しといて何を謙遜してるんだか。充分にパーティーとして通用する品数だし、時間があつたらどれだけハイレベルなものを用意するつもりなんだろ。それはそれで見たくもあるな。

「そんなことないよ。どれも綺麗で美味しそうで……ありがとう!」

「む……なら良い」

「しかし……本当に美味しそうね」

「うん。どんどん睡が溢れてくるよ」

「みなさんすでに限界のようですし、冷めないうちに頂きましょうか」

アミタの発言にディアーチェエが博士に挨拶を促し、全員手を合わせて食前の言葉を述べる。

俺はディアーチェエの腕前を知っているだけに、限界まで腹を空かせた小学生達がどのような反応をするのか気になった。なのでチラリ

と横を見ると、ちょうど料理を口に運んだバニングスと月村が見える。

「こ、これは……パリパリの皮にふっくら焼き上がったお肉」

「ほのかに付いている風味からして……表面にごま油を塗ってるのね！」

「それだけじゃないよ。中に香草だけじゃなくてきのこや蒸したお野菜も一緒に入ってる」

「お肉の旨味がしつとり上品に行き渡って……本当に美味しい」

「お口の中がしあわせ♪」

さすがはお嬢様方、小学生なのにずいぶんと味覚が発達していらっしやる。それに食レポとリアクションも完璧なようで……どういう風に君達は育ってきたんだ。

残りの小学生に意識を向けてみると、高町↓フェイト、アリシア↓高町、フェイト↓アリシアといったように代わる代わる食べさせ合いつこをしていた。こちらはお嬢様方と違って何とも子供らしい光景である。

「……ん？」

料理を皿に取っていると、幸せそうな表情を浮かべる高町を見つめているシュテルが視界に入った。彼女の顔は至って平常運転に見えるが、付き合いが長いせい何かを考えているのか何となく分かる。

多分……高町達みたいに食べさせ合いつこをしたいんだろうな。ああ見えて構ってちゃんというか、人と接したいと思う奴だし。まあ猫みたいに気まぐれだつたりもするんだけど。

予想はどうやら当たっていたらしく、シュテルは近くでガツガツと音を立てて食べていたレヴィイへと意識を向けた。

「レヴィイ、私達も……」

「んう？ なに？」

「……何でもありません」

確かに相手にディアーチェではなくレヴィイを選んだ点は良い。彼女ならば『あくん』といったことでも抵抗なくさせてくれただろう。が、食べ始める前にしないとダメだ。

「というか、やりたいいくせに押しが弱いな。あれか、やりたいけど自分のキャラ的に恥ずかしいのか。恥ずかしいと思うなら諦めればいいのに……あのシユテルさん、何でこっちに近づいてくるんですか？」

「いや、無言でやるなよ。それにやらないぞ」

「私の恥ずかしい姿を見たではないですか」

「それはお前の自業自得——んぐ!？」

問答無用と言わんばかりにシユテルは肉を刺していたフォークを俺の口の中に捻じ込んできた。味が最高なのは分かっているが、突然の出来事に味わう余裕はなく、俺は大いに咳き込む。

「……この野郎、何で俺には押しが強いんだよ。他の人間にもそれくらいで行けよ。」

なんて思っただけで睨む俺を華麗にスルーし、シユテルは何事もなかったように食事を始める。どうやら彼女の内にあった欲求は満たされたらしい。本来したかったことは別のはずなのに、何とも代用が利くものだ。

「こっちのもめちやくちや美味しいじゃない」

「うちのママがいないときは王様がうちのコック長なのよ」

「凄いねディアーチェちゃん」

「世話になっておる故な。まだまだ母上殿には及ばぬが……」

ディアーチェ以上に凄まって……グランツ博士の奥さん何者なんだろう。博士達とは昔から付き合いがあるけど、何でか会えた試しがないんだよな。うちの両親とか叔母さんは会ってるらしいけど。

まあ会ったらあつたで面倒な展開になりそうなのだが……。

これは俺の経験に基づく勘だ。俺には桃子さんやリンディさん、プレシアさんと意外と母親をやっている知り合いが多い。年頃の子供を持つせいなのか、あの人達は何かと色々な想像を巡らせてしまうのだ。

まったく……何で母親ってああなんだろう。うちの母さんもあの人達と会っているときは色々話してるのかね。

そんなことを思っていると、ふとグランツ博士のほうに歩いていく

高町が見えた。先ほど挨拶は済ませているが、知り合ったばかりの人間に躊躇なく近づけるのは凄いなと思う。だがあれが子供らしさと呼べるものなのかもしれない。

「あのグランツ博士」

「ん、何だい？」

「さつき訓練室をいつでも使ってくれていいって言ってくれたお話なんですけど」

「ああ、もちろん構わないよ」

「ありがとうございます。……えーと、その」

どうやら高町の本題は礼とは別にあるらしい。しかも言いづらいことなのか、言い淀んでしまっている。

あの子……いやあの子達は現在進行形で壁にぶつかってるわけだからな。これまでは自分達だけでやってきただけに、誰かしらにコーチでもしてもらいたいんだろう。

そう思った俺が助け舟を出そうとした矢先、俺よりも先に口を開いた人間が居た。

「何か困っていることがあるのなら、そこにいるふたりにコーチしてもらえばいいのではないか？」

発言したのはディアーチエ。彼女が言ったふたりというのはフローリアン姉妹だ。

何となくではあるが、ディアーチエの考えたシナリオの全容が見えてきた。現状の理解と打開するための手段を与える。それが彼女なりの祝福のようだ。相変わらず面倒見の良い奴……。

「お、それは名案だね！」

「ええええ!! デュ、デュエルの相手ならともかく……わ、私達が教えるだなんて」

「そ、そーよ。私達よりももつと得意そうな人が……ほらその彼とか」

キリエ、人を売するような真似をするなよ……まあ彼女達と先に知り合ったのは俺だから理不尽とまでは言わないけど。

「いや俺は……」

「シヨウ、謙遜は良くないと思うな。さっきわたし達のことギツタンギツタンにしたんだから」

アリシアの発言を皮切りに次々と小学生達の口が開いていく。

「そうよね……今思い返してみてもさっきのデュエルのシヨウさんは凄かったわ」

「うん……最初は行けるかもって思ったけど」

「2本目を抜いてからは一方的な展開だった」

「そうだね、みんなあつという間にやられちゃったし」

いやそれは……君達のデュエルを見てたから苦手な分野とか穴が分かってただけで、今日初めてデュエルしてたのなら多分勝てなかったと思うんだけど。

なんて言ってもこの流れは変えられるわけもないか。……はあ、気が重たいけどはつきり言う他にないよな。

「悪いけど、いくら頼まれても君達のコーチをするつもりはないよ」

「ええ、今まではなんだかんだで付き合ってくれてたんじゃん。何で？」

「……弱いから」

アリシアだけでなく、この場に居た全ての人間の表情が凍る。それに一瞬遅れて、自分が言葉足らずで発言してしまったことに気づく。

「ああいや、今のは君達が弱いからって意味じゃなくて俺がつてことだから」

「え？ 弱いってシヨウさん、すっごく強いじゃないですか？」

確かにバニングス達から見れば俺は強く見えるのだろう。

でも俺は最初から強かったわけじゃない。どちらかといえば、最初は負けることが多かった。負けても楽しくはあったけど、やつぱり悔しくて……強くなるために考えて考えて考え抜いて、勝っても負けてもそれを繰り返してやつと今の力を付けたんだ。

けどあいつは……初めてのデュエルで通り名持ちに勝ってみせた。もちろん、相手に油断はあっただろう。だが勝ったんだ。

あいつの成長速度を考えれば、おそらくすでにこの子達に近いレベルに到達しているだろう。遠くない未来、きっと今の俺くらいにな

る。この子達の面倒を見ていけば、間違いなく勝率は下がるはずだ。
「……現状で満足するわけにはいかないんだ。俺にはどうしても勝ちたい奴がいる……だから、もっと先へ進みたい」

俺の言葉に小学生達の視線がシュテルに集まる。だが彼女は涼しい顔で佇んだままだ。

「彼が言っているのは、おそらく私ではありませんよ……私に対して今ほどの熱を向けてくれたことはありませんから」

「いや、シュテル……お前にも勝ちたいって思ってるんだけど」

「私に『も』ですか。そうですか……」

ああ……間違いなく機嫌が悪くなっていらっしやる。目を合わせてくれないどころか背中向け始めたし、声もどことなくいつもより低くなってたし。

「……まあそれにコーチみたいな役をすでに引き受けてるからさ」

「それって八神堂さんとか？」

「いや……最近ブレイブデュエル始めたばかりの」

「……女の子？」

「そうだけど……」

アリシア、何でそんなジト目でこっちを見るんだよ。……いや、他の連中もアリシアほどじゃないけど何かこっち見てるし。別に不埒なことしてるわけでもないのに理不尽だろ。

「それって誰なの？」

「誰って……まあ一言で言えば従妹だけど」

「従妹？ 王さま知ってる？」

「ん、ああ。確かにショウウにはユウキという従妹がおるぞ……それにしても、あやつこっちに来ておったのか？」

「まあな」

ユウキの存在は小学生組以外は知っていたため、この場に漂っていた善からぬ空気が霧散し始める。だが今度は別の意味で不機嫌そうな目を向けられてしまった。

「ショウウよ、ユウキが来ておるのなら何故ここに連れてこないのだ？」
「それは……こっちに来たの数日前だし、叔母から前もって知らされ

てなかったからゴタゴタしてたんだよ」

「はあ……あの人は相変わらず仕事以外はどこか抜けておるな。だが、ならば今日連れてくればよかつたではないか？」

「あいにく今日あいつは用事があったんだよ。アリシア達がいなくてことで急遽T&Hからイベントデュエルに参加してくれて頼まれたんだとさ」

俺のした説明に一瞬ディアーチェは納得しかけたが、すぐさま怪訝そうな顔を作る。

「ちよつと待て……私の記憶が正しければ、あやつはデュエルの経験はなかったはずだが？」

「そうだな。初めてデュエルをしたのは数日前だ」

「……なのにイベントデュエルに出ておるのか？」

「ああ……」

ディアーチェは全て理解したらしく、ユウキのゲームに関する才能の高さに感心するどころか呆れているようで顔を手で覆っている。シユテル達も彼女のことを知っているだけに理解できたようで、首を傾げているのは小学生組だけだ。

「えつと……デュエル初めて数日でイベントデュエルに参加できる子っているの？」

「さあ？ 初心者を対象にしたものならできそうだけど」

「私はそういうのは聞いてないけど……お姉ちゃんは？」

「わたしも聞いてないよ。でも……何か超凄い新人が現れたって話は聞いたかな」

「じゃあその人はシヨウさんの従妹ってこと？」

全ての疑問は解決できていないようだが、まあ俺がコーチを出来るな理由は理解してくれただろう。これであればフローリアン姉妹にコーチをしてくれるように話を進めれば万事解決……

「ああ、言い忘れていたけどユウキくんは2学期からシヨウくん達と同じ学校に通うそうだよ。彼女のご両親がこっちに来るのはまだ先らしいけどね」

「え……それってつまり」

「親御さんが来るまではシヨウくんの家で厄介になるってことかしら？」

「そうなるね」

そうなるね……って、グランツ博士笑い事じゃないんですけど。あなたは悪気はないんでしょうけど、何でこのタイミングで言っちゃうんですか。また俺に周囲の視線が……

「あれ？ ……僕、何か不味いこと言っちゃったかな？」

「不味いことは言ってないですよ……言うタイミングが不味かっただけ」

「あはは……すまない、シヨウくん頑張って」

「こんなことで頑張りたくないです」

第22話 「従妹は思春期」

小学生達のチーム《T&Hエレメンツ》の歓迎会は色々騒がしくなる場面もあったものの無事に終了し、アミタとキリエがコーチとして彼女達を鍛えることになった。

あの子達の成長の速さを考えると、おそらく今度デュエルを行うときは記憶にあるものよりも数段上の実力になっているに違いない。

「……………まあ」

成長の速さだけでいえば、すぐそばにあの子達以上に速い人間がいるのだが。その人物の名前は、東雲悠樹。俺の従妹である。

ユウキはブレイブデュエルを始めてからまだ日も浅いのだが、歓迎会の日に行われたホビーショップT&Hのイベントデュエルでも大活躍したらしく、凄まじい勢いでデュエリストの間で知名度が上がっているらしい。

今日俺はユウキを新たなデュエルの舞台《八神堂》に連れて行くこうとしている。故に彼女の知名度の広がりには更なる加速が掛かることだろう。

そうなる……………必然的に血の繋がりのある俺にも注目が浴びせられるんだろうな。まあ全国ランカーに知り合いが多いし、イベントの手伝いやらもしてるから今更目立たないようにしても無意味なんだろうけど。というか、多分目立たないようにデュエルしてたら一向に成長しないよな。

ユウキに勝つために……………更なる高みを目指すために小学生達のコーチの話を断つたのだ。真剣にデュエルの腕前を磨かなければ彼女達にも悪いだろう。もしも不真面目なデュエルをしているのをシユテルあたりにでも見られたら……………。

「確か八神堂ってベルカスタイルのオーナー店なんだよね。T&Hとは違ったデュエリストが多そうだし、ほんと楽しみ……………シヨウ、どうかした？」

「え？ ああ、いや別にどうもしてないけど」

「ほんとに？ 何か元気ないように見えるよ」

「それは……」

本当の理由は別にあるがそれを正直に口にするのは良くないだろう。

また勉強のことやら家事のことを理由にするのもダメだ。その手の話をすれば、きつとユウキが我が俣を言っでごめんね、のような発言をするに違いない。

今のユウキは大丈夫そうに見えるが、前は病弱でよく寝込んだりしていた。そのときは俺も小さかったので本格的な看病をしていたわけではないが、見舞いに行つたときは毎度のように「ごめん」や「ありがとう」という言葉を申し訳なさそうな顔で言われたものだ。

血の繋がりがあからなのか、知り合いのそういう顔は見たくないと思うのか……ユウキの元氣のない顔は見たいとは思わない。多少機嫌が悪くなる可能性もあるが、ここはそれらしいことで誤魔化そう。

「これだけ気温が高いと元氣もなくなるだろ。ユウキみたいに八神堂に初めて行くわけでもないからテンションも上がらないし」

「む……何かその言い方は僕を子供扱いしてる気がする」

「別にしてるつもりはないさ……まあ俺とお前じゃ俺のほうが落ち着いてるとは言われるだろうけど」

言い終わつてから視線を向けてみると、ユウキの顔がやや不機嫌そうな目でこちらを睨んでいた。遠回しに彼女の方が子供だと言つたようなものなので無理もない。

やつてしまった……後半は言わなければよかった。

そのように後悔が芽生えもしたが、今更取り消すこともできない。変に誤魔化そうとすればさらにユウキの機嫌を損ねる可能性もある。ここは彼女の反応を見てどうにか対応するしかないだろう。

「……確かにショウの方が落ち着いてるけどさ、僕だつて落ち着いてきてるし。というか、大体ショウが口数が少なくて会話が続かないから僕がその分話すようになったんじゃない」

「あんまり拗ねるなよ。てか、そつちだつて人の過去をどうこう言ってるじゃないか。言つとくけど、前は目的も理由もないのに会話する

必要性をあまり感じてなかっただけだ」

「うわあ……子供らしくない。まあ確かに小さい頃のシヨウはそんな感じだったけど……正直近づきにくいというか、一緒に居ると緊張したし」

ユウキがそのように言うのも仕方がないだろう。俺の父さんや叔母は一般人からすればかなり優れた頭脳の持ち主である。つまり俺にも具体的な割合は分からないがその遺伝子があるわけで、物心つくのも早ければ同年代よりも勉強というか物覚えも良かった。

それだけに同年代と遊ぶよりも大人から知識を教えてもらう方が楽しいと思っていた時期がある。いや、もつと簡潔にあの頃の自分を表現するならば冷めてしまったというか、心が錆び付いていたというべきかもしれない。

けれどシユテルやレヴィ、ディアーチエ達に出会うことで変わるこゝとが出来た。彼女達は俺よりも優れた頭脳も持っているが、とても輝いた目をしていたのだ。それが俺には眩しく見えた。それだけに……近づきたい気持ちと近づきたくない気持ちを抱いたものだ。

——まあディアーチエに貴様も我らと共に遊ぶがいいみたいに言われ、レヴィに抱きつかれながら遊ぼうとせがまれ、シユテルから静かに諦めて遊ぶべきだと諭され選択肢はひとつしかなかったんだだけだ。

「けど……シユテル達と会った頃からかな。少しずつだけどシヨウは変わって行ったよね。優しくなったというか……いや優しいところはあつたけど、分かりにくかつたのか。感情があまりにも表に出てなかつたし」

「……何か話がずれてないか？」

「おっと……。うーん、そうだなあ……。じゃあ、子供らしくなつたってことで」

「それはさっきの仕返しか？」

「さあ、それはどうだろうね」

ユウキは笑顔を浮かべてくるりと回ると、少し先を歩き始める。

そのような逃げ方をするようになったあたり、ユウキも確実に年齢

を重ねているということか。シユテル達があまり使わない手段ということを考えてると、彼女の方が大人っぽいとも思えなくもない。

……というか、今でさえ厄介なあのメンツがユウキのような笑って誤魔化すなんて芸当——もとい逃げ方を覚えられると非常に面倒になるな。今でさえかなり面倒なときがあるし。

「あつ……そういえば、こっちに來てからまだシユテル達に会ってないや」

「そういやそうだな。ま、近いうちに連れて行ってやるよ……俺は送り届けたら別のところに行くかもしれないけど」

「もう、何でそういう余計なことをつけるかな。……まあシヨウらしいけどさ。みんな元気にしてる？」

「ああ」

「そつか……あ、あのさ」

ユウキの顔がこれまでと打って変わってこちらの顔色を窺うようなものになる。指先をもじもじさせているあたり、俺はこれからなかなかなことを聞かれるのだろうか。

「何だよ？」

「えっと、その……シヨウはちゃんとみんなと仲良く出来てる？」

「……は？」

ユウキはどういう意味で聞いているのだろうか。

まず最初に考えられるのは、単純に学校生活や私生活を含めて親しくできているかということだが……こちらに來る前に大きなケンカをしたなんてこともないのに聞くだろうか。……俺の性格を考えると否定できない部分はあるか。

他の可能性としては、ユウキの年代的にシユテル達の誰かしらとこれまでと違った関係になった。のようなものが考えられる。しかし、唐突にそのような話題を振ってくるだろうか。好きな異性のタイプ、といった話題でしゃべっていたわけでもないし。

「うーん……まあそれなりに」

「それなりって……どれくらいなのさ。例えを出してよ」

「例えって言われてもな……最近はブレイブデュエルに関することば

かりだし、あいつらよりブレイブデュエルを始めたばかりの小学生達と一緒に居ることが多かったからな」

「なるほど……ねえシヨウ、シヨウってやつぱり」

「ロリコンじゃねえよ」

何で小学生って単語を使っただけでそうなるんだ。俺が大人——いや高校生くらいの年齢ならそのように思われても仕方がないかもしれない。だが俺はまだ中学生であり、あの子達との歳の差は数年だ。世の中に数歳差の恋人は数多く居るだろうし、ロリコンだと言われるのは許容できるものではない。

「じゃ、じゃあさ……そのシユテル達とはどうなの？」

「どうなのって……どういう意味だよ？」

「それはその……ほら、例えば僕らも少しは大人になったわけだしさ。昔みたいは何をするのもみんな一緒にしたいな感じじゃなくなってきてもおかしくないわけで……」

「要するにシユテル達とふたりだけで出かけたりしてるのかって言いたいのか？」

「う、うん……そうなるかな」

ずいぶんと顔を赤くしているが、まあユウキも思春期の女の子だ。俺は従兄とはいえ彼女にとっては身近な異性のひとりであり、また俺の近くには昔から異性の友人が居たのだ。恋愛に関することが気になってしまうのは分からなくもない。修学旅行の夜や女子だけで集まって話してくれとも思う話題ではあるが。

「まあ下手に隠して誤解されるのも困るしな。……とはいえ、今もあまり昔と変わらないといえは変わらないと思うぞ。大体あいつらは一緒に行動してるし……ただ」

「ただ？」

「ディアーチェとは買い出しの手伝いとかでふたりになったりするとはある。レヴィとは……ディアーチェ達に予定があるときは一緒に遊んでくれて言われたりするな」

「シユテルは？」

「シユテルは……」

今はこれといって問題ないがつい最近まで疎遠になっていたというか、すれ違いみたいなのが起きてたから他のふたりと比べると何も無いんだよな。

まあそのへんはすでに解消してるし、静かに本を読める場所がないかって聞かれたから今度翠屋でも紹介しようかなとは思ってるけど。こつちに戻ってきてからあまり桃子さん達とも顔を合わせてないし。ちなみに翠屋というのは高町の両親が経営している喫茶店のことだ。「今度暇があれば出かけるかもしれないな」

「そそそれってデート!?!」

「そんなんじゃない」

とは言ったものの、男女がふたりで出かける程度の意味合いで言えばデートと呼ぶこともあるかもしれない。

しかし、組み合わせは俺とシユテルだ。互いに口数は多い方ではないし、はやてやレヴィのようにすぐ誰かに引っ付くタイプでもない。一緒に歩いていたからといってデートと思う人間はそういないのではないだろうか。

そもそも……俺はあいつのことを異性として認識しているが、昔から付き合いがあるだけに普通に会話する分には何の緊張もしない。お茶目な部分もありはするが、基本的に言葉だけなのでよほどの身体的接触がなければ顔を赤らめたりすることもないだろう。

というか、シユテルは俺のことを異性として見ているのだろうか。最低限はしてそうではあるが、ディアーチェなどと比べると本当に最低限のような気がする。感情が表に出にくい奴なので実際はどうなのか分かりはしないのだが……だからといって直接聞くのも悪手に思える。

そんなことをすれば、俺がシユテルに気があるように思われるかもしれないし、そうならなくても高い確率でからかわれるだろう。彼女の性格的に事あるごとにやってきそうなので面倒なことこの上ない。「ああもう……普段の振る舞いから見ればディアーチェとかの方が積極的に思えるけど、ディアーチェは奥手というか乙女だし。レヴィは好きの違いつか分かってなさそうだからしばらくは問題ないとして

……やっぱりシユテルは油断できないや」

「ユウキ、何をブツブツ言ってるんだ？」

「な、何でもないよ!? シユテルとのデートで失敗でもしたら色々心に刺さるようなことを言われるんだだろうなって思ってたただけで。うん、本当に他意はないからー」

慌ててるのもあれだが……他意なんて言葉が出ると他意があるように思えてならないのだが。

とはいえ、俺自身考え事をしてた意識を割いていたし、周囲から聞こえてくる音でユウキの独り言を聞いたわけではない。

証拠もないのに問い詰めるのもあれだし、ユウキは割と拗ねやすかったりする。それにユウキが何を言っていたのか気になるかといえば、そこまで気になるわけでもない。ここは流しておいたほうが何事もないだろう。

「そんなことより早く八神堂に行こうよ。T&Hとは違ったデュエリスト達がたくさん居るだろうし、せっかく自由な時間が多い生活を送ってるからね。思いつきりデュエルを楽しみたいよ」

「そうか、なら八神堂に着いたら別行動だな」

「何でそうなるの!? 僕は今日が初めてなんだから一緒に居てよ!」

「いや俺もデュエルしたいし、お前を置いて別のところに行くつもりはないから安心しろよ」

本当はこっそりといなくなるつもりなんじゃないのか、とでも思っているのか、ユウキの目は俺に対する疑いを持ったままだ。また唇が若干尖っているところを見るに何かしら文句があるのかもしれない。例えば……「シヨウって何でそういう言い回しばかりするかな。そんなんだから友達が増えないんだよ」とか。

「何か言いたいことでもあるのか？」

「別に……ただ置いて行ったりしたら怒るからね」

「しないって言ってるだろ。急な用事が出来た場合は別だが」

「そういうときも一言声を掛けてからにしてよ」

「はいはい」

第23話 「従妹VS小狸」

「えっと……八神堂ってベルカスタイルのオーナー店のはずだよな？」

「ああ」

「そ、そうだよね……あのさシヨウ、僕の目がおかしくないならどう見てもここは本屋だと思うんだ」

ユウキの言葉は最もである。

何故ならユウキの中で八神堂はベルカスタイルのオーナー店でしかないのだから。事前にブレイブデュエルだけでなく普通に本屋も経営しているとも伝えていなかったし。

このようなことを言うと、俺のことを意地悪な人間だとか言う人物が居るかもしれないが、別に意図的に教えなかったわけではない。俺は別にこの店長やシユテルのように人のことを積極的にからかう趣味はないのだから。単純に聞かれなかったから現状に至っているだけだ。

「その認識で合ってるぞ。ここは表向きは本屋をやってる店だからな」

「ああそういうこと」

「うん、そうなんよ」

不意に聞こえた第三者の声にユウキの肩が震える。

どうして俺の知っている茶目つ気のある人物は、こうも気配を感じさせないというか突然現れるのだろうか。神出鬼没のスキルでも習得しているのか？

と思う一方で、これまでに培ってきた……味わってきた経験からか、大抵のことでは動じない人間になってしまっている。いや、それどころか日に日に気配を感じ取れるようになってきている気さえする。

「だ、誰?! ……ディ、ディアーチェ!？」

……あ、そういうやこの街にはディアーチェ達にそっくりな人間が居るって言うの伝えてなかった。まあいいか、昔からディアーチェ達とは付き合いがあるわけだからすぐに慣れるだろうし。

「あはは、驚かしてごめんなあ。私は八神はやて、ここの店長や。よく似てるとは言われるけど、王さまとは別人なんよ」

「は、はあ……似すぎてて怖いくらいなんだけど、世の中には自分とそっくりな人が3人は居るって聞くし。ということは、僕にもそっくりな人間が……って、こんなこと考えてる場合じゃない。僕は東雲悠樹、よろしく……そういえば店長って聞こえたんだけど、それって僕の聞き間違いかな？」

同年代よりも下に見られることがあるユウキだが、はやては確実にそのユウキよりも幼い。たぬきフードの服を着ていても違和感がないどころか、むしろかわいらしく見えるくらいに。

それだけにユウキが店長という言葉に疑問を抱くのも無理はないだろう。この店にはアインスやシグナム、シャマルと大人組はそれなりに居るのだ。まだユウキは彼女達を見たことがないだろうが、はやてと一緒に誰かしら現れていたならそちらを店長だと思っただけに違いない。

「ううん、聞き間違いやないよ」

「そ、そっか……」

「あ、その顔は信じてくれてないみたいやね」

「えっと……子供の僕が言うのもあれだけど……はやてちゃんだったっけ？ 君は僕以上に子供に見えるし、信じろって方が難しいと思うんだけど」

「ユウキ、その考えは最もだが……こう見えてこいつはすでに大学を出てる。店長らしいかと言われたら店長らしくはないが、この店の人間はこいつを店長だと認めてるから店長という事実は覆せないぞ」

俺の言葉にユウキは驚き「う、嘘……もう大学出てるの」などと吹き始めるが、まあ世の中に天才というものは存在しているし、俺やユウキの血筋は頭脳明晰な人間が多い。また彼女はシユテル達とも交流があるので、すぐにはやてが店長ということを確認することだろう。

「それにしても……なあショウくん、ショウくんが好きな子に意地悪をしたがるんは知つとるよ。でもな、もう少し優しくしてくれても罰は当たらんと思うんや」

「あのなはやて、さも当たり前のように言ったが俺は別に好きな子に意地悪をする趣味はないぞ」

「さつきもうちのお店は表向きは本屋とか裏がありそうなこと言うとっつたし」

「人の話を聞け」

何故か得意気で話すはやてに俺はでこピンを敢行した。大して力を入れてないのだが、彼女は両手ででこを押さえる。

「もう、そういうところが意地悪やって言うんや。私を店長やのうて普通の女の子として扱ってくれるんなら、年上として甘やかしてくれてもええと思うで」

「基本的に店長として扱ってはないが、普通の女の子としても扱ってはない」

「ちよつ、それは何でもひどいで!？」

ガーン! という音が聞こえてきそうなほど盛大にショックを受けた顔を浮かべたはやては、ヘナヘナとその場に座り込む。店の外で座るのはどうかと思うが、チラチラとこちらの様子を窺うというか構ってアピールをしてくるだけに実に無視したい気持ちになつてくる。

……しかし、この状況を他のメンツに見られると面倒な事になりかねない。

ヴィータやシャマルははやてが構ってほしただけだと思ってくれるだろうし、シグナムもやれやれと言いたげな顔を浮かべるくらいだろう。

問題なのはアインスだ。基本的に大人しい人物ではあるが、はやての事になると豹変するし……ここはさつきと立たせるべきか。

「はあ……外で座り込むな、服が汚れるだろ」

「キyun……もうそうやって不意に優しくするのは反則や。何度私の心を奪えば気が済むんよ、まったくショウくんはアメとムチの使い分けが上手いなあ。まあそういうところとか含めて好きなんやけど」

「クネクネしてないでさつきと立て」

「ブーブー、女の子が好きやって言つとるんやから恥ずかしがっても

ええやん」

「キュン、なんて口で言うような奴の言葉で恥ずかしくなるわけないだろ。そもそも、お前は俺に対して冗談を言い過ぎだ」

俺の言葉に納得するかのようにはやてはこちらの手を取って立ち上がる。

まったく……本当にこいつは世話が焼けるよな。大卒という経歴を考えれば、思考とかは俺よりも大人びていてもおかしくないのに。……まあ真面目というか常に気を張って遠慮ばかりするようなはやてなんて考えたくもないけど。俺にとっては今日の前に居るはやてがはやてだし。

「ん？ どうしたんそんなに見つめて……もしかして」

「それはない」

「まだ何も言うてないやん!?!」

いや、言わなくても何となく理解できるし。

つい数秒前に今のままでいいなんて考えたけど、やっぱりもう少しまともになつてくれたほうが嬉しいかもしれない。

「やれやれ、鈍感なのもダメやけど鋭すぎるのもダメやと思うで」

「はいはい、分かったからいい加減店の中に入れてくれ。今日はデュエルしに来たんだから」

「むう……そう言われたら店主として話を進めなあかんやん。本当ショウくんはズルいなあ……まあショウくんがデュエルしてくれたら盛り上がるやろうし、カッコいい姿を見れるから嬉しいことの方が多いんやけど」

そう言つてはやては笑顔を浮かべながらいつものように俺の腕に自分の腕を絡めると、店の方へと歩き始めた。

これまでに何度か注意したもののこれといって効果がなかったことに加え、人間というものは慣れる生き物だ。なので彼女に対する言葉は特に浮かんでこない。ディーアーチエが居たならば、つい先日も怒られたので何かしら行動を取っていた気がするが。

「……って、ちよつと待って!」

「急に大声出してどないしたん?」

「どうしたもこうしたもないよ。何でふたりは腕を組んで歩いているのさ！」

「え、そんなん私がショウくんとかそういう仲やからや」

「デイアーチエに対して言うときの冗談だと分かる笑顔とは打って変わって、今のはやてはさも当たり前前のことを言っているような顔をしている。」

状況から推測するに……グラント研究所の誰かしらからユウキの存在を聞いてたな。そうでなければ、俺がユウキと一緒に店に来た時点でこの前のアリシアのようなことになっていても不思議ではないし。それにここに至るまでの言動でユウキが意外と良い反応をしそうなのは見抜いてそうだから。

「いやいやいや、確かにショウは昔から自分よりも『年下』のデイアーチエ達と接してたけどー！」

「別に年下を強調する必要はないんじゃないか？」

「最近は小学生達と仲良くしてたって聞いたし、年上の友達なんてアミタ達しかいないんじゃないかって思ったりもするけどさー！」

「おいユウキ、人の話を聞いているか？」

「でも、だからって小学生くらいの子とそういう関係になるような人間になったなんて思いたくないよ。従兄がロリコンだなんて……叔母さん達になんて報告すればいいのさー！」

「ユウキさん……とりあえず落ち着いてもらっていいかな？」

別にはやてとお前が思っているような関係になってないし、俺の親にも報告しなくていいから。

「というか、そういう言葉が出るってことは何かしら言われて来たたのか？ まあ可能性はあってもおかしくないけど、俺の両親は基本的に俺が選んだ相手なら誰でも良いみたいだなスタンスだった気がするんだが。」

「いや待てよ……それは俺の近くにはデイアーチエといった母さん達もよく知る女の子しかいなかったからだろうか。デイアーチエ達を除けば、母さん達が知っていたのは高町やテスタロッサ姉妹くらいになるだろうし。」

もし仮にそのへんと裏工作があったとして……高町の母親である桃子さんとは仲良くやっていけると思うが、テストロツサ姉妹の母親……プレシアさんにはそもそも娘さんを僕にくださいなんて言える気がしないな。

「シヨウ、実際のところどうなのさ！」

「どうもこうもはやてとは何もねえよ」

「その言い方は何か癪やけど今はまだ友達やからな。腕くんだりするのも本気でやってるわけやないし」

「はやてちゃんは女の子なんだから本気でもないのにああいうことしちゃダメだよ！ 男っていうのはすぐ勘違いしたりするし、簡単に密着したりするのは……その、違うと思う！」

かつてここまではやてに必死に常識を説いた人間が居ただろうか？

……おそらくディアーチェくらいだろうな。最近は何度もやってきたり、アインスとかのガードが入ったりするから漫才的な流れで終息してしまうけど。

「そこまで言うんなら……会ったら日に最低でも3回は引っ付くという目標を2回に減らす。これでええやろ？」

「うん……って、全然良くないよ!! そもそも引っ付くのもやめよう、というかそんな心掛け別にいらさないから！」

「えー、ユウキちゃんはいけずやなあ。私とシヨウくんなりのスキンシップなりに」

「シヨウは多分望んでないから、ある程度好きにさせてから言った方が効果的だとか、単純に慣れて何も言おうとしてないだけだから。というか、はやてちゃんは大学出てるんだよね？ この店の店長さんなんだよね？ 店長さんがそんなで良いと思うの？」

大声を出し過ぎて疲れたのか、常識的な問いかけで説得する方向性に変えたようだ。おそらくだが、俺の予想でははやての回答は斜め上に行く気がしてならない。

「そんなんでええかつて？ そんなんええと思つとるよ！」

「そうだよね……えええツ!! 何でそうなるのさ！」

「ええかユウキちゃん、シヨウくんは凄腕のデュエリストなんやで。凄腕のデュエリストが通ってくれる店なら活気も出てくるやろうし、うちのお店のチームの強化にも繋がる。そして何より、本屋の仕事にブレイブデュエル、家事全般出来るお婿さんもゲットできるんや！現状から想定できる人生設計で最高のプランやないか！」

前半や本屋の仕事とかに関してでは店長としての立場からの発言だと思えるが、お婿さん云々は少なくとも本人が居る前で言うものではないだろう……

「つてユウキ、お前は何を説得されそうになってるんだ。俺の意志を全く度外視した話に納得しようとするな。それとはやて、お前これ以上は何も言うな。これ以上やると俺の従妹がもたないから」

「しゃーないな、まあ十分に楽しめたからええとしよか。じゃあふたり共、そろそろお店の中に入るか。今日はたくさんデュエルして楽しんでいってな♪」

「……僕、すでに結構疲労困憊なんだけど」

「ユウキ……そんなだとこの街じややっていけないぞ」

「——っ、もう！　こんなときくらい現実突きつけないで優しい言葉を掛けてよね！」

第24話 「漆黒の剣士VS白刃の騎士」

はやてに連れられて俺とユウキは八神堂の地下にあるデュエル会場へと移動した。そこに至るまでにユウキが八神堂の仕様に驚いたり、唾然したりする場面があったのだが想像はたやすいだろうから説明は割愛しておく。

大分はやてとのやりとりで疲れていたユウキだが、デュエル会場へ到着するとホビーショップT&Hとは違ったデュエリストと戦えるとあってテンションが上がり、喜々として人混みの中に姿を消して行った。こういう切り替えがあるから子ども扱いしなくなるのだ。

ちなみにはやてはというと、今日は上で本屋の仕事をすらすらしいので俺達を送り届けるとさっさと姿を消した。

「……俺がデュエルする時には戻ると言ってたが」

普通はどのタイミングで俺の番が来るかなんて分からないはずだよな。ただあいつはすでに大卒だし、頭の回転も一般人より格段に良い。ジャストタイミングで現れたとしても「まあはやてだし」と納得できる自分が居る。

「……くだらないことを考えてないで俺もデュエルをしよう」

あまりユウキにデュエルしているところを見られたくはないが、俺ばかりユウキのデュエルを見るのもフェアではない。彼女は驚異的な勢いで成長しているが、経験値的には俺が遥かに勝っているのだから。

そもそも……俺はただユウキに勝ちたいわけじゃない。小細工なしの真っ向勝負で戦って勝利を収めたいんだ。それにあれこれデュエルに関係のないことを考えながらデュエルをやっても楽しくはないし、わずかな油断が敗北に繋がる可能性もある。今はただデュエルのことに集中しよう。

「……………つと」

人にぶつからないように進んでいたのだが、不意に人影の奥からさらに人が現れた。ただその人物がその場に止まり、こちらが方向を変えながら移動したこともあって衝突はなかった。互いに避けよう

としていればぶつかっていた可能性があるだけにある意味運が良かったと言える。

「すみません」

「いやこちらこそ……あれ、夜月くんじゃないか」

ぶつかつたわけじゃないので謝罪してすぐに立ち去ろうとしたのだが、名前を呼ばれたので改めて意識を向ける。視界に映ったのは、白いジャケットを着た長身の男性。黒髪で穏やかな雰囲気のせいが見た目以上に大人びて見えるが、年齢はシグナム達と同じくらいは
ずだ。

この人……どこかで。

記憶を遡ってみるとすぐに思い浮かぶ人物が出てきた。

その人物の名前は白石涼介。はやて達から耳にした情報や俺の記憶に間違いがなければ、確か何かしらの専門学校に通っている人で、授業時間が短いこともあってよく八神堂の手伝いをしていたはずだ。

「白石さん、でしたよね?」

「うん……俺ははやて達から聞いて知ってたけど、君も俺の名前知ってたんだね」

「まあ俺もはやて達と話しますし、社員でもないのに毎日この手伝いしてる人が居れば気になりますよ」

毎日手伝ってるわけじゃないんだけどな、と白石さんは笑う。

どこことなく自分に近いものを感じていたが、どうやらそれは間違いだったらしい。この人は俺と違って口数が少なくても明るいとか穏やかで人当たりの良い人だ。というか、口数も人並みにあるんだろう。はやて達が多いから少ないと思えるだけで。

「それにしても珍しいですね。白石さんがこっちに居るなんて」

「それでもないんだけどね。俺もそれなりにデュエルはやってるから……まあ頻度的にはアインスやシグナムと変わらないくらいだろうけど。何だかよくここに来る子達からは普通に店員だと思われてるみたいだし」

「あれだけ店の手伝いをしていれば誰だってそういう認識になりますよ」

年齢もシグナム達と変わらないだろうし、そのへんと仲良く話してるところを見られてるだろうから。距離感的に店員と客とは思われないだろう。

「聞けばバイト代とかもらっていないそうですけど、あいつらと同じ時間働くなら何か報酬をもらわないとダメだと思いますよ。メンツ的に体力だつて居るんですから」

「ははは、確かに一般的にはそうんだけど俺が自分からやってるのもあるからね。特に予定がなければこの手伝いをしている方が有意義な時間を過ごせるし。それにはやての手料理とかご馳走になったり、お客さんが引いた後でデュエルとかさせてもらえるからね。報酬はちゃんともらってるよ」

そんな報酬で満足だなんて白石さんは人が好過ぎる。偶に手伝うくらいなら十分な報酬なんだろうが、どう考えてもほぼ毎日手伝っている彼には足りてないだろう。はやてあたりもそのへんを考えてバイト代くらい出すと言つていそうな気はするが、おそらくこの人はもらわないんだろうな。

「ところで夜月くん、ひとつ提案なんだけど？」

「何です？」

「ここでこうして会って話したのも何か縁だと思うんだ。よければ1戦やらないかい？」

「それは……断る理由もないですし、もちろん構いませんよ」

今日八神堂に来た目的は誰かの指導をするためでもなければ、本屋の手伝いをしに来たわけでもない。ただ単純にデュエルを行いに来たのだ。

そもそも、デュエリストである以上デュエルに誘われたならば受けるしかあるまい。

と思うことはあるが、おそらくイベントといった場でもない限りは口にしないだろう。何かしら予定があれば断るだろうし、どういうデュエリストでありたいかはその人が自分で決めればいいだけなのだから。

「じゃあ決まりだ。いやはや、あの《漆黒の剣士》とやれると思うと楽

しみな一方で緊張するね。胸を借りるつもりで挑ませてもらうよ」

「あまり持ち上げられるのはあれですけど、まあご期待に添えるようベストは尽くします」

正直なところ、デュエルである以上100パーセント勝てる保証はない。

ただ経験値やカードの総合的なステータスで言えば、おそらくこちらに分があるだろう。だが……俺の勘になってしまふ部分もあるが、この人はシグナムやアインスに近いタイプのように思える。

どういうタイプかと言うと、簡単に言えばカードのステータス云々の前に本人が強いタイプだ。ブレイブデュエルは現実と同じように自分の意志でアバターを自由に動かせ、またデバイスは武器になるものが多い。故に現実で武道といったものを行っている人間はその経験が活きやすいのだろう。

それに……少し聞いた話だが、この人はシグナムと剣道を行えて良い勝負をするらしい。デュエルの腕を耳にすることは少ないが、下手という話を聞いたことはない。動きを見切るために様子見は行っても油断はないようにしなければ。

そんなことを考えている間に俺と白石さんの順番が回ってきた。お互い経験者なだけにフィールドやルールの設定はスムーズに進行し、意識を戦闘モードに切り替え終わる頃にはアリーナにデュエルフィールドの形成が終了しアバターとなった自分がそこへ降り立っていた。

「……さて」

あれが白石さんの……今回の俺の対戦相手か。

目の前に立っているのは先ほどまで見ていた私服姿の白石さんではない。純白のコートに身を包み、手には鞆に納められた反りのあるデバイスが確認できる。

所属はベルカ、使用しているカードはRクラス……通り名は《白刃の騎士》。ベルカスタイルで手には刀型のデバイス、それに通り名からして近接戦闘がメインだろう。問題なのは近接戦闘の技量がどれほどのものなのか、だ。

俺は射撃魔法も可能なミッドチルダスタイルではあるがメインとなる攻撃は近接攻撃……シグナムとデュエルをした場合、カードのステータス差もあってどうにか打ち負けることはないが、逆に言えばカードのステータスに差がない場合は近接では分が悪いということだ。つまり……現実でシグナムとやり合えるこの人に近接戦闘で油断はできない。

それに八神堂の手伝いをしていれば客がいなくなつてからもデュエルが出来る可能性がある。今日のように客として利用することも考えれば、この人はシグナム以上にデュエルの経験があるかもしれない。となれば……

「最低でも……」

シグナムに匹敵すると考えてデュエルを行うべきだろう。

そう意識しただけに俺の中の緊張感は自然と高まつていく。しかし、その一方で早く剣を交えたいと思つている自分も存在していた。そうでなければ、このどうにも落ち着かない気持ちに説明が付かない。

とはいえ、俺はデュエルに慣れていない新人ではないし、一部の人間は俺がシユテルと同等のデュエリストだと認識している。

勝負事なんだから全戦全勝できるとは思っていない。が、少なくとも自分らしい戦い方で勝ちに行く気持ちを捨てるつもりはない。勝つにしても負けるにしても、自分らしく戦うことが出来れば納得できるのだから。

両手を背中に伸ばし、右手で黒い肉厚の剣を、左手で白い華奢な剣を引き抜く。

「剣を2本……これまでに見たことがないスタイルだけど、おそらくそれが君の本気なんだろうね。俺なんかと本気でやってくれるとは……嬉しいと思う反面、少しは花を持たしてほしいと思つてしまふよ」

「何を言ってるんですか、八神堂の面々とデュエルしてそんな人に手加減なんかできるわけないでしょう。そもそも……今の俺は少し前にもっと強くなろうと決めてこの場に居ますから。相手が誰であろ

うと戦い方を変えるつもりはありませんよ」

「なら……俺も覚悟を決めるしかないようだね」

穏やかな口調とは裏腹に確かな戦意が白石さんの目には見て取れる。彼は無駄のない動きで鞘に納められているデバイスを引き抜いていく。姿を現した白銀の刀身から確かな武器としての輝きと共に恐怖してしまうほどの美しさも感じられた。

この場に関係のない話になってしまいかもしれないが、日本刀が美術品として扱われるのも今の俺のようになんかという感情が抱く人が居るからかもしれない。

「……………」

俺達は互いに開始地点から動くことはせずに相手の動きを観察する。

——俺も白石さんも剣を使って戦う。つまり得意とする距離はクロスレンジ……ここを制した方が勝利を取めると言っているだろう。

しかし、迂闊に攻めるわけにはいかない。

俺の本来の戦い方は両手の剣を用いて攻撃は最大の防御と云わんばかりに攻めることだ。だが俺は白石さんの力量を把握していないどころか、彼が戦っている姿を見たことがない。

シグナムと同等だろうという予想はあるし、刀を使って戦う騎士だということは見えた目から判断できる。が、同じ剣を扱う者でも戦い方は異なる。もしも白石さんがカウンターを得意とする剣士だった場合、下手に攻めれば返り討ちに遭うだけだ。

……かといって、このまま様子見をしているだけではいたずらに時間が過ぎるだけだ。それにリスクばかり考えては何も始まらない。俺はユウキに勝つために……今の自分よりも更なる高みへ行くために2本目の剣を常時使うことを決めたんだ。こういうときこそ……自分から踏み込まなくてどうする！

「……………」

無声の気合を発しながら地面を強く踏み切る。今回のデュエルステージは、これといって障害物の存在しない荒野のような場所だ。頼れるのは己のデュエリストとしての力量のみ。

爆発的な加速を得た俺は、地面を滑空するかのように白刃の騎士へと接近する。こちらのスピードが予想よりも速かったのか、それとも真正面から突っ込んでくるとは思っていなかったのか、彼の顔には驚愕の色が見て取れた。

だがシグナムの相手を出来るだけに度胸は据わっているらしく、一瞬の内に余計な感情を消し去ると踏み込みながら白銀の刃を振るってきた。こちらも負けじと左の剣を振るう。

「っ……いー」「く……いー！」

純白の刃と白銀の刃が交わると同時に火花と甲高い音を撒き散らす。

カードのステータスや剣の重量的にはこちらが上だと思われるが、こちらは片手持ちで振るっているのに対しあちらは両手持ち。今の一撃を見ても剣速はあちらに分がある。

そのため、俺達の一撃は互いの攻撃を相殺する形で終わり優劣を付ける展開にはならなかった。つまりここからどう戦うかが大切ということになる。

俺はすぐさま体勢を立て直しながら今度は右の剣を振るう。

だがあちらも体勢をすでに整えていたため、最小限のバックステツプで回避するとすぐさま反撃を行ってきた。襲い掛かってくる剣閃を反対側の剣で迎え撃つ。

それを皮切りに互いに足を止めて斬撃を繰り出していく。

手数としては2本の剣を用いているこちらが上だが、あちらの攻撃を受け流す柔の技と華麗な体捌きで有効打を与えられない。こちらもあちらの素早い斬撃を体重移動や剣の描く軌道から予測しパリィや回避を行う。

高速の剣劇が開始してからしばらく……俺の持つ黒い剣と白石さんの持つ白銀の刀が交差し競り合う形になった。

「……さすがは《星光の殲滅者》のライバル。一瞬も気が抜けないよ」「気が抜けないのはこっちも同じです。シグナムとやり合えるのも領けますよ」

「君だってシグナムとやり合えると思うけどね」

「デュエルでならまだしも現実じゃ無理でしょうけどね」

半ば強引に押しながら左の剣を足を払うような軌道で振り抜く。白石さんは素早く何度かバックステップを行って距離を取った。すぐにまた突っ込んでくるかとも思ったが、どうやら一旦距離を取って仕切り直すつもりらしい。

……どうやらあつちも俺と同じ感想のようだな。

正直なところ、あのままクロスレンジを維持しても意味を成さない。連続で攻撃を行っても決め手どころか体勢を崩すことさえできなかつたからだ。こちらにはブレイズストライクといった高威力の魔法があるわけだが、あれだけ打ち合って優勢に立てないのであれば単発で撃つてもまず当たらないだろう。

となると、まずは体勢を崩すことが必要になってくる。だが純粹な近接戦闘だけでは先ほどと同じような流れになって体力を消費するだけだ。体力勝負に持ち込むのも手ではあるが、あちらは現実でも体を動かす機会がある。それだけに体力面では俺が劣っているだろう。

「……なら」

これまで以上の攻撃であの人の守りを破るしかない。

俺が今回デツキに入れている魔法は単発重撃技の《ブレイズストライク》に高速4連撃である《バーチカル・フォース》、二刀流突進技である《ドラゴサーキユラー》……それに俺の持つカードの中で最大の手数と威力を誇るあの魔法になる。

愛用している《ブレイズストライク》や剣士系が使うことが多い《バーチカル・フォース》は読まれやすいと考えるべきだろう。二刀流の魔法はこれまで人前で使うことがほぼなかっただけに有効打になりえる可能性は十分にある。無論、使いどころを間違わなければだが……。

——なんてグダグダ考えるのはやめよう。

この勝負に勝ちたいとは思うが、負けられない戦いじゃない。更なる高みに行くための戦いだ。だったら今浮かんでいる方法を実行すればいい。それが使えるかどうかはこの勝負が終わればはつきりするのだから。

そのように思い愛剣達を握り直した直後、白石さんにも変化が現れる。抜刀状態だったデバイスを鞘の中に納め、体を捻りながら構えたのだ。

「……………」

構えからして白石さんの次の一撃は居合系に属するものだろう。もしも魔法を併用した一撃だった場合、これまで以上の鋭い一撃が繰り出されることになる。

だが……構えからして攻撃が来る方向は限られる。それに片手での一撃だ。魔法を併用したものだとしても、多少なりとも勢いを殺すことは可能なはず。わずかでも時間が出来れば、その瞬間にブレイズストライクを撃ち込むことが出来る。

直後。

白石さんが地面を蹴って接近を始めた。俺も同じように地面を蹴って距離を詰める。

右の剣で相手の攻撃を迎え撃ち、生じるであろうわずかな時間を使って左の剣でブレイズストライクを叩き込む。それが俺のプランだ。

自分の考えを信じ右の剣を振ろうとした矢先、白石さんと視線が重なった。そこから感じられた気迫と直感的に感じた恐怖から俺は自身の体に制止を掛ける。

「――雷切」

静かに呟かれた言葉が耳に届いた瞬間には、すでに白銀の刃が振り抜かれていた。俺の目に映ったのは同色の剣閃のみ。今の一撃の速さを言葉にするならば雷という言葉が相応しいだろう。

超高速の一撃をもらった俺は後方へと吹き飛び何度も地面を転がる。意識が刈り取られてはいなかったのですが、そのまま体勢を整え、両手の剣を使って制止を掛けつつ立ち上がった。

「はあ……はあ……」

「夜月くん、君は本当に凄いな。シグナムだって初見じゃ俺の雷切は見切れなかったのに」

見切った？ 冗談じゃない。

浅くとはいえ俺の胸部は斬り裂かれダメージを受けたのだ。あのとき一瞬でも視線が合うのが遅ければ今頃深手を負って勝負が着いている可能性もある。

だが現状で最大の問題はそこではない。決め手であろう《雷切》という魔法を直撃できなかったはずなのに白石さんには焦りが無い。それどころか冷静にこちらを観察している。次こそ《雷切》を直撃させるために。

穏やかな感じに接してくる癖にとんだデュエリストだ。

正直……あの《雷切》とかいう魔法を防ぐ手段はない。今回デツキに防御系の魔法は入れていないし、攻撃速度が違い過ぎるだけに魔法をぶつけて相殺するのも難しい。

全体的な攻撃速度はユウキに通ずる部分があるが……あの一撃に關してはユウキよりも遥かに上だ。フェイトやレヴィといった高速戦闘を得意とするデュエリストとの対戦経験があるだけに、目で追えないことはない。だが微かに追えているだけだ。見てから動いたのでは間に合わないだろう。さて……どうしたものか。

あれこれ考えている間にも白石さんは再びデバイスを鞘へと納め始めている。彼の中でのプランとしては《雷切》を用いて体勢を崩し、連続攻撃を仕掛けるまたは再度《雷切》を放つといったものだろう。現状の俺には《雷切》を完全に防ぐ方法がないだけに最も堅実で有効な戦法と言えるだろう。

「……なら」

こちらの覚悟は決まったようなものだ。有効な防御や回避手段がないのなら肉を切らせてでも骨を断つだけ。

幸いこちらには両手に剣がある。1本腕を断ち切れようともう片方で攻撃は出来るのだ。勝つために必要なリスクならばいくらでも負ってやる。

俺は左右の手に握った黒と白の長剣をクルクルと回転させ、ジャリイーン！ と音を立てながら切り払う。

「……次で終わらせる」

この交錯が終わりを迎えた時、立っているのはただひとりだ。

俺は右足を大きく踏み出すと、突進技である《ドラゴサーキュラー》を発動させる。黒と白の刀身に魔力が集まり、爆ぜて紅蓮の炎へと姿を変える。それと同時に俺の体は、まるで砲撃で撃ち出されたかのような加速を得て前方へと飛翔した。

今回のデュエルで最速の突進に白石さんの顔に緊張が走るが、雷に等しい速さの一撃を持つ人だけあってこちらの動きは見えているようだ。冷静に《雷切》の発射体勢に入る。

——あの技が発射されてからは少しでも威力を削ぐための行動しかできない。だが居合である以上、鞘に近い段階で止めれば止めるほど威力は収まるはずだ。

俺は体をくるりと回転させながら右手の黒い剣を下から猛然と斬り上げる。その際、刀身に発生していた炎が螺旋を描き出す。

「う……おおおッ！」

「はああああッ！」

紅蓮と雷光の一撃は交差し、視界はスパークで覆いつくす。だが右手から伝わってくる凄まじい圧力が敵の存在を確かに教えてくるだけに気持ちに余裕はない。

——……不味い、この感覚からして剣の競り合いが崩れる。

撃ち込む角度が浅かったか、それとも敵の凄まじい一撃に軌道をずらされてしまったのか。何にせよこのままでは俺の剣は支えを失って宙を翔け、雷と化している白刃が俺を斬り裂くだろう。

だが……そんな未来は訪れはしない。俺の放った《ドラゴサーキュラー》という魔法は、右手の黒い剣にぐくわずか遅れる形で左手の白い剣を描かれた軌道にクロスさせる形で振り抜く2連撃技だ。右手の黒い剣が外れたとしても左手の白い剣で迎え撃てる。

余談になってしまいが、高速の突進と螺旋を描く炎にそれを纏った2連撃。これらの一連の流れが、敵からは火竜の吐息のように見えることからこの魔法は竜の名を関しているのかもしれない。

「らあ……ッ！」

燃え盛る炎を纏った2撃目が雷刃を弾き飛ばし、敵の体勢を崩した。このチャンスを逃せば、俺はこのデュエル最大の勝機を失うこと

になるだろう。

体勢を完全に立て直せたわけではなかったが、半ば強引に高速4連撃である《バーチカル・フォース》を敢行。それによって与えられたダメージは普段に比べれば劣ってしまうが、この魔法は云わば本命の繋ぎだ。《バーチカル・フォース》を繰り返した場合、繰り返したのと反対側の腕は最終的に折りたたんだ状態で肩に引き付けられる。ここから少し身体を捻ることで、あの技の構えに等しくなる。

「これで……最後だ！」

純白の刀身を真紅の炎が包み、技術と魔法で腕を加速させて撃ち出す。それと同時に爆音が鳴り響き、撃ち出された真紅の一撃は白刃の騎士の体を深々と貫いた。俺がこのデュエルで最後に見た顔は、悔いのなさそうな顔で笑っている穏やかな笑顔だった。

外伝 第2話 「真夏の公園で」

……話は聞いていたけど、本当にやってるんだな。

俺は今公園の前に居るわけだが、スポーツチャンバラ用とでも呼べるような棒を持って戦っている集団が確認できる。集団の内容としては、学校指定であろう体操服を着ている小学生が2人とランニングにジャージという動きやすい恰好をしている大人が1人だ。

小学生の方は……ひとりはこの前からちよくちよく店に来るようになったアリサちゃんだろう。もうひとりの方は確か……T&Hのところの子だったかな。

あその姉妹は背の小さい方がお姉さんでアリシアって名前だったはずだ。今アリサちゃんと居る子はさほど背丈が変わらないように見えるので妹であるフェイトちゃんになるのだろう。フェイトちゃんの棒だけ長いのはブレイブデュエルにおいて使うデバイスが剣型ではないからと思われる。

そのふたりと相対しているのは、八神堂の一員で大学生であるシグナムだ。年齢は俺とさほど変わらないが、剣道場で師範を務めるほどの腕前を持っている。普段は一刀流のはずだが、今日は小学生達をひとりで相手をしているからか両手に棒を持っている。

「さあ……機を見てばかりだと逆に相手にチャンスを与えるぞ？」

シグナムの言葉に小学生達はアイコンタクトで作戦を決めたらしく、まずアリサちゃんが踏み込んで行く。なかなか鋭い踏み込みではあるが、シグナムは余裕で彼女の一撃を受け流す。

その間にフェイトちゃんがシグナムの後ろに回り込み、体勢を立て直したアリサちゃんと同時に攻撃を仕掛けようとする。しかし、シグナムの表情に緊張や焦りの色は全くといっていいほどない。

「タイミングが良いが……攻める気が逸るところなる！」

シグナムが両手の棒を振り抜くと同時にスパアン！ と実に良い音が小学生達のお尻から鳴り響いた。あれだけ良い音がしたのだから、少なくともしばらくはヒリヒリとした痛みを感じるに違いない。

大人が子供相手に本気で打ち込むな、と言いたくもなるが……おそ

らく加減はしているのだろう。

体育会系だから普通よりも力が強いだけできつと加減はしているはず。小学生が良い動きをするから熱くなって本気でやってしまったということはないはずだ……多分。

いったん区切りが着いたらしく、3人は日陰にあるイスへと移動する。小学生達はお尻を時折擦っているが、ブレイブデュエルだけでは体が覚えないうことで彼女達からシグナムにお願いしたらしいので負の感情は抱いていないように思える。

「ん？ おおリヨウじゃねえか。お前も見に来たのか？」

「外に出たついでにな……この暑い中でシグナムとチャンバラしてらって聞いたら心配にもなるし」

「ああ……まあそうだよな。シグナムって大人のくせに熱くなりやすいところがあるし」

ヴィータもまだ小学生ではあるが、シグナムと一緒に暮らしているだけあって彼女のことにはよく分かっている。

ただまあ……ヴィータはヴィータでシグナムがヴィータのことを自分で思っている以上に好きと思っているのに気づいていないだろうけど。

シグナムが普段ヴィータに対してあれこれと口うるさく言うのはヴィータのことが好きだからだ。前にヴィータがシグナムに対してもう少し家に居てもいいと思うと言った時に、シグナムは笑いながらヴィータの頭を撫でたらしいので間違いないだろう。そういうときくらい恥ずかしがらずにシグナムも自分の気持ちを言えばいいだろうに。

「何だよ？ あたしとシグナムを見ながらため息吐きやがって。シグナムはともかく、あたしはそこまで熱くなったりしねえだろ」

「そういうことでため息を吐いたわけじゃないけど……デュエルに關してはシグナムより君の方が熱くなってると思うよ」

「う、うっせえ！ ショッププレイヤーとして強くならないといけないんだから熱くなるのは当然のことだろ！」

口は悪いが小学生なのに店のことを考えているのは偉いと思うし、

年が離れていることもあつて微笑ましく思える。なのでヴィータの頭を撫でてしまう俺はおかしくないだろう。ヴィータは恥ずかしいのか「撫でんじゃねえ!」と言ってくるが、手を払おうとしないあたり別に嫌ではないようだ。こういうところもヴィータの可愛らしいところである。

「ふたりとも踏み込みが鋭くなってきたな。どうだ? 本格的に道場で学んでみては」

「そ、その件は……」

「前向きに検討させていただきます」

「そうか……残念だ」

「なんだ、また振られてんのかよシグナム」

ヴィータが声を掛けたことで3人の視線がこちらへと向く。先ほど来たばかりの俺に多少なりとも驚いた素振りを見せたのはもちろんだが、それ以上に『俺に頭を撫でられているヴィータ』という構図にシグナムはともかく小学生組は驚いたように思える。

「あ、リヨウさんずるい! ヴィータく♪」

「今日のアリサは汗掻いてるからくつつくの禁止!」

「ええ、少しくらいいいじゃない。リヨウさんみたいに頭撫でるだけ、ね?」

「ダメだったらダメ……にしてもお前らもよくやるよなあ。ブレイブデュエルだけじゃ体が覚えられねえからって」

その言葉に面倒を見ているシグナムは師匠から公認されているらしいが、荒っぽい特訓をしていることは理解しているらしく、小学生達に変な癖が付かないか心配する。フェイトちゃんは大丈夫と返事をするが、俺はそれ以上に彼女の頭を撫でるシグナムの方が気になっってしまった。

「何だ涼介、私の顔に何か付いてるか?」

「いや別に……」

「その言い方からして何かあるだろう。知らない仲じゃないんだ。素直に言ったらどうだ?」

シグナムって見た目の割に子供が好きだよな。面倒見良いよな、と

言うのは簡単だ。ただ彼女は八神家の中でも意地悪をする方とか、されるよりもする側の人間だ。

故に下手なことを言ってしまうと、恥ずかしかってすぐ近くにある棒で叩いてくるかもしれない。とはいえ、このまま黙ったままというのも機嫌を損ねてしまう……ここは。

「なら言わせてもらうが……もう少し女らしい恰好をしたらどうだ？」

「なっ……うるさい、別にどんな格好をするのも私の自由だろう。大体今日は体を動かす予定で外に出たのだからこの格好で問題ないはずだ！」

「それはそうだが……お前って今日みたいな予定がなくても普段からジャージばかり着てる気がするんだが？」

ジャージ以外の恰好は買い出しに行くときとか店の手伝いをしてるときくらいにしか見ない気がする。最近は大大会が近かったり、防犯訓練の手伝いをしていることもあるらしいので、比率で言えば確実にジャージ姿の方が多いだろう。

「そんなんだといくらお前が美人でも異性にモテないぞ」

「——っ、お前は何をさらりと歯の浮きそうなセリフを言っているのだ。お前まさか誰にでもそのようなことを言っているのではないだろうな。剣を取れ涼介、お前のその根性私が叩き直してやる！」

「落ち着けシグナム、チャンバラ用だろうとお前に本気で殴られたら最悪失神してもおかしくない。というか、何で今日はそんなに怒るんだ？ こんなやりとり前にも何度かしただろ！」

俺の記憶が正しければ、そのときは涼しい顔をしていたはずなのだが。顔はほぼ毎日合わせているようなものだし、押し倒したりして気まずくなるようなことがあったわけでもない。

「ああーリヨウ、それは多分あれだな。アリサとかにリヨウとあたしらの関係を聞かれてその流れでリヨウのことをどう思ってるかって話になったからだろうぜ」

「おいヴィータ、その話は……！」

「別にいいじゃねえかよ。あたしはあんまし分かんねえけど、シグナ

ムだってそういう話でアインスのことからかったりしてゐてえだし、リヨウだって状況が分かんねえだろうしさ」

ああなるほど、俺が来る前にそういうやりとりがあったのならシグナムの反応にも納得が出来る。男勝りというか大抵の男よりも男らしい奴ではあるが、シグナムは真正正銘の女だ。周囲から『乳魔神』と呼ばれることがあるくらい、とても女性らしい体つきもしているし。

ただ恋愛に関する話などはするにしても自分ではなく他人のものに参加するくらいだろうし、俺が知る限りこれまでにシグナムは男性と付き合った経験はなかったはずだ。小学生の純粋な興味で質問されたら無下にすることもできないだろうから、きつと追い込まれたに違いない。

「そうか……ちゃんとシグナムにも女らしい一面があつたんだな」

「っ、私にも女らしい一面があつたというのはどういう意味だ。お前は私を何だと思ってるんだ！」

「簡単に言うなら……いつもジャージ着てて割と口うるさい乳魔神とかじゃねえの？」

「ヴィータ、それはお前の中の私だろう。というか、お前は私のことをそんな風に思っていたのか！」

「だって事実じゃん」

さすがにシグナムのことが可哀想になつてきたのでフォローに入ろうかと思つていたのだが、一緒に暮らしているヴィータが事実だと言つてしまつては俺や小学生組ではどうにもできない。これがきっかけでシグナムの機嫌は悪くならなければいいが……。

「え、えっと……シグナムさんは今のままでも十分に魅力的だと思います。その、将来的にそうなれたらなって憧れるくらいスタイル良いですし。それに私達のわがままに毎日のように付き合つてくれる優しい人ですし……それから！」

「フェイト、やめなさい！ この状況であんたの必死なフォローはかえつてシグナムさんを苦しめるわ。時として見守ることも大切よ！」
アリサちゃん……正しいことだとは思うけど、小学生の君が言うに

は早いと思ってしまうのは俺だけだろうか。普通その年で優しさが時として人を傷つけるみたいなの発言はしないと思うんだけど。今どきの小学生は俺の頃とは違うんだな……。

などと考えていたらアリサちゃんの奮闘もあってか、どうにか事態は終息へ向かい始めていた。

アリサちゃんはいつもこんな風に頑張っているのかと思うと、彼女こそ大人組は甘やかすべきなのではないと考えてしまう。冷静に思い返すとシグナムがおかしくなった発端は彼女にあるので、彼女は彼女なりに責任を感じて奮闘しただけのようにも思えてしまうのだが。

「ふう……どうにか落ち着いたわね。……八神堂の大人の恋愛に興味の示すのは危険だわ」

「あはは……そういうことを言われると落ち着かせてくれたことへのお礼を言いつらくなるね。というか、恋愛に興味があるのは分かるけど……アリサちゃんからすれば俺達よりも夜月くんとかの方が興味をそそられるんじゃないの？」

「否定はできないですけど、シヨウさんってこの手の話題になっても上手くかわすというか大して反応しないじゃないですか。それにあの人の周囲に居る人って……あれですし」

あれ、という言葉が何を言おうとしているかはアリサちゃんの何とも言いにくい顔から察しは付いた。

確かに冷静に考えてみると、夜月くんによくちよっかいを出すというか気を引こうとする子ってアリシアちゃんとかはやてとかなんだよな。俺はあまり話したことがないけど、聞く話によればグラントツ研究所の面々にも妙な絡まれ方をしているらしいし。恋愛って感じの空気にはならないかもしれないな。

「夜月くん周りには癖のある子も意外と多いからね。まあ……素直に気が引けないからああいうことをしてそうなお子も居そうだけど」

はやてやアリシアちゃんも接し方を変えればもつと違うと思うんだけどな。変に冗談ばかり言ったりしてからかうから冷たくされるんだろうし。……ただああいうやりとりが彼ららしいと言えば彼ららしくもあるし、一概に悪いとは言えないだろうけど。

と思っていたし、流れてデュエルに誘ったんだ。いやはや、強いデュエリストだとは分かっていたけど二刀流の彼は別格だね」

と言った直後、アリサちゃんだけでなくその場に居た全員が食いつくように距離を詰めてきた。どうやら二刀流という言葉が興味を引いてしまったらしい。

「おいリョウ、二刀流って何だよ？ ショウの新しいカードか？」

「いや多分カードは今までと一緒にだと思うけど。二刀流の状態が本気ってだけで」

「ふむ……つまり私やヴィータが相手をしたことがあるのは本気のシヨウではなかったということか」

「あたしやフェイトは二刀流のシヨウさんを見たことがありますけど、あの時の強さは別格ですからね。あたし達はチームで挑んだのに瞬殺されちゃいましたし」

「涼介さん……あの、よかったらデュエルの内容をもっと詳しく教えてもらえませんか？」

負けたデュエルではあるが、《漆黒の剣士》の本気を見ることが出来たデュエルなので話すことに嫌気は感じない。なので可能な限り事細かに話すことにした。

夜月くんが悪いかなとも思ったが、あのデュエルは店のモニターに映っていた可能性もあるし、はやてが録画したなんて言っていたような気もする。また彼は二刀流で戦い続けるのような発言をしていたので、遅かれ早かれ周囲には知られることになるだろう。無駄に罪悪感を感じる必要はないはずだ。

「教えるのは構わないけど……俺も彼と同じで近接戦メインだからね。正直なところ、彼の方が上手だったっていう話にしかないよ」

「ちよつと待てよ、お前はシグナムとやり合えるくらい近接戦の技量は高いじゃねえか。それに雷切だってあるしよ」

「雷切？」

「涼介の愛用する魔法のひとつだ。簡単に言えば、目で追いきれないほどの超高速の斬撃……正直あれを近距離で回避するのは至難の業

だ。防ぐにしても基本的に防御系魔法は使うしかないだろう」

シグナムが言うようにこれまで相対してきたデュエリストはそうだった。剣の達人であるシグナムだって初見では見切れなかった。何度も見ている今では雷切を使わせないような立ち回りや相殺できるタイミングを見極めつつあるが……。

「へえ、そんな凄い魔法があるんですね。だったらシヨウさんとも良い勝負したんじゃないですか」

「どうだろうね……一度目の雷切も直撃とはならなかったし、二度目に関しては真正面から破られたから。そのあとはラツシユで決められちゃったし」

「嘘だろ、って言いたいところだけど……あいつの反応速度は異常だからな」

「それに動作も最適化したような感じで無駄もなく一撃も重い」

「他にも普通の人がしなさそうなことも平気でやるしね」

「あの、もうそのへんでいいんじゃないかな」

夜月くんはおかしいと言わんばかりの流れをフェイトちゃんがやんわりとだが断ち切る。

人柄的に悪口を言えないからなのか、それとも彼に好意があるからなのか……まあ何せよここで止めに入るあたり、彼女は良い性格をしていると思う。夜月くんのためにもこういう子が隣に居た方がいいのではなからうか。

「えっと……涼介さん、どうかしました？」

「いや何でもないよ……そうだ、フェイトちゃんにアリサちゃん。この暑い中、シグナムと特訓してたんだから大分汗掻いただろ？ 何かおこってあげるよ」

「え、いえ大丈夫です。シグナムさんをお願いしたのは私達の方ですから」

「そうですよ。それにおこってもらうのも悪いですし」

「頑張ってる君らへのご褒美だよ。それに俺はおごれる時にしかおこらないんだから断ると損するよ」

「ふたりともここは素直に甘えるといい。その方が大人も嬉しいもの

だ」

「じゃああたしは……コーラでいいや」

「涼介はお前におごるとは言っていないだろう。というか、お前は少しは遠慮というものを覚えろ」

第25話 「星光とのお出かけ」

ブレイブデュエルが正式稼働を始めてしばらく経とうとしている。日に日にデュエリスト人口は増えているだろうし、今日もきつと白熱したデュエルがそれぞれの店舗で行われているに違いない。店内の熱気は実に凄まじいものだろう。

だが真夏の外を歩く際に感じる熱気はその比ではない。

そもそもの話……その熱気と比べるものではないだろうと言われしてしまうかもしれない。そう言われてしまうとそれとおり……だが、そんなことを考えてしまうほど外は暑いのだ。

にも関わらずどうして外を歩いているかという点、前にシユテルと出かけるという約束を果たすためだ。ただ誤解がないように言っておくが、別にシユテルとデートというわけではない。

事の経緯を簡単に説明すると、ユウキも大分この街に慣れてきた。また昔から付き合いのあるディアーチエ達が会いたがっていたこともありグランツ研究所に連れて行こうと思っていたのだ。しかし、ディアーチエがユウキのための食事などの準備がしたいということであるのは夕方にしてほしいと言ってきた。

俺はそもそもシユテルと出かける用事があり、どうせ夕方にグランツ研究所に行くのならユウキも連れて行こうと考えていた。

だがユウキはホビーショップT&Hから特訓でないフェイトやアリシアの代わりに店側のデュエリストをやってくれないかと頼まれていたらしく、結果的にシユテルとふたりだけで夕方まで時間を潰すことになったわけである。

「……はあ」

「そのため息は暑さに対するため息ですか？ それとも私とふたりだけで外出するのが嫌だといったニュアンスのものですか？」

「そのどちらかといえば前者だ」

別にシユテルとは昔から付き合いがあるだけに一緒に居ても緊張は覚えないし、相手をするのが面倒だなと思うときはあるものの彼女のことを嫌いと思ったことはないのだ。

「なるほど……あなたにちよつかいを出しても構わないということですね」

「今の答えをどう解釈したらそうなるんだよ」

「簡単なことですよ。いくら昔から付き合いがあるとはいえ、私達もそれなりに年頃の男女です。ふたりだけで出かけるという行為は緊張してしまうではないですか」

「つまり照れ隠しの意味合いでやるってのか？」

「そのとおりです」

キリッ！ という擬音語が聞こえそうな顔を浮かべるシユテル。今日はコンタクトをしているはずなのにメガネの位置を直す仕草をやってしまったのはまあメガネを掛けている人物なら起こり得ることなので仕方がないだろう。

だが……そこで恥ずかしがるならば可愛げもあるのだが、こいつの場合はわざとやっている感じがしてならない。外の暑さも相まって苛立ちを覚えてしまうのは当然だと言えるだろう。

「常に涼しい顔をしている人間が言っても説得力がまるでないんだが」

「何を言っているんですか。私はただ無駄な体力を使わないようにしているだけです。私の内側は様々な感情で溢れていますよ」

「ああ……確かに人のことをからかいたって感情はあるみたいだな」

俺の目に映っている八神堂の店主と同等にムカつくドヤ顔がその証拠だろう。

出会った頃から何を考えているのか読みにくい奴だったが、正直今のこいつの方が分からない時がある。昔は今ののように表情は変わらなくても疑問に思ったことはすぐに聞くという素直な一面もあったのだが。……今もそういう一面はあるように思えるが、少なくとも今は基本的に茶目っ気が混じっているのではあ頃と同一の素直さではないだろう。

「時にシヨウ、ひとつ聞いておきたいのですが」

「何だよ？」

「あなたは私をどこに連れて行くこうとしているのですか？」

「簡単に言えば喫茶店だな」

喫茶店の名前は翠屋。高町の家族が営んでいることもあって昔から利用している店だ。

今日シユテルをここに連れて行くこうと思つた理由は彼女がのんびりと読書をできる場所がないか、と以前聞いてきたことがあったからというのが最大の理由になる。まあ個人的にこここのところ桃子さん達と顔を合わせていなかったことのも理由ではあるが。

俺達の共通でハマっていることで考えれば、ホビーショップT&Hや八神堂でデュエルをするのが無難な手ではある。が、真っ先にその手を使うとシユテルの機嫌が悪くなりそうなんだよな。

——せっかくふたりで出かけているのにデュエルですか……いえ別に構いませんよ。私はデュエルが好きですし、まだ見ぬ強敵と戦える可能性を考えれば胸が躍りますから。私やあなたのことを考えれば当然の選択ですね……。

みたいなことを顔を合わせようとはせず喜びが感じられない声で言いそうだし。拗ねてもあまり表に出さない。でもそれを分かつて構ってほしい……ある意味レヴィやディアーチェより手間の掛かる奴だよな。本気で拗ねられるとそれぞれにそれぞれなりの面倒があるのが現実だが。

「……お前は何で固まってるんだ？ 別におかしなことは言っていないはずだが」

「いえ……あなたが私とふたりだけの状況でそのような場に行くとは思っていませんでしたので」

人のことを何だと思っているんだ、と思わなくもないがシユテルの気持ちも理解できる。

ふたりだけの状況で喫茶店に行けば、シユテルはデートだのなんなの言つてからかってくる可能性があるわけだ。

それは俺も理解しているし、シユテル自身も自分がどのような行動を取りそうか理解しているだけに今の反応をしているのだろう。理解しているならばやるなど言いたいところではあるが、こいつを含め

た茶目つ気の強い人間には意味を成さないのも分かっている。俺が心の底からやめろと言えば別ではあるのだろうか。

「まあ確かにその見解は間違いないな……おい、お前が言ったことを肯定しただけだろ。露骨に顔を逸らして拗ねるのはやめろ。というか、本当に拗ねてもないのに拗ねる真似をするな。次の話に行くまでの過程が長くなる」

「やれやれ、その過程が私達なりのスキンシップではありませんか。ただでさえ私やあなたは周囲に比べると口数が少ないタイプです。もしも無駄な過程をなくしてしまったら会話がなくなってしまうよ」

デュエルにおいては無駄なものを極力省いて戦うタイプの癖に何故それが現実には反映されないんだ。そもそも無駄な会話がスキンシップって……意味のある会話でスキンシップを取った方が有意義ではないのか。分からん、やっぱりこいつの心の内は他の知り合いに比べても読めん。

ただし、今の会話にも確かなものは存在している。それは俺とシユテルの口数についてだ。確かに俺達の口数は人よりも少ない方なのだろう。周囲に居る人間が口数が多いだけなのではないか、とも思えてしまうが……。

などと考えながらも、シユテルの言うところの俺達なりのスキンシップを取っている内に目的地である翠屋に到着する。

「ここが目的の喫茶店ですか？」

「ああ。店の名前は翠屋、俺が小さい頃から利用しているところで高町の家族が経営しているところでもある」

「ほう……」

……なぜ俺はシユテルからジト目というか意味ありげな視線を向けられているのだろう。

考えられるとすれば、俺はシユテルとは小さい頃から交流がある。だが彼女は日本に居るときの俺をよくは知らないわけで……しかもそこに最近親しくなったはずの高町の名前が上げれば妙な疑いを持つ可能性は無きしもあらず。

しかし、そこに触れると面倒な展開になる可能性の方が高い。また店の前に居ては店側にも客側にも迷惑になる。ここはさつきと中に入るべきだろう。

「いいからさつきと入るぞ。ここに立っていたら邪魔になる」

反論があるかと思つたが、シユテルは大人しく俺の後に付いてくる。おそらく俺に迷惑を掛けるというか自分のペースに持ち込むのは良いと思つているのだろうが、他人を巻き込むのはダメだと思つているのだろう。

基本的にシユテルは近しい相手にしか茶目つ気を出さない。それだけに……きつと俺のような近しい人間と外見くらいしか知らない周囲では彼女に対する認識の差があるの違いない。

「いらつしやいませ……あら、シヨウくんじゃない」

店内に入つてまず声を掛けてきたのは、高町の母親である桃子さんだった。

桃子さんの立場は店長に等しいだろうし、パティシエなので店の奥で作業をしている印象が強かつただけに真つ先に顔を合わせると思つてもみなかった。事前で来店すると言つていた場合は別であるが。たまたまアルバイトが少ない日なのか、恭也さん達が一時的に店から離れているためにフロアも兼ねているのかもしれない。

「久しぶりね。最近はあまり顔を出してくれてなかつたけど……うちのなのはが迷惑掛けちゃつたかしら？」

桃子さんの顔にわずかながら喜びのような色も見えるあたり、高町は毎日のようにその日にあつたことを家族に報告しているのかもしれない。というか……そうでなければ、ここで高町が俺に迷惑を掛けたという言葉は出てこないだろう。俺と彼女の繋がりなんてブレイブデュエル関連しかないのだから。

「別に迷惑を掛けられた覚えはないですよ。最近顔を出せてなかつた理由は色々ありますけど……まあ最大なのは身内関係ですね。叔母が何も教えてくれなかつたので……」

「そう……レーネさんらしいと言えばレーネさんらしいけど、今はシヨウくんの保護者代わりなんだからもう少ししっかりしてほしい

わね」

桃子さん、そう言いたくなる気持ちは分かりますけど……あれでもレーネさんは成長してるんですよ。自室はともかく、前のように廊下やりビングに服を脱ぎっぱなしにすることはしなくなっただけですから。

「ところでそっちの子は……ふふ、シヨウクんの彼女かしら？」

「違います。会う度にそういう冗談を言うのやめてください」

まったく……何で大人はすぐ子供の恋愛事情に首を突っ込みたがるのだろうか。俺は桃子さんの息子というわけでもないのだが。

ただ桃子さんとは昔から付き合いがあるし、うちの母さんは桃子さんの親友だ。故に俺は時として彼女に息子のようになり可愛がっつもらっている。あまり強くやめろとも言いきれないのが現状だ。

「彼女は……」

「はじめまして、私はシュテル・スタークスと申します」

小さい頃から淑女としての礼儀作法やらを教え込まれていただけに実に様になっている挨拶だ。普段のこいつを知っている身としては、いつも淑女的な言動をすればいいとも思ってしまうのだが。

「彼が言ったように私は彼女ではありません。彼女では決してありませんので……ええ断じてシヨウウの彼女では」

「俺にとつてありがたい返答だし、大切なことでもあるけどもう言わなくていい。一度言えば伝わる」

だからチラチラとこつちを見るな。彼女じゃないと即答したことに対して茶目つ気のあるお前は何かしら思ったのかもしれないが、実際のところ俺達は彼氏彼女の関係でもないんだから。

「ふふ、なのはから色々と聞いてたけど思っていた以上にふたりは仲良しなのね」

「昔から付き合いがあるだけ……おい、何でこつちに近づいてくる？」

別に引つ付く理由なんてないだろ」

「大した理由はありません。たまにはレヴィのように親しさをアピールしてみようかと思っただけです」

「やらんでいい」

レヴィのスキンシップはレヴィだから許されているというか、こちらとしても許容できているのであって、シユテルにそれをやられると困る。

「というか……お前って至近距離まで近づくのは大丈夫でも実際に触れ合ったりするのはダメな奴だろ。そっちから一方的に触れる分には大丈夫だろうけど。仲良しって言葉が嬉しかったのか、真夏の暑さにやられたのかは知らないが、もう少し自制しろ。」

「ふふ、うちのなのはともそれくらい仲良くしてくれると嬉しいんだけど」

「あの子が良い子なのは分かってますから個人的に親しくなるのは構わないんですけど……こいつとのやりとりみたいなのを期待されるのは困りますよ」

シユテルと高町は容姿や声に酷似した部分があるが、性格は360度とまではいかなくても270度くらいは違う気がする。同じような接し方になる可能性は極めて低いだろう。

それに……シユテルを含めた昔から付き合いがあるメンツは飛び級で中学生扱いされているから大丈夫なんだが、小学生達と親しくしていると茶化してくる奴が居るからなあ。そんなに年の差があるわけでもないのにロリコンだとか言われるのは困る。

「にしても……まあ分かっていたこともありますが、桃子さんはシユテルと高町を間違えないんですね」

「だってあの子の母親だもの。確かに声とかは似てるなあと思うけど、髪形や瞳の色……あと性格も大分違うみたいだしね。……ねえシヨウくん」

「何です?」

「出来ればだけど、なのはのことはなのはって呼んであげてほしいわ。単純に私達家族も反応しちゃうからってのもあるけど、あの子の話にはシヨウくんがよく出てくるから。きっとシヨウくんともっと仲良くなりたいたいと思うの」

桃子さんの言い分は理解できるのだが、本人がいないところで今のような話をしていいのだろうか。まあ居たら居たであの子がテンパ

りながらも桃子さんを止めようとするだろうが。

「えつと……急に名前前で呼ぶとなると恥ずかしさやらを覚えますし、個人的にですけどこっちから急に下の名前前で呼んだらあの子は慌てそうなんですが」

「ふふ、確かにそうなりそうだけどやっちゃって大丈夫よ」

いやいや、大丈夫じゃないでしょ。

桃子さんはまともな母親だと思っていたのに、まさかプレシアさんとは別の方向だろうが彼女のように危ない人なのだろうか。

「あの子も小学4年生……女の子は早熟だっていうし、男の子を意識し始めてもおかしくないと思うの。けどあの子は同じ年の子よりも性別の壁がないというか、誰にでも同じように接するのよね。それ自体は良いことだと思っただけ……」

ああ……確かに普段のあの子は小学生組の中でも誰にでも平等と
いうか、異性意識は持っていない方に思える。ただ俺には異性を意識
しているような反応をする時があるので、桃子さんとしてはあの子の
成長を促してほしいのだろう。俺にも反動がありそうでならないが
……。

「まあ正直に言う……あの子はショウくんと親しくなりたがってる
し、年もそんなに離れてない。ショウくんはアスカや偶に私からお菓
子作りを教わってる。だから将来的に一緒に翠屋を継いでくれない
かしら……なんて考えたりしてるだけなんだけど」

……さりとんでもないことを言われたような、いや確実に言っ
たよな。自分の娘と結婚してこの店を継いでほしいみたいなことを
絶対言ったよな。

ああもう、何で俺の知り合ってる親ってこういう人が多いんだ。ま
あうちの親も悪いんだけど……父さんの方ではダイアーチエとの許
嫁の話があつたりしたし、母さんの方ではたつた今とんでもない話を
聞かされたわけだから。

ちなみに桃子さんが言ったアスカというのは俺の母さんの名前だ。
苗字は言わなくても分かっていると思うが、フルネームだと夜月明華
になる。

「いやはや、モテモテですね。これは帰ったらすぐさま報告しなければなりません」

「少し……いや結構脚色して言いそうな顔で言うのやめろ。桃子さんも唐突に変なことを言うのはやめてください」

「別に変なことを言ったつもりはないわよ。なのははシヨウくんのお嫁さんになるって言ってた頃もあるんだから」

「……はい？」

「ふふ、シヨウくんが分からないのも無理はないわよ。ふたりが小さい頃の話だから……なのはは自分が言ってたことなんて覚えてないでしょうけどね。シヨウくんのこと最近会った感じに話すから」

よく思い返してみれば、小さい頃に親に連れられて桃子さん達に会いに行った覚えはある。具体的な内容までは覚えていないが、そのときに自分よりも小さい子と一緒に遊んだ覚えもある。きっとその子が高町なんだろう。

でも……当事者達が忘れているなら言わないでほしかった。そういう話を聞かされると何とも言い難い感情が沸き上がってきてしまうから。

俺はともかくあの子にはしないでほしい。絶対とっていいほど普通に接してくれるようになるまで時間が掛かりそうだし。

「……って、ごめんなさいね。席にも案内せずに立ち話に付き合わせちゃって。今日はそこまでお客さんは来なさそうだからゆっくりしていつて。なのははやアリシアちゃんは道場の方に居るからあとでこつちに顔を出すかもしれないし」

桃子さんはいつもどおり温かい笑顔を浮かべているのだが、正直再び桃子さんがきっかけで何かしら起こると思うと恐ろしくもある。

高町が混じるだけでも大変なことになりそうなのに、アリシアまで居るとなると力オスな未来しか見えない。こういうことはあまり考えたくはないが……感じる流れ的に個人的に嫌な方になる気がする。俺は無事に翠屋から出ることが出来るのだろうか……。

第26話 「好敵手は災いの元?」

……はたから俺達はどう見えてるんだろうな。

そのように考えてしまうのは、俺とシユテルが向かい合う形でテーブルに座っているからではない。確かに喫茶店で男女が向かい合つて座っていれば誤解する人間も居るかもしれないが、おそらくそういう誤解をしている人間は少ないと思われる。

何故ならば……俺達は互いに注文したコーヒーと紅茶を飲みながら本を読んでいるからだ。会話という会話はこれといってない。店が混んでいて相席を余儀なくされたのならば話は違うだろうが、今日の翠屋は比較的空いている。故に周囲が俺達を見てどう思うか考えまわっているというわけだ。

「……まあどうでもいいか」

俺達と付き合いがない人間がどのように思ったとしても大した問題ではない。同じ学校の生徒に見つかるのと面倒になる可能性もあるが、俺とシユテルは学校で同じクラスだ。学校でも比較的一緒に居ることは多いため、見られたところでこれといって何も無い気がする。

……何かあるとすれば。

例えば俺の目の前に座っている少女に想いを寄せている男子に見られた場合だろうか。

シユテルを含め留学生組はうちの学校でも知っている人間は多い。何故ならディアーチエは学年主席であり、シユテルもそれに次ぐ秀才なのだから。レヴィは俺達より学年がひとつ下であるが、数学と体育の成績は満点に等しいし、そもそも普段の言動的に目立つ存在だ。

付き合いの長い俺はこいつらのことを他人よりも知っているからあれだが、学校の人間は良いところとか目立っている部分くらいしか知らないだろうな。それに……本を読んでいるときのシユテルは絵になる。俺に絡むときは茶目っ気を出してくるので認めたくない部分もあるが。

「……先ほどから本ではなく私の方を見ているようですがどうかしましたか?」

「別に……お前とふたりでのんびりしているのが新鮮だなんて思っただけだ」

素直に考えていたことを言わなかったのは……言わなくても分かりそうだが、簡単に言えばシユテルが面倒な流れにしそうだからだ。こいつのことだからきつと……私の隣に自分以外の異性が居るのが嫌ということですか、みたいなことを言ってからかってくるに決まっている。

俺から言わせれば、俺以外の男子ともっと絡めと言いたい。事務的な会話や何かしらの作業を一緒にするときには話している姿を見るが、それ以外では常に俺かディアーチエ達の傍に居るイメージしかないし。

「よくもまあさりと嘘が言えますね。本当は私が面倒な流れにするなどと思っているでしょうに」

「……別に」

「やれやれ……あなたはもう少し素直になった方がいいですよ」

どこか呆れながらもシユテルの顔には笑みが浮かべられている。まるであなたが私の考えを読めるように私だってあなたの考えは読めます、と言いたげに。

「まあ今口にした言葉も思ったことではあるんでしょうが……実際に私も似たような想いを抱いていますし。私達の近くには昔からレヴィやディアーチエが居ましたから」

「ディアーチエは準備があるから無理だろうが、レヴィは呼べばすぐにでも来そうだけどな。呼びたいなら呼べばいいんじゃないか？」

「それは……やめておきましょう。今後、私達は自分の道を見つけて歩んでいきます。常に一緒に居ることはできなくなるでしょう。それに一緒に居ることが多い私達ですが交流している相手には差が存在しています。時として各々の時間を過ごすのも大切ですよ」

確かにシユテルの言うことは最もだ。ただ……俺から言わせれば、彼女の方がもう少し素直になるべきだと思う。

お茶目な部分はあるが、そこを除けばいつも冷静沈着で大人じみた対応ばかりしてる。人が恋しいだとか寂しいと思っても

自分のキャラじゃないとか思ってた素直に甘えられない。小さい頃からそういう節はあったけど、年々それが顕著になっていってるよな……。

学年で言えばシュテルは俺と同じ中学2年生だ。けれど彼女は留學生であり、また飛び級をしている。精神年齢は優れた頭脳の持ち主なので実年齢よりも高いわけだが、だからといって子供らしく振舞うのがダメだと言うのはおかしい。

ただそういうことをシュテルに対して思うのは小さい頃から付き合いのある俺だけであり、また甘やかしてあげられるのも俺だけなのかもしれない。調子に乗られるのも困るが、どことなく寂しそうにしてる彼女に何もしないのも年上としてどうなのだろうか。

そんなことを考えている内に俺の手は自然とシュテルの方へと伸び、彼女の頭を軽めに何度か叩いて撫で始めていた。

「……なっ……何をやっているのですか!?!」

「いや、寂しそうだから慰めてやろうかと思って」

「だ、だからといって急にしないでください。別に寂しいなど思っていないから!」

顔を赤くして慌てふためくシュテルの姿は普段の彼女からかけ離れているだけあって面白くもある。今の姿が、性格が大分違うが近い見た目をしている高町とダブって見えることもありさらに面白い。

俺は別にからかつているつもりはないが、うちの叔母やはやて達が人のことをからかうのはこういう気持ちを抱くからだろうか。多少なりとも彼女達への理解が深まるが、まあ俺は頻繁にすることはあるまい。ただでさえ、今でも俺のことを意地悪だの冷たいだの言ってくる子はいるのだから。

「あいにくお前との付き合いは長いからな」

「う……ディアーチェに知られたら気軽に異性に触るものではないと怒られますよ」

「普通ならそうだがお前が寂しそうにしてたのなら話は別だろ。というか、嫌なら振り払うなりすればいい。俺としては……まあ多少恥ずかしくもあるが、昔何度かやった覚えがあるだけに懐かしくもあるが」

「もうあの頃とは違うのですから……子供扱いするのはやめてください」

シュテルは顔をこちらからやや背けるが、俺の手を自分の頭から退かそうという素振りは見せない。それがどこことなく小さい頃の彼女と重なり可愛く思えた。普段から今ののような感じならば、俺ももう少し兄貴分的な行動をしてやりたいと思う。

とはいえ、今日はもうここまでにしておこう。

桃子さんに見られても微笑ましく思われるだけだろうが、ここは高町達も利用する場所だ。顔を合わせたことはないものの、先ほどあとで顔を出すかもしれないと言われたのでここで引いておいて損はない。

「……あ」

と俺が手を退けた瞬間にシュテルが声を漏らす。人に甘えることが少ないだけにもう少しやってほしいとでも思ったのかもかもしれない。まあこちらと視線が重なった瞬間、これまで以上に顔を真っ赤にして俯いてしまったのが現状だが。

ここでまた撫でるのも何か言うのも今のシュテルには悪手だろう。そう思った俺は、静かに読みかけだった本を手取る。

ちなみに何の本かというと、簡単に言ってしまうえば工学系のものだ。父親や叔母といった技術者が近くに居たため、幼い頃から興味を持ってしまうのは仕方がないだろう。ならばお菓子作りも……と思うかもしれないが、そこに至っては下手な本を読むより母さんや桃子さんに聞いた方がいいので手を出していない。

「……………そういえば」

「ん？」

「最近はずいぶんと暴れ回っているらしいじゃないですか。デュエリストの間で噂になっていますよ」

「マジか……」

まあ高町達の特訓の話を書き足してからはユウキと一緒にデュエルばっかやってるからな。通り名持ちのデュエリストも何人も食い破ってしまったし。それを除いても最近イベントデュエルの手伝

いもしていた。

八神堂に至っては、イベントデュエルではないが白石さんとのデュエルを見ている人間が予想以上に居たらしく認知度が上がってしまっている。率先して目立ちたいとは思わないが、実力のある人間が注目を集めてしまう世界なだけに仕方がないかもしれない。

「マジですよ。……そもそも、あなた程のデュエリストが本気で戦えば注目を集めるのは必然というものでしょう。ロケテスト時、私にしか使っていないかった二本目も常時抜いていると耳にしていますし。あなたのことを本当の意味で本気にさせられるのは私だけだと思いますのですが……」

シユテルの顔には先ほどまでの赤味もなければ、唇を尖らせたり頬を膨らませるといった露骨な感情表現も確認できない。しかし、声にどことなく拗ねているというかある意味焼きもちを妬いているかのように思えたのは俺の気のせいだろうか。

「デュエリスト人口は日に日に増加しているし、通り名持ちのデュエリストも増えてきている。二本目を抜かないと勝てなくなってきたんだから仕方ないだろ」

「それはそうなんですしょうが、今のあなたがこれまで隠してきた二本目を常時使ってまで腕を磨くのは更なる高みへ上りたいから……いえ、そこに辿り着けなければユウキに勝てないからではないですか？」

「それは……」

「まあ理由でどうあれ……あなたが更なる高みへ上がるのは私としても喜ばしいことです。あなた以上に私のことを熱くしてくれるデュエリストはいないのですから」

こちらに真つすぐ向けられたシユテルの目には、静かだが激しく燃える炎が見える。

それは普段俺に向ける目ではない。自分と同等の存在……最も自分が勝ちたいと思う相手に向けるデュエリストの目だ。ここからのセリフはシユテル・スタークスではなく、ロケテスト1位シユテル・ザ・デストラクターとしてのものだろう。

「故に……私も更なる高みを目指します。今後おそらく最強のデュエリストを決めるイベントも行われることでしよう。そこで私はどんな戦いであろうと、あなたと雌雄を決するまで負けるつもりはありません。だから……」

「俺もお前と当たるまで負けるなっただけか？」

「はい」

日に日にデュエリスト達の実力も上がっているというのに、俺の好敵手は難題をさらりと言ってくれるものだ。

デュエルは勝負事だ。絶対に勝てる保証はない……しかし、ここで燃えない奴はデュエリストではないだろう。

確かに今の俺はシュテルの言うようにユウキに勝ちたいという想いで強くなるうとしてている。

だが最大のライバルが誰かと聞かれれば、ユウキではなくシュテルと答える。シュテルから自分と相対するまで負けるなど言われたならば、可能な限り努力するべきだろう。彼女の好敵手として。

「お前と本気でやり合うなら色々準備もしたいし、可能な限り別ブロックであることを祈りたい」

「私は同じブロックであろうと、初戦の相手であろうと構いませんよ。私にとつての決勝戦はあなたとのデュエルなのですから。故に……未来の決戦をより良い形で迎えるために今度別の街へ足を運んでみませんか？」

話の方向性が一気に変わったかのように思えるが、ブレイブデュエルを行える場所はこの街だけではない。この街にある各店舗がスタイルごとの総本山ではあるだろうが、他の街にもブレイブデュエルを稼働させている店は存在している。

シュテルは強敵とのデュエルを望む性だからな……まあ俺も似たようなところはあるけど。それにレーネさんが他の街の稼働状況とかが知りたいって言うていたし、シュテルもグランツ博士の方から何か言われたのかもしれない。

ユウキもこの街に大分慣れてきたし、グランツ研究所に連れて行けばこの街にあるブレイブデュエルを稼働させている店には全て連れ

て行ったことになる。T & Hからはイベントデュエルの手伝いを頼まれたりしているし、俺ひとりで動ける日も増えてくるだろう。なら……

「別に構わないが、今すぐにはさすがに無理だぞ」

「分かっていますよ。私も今は日に日に成長するなのは達の姿を最後まで見届けたいので」

「そんなに成長してるのか？」

「ええまあ……コーチ役を断ったあなたには秘密ですが」

いじわるな笑みを浮かべるシユテルに対して思うところはあつたものの、あの子達のコーチ役を断ったことについて引け目が全くないわけではない。

それに……シユテルが認めるほど成長しているならば、むしろデュエリストとしては次に会うのが楽しみというものだ。ここは無理やり聞くようなことはせず、今後の楽しみとして話を終わらせよう。

そんな風に思いコーヒーを口に含んだ直後、背後から聞き覚えのある声が響いてきた。振り返ってみると、そこには道着姿のアリシアと高町が確認できた。

「ちよつとシヨウ、シユテルとふたりで何してるのさ！」

「何って……他愛のない話をしてるだけだが？」

「嘘だ！ 年頃の男女が喫茶店にふたりで居るのに他愛のない話をするわけない。というか、他愛のない話だとしてもデートじゃん。わたしとはデートしてくれないくせに！」

小学4年生よりも年下に見える小学6年生は今日も相変わらずうるさい。いや、最近顔を合わせていなかっただけに前以上にうるさくなっているかもしれない。

「シユテルとデートしている覚えはないし、お前とデートする理由もないんだが」

「なっ!? 何でそういうことをさらりと云っちゃうかな。わたしにだって心はあるんだよ。何でそう意地悪なことばかり言うかな！」

「まあまあ姉氏、男の子というものは好きな異性に対して意地悪をしてしまうことがあるそうです。それに店内で騒ぐのはあまり良いこ

とではありません。とりあえず落ち着いてください」

さすがに喫茶店で騒ぐのは良くないとアリシアも理解はしているのか、表情は不機嫌そうなままだが声は小さくなっていく。その様子が年上に注意されて大人しくなる年下といった構図に見えなくもない。口に出すとアリシアの怒りが爆発するはずなので言葉にはしないが。

「シヨウが言ったように私達はデートをしているわけではありません。このあとも一緒に過ごす予定ではありませんが」

「シユテルが言うなら信じて……って、やっぱデートじゃん!? ふたりしてわたしのことをからかって悪趣味だよ!」

シユテルはともかく俺はからかったつもりはないのだが。シユテルだけが悪いはずなのにどうして俺にまだ飛び火するのだろうか……。などと考えていると、誰かに袖を引つ張られた。意識を向けてみると、高町が何やら言いたそうな顔をして立っているのが見えた。

余談になるが今日の高町は髪をツインテールではなくサイドポニーにしている。桃子さんも女の子らしさを心配していたが、身だしなみといった部分に意識が行っているのであれば、同年代よりも異性意識が薄いとしてもあと1、2年もすれば変わってきそうに思える。そこまで心配することはないのではないだろうか。

「どうかした?」

「えっと……シヨウさんはシユテルとデデ……デートしてるんですか?」

「いや個人的にしてる覚えはないけど。今日は夜にグランツ研究所で俺の従妹の歓迎会みたいなのがあるわけだけど、準備とか従妹に夕方まで予定が入ってたからそれまで時間を潰してるだけだし」

俺の言葉に納得したのか、高町はにっこりと笑う。彼女の笑顔を見るのは今日が初めてというわけではないのだが、先ほど桃子さんに言われたことが尾を引いているのか何となく恥ずかしくなってしまう。

「シヨウ……何だか顔が赤くなっているような気がするんだけど。もしかしてなのは見てドキドキしてるの?」

「にやつ!? なな何言ってるのアリシアちゃん!？」

「何でなのかが慌てるかな。普通ここはショウが慌てる場所でしょ……まあなのはらしいと言えはなのはらしいけど」

アリシアが言っているのは至極もつともであり、いつもならば問題ない流れである。しかし、今日に限ってはこの流れは悪手だ。こうも過剰に意識されると、桃子さんの話がフラッシュバックしてしまう。「むむ、慌てるのはを見てショウの顔がさらに赤くなったような……ふたり共、わたしの知らないところで何かしたでしょ!」

「な、何もしてないよ!? 最近ショウさんとは会ってなかったし……というかアリシアちゃん、私と一緒に特訓してたよね。私がショウさんに会ってるならアリシアちゃんだって会ってるはずだよ!」

「むう……それは確かに」

「やれやれ……仕方がありません、私が説明しましょう。私も今日知ったことなのですが、どうやらショウとなのはは幼い頃に何度も顔を合わせていたようです。しかもなのはに至っては……ショウのお嫁さんになると言っていたと」

「——にゃ!？」

シュテルの言葉に高町の顔は一瞬にして真っ赤に染まり、目を回しながらブツブツと「え? 私がショウさんの……」といった独り言を次々と言い始める。

「どういうことなのは!？」

「し、知らないよ! ショウさんと出会ったのはついこの間だし……お母さん達と知り合いみたいだから小さい頃に会ってたかもしれないけど、少なくとも私にはショウさんのお、お嫁さんになるって言った覚えはないよ。シュテル、変なこと急に言わないで!」

「変なことを言った覚えはありません。つい先ほどあなたの母君……桃子さんから聞いたことを伝えただけです」

今にも泣きそうな顔をした高町が視線で真実かどうか訪ねてきたが、俺は何も言うことができなかった。それは必然的にシュテルの言葉は事実であると言っているようなものであり、高町が頭を抱えてしやがみこんでしまったのは言うまでもない。

このあとの展開は……正直語りたくないのをご想像にお任せする。
ただ誤解がないようにこれだけは言っておくが、決して笑い声の絶え
ない楽しい時間だったとは言わない内容だった。

第27話 「騒がしくても」

「みんなに会うのも久しぶりだなあ……何かいざ会うとなるとそわそわしてきた！」

のように隣を歩いている俺の従妹は先ほどから独り言を言いながら百面相をしている。

現在の状況を簡潔に説明するならば、俺達はグランツ研究所内の廊下を歩いていて歓迎会用にセッティングされているはずの一室に向かつて歩いている。

ディアーチェ達と顔を合わせるのは久しぶりだろうから気持ちを分からなくもないが、別に何年も顔を合わせていなかったわけじゃないんだからそこまで緊張しないでもいいと思うんだがな。

おそらくユウキの記憶にあるディアーチェ達と大差はないと思う。性格といったものはこれといって変わっていないのだから。

ただ……背丈とかに関しては変わってるんだよな。男子の場合は中学入学前後くらいの年齢から一気に伸びるけど、女子は小学生の内にとんどん伸びるイメージがあるし。

俺はちようど中学2年と年齢的に伸びる時期であり、また頻繁に顔を合わせていることもあって視線の高さなどに違和感を感じてはいない。だが最近あまり身長が伸びていないであろうユウキは違和感を覚えるに違いない。何故ならば

「ユウキ、あなたの気持ちが分からなくもないですが私達に大きな変化はありません。そう身構えなくても大丈夫です」

「大丈夫じゃないよ。シユテルと話してみても性格とかは変わってないだろうなって思いはするけど、絶対みんな大きくなってるとじゃん。この前まで僕の方が大分高かったはずなのに今のシユテルは僕と同じくらいになってるし！」

このように数十分前に顔を合わせたシユテルに対しても、未だに文句にも聞こえる違和感をぶつけているのだから。

ディアーチェはまあシユテルと変わらないからともかく……ふたよりも背が高いレヴィに会ったらユウキがどうなることやら。何

度言っても引っ付いてくるから分かってしまうことだけど、レヴィは大分発育も進んでるみたいだしな。今でもユウキよりあるんじゃないかな……

「年上のアミタやキリエは元から僕より大きいからあれだけど……前々から思ってたけどみんなはすぐ大きくなり過ぎだよ。遺伝子的な問題なのかもしれないけど……シヨウ、何かずっと僕の方見てるみたいだけどどうかしたの？」

「いや別に……」

「誤魔化さなくていいからはつきり言いなよ。シヨウがそういう風にするときは大抵何かしら思ってるはずなんだから」

「ここ最近似たようなセリフを言われることが多い気がするが、だからといって思っていたことをはつきりと言うのは良くないだろう。」

「ここで言わなくてもきつとレヴィに会ってしまったえば思ってしまった可能性がある。それに割とユウキは背丈とか身体的な女性らしさを気にしている節があるから言わない方が良いに違いない。」

「というか、そもそも男の俺の口から言ったら面倒なことになる。何でレヴィの胸の大きさを知ってるんだって。俺から触れているわけではないの責められては堪ったものじゃない。」

「なら言わせてもらうが……もう少し落ち着いたらどうだ？ あんまりそわそわしているとシユテルより下に見えるぞ。年齢的にはシユテル達よりお姉さんなんだから」

「なっ……言えって言ったのは僕だけだし、落ち着けて部分だけでいいんじゃないかな。特に最後の年齢的にはお姉さんって、落ち着いてなくても下に見えるような言い方なんだけど！」

「確かにそのようにも解釈できますね。ですがユウキ、私を含めディアーチェ達もあなたのごことは年上だと思っっていますよ。親しい間柄なので口調は砕けていますが」

「シユテル……」

「そもそも、悪いのはユウキではありません。真に悪いのは……実年齢以上に大人っぽく見えてしまう私達なのですから」

「それって言い回しを変えただけで意味合いは変わってないよね。何

で上げて落とすの!？」

ユウキの心からの叫びが廊下に木霊する。まあキリツとした顔で今のようなことを言われれば、彼女が叫びたくなるのも無理はない。メガネをしていないのにメガネの位置を直す仕草も微妙に腹が立つし。

「ああもう、昔から分かってたことだけど本当シヨウとシユテルってそういうところ似てるよね」

「そういうところ?」

「上げて落とすというか、人に意地悪なことを言うところだよ」

意地悪?」

シユテルの場合はそのように言われても仕方がないとは思うし、俺もたまには言っているとは思いますが、基本的に俺は事実しか言っていないと思う。現実逃避はしてはいけないと言われるものはずなのに、現実を突きつけるのはいけないことなのだろうか。

「伊達に彼の背中を見て育っていませんから」

「あのねシユテル、それはキリツとした顔で言うことじゃないから。というか、シユテルが強く影響を受けたのはシヨウじゃなくてレーネさんの方だと思うんだけど」

「確かにレーネは私やディアーチエ達にとって師のような存在ですから否定はしませんが……それでもシヨウの影響があるのも事実ですよ。昔も今も可愛がってもらっていますから」

どうしてこいつは今のタイミングで可愛がってもらっているなどと言うのだろうか。しかも意味ありげに。

いや……昼間の仕返しだろうっていうのは何となく予想できているわけだが。けどお前だって頭を撫でられてまんざらでもない反応してただろ。言うなとまでは言わないがせめて妹分だとか付けて言ってくれよ。今の言い方だとユウキが誤解する可能性が高いだろうが。

「今も? ……ねえシヨウ、いったいどういうことかな。昔はみんな小さかったし、シヨウの方が年上だから分かるんだけどさ。今だと事の次第によっては問題があると思うんだけど」

「如何わしい真似をしたつもりは断じてない」

「本当に？」

「本当に」

何でここまで疑われなければならないのだろうか。この前は高町達と親しくしていることを言っただけでロリコンだとか疑われたし、今は今で昔から付き合いがある相手との付き合い方について疑われている。

俺が過去にシュテルに対して……いや異性に対して何かしてしまったのならば疑われても仕方がない。胸を触っただとか、お尻に触れただとか罪を犯した男が疑われるのは当然のことなのだから。

しかし、俺の記憶が正しければそのような出来事はないはずだ。頭に軽く触れたり撫でたりすることはあるが、それはある程度親しくなった相手にしかしていないし、して怒られるようなことでもあるまい。ディアーチェのようなタイプだと照れ隠しに怒鳴る気はするが。

「シュテル、実際のところどうなの？」

「信用する気ゼロだな」

「信用してないわけじゃないよ、確認をしてるだけ。さあシュテル、本当のこと言っちゃって。別に怒ったりしないから」

嘘を言うな。お前、グランツ研究所では言わないにしても絶対家に帰ってから何か言うつもりだろ。発せられてる雰囲気からして「答えによってはあとでお話だね」って伝わってくるし。頼むシュテル、ただでさえユウキの歓迎会が平穩に進むとは思えないんだから厄介事を増やすようなことは言わないでくれ。

「実際のところ……別に如何わしい事をされた覚えはありませんよ」

「本当に？」

「はい、大体彼にそのような度胸があるならこれまで恋人のひとりくらい出ていますよ。ちなみにこれは私個人の意見なのですが……ユウキ、あまりしつこいと嫌われるとまでは言いませんが面倒だとは思われますよ」

「それは……そうだけど。……って、からかい癖のあるシュテルから面倒だと言われたくないよー」

ユウキの言葉は至極最もであるが、シユテルは先ほどまでとは打って変わってぼんやりとした顔で聞き流しているようだ。

シユテルはどちらかといえば口数が少ない方なので話し疲れたのかもしれないが、会話が一段落してもいないのにやってしまうあたり、何ともマイペースというか気まぐれな性格をしていると言えるだろう。こういう性格だから猫には好かれるのかもしれないが。

中身があるとは決して言えないであろう会話を続けている内に気が付けば目的の部屋の前まで到着した。きつとこの奥にはディアーチェが作り出した極上の料理が並んでいるに違いない。俺も料理は人並みに出来はするが、人並みに出来るが故に彼女には敵わないと思ってしまう。

「ん？　ようやく来……」

「おつそーい！」

ディアーチェの言葉を遮ったのは言うまでもなくレヴィイである。極上の料理を前にして俺達が来るのを待っていただけに気持ちは分からなくもない。……分からなくもないのだが、だがそれでもこれだけは言える。俺に飛び掛かるように抱き着くのは違うだろう、と。

「遅い、遅い、遅いよー！」

「それは悪かった。悪かったと思ってるからとりあえず離れてくれ」

「え、何で？」

え、何で？

そう言い返したい気分になってしまったが、相手がレヴィイなだけに言ったところで意味がない。分かっていることではあるが、レヴィイは一向に異性というものを意識してくれない。

俺が昔から付き合いがある身近な存在なので異性の中でも抵抗がないのは分かるのだが、それでももう少しだけでもいいから異性に対する配慮をしてくれないだろうか。今はまだ顔に出さずに済むが、発育がこれ以上進むとさすがに俺も不味いものだから。

「何で？　ではないわ！　レヴィイ、さっさと離れぬか！」

「ええー別にいいじゃん、シヨウなんだし」

「良くないよ！　親しき中にも礼儀ありというか、レヴィイも女の子で

しよ。気安く男の子に抱き着いたりしたらダメだよ！」

「やれやれ、まだ歓迎会は始まったでもないのに騒がしいことです」
シユテルさん、そう思うなら俺の従妹と王さまを鎮めるか俺に引つ付いている犬っぽい女の子をどうにかしてくれませんか。それがダメにしても……せめてやれやれとか言いつつ、はたから見て面白がるのはやめてほしいです。主に俺の精神的に……。

「あ、ユキりんだー！」

「え、あつ、ちよっ!？」

レヴィの高速飛びつき型ハグは見事にユウキに直撃。突然のことに加え、人前で抱き着かれるのが恥ずかしいのかユウキの顔は真っ赤である。

ただ先ほどと打って変わってユウキは怒鳴る素振りは見せていない。彼女自身もレヴィとの再会は嬉しいものであり、また抱き着かれている対象が異性である俺ではなく同性である自分なのが理由だろう。

「久しぶりだねユキりん」

「う、うん久しぶり」

「えへへ……あれ、何かユキりん小さくなってない？」

レヴィにとっては純粹な疑問から生じた言葉なのだろうが、それでもユウキにとってはクリティカルするものだったらしく、彼女の表情から喜びの感情が消えていく。プラスの感情が溢れる雰囲気になりかけていたというのにどうしてこうなるのだろうか。

「僕が小さくなったんじゃないってレヴィが大きくなったんだよ！」

劇場に駆られたユウキは強引にレヴィを引き剥がそうとした。が、手を置いた位置が実に不味かった。ユウキがどこに手を置いてしまったかという……レヴィの胸である。つまり必然的にユウキの両手には発育途上ではあるが確かな膨らみの感触が伝わるわけ……。

「うん？ ユキりん、どうかしたの？」

「何でも……何でもないよ。……身長はまだいいとして……胸まで大きくなってるってどうということ。下手したら僕よりも大きいん

「だけど」

「ブツブツ言ってるし、絶対どうかしてるよ。ユキりん、ねえどうしたのさ？」

レヴィは純粹に心配しているようだが、それがまたかえってユウキは辛いことだろう。

嫌味で言っているのであればレヴィに対して怒ることもできるだろうが……レヴィは悪戯をする時以外は基本的に悪気は全くないからな。キャラ的にも憎めない奴だし、ある意味ユウキとは相性が悪いかもしれない。

「シヨウ、ボクなんかしちゃった？ ユキりんどうしちゃったの？」

「いや……俺の口からはちよつと」

「じゃあシユテるん」

「すみませんレヴィ……時として沈黙を貫かなければならないときもあるのです」

「王さまー」

「我也答えとうないわー！」

頼りのディアーチェにも断られてしまったレヴィは自分で考え始める。だが頭を抱えながらウンウン唸っているあたり、ほぼ間違いない答えに辿り着くことはないだろう。今回の答えに辿り着くには男女の性別の違いなどの思春期になれば自然と意識してしまうものを理解していないといけないのだから。

「みんな、もうそのへんでやめてあげたらん？ 答えるにしても答えないにしてもユウキちゃんを傷つけてるわよ」

「ユウキさん、大丈夫です。ユウキさんはまだ中学2年生じゃないですか。まだまだこれからです！」

「キリエ、アミタ……そうかな？ 僕、まだこれからかな」

「はい、きつとこれから大きくなりますよ！」

アミタは今日も変わらず……ユウキに再会できたことでいつも以上に熱い気がする。それに対して、アミタの妹であるキリエはアミタの方を見ながら澄ましそうでいなさそうな微妙な顔を浮かべている。

「ですよねキリエー」

「いやー私はお姉ちゃんみたいに『きつと』とか言える素直な子じゃないし、ユウキちゃんくらいの頃にはそれなりにねえ……確かお姉ちゃんは私よりも」

「あわわ！ キ、キリエ、あなたは何を言おうとしてるんですか。ここにはシヨウさんだつて居るんですよ。というか、姉とはいえ人のプライベートな情報を言うのはいただけません！」

「お姉ちゃん、そういうことを私に言う前にやることがあると思うわよん」

「アハハ……そうだよ、僕とふたりを比べるのは良くないよね。遺伝子的に違うわけだし……」

「ユウキさん、落ち込まないでください！」

……うん、この場を端的に言うならカオスだ。

昔もこんな感じだった気がするが、年を重ねて背丈や体型やらが変わってしまっただけに話す内容は和気藹々と聞けるものではない。

というか、その手の話をするのは構わないが俺がいなくてやってくれないだろうか。正直男の身としては会話に入るわけにもいかないし、気心が知れている仲とはいえ男女比的に圧力のようなものがあるのだから。そんなことを考えた矢先、不意に扉が開く。

「すみませーん、遅れてしまいました！」

入って来たのはシュテル達同様にグランツ研究所にお世話になっているユーリである。先ほどから姿が見えなかったので一時的に席を外していると思っていたが、今の言葉を聞く限り大方グランツ博士の手伝いでもしていたのだろう。

「もう始まつちやつてますよね？」

「いや、これから始まるうとしてるところだ……時にユーリよ、博士の姿がないようだが？」

「えっと、博士はもう少ししたら来ると思います。先に始めてもらつて構わないんですけど、博士の食べる分は残しておいてほしいそうです」

「ふむ……ならばお言葉に甘えて先に始めるとしよう」

普段のディアーチェエならばグランツ博士が来るまで待とうとも

言っていた気がするが、そうしなかったのは時間的に夕食の頃合いであり、また先ほどから腹の虫が鳴っている人間が多いからだろう。主に音の発生源はレヴィだが、シユテルや今来たユーリからも可愛らしい音が聞こえた。

まあ俺も正直に言えば何度か鳴っているし、キリエも露骨に顔に出してはいないが空腹は感じているように見える。久しぶりに顔を合わせたユウキが居るのでお姉さんとしての建前を維持しているが、彼女がいなければきつと「おなかすいたああ」と言っているに違いない。ちなみに今名前を上げていないアミタだが……彼女の腹の虫は彼女が乙女かどうか疑ってしまうほどの音を出してしまうので触れないでおく。

「ん!? お、おいしい……口の中が天国だよ。さすがディアアーチエだね!」

「口に合ったのならばそれで良い。たくさん作っておるから満足するまで食べるが良い」

「うん!」

ディアアーチエの言葉を皮切りにユウキは会話よりも食事を優先することにしようで、次々と自分の皿におかずの乗せて口の中に放り込んでいく。我が家では見られなかった光景ではあるが、まあディアアーチエの料理ならば仕方があるまい。

というか……食べっぷりだけならレヴィの方が格段に上だからな。よくもまああれだけ食べて太らないものだ……あいつを全部体を成長させる栄養になっている気がしてならないが。

「あららん、ユウキちゃんずいぶんと勢い良く食べるわね」

「ディアアーチエの料理は美味しいからね」

「それはそうだけど……シヨウくんの家ではあまり食べさせてもらってなかったのかしらん?」

「そんなことはないけど……シヨウの料理よりディアアーチエの料理の方が美味しいから。あ、もちろんシヨウのも美味しいんだけどね!」

そんなに必死に言わなくてもディアアーチエより料理の腕が下なのは分かっているんだがな。俺はそこまで料理にこだわりとかないし、家

族に出す食事くらいの意識でしか作ってなかったから。

人に振舞うという意識でやればもう少し良いものは作れるだろうが、そういう機会に立ち会ったとしてもディアーチェやはやてに任せられる方が賢明だろうしな。

「別に慌ててフオローを入れる必要はないぞ。俺もディアーチェの料理の方が美味しいと思うし」

「ふん……まあ我としても幼い頃からやってきたのだから料理には多少の自信がある。しかし、菓子作りに関しては貴様の方が上だ。貴様が本気で取り組んだら我よりも上になるのではないか？」

「いや、それはないだろう。何かしらきつかけがあるなら別だろうが、現状じゃ今以上に熱を込めて料理することはないだろうし」

正月だとかクリスマスだとかイベントがある日は普段よりは気合を入れて作るだろうけど、それ以外だと食べられればいいくらいにか思っていないからな。

そもそも、俺は昔からイベントがある日はディアーチェ達などと一緒に食事をすることが多いかった。故に今以上に料理に対する熱量が上がるとは思えない。手伝いはするので技量的には少しずつは上達しそうではあるが。

「やれやれ、せっかく同年代よりも腕があるというのに向上心のない人ですね。まあ料理に目覚めてデュエリストとして落ちぶれられる方が困りますが」

「あはは、シユテルとはまだデュエルしたことないけど今の発言からして根っからのデュエリストだね。僕もデュエリストになったんだから忘れないでほしいけど」

「別に忘れてはいませんし、忘れるつもりもありませんよ。ユウキのゲームへの適応力はこの中でも群を抜いて高いのですから。お望みとあれば、今から1戦交えますが？」

シユテルさんシユテルさん、今からって部分は冗談なんだろうけどそんなに真剣な顔をしてたら相手は冗談だって思わないからね。冗談と思われないように冗談を言ってるんだだろうけど、付き合いが短かったり久しぶりに会って人間はそれを理解しにくいだろうからせ

めて冗談のランクを下げてやろうよ。

と心の隅の方で思いつつディアーチェの料理を口に運んでいると、不意に服を引っ張られた。力が働いた場所が低い位置なのでおそろくユーリだろう。

「どうしたユーリ?」

「え……シヨウさん凄いです、何で見てないのにわたしだって分かったんですか?」

「他のメンツだったら服を引っ張ったりはあまりしなさそうだし、引っ張ったとしてもユーリほど低い位置を掴まないだろうから」

「むう……わたしだってこれからですよ」

年齢的に誰よりも身長が低くてもおかしくないのに頬を膨らませるあたり、ユーリも色々と気にするようになってきているようだ。

まあ謝罪に近い形でこれからということ肯定しながら頭を撫でてやると、途端に機嫌が良くなるあたりまだ年頃の女の子のことは言えないのだろうか。

「で、どうしたんだ?」

「えっと、その……ディアーチェがついさつきお菓子作りはシヨウさんの方が上だって言ってたじゃないですか。もちろんわたしもシヨウさんのお菓子は食べたことがあるので味は知っていますし……だから……その」

「今度また食べたいってか?」

俺の問いかけにユーリは顔を真っ赤にしながら頷く。

俺達の年齢でもお菓子がほしいだとか誰かにせがむことはあるのだから顔を赤くするほど恥ずかしいことではないと思うが、まあユーリの性格的には仕方がないことなのかもしれない。

それに……年頃の女の子とは言えない年齢だが、ユーリは同年代よりも早熟だろうし、年上に囲まれて生活しているだけあって考え方にも影響を受けやすいだろう。たくさん食べる子だって思われたくない、くらいには考えてもおかしくないな。

「時間があればいつでも作ってやるよ」

「本当ですか? えへへ、ありがとうございます。じゃあ……その今

度ショウさんの家に行ってもいいですか？」

家に来てもらった方が逆算して作りやすいし、また今の季節的に安全性は高くなる。

しかし、ユーリは体が丈夫ではない方なのであまり外を歩かせたくない。春や秋といった過ごしやすい時期ならまだ良いのだが現在はあいにくの夏なのだから。

「来るのは良いけど炎天下の中を歩かせるのは心配だから俺が持つてきてやるよ」

「そうですか……」

「そんなにしょんぼりするなって……じゃあ来るのはいい。でもそのときは誰かと一緒に来ること。ひとりで来て体調が悪くなったら大変だからな」

頭を撫でながら言うとうーりは笑顔を浮かべながら肯定の意志を返してきた。少し恥ずかしいのか顔に赤みがあるのがまた可愛らしい。……数年後、シユテルやはやて、アリシアといった人物に影響を受けて純粹さがなくなってしまうんじゃないかと思うと何とも言えない気持ちもなるが。

「あ、ユーリだけずるい。ボクも撫でてよ！」

「お姉さんにもたまにはそういうことしてくれてもいいのよん。もちろん、お姉ちゃんにもね」

「なっ!? キ、キリエ、あなたは何を言ってるんですか。わわ私はそんなこと……風紀的によろしくないですー！」

「仕方ありませんね、ここは私が行くとしましょう」

「ちよつと待ってシユテル、真剣な顔で何言ってるの!?!」

「やれやれ……こうなるとは思っておったが、やはり騒がしい連中よ」

「でも嫌いじゃないだろ?」

「嫌いじゃないですよね?」

「ふたりして聞くでない! ……まあ元気がないよりはマシなのは認めるが」

第28話 「山彦市での出会い」

空には今日も煩わしいほどの光を放つ太陽が輝いている。

施設内や交通機関の中などは空調が効いていて快適ではあるが、それでも外に出れば日光を浴びる時間は確実に存在する。

それだけに夏に外出するのはどうしても必要以上に気力が必要になってしまう。きっとそれは俺だけでなく多くの者が近い考えを抱くはずだ。予報によれば今日は夜になっても気温が20度後半を維持するらしいので実に外出はしたくない……したくないのだが。

「シヨウ、次の駅で降りますので置き忘れに気を付けてください」

「心配するほどの荷物は持ってないから安心しろ」

この会話から分かるだろうが、俺は今電車に乗って移動している。隣に座っているのは、涼しげな色合いのワンピースを着たシユテルである。最近は割かしコンタクトばかり付けている印象があったのだが、今日は長時間外出することを想定してメガネを使用している。

それほど視力が悪いわけではないと聞いているので、裸眼でもいいのではないかと思ったりもするが……シユテルの性格からしてリスク軽減のためにそれはしないだろう。

……するにしても現状で考えれば確実に俺を巻き込むはずだ。例えば必要以上に俺に引っ付いてきたり、よく見えないからいつも以上に接近して話そうとしたりとか。俺とシユテルの関係を疑う人間は割かし存在するため実に避けたいことである。

他よりも距離感が近く、またこうしてふたりで出かけることもあるだけに努力するだけ無駄なのではないかとも思ってしまうのだが。……まあ俺の精神的な疲労を軽減するためには必要な努力なので全くの無駄ではないだろう。

話を戻すが、向かっている先は海鳴市から数駅離れた山彦市というところだ。

理由としてはまだ見ぬデュエリストと戦うためというのが真っ先に挙げられる。以前にシユテルと交わした約束を果たそうとしているのだ。まあ開発側に関わりがある身なので、海鳴市以外のブレイブ

デュエルの稼働状況を知るというのも理由に入っている。

「やれやれ……今に始まったことではないですが、もう少し可愛げのある返事をしたらどうですか」

人の事を散々からかう奴が何を言っているのだろうか。

感情があまり表に出る方ではないので可愛げないと言われるのはまあ良しとしよう。その点は自分も理解している。下手したら俺よりも感情が表に出ないシュテルに言われたくないという気持ちはあるが。

ただこの点を置いておくとしても……年齢で言えばシュテルは俺よりも下だ。飛び級しているので同学年ではあるが、これを踏まえて考えるとシュテルの方がマせていると言えるだろう。故に

「あのなシュテル、可愛げのなさで言えばお前の方が上だと思うんだが？」

「何を言っているのですか。私はナノハにも劣らない可愛らしい外見をしているんですよ。可愛げなら十分にあるはずですよ」

「俺が言ってるのは外見の可愛げじゃなくて内面の可愛げだ。ここでそういう返しをしてくるお前は高町と比べると格段に可愛げはない」
格段という言葉を用いたものの高町とシュテルの性格を考えると比較するのも悪いような気さえする。容姿に関しては似ていると言われるふたりだが、大雑把に言ってしまうえば性格は真逆なのだから。それにも関わらず、シュテルは気分を害したのか顔を背けてしまう。本気で拗ねているわけではないのだろうか、こういうところが時々面倒に思う。

だからといって構わないで放置しておくでアピールしてきたり、遠回しな言い方で構えと促してくる。それはそれで面倒なので……結論だけ述べればレヴィとは違った意味で面倒な子なのである。シュテルとレヴィの面倒を見ているディアーチェは尊敬に値する。見方を変えるとふたりに玩具にされているとも言えるのだが。

「……チラ」

「……」

「……………チラ……………チラ」

チラチラとチラチラ言いながらこつちを見るな。簡潔に言つて鬱陶しい。

これがシュテルではなく高町だったならば、恥ずかしがったりして顔を赤らめモジモジしていそうなので可愛らしく思えるだろう。しかし、現在俺の視界に映っているのは表情の乏しい顔でアピールしてきているシュテルだ。

構つてオーラのようなものは感じるが、ぼんやりとした顔でこちらを見てくるだけに沸々と胸の内に湧いてくるものがある。仮にデュエル時に見せるような凜とした顔だったとしても、おそらく似たような感情は抱きそうではあるが……ドヤ顔のように思えてならないし。「あのな……構つてほしいならもう少し別のベクトルでしてくれ。そのやり方だと余計に突き放したくなる」

「そんな……そんなことを言われてしまつてはもっとやりたくなるではありませんか」

「何でそうなる?」

「男子は好きな子には意地悪をしてしまうと聞きますし、あなたもそのタイプだと小耳に挟みましたので」

確かに素直になれない奴はちよっかいを出して気を引くような真似をするが、別にそれは男子に限つた話じゃないと思うんだ。というか、誰が俺は好きな相手には意地悪をするだなんて言っているんだ。言いそうな知り合いは小さなヒヨコかタヌキあたりしかいないけれども。

「誰から聞いたかは知らないが鵜呑みにするな。お前への対応は基本的に素だ。意地悪でやっていることなんてほぼない」

「シヨウ、あなたは分かっていますね。今のような発言をするから意地悪と思われるのですよ」

「何でだよ?」

「やれやれ……仕方がありません、説明してあげましょう。いいですか? 付き合い始めて日の浅いナノハ達は除外するにしても、ここ最近のあなたはディアーチェ達と比較すると私に対して冷たい気がします」

「……あのさシユテル、それについてはまあ否定できない部分はある。が、それは単純にお前の俺への接し方が他よりも悪いからだぞ」
「おや？ 電車が駅に着いたようですね。シヨウ、さっさと降りるとしましょう」

颯爽と歩き始めるシユテルに対して俺は大きく一度ため息を吐いた。今みたいな言動をするから必然的に俺の対応が冷たくなっていくのだと理解できないのだろうか。性格的に理解してやっている部分はありそうだが、正直俺が許容できる範囲を見極めていくだけに性質が悪い。

まあ……俺がこいつに対して本気で怒れないだけなんだろうけど。シユテルに対して面倒だとか鬱陶しいと思ったりすることはあれど、俺は子供の頃から彼女と付き合いがある。昔は今ほど茶目っ気がなかったし、無口ではあったが気になったことなどは素直に言う可愛い奴だった。

今でも照れたりしたときはあの頃の可愛さが表に出るだけに心の底から嫌いになれるはずもない。

こういうことを思っても口には出さない。故に人からもう少し素直になれだの言われるのだろうが、今のようなことを素直に言うのもそれはそれで良くないだろう。

そんなことを考えているなんて知らないシユテルは、俺に早く来いと言わんばかりに立ち止まってこちらを見ている。

しかし、俺達はまだ電車から降りたばかりである。この場には行き交う人がそれなりに存在しているだ。その中には急いでいる人もおかしくないわけで……たまたまシユテルにぶつかってしまったこともありえる。今まさに目の前で起きているように

「……………!?!」

「おつと……………」

一連の流れが見えていただけに俺はすかさず倒れるシユテルの手を握った。線が細いなどと言われることがある俺だが別に非力ということはない。自分よりも小柄な女子を助けようとして自分まで転倒する、なんてことは起こらないわけだ。レヴィがたまにやるような

タツクルのような愛情表現の場合は別だが。

「大丈夫か？」

「は、はい……すみません」

「別にいいさ」

そう言つて俺達は歩き始める。

電車という快適空間から出てしまっただけに、言うまでもないだろうが再び熱せられている空気が触れてしまっているわけだ。俺はシャツがへばりつく感覚が好きという物好きではないため、1秒でも早く目的地であるゲームセンター《ステーションアズール》に行きたいのだ。

「……………あ、あの」

「ん、どうした？」

「どうしたもこうしたも……いつまでこうしているつもりなのですか？」

こうしている、というのは……おそらくいつまで手を繋いだままにいるのかということだろう。

何故手を繋いでいるかというのと、思った以上に人が多かったことに加え、また人にぶつかられたりして転びそうになるのも困るからだ。単純にはぐれてしまうのを防ぐという意味合いもある。シユテルならばレヴィと違ってその心配はない気もするので移動速度を速める意味合いの方が強いかもしれないが。

「最悪……目的地に着くまでだな。予想よりも人が多いし」

「先ほどのこともあるので理由は理解しますが……そこで最悪という言葉を選ぶのはどうかと思うのですが。別にあなたの言っている意味を間違つて解釈しているわけではないですが、何というか癩に障ります。というか、この前からあなたは少しおかしいです。私に対してその……スキンシップの取り過ぎというか、距離感を間違つてませんか」

俺の記憶が正しいならばさつきまでこいつは自分に構えとアピールしていた気がする。今の発言が本音ならば本末転倒もいいところだ。

とはいえ、俺も馬鹿ではない。シュテルの発言の理由に見当はついている。

こいつは自分から触れたりするのは問題ないけど、相手からされるのはレヴィとか以外には慣れてないからな。しかも昔から付き合っていることはいえ一応男である俺と触れているわけだ。頬に赤みが差していることから考えても照れているんだろう。

小さい頃は兄妹のような感じだったが、一般的に女子は男子よりも早熟であると言う。これに加えて、シュテルは飛び級している秀才だ。俺と話が合う時点で精神年齢は実年齢よりも上だろう。

ディアーチェも昔とは違った反応をするようになってるし、あいつは場合によってはアマタ達よりも女の子らしい反応をするからな。シュテルにも恋愛面で見られるような女の子らしい部分が芽生えていてもおかしくはない。

それだけにここはすんなりと手を放すべきだろう。日頃からかわれる身としては仕返しで続けたい気持ちはあるが、下手をするとか口を利いてくれない状態になったりと面倒な展開になるかもしれない。それを考えると無難な選択をするべきだ。

「それもそうだな。こんなクソ暑い日に手を繋いでるのもあれだし、お前はレヴィみたいに迷子になったりはしなさそうだからな」

「……レヴィと出かけると時は未だに手を繋いでるのですか?」

「最近はずたりで出かけたりしてないが、出かけることがあれば多分繋ぐだろうな。あいつは昔からすぐ引っ付いてくるし、落ち着きがない。そのうえ身体能力が高いから追いかけるのも一苦労だ。挙句に迷子になったりするとすぐに取り乱して最悪泣く……繋いでる方がこっちとしても気が楽だ」

周囲から見た場合はあれこれと疑われるかもしれないが、ただシュテルやディアーチェに比べればレヴィは面倒を見てくれるだけと思われることが多い。シュテル達とは別の意味で学校では有名なだけにレヴィの性格は割と知られているから。

俺としては今の内に必要以上にスキンシップを取るのはやめてほしいのだが。今はまだいいけど、確実に女らしい体つきに変わって

いつてるみたいだし……数年後には確実に男子にとってよろしくない体になるだろう。ただ性格は変わりそうにないだけに非常に不安だ。

「まあ昔よりはマシにはなってるけどな……なあシユテル」

「何ですか？」

「手を放すんじゃないのか？」

俺はすっかり手から力を抜いているのだが、俺とシユテルの手は繋がれたままだ。恥ずかしいから放してくれと訴えていたはずなのに。

「いえ、大した意味はありません。ただ……あなたに迷子になられては困りますので」

「俺が迷子になるように見えるか？」

「細かいことを気にしないでください。そんなことより早く目的地へ向かいましょう。このままでは無駄に汗を掻いてしまうだけです」

目的地に向かうことは賛成だが……気にするなと言われて、はいそうですかと納得できる展開でもないのだが。これがまだ他の人物だったなら心境を推測することも出来るのだが、シユテルだと考えられる可能性が人よりも多すぎて確信めいた答えが出ない。

普段はからかわれたりしているとしても、ここぞというときはシユテルにちゃんと言うことを利かせられるディアーチェはやはり尊敬に値する。

「……何ていうか、お前とふたりで居るとディアーチェの凄さを改めて実感するな」

「どういう経緯でそのような発言に至ったのかは確信がないので追求しませんが、改めて実感する必要もないでしょう。彼女は我らの王なのですから」

「まあ……」

それもそうだが、と言おうとしてふと気が付いた。今シユテルはディアーチェを我らの王と言わなかっただろうか。ここに居るのが俺ではなくレヴィやユーリならば特に問題はないだろう。

しかし……俺はダークマテリアルズに所属しているわけでもないし、ディアーチェとの関係性も主従的なものはない対等のようなもの

だ。シユテル達と同じ括りにされるのはおかしいだろう。

自分の気持ちに従って指摘しようと思った矢先、タイミング悪く曲がり角から人影が現れ前を歩いてきたシユテルが衝突してしまう。

激しい接触ではなかったが、相手の方が背丈があったようでシユテルの方が飛ばされる。背後に俺が居たこともあり受け止めることには成功したものの、彼女のブレイブホルダーが落下してしまい地面にカードが広がってしまった。

「平気か？」

「はい、大したことでは……」

「紗耶、大丈夫か？」

「う、うん……私は、大丈夫」

視線をシユテルから前に戻すと、そこには1組の男女の姿があった。長い黒髪の女性は白いワンピースを着ているが、男性の方は上下とも真っ黒……それに加えて同色のサングラスをしている。

俺自身も黒系統の服装を好みのであれこれと言いたくはないのだが、それでもこのクソ暑い時期に長袖はない。もしかすると肌が弱いので人並み以上に日焼け予防をしているだけかもしれないが……だとしても見ている側が熱くなる格好だ。

「あの、申し訳ありません」

「い、え……わ、私の方こそご、ごめんなき、い！ あ……カ、カードが……、すぐ拾うか、ら！」

長い黒髪の女性は慌てながらしゃがんで散らばったカードを拾い始める。高校生くらいの年代に思えるが、目元が前髪で隠れているので定かではない。ただ男性の方の背丈や雰囲気からして、少なくとも俺達よりも年上なのは間違いないだろう。

ちなみに余談になるが、シユテルはブレイブデュエルに関することは人一倍熱くなる場所がある。故にカードを傷つけるような真似も傷つけられることも許しはしない。今回の場合はシユテルにも責任があるので問題なかったが、もしもわざとそのようなことをする人間と出会っていたら実に面倒くさいことになっていただろう。

「いえお気遣いなく。私の連れと一緒に拾いますので」

「ざらりと人を使う奴だな」

「そういうことを言っても拾ってくれるのがあなたでしよう？」

まあ……それは否定しない。

俺がシュテルの連れであることは間違いないし、相手側だけが悪いわけではないのだ。何もしないで見ていただけというのは逆に嫌になる。きつとそれは相手側の男性も同じなのだろう。そうでなければ同じタイミングで腰を下ろしたりはしないはずだ。

散らばったカードはそこそこ数があるのだが4人がかりで拾えば瞬く間に回収できるものだ。だが残り数枚となったとき、不意に黒髪の女性が動きを止めた。

「………このカ、カード!？」

どうやらシュテルが愛用しているアバターカードが動きを止めた理由のようだ。この反応や落ちたものがカードだと分かっただけでさっさと拾うとしたことから推測するに彼女もブレイブデュエルをやっているのかもしれない。

そう考えればシュテルのカードを見て動きを止めるのも納得が出来るのだ。何故ならシュテルは全国1位の実力者であるのと同時に最強チームに所属している。知名度でいえばデュエリストの中ではトップに等しいだろう。むしろデュエリストで知らない人間はそうそういないのではないだろうか。

「え、え……うううそ、な……何でシュシュシユ、シュテルさんがここ……こんなところ、に!？」

「お、おい紗耶！　とりあえず落ち着け……って、おい紗耶！」

シュテルのカードを持ったまま失神気味になってしまった女性に俺とシュテルは固まってしまふ。熱中症にでもなってしまったのだろうか……と考えるのが妥当なのだろうが、状況が状況だけに太陽にやられたのか、はたまたシュテルという存在を目にしまった故にやられたのかは分からない。

だがしかし、これだけははっきりと分かる。これからの流れが予定していたものとは別のものになるのだと。

第29話 「憧れと感謝は程々に」

現状を説明しよう。

俺とシユテルは、デュエリストの腕を磨きつつ海鳴市以外のブレイブデュエルの稼働状況などを調査するために山彦市に足を運んだ。

だが目的地であるアズールという店に向かっている途中に人とぶつかってしまい、シユテルのカードが散らばってしまう。相手側も拾ってくれたわけなのだが、その人が熱射病にでもなったのか倒れてしまい……今は空調管理が行き届いているアズールのコミュエリアに居る。

俺達としては目的地に着いたのであれだが……それでも今日のよくな流れでまた来たいとは思わないな。さすがに目の前で急に人が倒れるのは精神的に悪い。

「大丈夫か？」

「う、うん……その、迷惑かけちゃってごめ、ん」

たどたどしさのある話し方をしているが、おそらく先ほど倒れたからこうなっているのではないだろう。見ている限り、この黒髪の女性は人見知りというか内気なタイプに思える。

知り合いで言えばフェイトが最も近いだろう。ただ彼女は慌てたりしなければ話すときは普通なのでこの人の方が内気だろうが。

それだけに……黒づくめの人も大変なことがあったりするんだろうな。まあ今回みたいにいきなりぶっ倒れることはさすがに少ないだろうけど。頻繁に倒れてるならさつき倒れたときに俺達と一緒に驚いたりしなかっただろうし。

「俺は別にいいけど……この子達には謝っておいたほうがいいぞ。また倒れるってんならやめてたほうがいいけど」

「だ……大丈夫、なはず。……そ、そのシユシユテルさん達、さつきはめ、迷惑かけてごめんなき、い」

黒髪の女性は深々と頭を下げる。申し訳なき以外にも凄まじい緊張が伝わってくるが、この人はシユテルのファンなのだろうか。

ファンなら……ぶつかったのがシユテルだって分かって倒れるの

も理解できなくもない。シュテルは知名度的にファンが居てもおかしくないし。ディアーチエのように自分のことを踏んでくれと言うような変態チツクなファンはいないだろうが。

余談になるがディアーチエは身近な人以外からも王さまという愛称で呼ばれて慕われているわけだが……その愛称故に変態チツクなファンが出来ているかと思うと可哀想にもなってくる。あいつが元気がないときはちゃんと励ましてやることにしよう。

「いえ、別に気にしていませんので。私達の目的地もこの店でしたし……そういえば、まだ名乗っていませんでしたね。私のことは知っているようにお見受けしますが、シュテル・スタークスと申します」

「これは……丁寧に。俺は日向疾風、よろしく」

「わ、わわ私はお小野寺さ、紗耶です！」

何とも真逆の挨拶をするふたりである。まあ小野寺という人はシュテルを前にして緊張しているのだろう。目元は前髪で隠れているが、顔に赤みが差しているし。

「何をぼけっとしているのですか。あなたもちゃんと挨拶をしてください。挨拶もできない子に育てた覚えはありませんよ」

「別にぼけっともしてないし、今からしようとしてたところだ。というか、お前は俺の何なんだ？俺はお前に育てられた覚えはないぞ」俺がお前を育てた、ということならまだ分かる。小さい頃は面倒を見ていたわけだし、現在の性格を形成している要因のひとつになっていてもおかしくないのだから。

「私ですか？……そうですね……私はあなたの

最大の好敵手

友

でしょうか」

「おかしなことを言われたわけじゃないし、それで別に良いんだが……何でわざわざ違う意味合いまで込めて言った？」

「きちんと理解しているとは、さすがは私の

最大の好敵手

友

です」

うん、だから別の意味合いを込めないでいいから。絶対俺にしか伝わってないし、お前のそういうところを理解出来るようになるにはそれなりの時間を有するからね。初対面のこの人達じやまず理解できないよ。お前がただ言いたいだけなのかもしれないけどさ。

「まあそれは置いておくとして」

「勝手に置かないでください」

「いや置くから、お前のおかげで話が進んでないからね。あとで話は聞いてやるから少し黙ってなさい」

やれやれ、別の街に来て浮かれているのかいつも以上のマイペースさだな。ここが海鳴市であったならこれほど話の腰を折るような発言はしなかっただろうに。近しい人間以外には基本的に淑女的な振る舞いをする奴なんだから。

それにしても……日向って人はともかく小野寺って人は落ち着きがないな。シユテルのファンだからなのか、一緒に居る俺がどういう人間なのか気になってるのかもしれないけど、露骨に交互に見る必要はないと思うんだが。俺達の関係を疑うのは学校の連中だけで間に合ってるし。

「えつと、こつちが話を逸らしたのに戻すのもあれなんです……俺は夜月翔って言います。お連れの方がさつきから凄まじく俺とシユテルを交互に見ているので説明しておきますが、俺とシユテルの関係はただのクラスメイトなんで誤解しないでください」

「え、あ……べ、別に誤解してたりはしな、い。ただシユ、シユテルさんと仲良しなんだなって思っただけ、で！」

「シヨウ、聞きましたか？ あなたは客観的に見た場合、私と仲良しに見えているようです。なのでただのクラスメイトという言葉に関し撤回を要求します」

キリツとした顔で何を言ってるんですかねこの子は。

というか、何でそんなにマイペースに話すことができるわけ？俺が話を進めようとしているのはお前も理解できてははずだよ。それなのにどうして構ってと言わんばかりに話しかけてくるのかな。

「……話の続きですけど、今日俺達と一緒に居るのは」

「やれやれ、ここで華麗にスルーして話を進めるとは……親の顔が見てみたいものです」

「あのな、お前は俺の親に何度も会ったことあるだろ……頼むから少し黙っててくれ。ちゃんとかとで構ってやるから」

「仕方ありませんね。ここはあなたに華を持たせてあげましょう」

その日本語の使い方合ってる？

いや、まあ日本語の使い方は置いておくとして……冷静に分析するとこれまでとは違った手で嵌められたような気がしてならない。

俺の方から構ってやると言ってしまった以上、面倒臭がった対応をすればきつとシユテルは多様な言葉を用いて責めてくるに違いない。切り返せる手札が今のところないだけに……考えるのはここままでにしよう。下手に状況を悪化させないために目の前のことから片づけるべきだ。

「えーと……俺達の関係性について話してましたよね？」

「そうだな。まあ今のやりとりを見てたら何となく分かったけど……なあ紗耶？」

「え、あ、うん……ただ、のクラスメイトじゃないと思、う」

うん、俺が意図していた方向に話が進んでいないのは分かった。

にしても……小野寺って人、シユテルに対してはまともに話せてない感があるけど俺にはそこそこ行けるみたいだな。口数が少ない感じだから俺の望んでない答えをあえて口にしたのかまでは分からないが。

「はあ……まあ他のクラスメイトよりも親しいのは認めますが、変な誤解だけは勘弁してくださいよ」

「別に誤解してるつもりはないけど……確か夜月くんだったっけ？」

「ええ、そうですけど」

「俺はスタークスさんのことデュエリストだったこと以外これといって知らない。でもデュエルするときの雰囲気と君と居る時の雰囲気はがらりと違うのは分かるし、周囲の人間が疑うのも分かる気がする。俺の予想になるけど、君以外にはそこまでお茶目な感じは出して

なさそうな気がするし」

確かに周囲の人間と接するときには割かし普通ですけど……親しくなった人物の大半は俺みたいな目に程度の差はあれ遭ってると思いますよ。

ちなみにデュエル中にも普段の片鱗はたまに出ています。スカイドツジのときとかぼんやりと佇んでるときもありますし。小野寺つて人がシュテルのファンみたいなので口にはしないでおきますけど。下手な発言をしてキレられたら面倒だし。

「否定はしませんけど、小さい頃から付き合いがあるからその分……っただけですよ」

「へえ、じゃあスタークスさんとは幼馴染なんだ」

「まあ……そう言えなくもないでしょうね」

ディアーチエならば素直に認められそうなことなのだが、シュテル相手だどうにも認めたくない自分が居る。

別にシュテルの事を嫌っているというわけではないのだが……いつも一緒だったというわけではないからなのか、はたまた俺の中の幼馴染というものへのイメージによるものなのか。まあシュテルを見る限り、幼馴染という言葉肯定しろと言いたげな雰囲気はないのでどうでもいいと言えればいいのだが。

「全国1位のスタークスさんの幼馴染と一緒にここに来るってことは……夜月くんも結構強いデュエリストなんだろう?」

「デュエリストなのは認めますが、こいつはこう見えて約束すれば誰とだって遊びに行ったりしますよ。今回も前にした約束を果たすために来てるようなもんですし」

「シヨウ、今のあなたの言い回しは場合によっては私の印象を悪くする可能性があります」

「本音は?」

「あなたの言い方が何だか癪に障りました。ただ別に撤回はしなくていいです」

「だったら会話に入ってくるのやめてもらえますかね。お兄さんは黒ずくめの人と話してるんだから。」

「……あ、あの！」

「どうかさきましたか？」

「ええええっと、その……！ あ、あの……おおふた、りにき、聞きたいことが……」

シユテルが話しかけた途端に凄まじい動揺である。声量もどんどん小さくなって……何とかある意味フエイトの数年後の姿を見ているかのようだ。

いや高町達という良い友人に出会えたのだからさすがに今以上に内気になることはないか。

余談になってしまふのだが、そもそも話……シユテルを目の前にしてそこまで上がってしまうものだろうか。シユテルに対して恋心を抱いている男子、などであれば理解できなくもないのだが。ただぶつちやけてしまえば、シユテルとはあるゲームで全国で最も強い中学生。普通の人が聞けば「へえ、凄いじゃん」くらいにしか思われないので？

まあ考え方によつては、それだけこの人がブレイブデュエルに本気ということなのだろうが。そう考えると開発者側にも関わっている身としては悪い気はしない。

「わ、私……シユシユシユテルさんのデュ、デュエルを見て……その……えっと」

「時間が掛かりそうだから代弁するわ。紗耶は知り合いが開発者側にいるらしくて、ロケテストの時のスタークスさんのデュエルを見たんだ。そのデュエルを見て強くブレイブデュエルに惹かれたみたいで……まあ簡潔に言えばスタークスさんに憧れや感謝の念を持つてるってことだな」

日向さんの言葉に小野寺さんは何度も頷く。勢い良く首を縦に振るので首を痛めやしないかと不安にもなるが、それはさすがに心配し過ぎだろう。

ちなみに必要のない情報かもしれないが、小野寺さんの瞳は月村に近い青色だ。通常は前髪で隠れているので今のように何度も頷いてくれなければ見ることはできなかつただろう。

「なるほど、そうでしたか。先駆者であろうと心掛けていただけに小野寺さんのような方が居てくれるのは嬉しい限りです。ありがとうございます」

「——っ、いいいいえ、べべべ別に……そ、んなに風に言われるようなのこと、じゃ!？」

「いえいえ、あなたのような方が居てくれるからこそ……私を含めたダークマテリアルズは常に頂に居続けデュエリスト達の壁であり続けようと思えるのです」

「シユテル、そこまでにしとけ」

「何故です?」

「この人はお前の言動で一喜一憂している。つまり、お前から色々と言われたら喜びのあまりさつきみたいなきっかけが起きておかしくないわけだ。何より……普段無表情なお前の笑顔はギャップもあって可愛過ぎるからこの人は昇天しかねん」

また気絶でもされたら面倒なことこの上ない。

それに今日は帰るまでシユテルと一緒にのだからシユテルをグラント研究所に送り届けるまでは何が起こってもおかしくない。故に……可能な限り体力や精神力は残しておかなければ。俺が生きて帰るためにも。

「か、可愛い……そ、そうですね。王者のチームの一員があれこれ言い過ぎてしまうと、貫禄や風格を疑われてしまうかもしれません。我が王たるディアーチェにも迷惑を掛けてしまうかもしれませんし、ここは大人しくあなたの言うことに従うことにしましょう」

……こいつ、照れてる?」

いやいやいや、確かに俺はシユテルの笑顔は可愛いといった発言はしたけれども……俺よりも小野寺さんに比重を置いての発言だったと思うのだが。照れさせようと思って口にした言葉でもないし。

シユテルは俺に対して最近自分に対する接し方がおかしいなどと言っていた気がするが、むしろシユテルの方が俺に対する反応がおかしいのではないだろうか。今のだってこれまでなら

『可愛い? 褒めても何も出ませんよ』

『それはナノハも可愛いと言っているようなものですよ。今度彼女に会った際に言っておきましょう』

みたいに答えているはずだし。これが続くようなら……今度ディアーチェにも相談することにしよう。この手のことはあいつを頼るに限る。

「ただ……紗耶の話には続きがあつて、紗耶にはスタークスさん以外にもうひとり会いたいデュエリストが居るんだ」

「もうひとり？ シュテルとのデュエルを見てブレイブデュエルをやりたいって思つたんなら少なくとも上位のデュエリストでしょうね。アバターの恰好や使う得物の特徴とか分かったりします？ ロケテスト時の上位者なら知り合いに結構いますから分かるかもしれません」

「特徴ね……簡潔に言えば、漆黒のロングコートを着てる二刀流の少年だな」

漆黒のロングコートに二刀流。その特徴のアバターを俺は知っている。

とはいえ……世の中は広くデュエリストの数は今ではロケテスト時の比ではない。もしかすると俺の心当たりとは別人の可能性もあり得る。ここはもう少し様子を見るべきだろう。

「も、もつと詳しく言うなら……黒と白の長剣を持つて、通り名は《漆黒の剣士》。多分年齢はシュ、シュテルさんと大差はないと思、う」
「ロケテストの時は噂になってたみたいだけど、本格稼働してからはスタークスさんと同等の実力があるらしいのに詳細不明。最近になつてまたチラホラ噂が飛び交い始めてるみたいだけ……」

……………。

……………アバターの特徴並びに通り名、ロケテストから今に至るまでの経緯。どれから推測しても小野寺さんの探している人物はひとりしかいない。

「どこかのショップに所属してるって話は聞かないし……いったいどこの誰なんだか」

「いったいどこの誰と言われましても」

「ご、ごめんなさい。シユシユシユテルさんは毎日のようにたくさんの人とデュエルするから分かりませんよ、ね」

「いえ、そうではなくて……あなた方の話に嘘がないのであれば、あなた方はすでに目的の人物に会ってますよ。今も私の隣に座ってますし」

シユテルが言い終わると、ふたつの視線が静かに彼女から俺の方へと移される。もしも俺がレヴィのようなタイプだったならば、ここで颯爽と名乗りを挙げていただろうが……俺がしたのはバツが悪そうに顔を逸らすことだけだ。

「え……ええええつと、ややや夜、月さんがしししし漆黒の……!？」

「ふむ……どうやらまだ信じられないといった様子。ならば証拠を見せる他にありませんね。シヨウ、あなたのカードを出してください」

「そこまでしなくても信じてくれそうなんだが。それに……分かった、分かったからそれ以上近づくな」

無表情な人間が迫って来るのはなかなかに圧迫感があるのだから。もし仮にこれがレヴィだったならば顔を鷲掴みしているだろうし、八神堂の主だったならばでこピンやらチョップを打ち込んでいただろう。

ブレイブホルダーから愛用しているアバターカードを取り出してシユテルに渡す。シユテルに渡したのは直接小野寺さんに渡すのが気が引けた、というわけではなく……単純にシユテルとの距離を元に戻すためだ。

「……そういえば、私はあなたのアバターカードを持っていません。予備のカードがあるならください」

「なあシユテル、お前は何のために俺にカードを出させたんだ？」

「問題ありません。会話しながらでもカードを彼女の方へ差し出すことは可能ですから」

それはそうだけど、人に何か渡すときはちゃんと相手の方を見て渡しなさい。人と話すときは目を見て話すことも大切だけど、今に關してはそこまで俺を優先しないでいいから。

「ま、ま……ままま間違いない！ わ、私が探してた……うううそ、まさかこんな偶然って……。し、しかもシユテルさんと一緒にだなん、て!? あわわわ………」

「え……お、おい紗耶！ ここで気絶は不味い……おい、しっかりしろ。気をしっかり持て！」

「……こうなるかもしれないから出したくなかったのに」

「出していなくても同じだったと思いますけどね。さて、彼女が落ち着くためにもいったん私達は離れた方が良いでしょう。何か飲み物でも買いに行きましょう」

「お前……こういう時は至ってマイペースだな」

第30話 「燃える小学生」

何で……何で当たらないのよ！

あたし——アリサ・バニングスは現在非常に苛立ちを覚えている。それもこれも理由は目の前に居る漆黒のロングコートを纏った剣士のせいだ。

「このっ！」

相棒であるフレイムアイズを振るって炎刃を次々と放つ。が、どれもこれも漆黒の剣士は軽々と回避する。

ううん……回避するだけならまだいいのよ。あたしがこんなにも苛立ちを覚えるのは、全ての炎刃を紙一重で避けられるからで。

今あたしが相手をしているのは、全国No.1デュエリストであるシユテルと同等の実力を持つと言われているシヨウさんだ。なぜデュエルをしているかというと、1か月後に開催されることになったデュエリストの頂点を決めるイベント《ブレイブグランプリ》のために個人スキルを磨くためだ。

今日は単純になのは達と予定が合わなかったからってのも理由ではあるけど、あたしの周りでフェンサータイプなのってシヨウさんだけなのよね。機会があれば色々教えてほしいと思っただけに今日はある意味運が良かったんだけど……。

「今の数じゃ足りないってんならー！」

これまでよりもさらに撃ち出す炎刃を増やす。

しかし、シヨウさんは慌てた様子を一切見せることなく、しなるように飛んで来る炎の刃を華麗な動きで回避していく。

同じフェンサータイプでもシヨウさんは、アミタさん達の特訓を受ける前とはいえあたし達5人をひとりで倒したデュエリストだ。あたしなんかよりずっと強いつてのは分かった。けど……だからって負けてもいいなんてあたしは思えない。

そう思うだけに自分の攻撃が当たらないことにも苛立ちを覚えるし、当てることのできない自分の力量にも腹が立つてくる。

「なら……これじゃええッ！」

フレイムアイズを大きく横へ振りつつひと際大きい炎刃を放つ。それまでに飛来していた炎刃を回避していたシヨウさんに攻撃範囲外に逃れる時間はない。仮に持ち前の超反応で回避したとしても体勢は崩れるはずだ。そこにラッシュを掛けることが出来れば……

「……ッ！」

黒い閃光が疾ったかと思うと、あたしの放った巨大な炎刃は一瞬にして弾け飛んだ。防がれる可能性は十分に懸念していたが、魔法でガードではなく剣で斬られるという行為はなかなか精神的に響くものがある。

というか……舞い散る火の粉が演出を掛けてるみたいで癪に障るわ。これじゃシヨウさんの引き立て役じゃない。デュエル中なのに一瞬カツコいいと見惚れてしまった自分に一番腹が立つだけだ。

近接戦闘での勝ち目は薄いと思い中距離から攻撃してこちらのペースに、と思つて戦つていたけど、このままでは勝機はない。

そもそも、前に出て戦わないというのはあたしらしくないわ。でも普通に仕掛けたんじゃ返り討ちに遭うだけ……ヴィータ、あんたのあのカード使わせてもらうわよ！

スキルカードを発動させるとフレイムアイズから凄まじい勢いで炎が噴射される。爆発的な加速を得つつ強烈な一撃を叩き込めるヴィータの愛用技ラケーテンハンマーを発動させたのだ。これが直撃すればシヨウさんとはいえタダでは済まない。

「ぶっ叩いて終わらせてやるわー！」

「君のそういうところは嫌いじゃないけど……終わるのはそつちだ」

まるであたしの行動を読み切つていたかのように、シヨウさんは冷静に剣を構え刀身に魔力を纏わせる。軌道修正できなくもないがそれをすればこちらの攻撃力は一気に激減するはず。生き残れる可能性は高まるけど、ここで逃げるのはあたしの流儀に反する。

怖いってビビつてたら先になんか進めないのよ！

気合の込めてフレイムアイズを振るう。炎を推進力として使つている技なだけにあたしの攻撃の中でも最速の一撃だ。

しかし、目の前にある黒光を放つ長剣はこちらの速度は凌駕する。

掻き消えて見えるほどの速さで迫って来る闇色の一撃。こちらの攻撃も着実に相手へと進んでいるのに、まるで次元が違うのだと実感させられる速度差だ。

そのように認識した直後、漆黒の長剣は最大速度に到達しあたしの視界から姿を消す。それとほぼ同時にあたしの意識も刈り取られるのだった。

★

「……負けた……完璧なまでに負けたわ」

デュエルを終えたあたしは、コミュエリアにある空いていたテーブルに盛大に突っ伏した。

シヨウさんにデュエルを挑む前から実力の差は理解しているつもりだったが、ここまで一方的に叩きのめされると精神的に来るものがある。

何も出来ずに終わったのって初めてのデュエルでヴィータにボコボコにされたとき以来な気がするわ。いや……あのときも格段に実力が上がってる分、ヴィータのときよりも自分の無力さを感じるわね。

全国1位の実力を持つシユテルのライバルであり、あたしが所属するチームT&Hエレメンツをひとりで壊滅させられる化け物。そのような認識はちゃんと持っていた。

しかし、あたし達5人がシヨウさんに敗北を喫したのはアマタさん達やシグナムさんの特訓を受ける前。あの特訓を通してあたし達はさらに強くなったはずだった。

「けど……」

今日の結果だけ見れば自惚れも良いところだ。

あくまで上達したのはチームとしての強さであって、あたし達の個々の強さが一気に強まったんじゃないというのに。

というか……あたしは自分の能力を高めるためにシヨウさんに付き合っって言ったんじゃない。胸を借りるつもりで挑もうってデュエル前は思ってたはずなのに

「ああもう、何であたしはすぐに熱くなっちゃうのよ!」

自分の悪い癖だとは思っているのにどうしても直すことができない。勝負事になるとそれが余計に出やすくなってしまうだけにこのままではなのは達の足を引っ張ってしまう恐れさえある。ブレイブグランプリが開催されるまでの1か月の間でどうにかしなければ。「……って思っても、性格なんてすぐに変えられるものじゃないし。戦い方を変えれば、とも思うけど……自分の好みに反する戦い方をする方が逆にストレスが溜まって熱くなる気がするわ。いったいあたしはどうしたら……ひゃっ!？」

突然感じた冷たさにあたしは悲鳴を上げつつ身を震わせる。

これまでに似たような経験があるだけに冷たさの正体は何となく分かる。問題なのはいったい誰があたしにそれをしたかということだ。状況的に出来る人物はあの人しかいないんだけど……

「シヨウさん……何するんですか？」

「難しい顔してたから、ついな。ほら、これでも飲んで落ち着きな」

「ついって……ありがとうございます」

アリシアやはやて、レヴィあたりだったならそれで納得出来てしまう自分が居るのだが、少なくともシヨウさんはあの子達とは違う分類に入る人間のはず。故についてやりたくなつたといった理由で納得出来るはずもない。

とはいえ、あのままだったなら負のスパイラルによつてあたしの精神は深く沈んでいただろう。それにジューズをもらっただけにあれこれ言うのはあまり良い気分ではない。状況的におごつてもらっているだけに。その分の代金を渡せば言える立場にはなるけど、それはそれで悪い気がする。

「……シヨウさんって今みたいなことするんですね。意外です」

「まあ偶にはね。と言つても誰にでもかんでもするわけじゃないけど……一部の人間に関してはそのまま居ろつて思つたりもするけどね」

親しくなつた相手にしかやらないつてことみたいだけど、あたしにするのはやめて、なのはやフェイトあたりにしてほしいものだ。あの子達ならあたしと似たような反応をするだろうけど、きつと誰にでも

するわけじゃないと言われれば満更でもない反応をするはずなのだから。

そういう意味じゃ……恋する乙女は無敵とか言われるのも何だか分かる気がするわ。

しかし、なのにもフェイトも恋する乙女だと言われれば否定するに違いない。アリシアはやて並みに飄々とした態度にしろとまでは言わないけど、はにかみながら肯定するくらいにはなっても良い気がするんだけど。

このまま何もアピールせずにそのへんの誰かに取られた日には……慰めるのも面倒臭そうだし。まあ本気で取り合いが起こって険悪になるのはそれでそれで嫌だけど。

本当にシヨウウさんのことが好きなのか、それとも恋に恋をしているだけなのか……そこらへんがはつきりが見えてこない年頃と性格な子達だけに今あれこれと動き回るのはやめておいた方が良さだろう。「ところで俺とのデュエルで掴めることはあったかい？」

「……正直に言いますが、あたしは何も出来ずに終わっただんですけど?」

「ふて腐れるなよ」

そう言っただけ俯き気味だったあたしの頭をシヨウウさんは優しく撫でてくる。

子供扱いされているようで癪に障る部分もあるが、心地良さを覚えている自分も居る。昔からレヴィみたいな子と関わってきただけに磨かれたスキルなのかもしれない。

「バニングスはまだデュエルを始めてそう日が経ってないんだ。ロケテスト組から見ても凄まじい勢いで成長してるさ。それに……君はシュテルみたいに勝ち続けることが義務みたいな王者じゃなく挑戦者だろ」

「それはそうですね……それでも負けたらくやしぃんです」
「その気持ちがあるなら強くなれるさ」

シヨウウさんは少し強めに撫でた後、何度かあたしの頭をポンポンと叩いて撫でるのをやめる。

……あたしは何で名残惜しいとか思ってたのよ。そりやまだパパ達とかからは撫でたりしてもらうことはあるけど、あたしはもう小学4年生なのよ。撫でられるために何かするような年じゃないでしょ……ああもう、大体シヨウさんの撫でスキルが無駄に高すぎんのだよ！「多少落ち着いたかと思っただけど……まさかここで睨まれるとは。もしかして……まだ撫でられていたかったのか？」

「なっ——ち、違うわよ！あたしはレヴィとかとは違うんだから子供扱いしないでよね！」

あたしはレヴィみたいになんか犬みたいなキャラじゃないんだから。まあ犬は好きだし、家にも飼ってるけど……断じてあたしは犬みたいなキャラじゃないはず。

「どうどう」

「馬でもないわよー！」

「はいはい、分かった、分かったから……とりあえず腰を下ろしな。ここは君の家じゃなくて人の目があるんだから」

ハッと我に返ったあたしはすぐさま浮かしていた腰を椅子へ下ろす。

頬が熱くなっているが、これもそれも目の前にいる中学生のせいだ。そんな想いを抱いているため、今のあたしはきつとシヨウさんを睨んでいるに違いない。

だがシヨウさんは全く気にした素振りを見せない。鋭いか鈍いかと言えば鋭い人だけにあたしの気持ちは理解していそうなものだけ……理解しているのに涼しい顔をしてそうだと思えるから余計に頭に来る。

「さすがが前にイイ性格してるって言ってたけど、ほんとそのとおりだわ……って、すみません。そのタメ口で話しちゃってー！」

「いや、別に話しやすいならタメ口で構わないけど」
「でも……」

「親しくなれば年齢だとか関係ないさ。口調がどうであれそこに込められた意味が分からないほど馬鹿でもないし……そもそも、俺が昔から付き合ってきた連中に比べればタメ口で話されるくらいどうって

ことない」

ま、まあディアーチエは礼節とか弁えてるけど口調に関してだけ言えば尊大な方だし、シュテルは話し方は丁寧だけど毒舌というか茶目っ気満載なところがある。レヴィに関しては誰にでも気さくに行っちゃうから……あのへんと比べたら確かにあたしがタメ口で話したところでインパクトはないわね。

「……本当にいいんですか？」

「君が断固として嫌だ、ということではなければ」

「分かったわよ、じゃあ好きにさせてもらうわ。あなたの今みたいな言い回し聞くとこっちで話さない方が馬鹿らしくなるし。その代わりに、そっちもシュテル達と話するときみたいに話してよね。あたしだけってのはフェアじゃないっていうか、こっちばかり歩み寄ろうとしてるみたいで癪に障るから」

本当は年下の自分が砕けた話し方をするのに丁寧な感じに返されるのが嫌なだけなんだけど。シュテルみたいに誰にでもそういう感じなら気にならないけど、この人は相手によって砕けた話し方をするし。

「バニングスがそう言うならそうしよう」

「それもなし！　今後はあたしのはアリサって呼びなさい。親しくなったって言うんなら名前呼びなさいよね」

「なかなか強引だな。まあ君……お前らしいとは思いますが。デュエルでもそういうところが出てるし」

さらりと言われたが上げてから落とすような言い回しだっただけになかなか引つかかる言葉だ。こういうところがあるからシュテルと似ているだとか言われるに違いない。

「どういう意味よ？」

「そうやってすぐに熱くなるのがよろしくなくて意味だ。個人的にアリサの戦い方は嫌いじゃないが、ブレイブデュエルは突っ込むだけで倒せるほど甘いゲームじゃない。さっきの俺とのデュエルもそっちが負けた最大の理由は熱くなったところだ」

「それは……そうだけど。でもあんなに避けられたら誰だって頭に血

が昇ってもおかしくないでしょ」

惜しいと思える攻撃はあればまだいいけど、完全に読み切られて回避され続ければムカつくのは当然と言えるはず。それも並行して自身自身に対しても苛立ちを覚えるからあたしは人よりも熱くなってしまうんだろうけど。

「確かにそうだが、お前ももう始めたばかりの初心者じゃないんだ。チーム戦なら周りが助けてくれたり、協力して意味のある一撃を当てる事が出来るだろうが、個人戦では全て自分でやらないといけない。意味のある一撃を当てるためには先を読みながらデュエルを組み立てる力が必要になる」

その言葉を聞いたあたしは冷静にさっきのデュエルを振り返ってみる。

近接戦闘じゃ分が悪そうだから中距離から炎で……つて最初こそ考えてはいたけど、途中から完全にムキになってたわよね。相手がどう避けるだろうとかあんまり考えず、避けられないほど攻撃すればいいって感じだったし。

小技がない連続攻撃。決まれば勝負を決するだろうけど、そんなことが起こるのは初心者同士のデュエルくらいのもだろう。あたしを含めたチームT&Hエレメンツが今後臨もうとしているデュエルにそんなものは起こり得ないはず。

目の前のことばかり考えていた者と常に先を考えていた者……先ほどのデュエルの結果がああなってしまうのは当然としか言えない。

「加えて……俺みたいに同じフェンサータイプが相手ならさつきみたいに距離を開けて戦うのも有りではあるが、射撃が得意なタイプ……特に高火力を持つセイクリッドに対しては基本的に悪手でしかない」

「まあ……距離を取って撃ち合ったところで勝ち目は薄いわよね」
「さらに加えると、高町はともかくシユテルからすればアリサは格好の得物だ。性格的にヴィータに近い部分があるしな。シユテルはああいう手合いを倒すことに長けてる」

愛しのヴィータと近いものがあると言われるのは嬉しい気分にもなるけど、ここでの意味はおそらく猪突猛進するタイプだ的なもので

しようね。そう考えると全く嬉しくないわ。反論したところで言いくるめられるのがオチなんだけど。

「まあシユテルを除いても同じフェンサータイプである俺にもアリサは相性悪いんだがな」

「どうしてよ？ タイプは一緒なんだから技術的な差はあっても相性は五分のはずじゃない」

「アバターの的なもので言えばな。俺が言っているのは性格的な相性だ」

なるほど、確かにシユテルと似ている部分があるシヨウとは性格的な相性は良くないかもしれない。普段の会話はともかく、デュエル時の冷静さに関して言えばあたしよりも格段に上なのだから。

「ふん……どうせあたしはすぐに頭に血が昇るイノシシですよーだ」

「いじけるなって。俺だって最初はアリサみたいに突っ込んで蹴散らす、みたいな戦法だったんだ。今のお前の戦い方は嫌いじゃない。むしろ好きな方さ」

「え………いやいやいや、嘘でしょ！ あつ、今の嘘つてのはあたしの戦い方がどうこうって方じゃないからね」

「分かっている分かっている……だが正直なところ嘘じゃない。最初は2本の剣を持って突っ込んで叩きかける。それが俺の戦い方だったんだ。まあそれじゃ上には行けないってことで1本だけで戦うようにしたんだがな。相手をきちんと観察するとか戦い方がもうひとつあった方が切り札的な意味で有利になるだろうし」

そう言われると……1本で戦っている時よりも2本の剣を操って戦っている時の方が馴染んでいるように思える。

1本の時でもシヨウの戦い方は攻撃的な方だけど、2本目を抜くと格段に攻撃的になってる気がするわ。手数が倍になったってことも理由でしようけど、何ていうか攻撃は最大の防御を体現しようとしている感じもするし。

アバターはフェンサータイプと固定ではあるけど、戦闘スタイルが一刀と二刀流……ふたつあるのはよくよく考えれば脅威だ。それが高い次元になればなるほど、切り替わった時の対応は困難になる。

「ま、俺と同じようなやり方で強くなれってわけじゃないんだけどな」
「でしようね。あたしのアバターには二本目の剣とかはないし、そもそもそっちみたいの実体剣でもないから……というか、同じやり方でやれたとしても性格的に同じ結果は望めないでしようし」

「そうだな。アリサが今後取り組むべきことは、まず最初に考えながらデュエルすることだ。勉強が出来るんなら頭を動かすことは苦ではない方だろ？」

「まあそうだけど……」

「加えて、俺達フェンサータイプは中距離まで戦えるとは言っても本領を発揮するのは近距離。だから敵との距離を詰めるためのステツプインと、自分の距離を保ち続ける立ち回りを磨くことだ。俺の見る限り、アリサは正面からぶつかってくれる相手には滅法強い方だが、距離を取って戦おうとする相手からすれば的になりやすいからな」

戦い方に関して指摘されるのはアミタさん達との特訓があったので初めてじゃないし、遠回しに言われるよりはズバズバと言われた方がマシだと思う方ではあるけど……感情の起伏がアミタさん達と比べてないせいかな、あの時には感じなかったこ感情が湧いてしまう。

けど……言っていることは事実だし、この人はあたしと同じタイプのアバターを使うデュエリストであり、同時に最強の一角でもある。なら言われたことを実践すればあたしは強くなれるはず。強くなれるんだったら多少のことは目に瞑ってやるわ。

「同じチームに高町やアリシア、フェイトといった絶好の練習相手が居るんだから意識して取り組むといい。そうすれば、プレイスタイルを変えないでも今以上に強くなれるさ」

「ええ、やってやろうじゃないの。グランプリまでに確実にレベルアップしてやるわー!」

「その意気だ」

「あのね、いま他人行儀な言い方したけどあなたにも手伝ってもらうんだからね。今以上に強くなれるって断言したんだから責任持ちなさい」

「……はは、何ともわがままだな」

「失礼ね、わがままなんじゃなくて甘えてるだけよ。年上に甘えられるのは年下の特権でしょ」

「商売のことやら冷静に分析する奴を年下とは思えないんだけどな。まあ手伝えるときは手伝ってやるさ。ただし、実力差に心が折れても責任は取らないぞ?。」

「誰に言ってるんのよ、あたしの心はそんなに柔じゃないわ。そのうちボッコボコにしてやるんだから!。」

第31話 「ふたりは小悪魔？」

「何ていうか……君に会うのも久しぶりな気がするな」

私にそう言ったのは、私よりも少し年上の中学生。白いシャツの上に黒い半袖のパーカー、下はベージュのズボンと比較的ラフな格好をしている。まあ私も休日なのでワンピースなんだけど。

どうして私とシヨウさんが一緒に居るかというところ、八神堂に行く途中でばったりと会ったからだ。今日はシヨウさんも私と同じように本を買いに行くらしい。

「私は少し前までアミタさん達に特訓してもらってましたからね。シヨウさんが私達の相手をしてくれてたら今のセリフは出なかったんでしょうけど」

「まったく……君はさらりと毒を吐く奴だな。しかも笑顔で言うあたり本当にイイ性格してる」

何だか毎度のようにイイ性格をしていると言われてる気がするけど、私からすればシヨウさんもイイ性格していると思うんだけどな。必要以上の言葉を言っちゃったり、遠回しな言い方をしたりするわけだから。

「シヨウさんがそういうことを言う人だから言うんです。というか、みんなが居る時はそういうこと言わないでくださいね。私はシヨウさんみたいに誰にでも冷たい言葉とか言ってるじゃないんですから」

「別に誰にでも言ってるつもりはないし、言われてる奴にはそれ相応の理由があると思うんだけど？　というか、何その俺だけにしかこういうことは言わない。俺は特別なんだから納得しろ、みたいな言い回し……この短時間で君に対しては言葉を選ぶ必要はないんじゃないかって思えてきたよ」

そう言う割にシヨウさんの口元は笑っているし、纏っている雰囲気も優しい。

私はなのはちゃん達と比べると異性と話すのが得意ではない方だけど、シヨウさんに限ってはあまり抵抗のようなものは感じない。多分必要以上に距離を詰めようとしてこないからこちらのペースで進

むことが出来るからだろう。

年上の男の人でこんな風に話せるのって恭也さんくらいだったのに……でも恭也さんも普通の人に比べると感情を出す方じゃないし、そういう意味ではシヨウさんと似てるかも。シヨウさんと話せるのは恭也さんでこの手の人に慣れてたからかもしれないかな。

「私は別にダイアーチェちゃん達と話するときみたいに砕けた感じで話してもらって構いませんよ」

「その笑顔の下に何を考えてるか分からないだけに簡単には承諾しなくないところだな。月村はアリサと同じようにお嬢様っぽくはあるけど、アリサほど分かりやすくはないし」

まだ言葉を選ばないようにするのは断言していないはずだけど、なかなかひどいことを言っている気がするのは私だけなのかな。でも……それ以上に今シヨウさん、アリサちゃんのこと名前で言ったよね。

私の記憶が正しければ、シヨウさんは私達のことをみんな苗字で呼んでいたはずだ。

なのはちゃんのことが高町だったはずだし、私のことは月村。アリサちゃんのことバニングスって呼んでたはず。フェイトちゃんやアリシアちゃんは前から顔なじみだったみたいだし、苗字じゃ両方反応しちゃうだろうから名前前で呼んでたけど。

もしかして私が聞き間違っただけだろうか……いや、さすがに二度もアリサと言われたのだからそんなはずはない。私が思うにシヨウさんは理由もなく呼び方を変える人じゃないし、これはアリサちゃんとかあったのかな？

アリサちゃんの呼び方が変わったからといってどうこうということはないけど、アリサちゃんの近しい人間のひとりとしては気になる。

「あのシヨウさん、アリサちゃんと何かあったんですか？」

「どうして？」

「今アリサちゃんのことアリサって言ったじゃないですか。前まではバニングスだったのに」

「ああ……つい先日、1日中一緒に居たことがあってね。主にデュエルをして、そのあと今後の強化すべきこととか話してただけだけど。まあ話してる内にタメ口で話してもいいよって流れになって、それから自分だけタメ口なのはフェアじゃないとか、親しい相手のことは名前前で呼ぶべき……みたいになつたから変わっただけだよ」

アリサちゃんの性格を知っている身としては理解できる流れではある。きちんとした対応も出来るけど、仲が良い相手にはタメ口で話すし。

いつも一緒って感じがするけど、私が知らないところでアリサちゃんも色んな人と交流してるってことだよ。あまりシヨウさんと仲良くしてると、アリシアちゃんあたりがうるさくなる気がするけど。もしも今は強く出ていないのはちゃんやフエイトちゃんあたりも参加したら……賑やかな毎日になりそうかな。

「なるほど、そうだったんですか……じゃあ私の事もすずかっと呼んでくれてもいいんじゃないですか？ ついさつきもつと砕けた話し方していいですよ、って話したばかりですし」

「構わないけど、って言いたいところだけど……君がイイ性格をしているのは知ってるからな」

「……でそういうことを言うシヨウさんの方がイイ性格してます。年下の女の子が歩み寄ろうとしてるんですから普通に応えてくださいよ」

「唇を尖らせると可愛い顔が台無しだぞ」

「適当な気持ちで言われても嬉しくありません」

と、ムスツとした顔でシヨウさんを睨んだけど……数秒の沈黙の後、私とシヨウさんはほぼ同時に嘔き出した。シヨウさんはそのあと「本当イイ性格してる」と言っただけで私の頭を撫でてくる。

自分が子供であることは理解しているし、シヨウさんが年上なのは変えることが出来ない事実だけど……それでも子供扱いしてほしくない気持ちはある。

……それと同時にシヨウさんから歩み寄ってくれてるみたいでちよつと嬉しくもあるんだけど。

近しい人にしかシヨウさんはこういうことはしなさそうだし、私は別に頭を撫でられるのは嫌いじゃない。むしろ……好きかもしれない。レヴィちゃんといった面倒を見ないといけない子が身近にいたせいなのか、何とも落ち着く撫で方をしてくるのだから。

「もう……子供扱いしないでください。外を歩いてるんですから人の目だってあるんですよ」

「そう言う割に嫌がってるようには見えないけど?」

「私はシヨウさんのために言ってるんです。誤解されても知りませんよ。」

「誤解されるにしても兄妹が関の山だろ。クラスメイトに見つかったとしても、さすがに君と恋仲にあるとは思われないだろうさ」

まあシヨウさんは黒髪だし、私もシヨウさんほど綺麗な黒色じゃないけど分類的には黒髪。身長差や年齢差から考えても、周りからおかしな目で見られることはない気がする。

兄妹か……シヨウさんと話しやすいのは私がお兄ちゃんみたいだなんて心のどこかで思ってるからなのかな。もしも私にお兄ちゃんが居たらこんな感じになりそうな気はするし。シヨウさんほどイイ性格はしてなくていいけど……。

「……今度は何を笑ってるんだ?」

「別に大したことじゃないですよ。ただ……兄妹に見えるのなら今度からシヨウさんのことお兄ちゃんって呼ぼうかなって思っただけで」
「それはぜひともやめてくれ。今みたいにふたりつきりならまだしも、周囲に誰かしらいたら面倒なことにならざる気がしない……」

確かにシヨウさんによく絡むというか相手をしてほしいアリシアちゃんやはやてちゃん、シユテルちゃんあたりの前でお兄ちゃんとか言ったら大変だろうな。なのはちゃん達の前でもあれこれと言われそうな気がするけど。

「じゃあ、すぐかって呼んでくれます?」

「はあ……天使の皮を被った悪魔っていうのは君みたいな子のことを言うんだろうな。分かった、名前に関しては善処しよう。その代わりに……みんなの前でお兄ちゃんとか言ったら容赦しないからな」

「それでいいですよ、お兄ちゃん♪」

「やれやれ……清纯そうに見えてとんだ小悪魔だ。君に関しては別の意味で言葉を選ばないといけない気がするよ」

小悪魔だなんてひどいなあ。私がここまでやる相手なんてシヨウさんしかいないのに。たまにアリサちゃんとかをからかったりするけど、割とすぐにやめちゃうから。

だけど今日こんな風にしてみても何となくアリシアちゃん達の気持ちがかかったかも。普通に話すのも楽しいけど、こういうやりとりには別の楽しさを感じるし。それに……なんだかんだでシヨウさんはきちんと反応してくれるから優しい人だなあとも思ったりもするけど。

そんなことを思いながら他愛もない話をしている内に目的地である八神堂が見えてきた。

シヨウさんがぼそりとはやてちゃんは地下に居てほしい、なんてことを呟いたのを私は聞き逃さなかったけど、それを咎めるような真似はしないでおくことにした。多分私の勘だけど、そんなことをしなくてもはやてちゃんならシヨウさんの存在を嗅ぎつけそうだし。

「……ふう」

「ふふ、そんなに身構えなくても」

「顔を合わせる度に何かしらされる身にもなってくれ。あいつなら店先に現れた瞬間に満面の笑みを浮かべながら、飛びつくように抱き着いてきてもおかしくないんだから」

「確かに簡単に想像できる光景ではありますけど、それだけははやてちゃんがシヨウさんのことを好きってことじゃないですか」

「もうすぐすかちゃんは何言うとするんや。そないなこと言われたら恥ずかしいやないか」

突如聞こえた声に振り返ってみると、そこには愛用しているタヌキさんパーカーのはやてちゃんが顔を赤らめながら悶えていた。

えっと……結構気配とかには敏感な方だったりするんだけどな。はやてちゃん、いつの間に私達の背後に現れたんだろう。まあはやてちゃんならこういう現れた方をして納得しちゃってる自分が居る

けど。

「確かにわたしはシヨウくんのこと好きやし……あ、もちろんLikeやのうてLoveの方やで。そのへんの子と一緒にされるんは心外や。何たってシヨウくんとかどういふ風に付き合い始めて、そんで結婚して……子供は何人産もうとか、老後はどうやって過ごそうかまで考えとるんやから！」

「別に誰もお前と他人を比べたりしてないし、今のところお前の考えてるような未来は訪れないぞ。結婚するならお前より月村を相手に選ぶし」

「な、なんやて?!」

はやてちゃんは盛大に崩れ落ちる。前からノリが良い子というのは知っていたけど。やはりシヨウさんを相手にしているときが最も力を入れてるよね。

「わたしの方が付き合いは長いはずなんに何でするかちゃんに負けるんや。いったいわたしの何が劣ってるって言うんやー」

あはは……はやてちゃんは相変わらず元気だなあ。

私じゃこんなハイテンションにはなれないよ。元気や明るさといった部分なら完全に私の負けかな。あと頭の良さとか……こう見えてはやてちゃんってすでに大卒の天才だし。冷静に考えると私のはやてちゃんに勝つてることって身体能力くらいじゃないや……。

「いや、色々と劣ってるだろ。落ち着きとか落ち着きとか落ち着きとかか」

「色々と言った割に落ち着きだけなん!? というか、そこだけでわたしはすずかちゃんに負けたんか……シヨウくん好みの料理とか作れるように努力しとるって言うのに。……ぐす」

「そのへんの努力をする前に性格を直す努力をしてこい」

「いやいや、性格を変えてもうたらわたしがわたしで無くなってまうやん。いくら好きな人のためとはいえ、自分を曲げる気はあらへんで」

ドヤ顔でそう言い切るはやてちゃんは、直接対象になっていない私でも正直うっとうしいなと思ってしまった。きつとシヨウさんは私

よりもはるかに内心グツグツ煮えかえっていることだろう。

「というか、シヨウくんもいい加減わたしにデレてくれてもええんや……ちよつ、無視して中に入ろうとせんといて!? わたし、こう見えて傷つきやすいんやで!」

はやてちゃんの叫びにシヨウさんはノーリアクションを決め込み、店の中に歩いていく。相手をしてほしいはやてちゃんは必然的に彼の後を追う……疎外気味の私は静かにそのあとを追った。疎外なんて言葉を使ったけど、私がふたりの世界に入ろうとしないだけなんだけど。

正直に言ってしまうと、あの会話に入っていくのは疲れるっていうのも理由ではあるけど……ふたりのやりとりを見てるのって結構楽しいんだよね。

「なあなあ、わたしが悪かったからそう怒らんといて。せつかくの可愛い顔が台無しや」

「だったら俺の可愛い顔よりもお前の顔を可愛くしてやる。月村……すずか、悪いがそのへんからペンを持ってきてくれ」

「ペンやて!?! わ、わたしのおでこに肉とでも書く気なんか!」

「ふん、誰が肉なんて書くか。お前なんかひげを書いて鼻のてっぺんを塗りつぶすだけで十分だ。書くにしてもタヌキって書いてやるよ」
「な、何やろ……ひどいことされるはずなのにそこまで嫌じゃない自分がおる」

「いやいやいや、はやてちゃんはそこはちゃんとやめてって言おうよ。はやてちゃんがタヌキ好きだってのは分かるし、芸人的な扱いに喜びを感じてるのかもしれないけどさ。でもはやてちゃんは女の子なんだよ。シヨウさんのことが好きだっていうならもつと慎みのある女の子になろうよ!」

「さて、楽しいやりとりはここまでにしてお仕事しよか。見たところふたりはデュエルしに来たって感じやないみたいやけど、今日はどういう本をお探しなん?」

「えつと……私は今日は工学系の本を見に来たんだ」

「へえー、すずかは工学に興味があるのか」

「あ、はい。お姉ちゃんが機械とか好きなんでその影響で……シヨウさんも工学に興味あるんですか？」

「あるというか、俺の父さんや叔母は技術者だからな。知り合いにもその手の人間は多いし……昔から触れる機会は多かったから将来の仕事のひとつとしては考えてるよ」

シヨウさんの言葉に不意に去年学校でやった授業を思い出す。そのときの授業内容は将来の夢について考えてみる、ということ。私はそのときに具体的な職業までは考えきれなかったけど、工学系に進むかなと思つた。今もこのまま進めば工学系に進もうと考えている。

「なら私と同じなんです。私は今のところはつきりとした職業までは考えきれないですけど、シヨウさんはもう考えたりするんですか？」

「いや、俺もはつきりとは決まってるよ。ただ父さん達は最新技術……君もやってるブレイブデュエルの開発に携わった人間だからね。進むとしたらそういう方向になるかな。家にある本もそっち方面の物が多いし……興味あるって顔してるね。別に貸すのは構わないし、持って帰ったりするのが面倒ってことなら家に読みに来ても構わないよ」

「え、いいんですか？」

「まあ君なら好き勝手家の中を散策する、なんてことはないだろうからね」

男の人の家に行くのは緊張するけど、本を読みに行くということであればそこまで緊張はしない気がする。確か聞いた話ではシヨウさんの従妹であるユウキさんも居るらしいし。

ちなみに何でユウキさんのことを知ってるかというのと、彼女がホビーシヨップT&Hのイベントデュエルを手伝ったりしてくれている存在であり、また爆発的な速度で成長しているデュエリストとしてそれなりに有名だからだ。

「じゃあ……今度お邪魔してもいいんですか？」

「ああ。ひとりで来るのがあれだったなら……高町達と一緒に構わないよ。ただし、うるさそうな奴だけは抜いてくれ」

「あはは……それをすると私があとで色々と言われちゃうんですけど」

「何かを得るためには何かを失うものさ」
それはそうですけど、私からすればアリシアちゃんとかと一緒にでもあまり困らないんですが。困るのはショウウさんになるだけなので……まあお邪魔させてもらうことを考えると簡単に実行できることでもないんだけど。

それにしても……急にはやてちゃんが静かになったような。一通りショウウさんと会話して満足したみたいに見えたけど、いつものはやてちゃんなら会話に入ってきてるはずだよな。

そう思っではやてちゃんの方に視線を向けてみると、これまで見たことがないくらいムスツとしている彼女の姿が見えた。

「は、はやてちゃん……どうかしたの？」

「べ・つ・に……どうもしてへんよ。ただショウウくとすずかちゃんは仲良しさんやなって思っただけや。いつの間にか呼び方も月村からすずかに変わつとるし、あつさりとお家にお呼ばれされるんやから」
「おいおい、ふて腐れるなよ」

「ふて腐れてへんもん。ただ年相応に自分の気持ちを表しとるだけや」

今までにはやてちゃんの色んな感情を見てきたけど、ここまで拗ねてるというかいじけてるのは初めてだ。いつもはなんだかんだで冗談だったりするのに、今回に限っては本気だということが分かる。

はやてちゃんでもこういう顔するんだ……私とショウウさんが仲良くしてるのを見て嫉妬したってことだよな。それだけははやてちゃん
はショウウさんに真つすぐなんだ。もしかすると普段の振る舞いも恥ずかしいのを隠すための演技だったりして……。

「イチヤイチャするんやったら、よそでやってくれへん」

「大卒なんだからもう少し大人になってほしいんだがな。俺はあまりお前のそういう顔は好きじゃないし……納得できない部分もあるが、俺が悪かったよ」

ショウウさんは大きなため息を吐くとはやてちゃんに近づき、そつと

手を彼女の頭の上に置いて軽めに何度か叩いた。

だがはやてちゃんの表情に変化はない。そのためショウさんは優しく撫で始める。すると少しずつはやてちゃんの顔に明るさが差し始め笑顔に変わった。言い方は悪いかもしれないけどチョロくはないだろうか。

でも……私ははやてちゃんにはチェスを使った特訓をしてもらっただけに頭の回転が良いのは知ってる。だからここに至るまでを計算でやってる可能性は十分にありえるんだよね。

もしもそうなら……はやてちゃんこそ本当の小悪魔だと思う。アバターやスタイルとの出会いは運命って前に言ってた気がするけど、はやてちゃんのアバターはR・O・G。その背中には羽があるわけだけど……もしかして何か繋がりがあつたりするのかな？

「しゃーないなあ、今回は水に流すことにしようか。その代わり、すぐかちゃんがショウくん家に行くとき一緒にいかせてもらおうで」

「はあ……好きにしろ。ただし、好き勝手動き回るなよ。俺ひとりで生活してるわけじゃないし、レーネさんの部屋にあるものを壊したら一大事だからな」

「あんなあショウくん、わたしかて時と場所に合わせて行動は変えるで」

「だったら……いや、言ったところで無駄か。言っただけなら苦労なんてしてきてないし」

「ごうごう、ため息ばかり吐いてると幸せが逃げてまうで」

「あのな……誰が吐かせてると思ってるんだ？」

「そこは問題あらへん。ショウくんから出た幸せがわたしがもらつてるから結果的にプラマイゼロや」

「いや俺からすればマイナスだから」

あはは……ごうやってみてると私なんかよりもずっと仲良しに見えるんだけどな。やきもちを妬いたりする必要はないと思うんだけど。

ただはたから見た場合、言っただけ悪いけど私の場合よりも兄妹に見える可能性はある。

とはいえ、今の私に出来ることは見守ることだけだし……しばらくは今の立場に居ることにしようかな。今後のことはそのときになって考えれば良いというか、考えるしかないだろうし。

第32話 「金色の姉妹」

世の中にはあまり理解出来なかったり、共感できないことがそれなりにある。

私にとってその代表と言えるものは恋愛だ。人を好きになるということは素敵なことだと思うし、いつかは自分も誰かを心から愛したいと思う。

しかし……目の前に居る人物を見ると複雑な気持ちになるのが現状なのですが。

「はあく……一向に進展しない」

私の前で盛大にだらけている……いえ、突っ伏しているのは私と幼い頃から寝食を共にしてきた人物。簡潔に言っつてしまえば、私の双子の姉だ。名前は黒崎フアラ、綺麗な長髪と整った顔立ち、それに抜群のスタイルと妹の私も素直に認める美少女……なのだが。

学校といった場所では真面目ですが冗談も言っつたりする社交的な感じに振舞っています……今のように近くに私しかいないと途端にだらしなくなるから困ります。学校の者に見られれば落胆されたとしてもおかしくないです……そもそも、喫茶店に居るのですから突っ伏すのはやめてほしいのですが。

「セイ、私どうしたらいいのかな？」

「素直に告白でもすれば良いではないですか」

「なっ——そそそんなこと出来るわけないでしょ！ まだそんなことが出来る仲じゃないし、物事には順序つてもものあるんだから……いつかはしなきゃって思うけど」

頬を赤らめながら髪の毛を弄る姿は、私の目から見ても可愛いと思える。大抵の男子なら一目惚れをしてもおかしくないのではないだろうか。この手の話になった時に毎度のように見ていると可愛さよりも鬱陶しいというか、苛立ちのような感情の方が勝るのが現実ですが。

「いつか、いつかと……そんなんだからフアラは一向に夜月と仲良くなれないですよ」

「し、仕方ないじゃない。セイみたいに夜月くんと一緒のクラスってわけでもないんだし、話すきつかけとかもないんだから」

「はあ……」

私の性格が男勝りなのか分かりませんが、誰かと仲良くなりたいたい口にするのに言うだけでこれといった行動を起こさないのはどうかと思います。恥ずかしいのは分かりますが、自分が動かなければ何も変わりはないというのに。

昔はファラのようにになりたい……などと思うこともありましたが、今となつては一卵性ではなく二卵性の双子で本当に良かったと感じます。髪色に関して同じ金色ですが、私はファラよりも中性的な顔立ちをしていますし。

ただ……食べているものは同じはずなのにどうして差が生まれてしまうのでしょうか。

私はスレンダーな体型をしていますし、ファラも一見そのように見えるのですが……着やせするタイプ故に脱ぐとなかなかのものがあるのが現実。ファラの方が女性らしい顔立ちをしているのは認めますが、同じ日に生まれた姉妹なのですからそこに差を付けなくても良いものを。

というか……なぜ私はファラとふたりで出かける際は男性らしい恰好をしなければいけないのです。最初はファラに悪い虫が近寄ってきて困るので承諾していましたが、こう精神的にストレスを感じさせられることが多いと嫌になってきます。

「まったく……ファラは女々しいことこの上ない。告白してくる男子は大勢居るのですから、いつそのこと誰かと付き合ってみれば良いのではありませんか」

「なっ……セイには色々相談しているし、自分が女々しいのは認めるけどそういう言い方はないんじゃないかな。大体セイは好きな人がいないから私のことを女々しいとか言うのよ」

「確かに私には好きな人はいません……が、あなたが夜月を好きになったのはいつのことですか？」

今の季節は夏。ファラが私に夜月のことについて話すようになって

たのは今年の春頃……少なくとも1年の4分の1ほどの時間は流れているわけです。それだけの時間がありながら関係性に何も進展がないというのは、本人の努力が足りないばかりか何もしていないのと同じではないのでしょうか。

「好きだ好きだと言うのなら何かしら行動に移したらどうなのですか。何もせずに仲良くなりたいたいなどと矛盾していると思わないのですか？」

「うう……だって」

「言い訳なんか聞きたくありません。そもそも、なぜ夜月なのですか？」

「フアラだって彼の周りにシユテル・スタークスやデイアーチェ・K・クローディアといった存在が居るのは知っているでしょう」

聞いた話によれば小さい頃から付き合っているといえますし、また学校でもよく話しているところを見ます。親密さで言えばフアラとは雲泥の差があると言えるでしょう。

ちなみに夜月は1学年下のレヴィ・ラツセルとも親しいようですが、彼女の場合は友人としての粹よりも上に行く気がないので今回は口には出さないことにします。

「彼女達は飛び級で私達と同学年になっていきますから外見的な魅力ではフアラに軍配が上がるでしょうが、それも数年後には同等……下手をすれば逆転される可能性があります。長年の片想いが成就する、という物語は人に感動を与えるものではありませんが……フアラで考えた場合、長期戦になればほぼ失恋するでしょうね」

「いつもどおりのトーンで失恋だとか言わないでよ！ 私だってそれくらい分かってる、分かっているわよ。でも仕方ないじゃない、気が付いたら好きになってたんだから。恋は理屈じゃないの！」

恋は理屈じゃない……確かにそうなのかもしれない。でも今の私にはやはり理解できない言葉だ。

故に……今のままでは私とフアラが理解し合うのは難しいのでしようね。私が誰かに恋をするか、それともフアラが変わるか。いずれにしろこのままこの話を続けるのが得策ではないことは確かです。早々に切り上げることしましょう。

「やれやれ……そこまで言うのなら多少なりとも進展させてもらいたいものです。現状では私以下なのですから」

「言われなくてもそのつもり……ねえセイ」

「何ですか？」

「今何て言った？ 私よりもセイの方が夜月くんと親しい、みたいなこと言われた気がしたんだけど」

目の前に居るフアラはにこやかに笑っている。

しかし、そこにあるのは嫉妬めいた黒い感情……笑っているのに笑っていない顔というのはこういう顔のことを言うのでしょうか。

もしもこれを学校の者が見たら走り去るとまでは言えませんが、少なくとも怯えるでしょうね。少し前までは怒るときは怒ってますよと言わんばかり顔だったはずなのに。なぜこうもより怖い方へ進んでしまったのか。夜月への気持ちの原因なのなら……将来的に付き合い始めた場合、夜月の身が心配でなりません。

「確かに言いましたが……それが何か？」

「何か？ ってことはないんじゃないかな。セイは私の気持ち知ってるはずだよ？ なのに私よりも夜月くんと仲良しってどういうこと？ いつからセイはそんなに性格の悪い妹になったのかな？」

「誤解しないでください。私はあなたと違って彼とは同じクラスなのです。故に顔を合わせれば挨拶くらい交わします。あなたよりも親しいのは当然でしょう」

私の言葉に理解が及んだのかフアラから黒い何かは消滅する。どこか怯えたような素振りもありましたが、それは気にしないでおくことにしましょう。私だって人間なのですから姉が愚かな発言をすれば目つきが鋭くもなるのですから。

「うー……昔はお姉ちゃんお姉ちゃんって私のあとを付いて回る可愛い妹だったのに」

「そうやってすぐにだらけないでください。それと勝手に人の過去を作らないでもらえますか。私にはそのような記憶はありません」

「ぐす……最近のセイはお姉ちゃんに優しくない。前はもつと甘やかしてくれてたのに」

なぜ私はこれといって尊敬が出来るところがない姉にこのように言われなければならないのでしょうか。

私の記憶が正しければ……学校がある日は毎朝のように起こしてあげていますし、親が不在の時は料理や掃除も私がしているのです。それに今日のように聞いても何の面白みもない恋愛話に最後まで付き合おうとしているのですから……十分に甘やかしていると思うのですが。

「ああー暑かった。毎日のように思うことだけど、やっぱり日本の夏は暑いね」

「はいはい、話はちゃんと聞いてやるからまずは空いてる席に座れ。入口で止まるのは邪魔になる」

「む……そうやっていつも子供扱いする。そんなこと言われなくても分かってるよ」

と、不意に声が聞こえた。喫茶店に居るのだから普段なら聞き流すところですが、聞こえてきた中に先ほどまで話題になっていた人物の声が混じっていただけに、私とファラの視線は自然とそちらに向く。やはり夜月のようなですね。まあ同じ街に住んでいるのですからこういうこともありえるでしょう。隣に居る少女は見たことがあります。せんが。

雰囲気的に夜月と小柄な黒髪の少女はそれなりに親しい間柄のように思える。個人的に少女の顔立ちは夜月と似ている部分があるように思える、似ていないと言われれば似ていないとも言える。髪の色や背丈の違いで見れば兄妹のように見えなくもないが……。

「何なのあの子……ちよつと夜月くんと距離感近いんだけど」

ファラの機嫌が凄まじく悪くなっていることから察するに妹という線は捨てるべきだろう。恋する乙女だけに特定の人物が関わる判別に関して私よりも上なのだから。

夜月達は私達の居る席から見ようと思えば見える席に腰を下ろし、店員にそれぞれ注文する。

「シヨウ、今日も楽しかったね。明日はどこに行こつか？」

「今日はまだ終わってないし、明日のことは明日決めればいいだろ」

「今の内に決めてたら明日の時間を有効に使えるんじゃない……もしかして、明日はシユテル達と何かあるの？ それともなのはちゃん達？」

「高町の名前を出した瞬間に表情を変えるのやめてほしいんだが。何度も言ってるが別に俺はロリコンじゃない」

店内には夜月達の他にも客が大勢居るので何を話しているのかまでは聞き取れることは出来ない。けれど私は夜月と挨拶程度ではあるが会話をする機会があるだけに、普段よりも楽しそうにしているのは分かる。

「ねえセイ……あの子、夜月くんのこと下の名前で呼んでたわよね？」
「私はよく聞こえませんでしたからその問いには肯定しかねます」

「呼んだのよ。しかも……くん付けとかじゃなく呼び捨てで。あの子何なのかしら……今日も楽しかったね？ 明日はどこに行こうか？
まるで毎日のようにデートしてますって発言してるんだけど」

この人の耳はいつたいたいどうなっているのだろうか。店内には夜月達より格段に大きな声で話している客も居るといふのに……。

まあ……それはどうでもいいとして、私は一足先に帰ってはダメでしょう。正直今のファラの相手はこれまでの経験から面倒な状態にあると判断できるだけに相手したくありませんし。

「そういう割には……結構なのはちゃん達と仲良くしてるみたいだけど？ あの子達が良い子なのは付き合いの短い僕でも分かるけど、小學生に色目を使うのはいかがかと思うなあ」

「いつ俺があの子達に色目を使った？ ……まあお前みたいにこういうことを言ってくる奴よりはあの子達の方がマシではあるが」

「なっ……僕だってシヨウミたいにすぐ意地悪なことを言う子よりあの子達の方が良いよ。そういう性格だから未だに彼女のひとつも出来ないんだ！」

「彼氏が出来たことない奴に言われても全く心に響かないんだが」

何やらケンカが始まったようにも思えますが……私の姉にはイチャついていてるようにしか見えていないようですね。どんどん表情が険しくなっていますし、本気で先に帰りたくなってきました。ただ

普通には帰ることは出来ないでしょう……夜月に押し付けければチャンスはあるかもしれませんが。

あとでフアラから何か言われる可能性はありますが、夜月と話せるチャンスを作ったことになるのですから文句ばかりは言わないでしょう。そのチャンスを活かさずに終わった場合は泣きながら怒られる気がします。それで今回の恋が終わればそれはそれで収穫があります。黒いフアラが出て来なくなるわけですし。

……と考えたいところではありますが、私は誰よりもフアラという人間を知っています。迂闊な行動をすれば今よりもさらに面倒なことになりかねません。そう考えると聞き役としてこの場に居座ることの方が無難勝つ賢明な判断のように思えます。

「ねえセイ、あの子は夜月くんの何なのかな？」

「私を知るわけじゃないでしょう」

「だよ。セイが知らないんなら彼女って可能性は低いだろうし、同じ学校の子でもないよね。あれだけ夜月くんに馴れ馴れしく接してるなら学校では目立つはずだし、というか私が知らないわけじゃない……スタークスさん達の関係者？ でも髮色的に姉妹って感じじゃないわよね。本当あの子何なの？」

私からすればあなたの方が何なのと言いたいのですが。現状ではあちらの黒髪の子の方が夜月と親しいのは明確。対してフアラの方は挨拶さえ交わしたことがないと言っても過言ではないのですし。

「もしかして他校の子？ まあ夜月くんはカッコいいし、他校の女子が目を付けてもおおかしくはないけど……でもパツと出てきた……しかもどこの馬の骨とも分からない小娘が夜月くんに馴れ馴れしくするのはおかしいわよね」

「フアラ、さすがに話したこともない相手をそこまで貶すのは人としてどうかと思うのですが……」

「え？ 別に貶したりしてないよ。私はただ自分の気持ちを素直にセイに言ってるだけだもの。別にあの子に対して言ってるんじゃないわ」

あの子から全く視線をずらすことなく言われても説得力がないの

ですが……。

というか、この短時間でフアラの中の何かが1段階進化したように思えてならない。ああ……なぜ私はこんな姉を持つてしまったのだろう。こんな姉と一緒にでは恋愛というものが良いものとは全く思えてこない。

「ああもう、ほんとシヨウってあれを言ったらこう言うよね。僕はまだ従妹だから良いけど、他の子にもそんな風にしてたら嫌われるよ」「安心しろ、相手によって言葉は選ぶ。ここまでぶつちやけて言うのはお前やシユテル達くらいだ」

「……何だろう、親しい関係だって言われてるんだらうけど素直に喜べない」

何やら元気に話していた少女が大人しくなったように思えますが……赤面はしていないようですし、少なくとも夜月が齒の浮くような言葉を言ったわけではないようですね。

もしもそんな言葉を言っていたなら……私は何も言わずにこの場を去る。姉が周囲に迷惑を掛けるだろうとか、あとで姉があれこれと言ってくるだろうと思いますが関係ありません。私は私の身を守るためにこの気持ち大切にします。

「まあいいや。じゃあ明日も暇だったなら今日みたいに僕と一緒にどこかしらのショップに行こうね。グランプリまで時間もなくなってきたるし」

「はいはい、分かった分かった」

「やる気が感じられないんだけど！ もう……少しは僕がカッコいい従兄だって言えるようになってよね」

「あのなユウキ……俺は自分を偽らない」

「言葉自体はカッコいいけど、今回の場合はカッコ悪いから！」

少女の元気が戻ったようですが、怒っているように見えるだけに……私にどう見えたところでフアラからすれば結果は等しい気がします。あれこれ考えるだけ無駄な気さえしてきました。心を空にして流れに身を回せるほうが楽かもしれません。

そう思いながら意識をフアラへと戻すと、そこには先ほどと打って

変わって表情の和らいだ彼女の姿があった。いったいどうしたというのだろうか……。

「うん？　どうかしたのセイ？」

「いえ……大分落ち着いたように見えたので」

「ああうん、ちよつと取り乱したもんね。でももう大丈夫だよ。あの子、夜月くんの従妹みたいだし。従妹ならあの距離感でもおかしくないよね……まあ私の見る限り、一方通行な気持ちがありそうだから要注意ではあるけど」

私は別に悪くないのですからその笑っていない笑顔を向けなくてください。というか、そこまで人の気持ちを理解できるのならもつと違う方向で使ったらどうなのですか。そうすれば夜月との関係にも変化はある気がするのですが。

「そういえば……ショップに行こうだとかグランプリだとか言っていた気がするけど、いったい何のことなのかな？」

「それは……多分ブレイブデュエルというゲームに関することだと思います。夜月はそのゲームの関係者に知り合いが多いと耳にしたことがありますので、イベントの手伝いなどをしてもおかしくないでしょうし」

「なるほど……ねえセイ、そのゲームって誰でも出来るのかな？」

「出来るのではないですか。子供から大人までやっているそうですし……もしや」

「うん、そうだよ！　私もそれをすれば夜月さんと共通の話題が出来るわけだし、そうなれば関係も進展しやすくなるよね。学校で偶然そういう話をしてるところに混じって行ったり、ショップで偶然会ってそれで……えへへ♪」

何を想像しているのかわかりませんが、おそらくあなたが今考えているような展開にはならないと思いますよ。というか、今すぐその恥じらいのある笑顔やめてください。この流れで見ると最高に不快です。

「よし、そうと決まれば明日から私達もショップに行くよ！」

「いやいや、何が決まったのですか？　そもそも、何故私まで一緒に行

くことになっているのです?」

「だってセイ暇でしょ? 付き合ってる男の子とかもないし」

実際に交際している相手はいませんし、明日は予定が入っていないので否定はできません……が、それでもこの愚姉に言われるのはムカつきます。

とはいえ、ここでひとりで行けと言ったところで1日中行こう行こうと駄々をこねられるのが関の山。それにひとりで行かせることに成功してもそれが原因で人様に迷惑でも掛けられたら……。

「……分かりました。ですが行くのはやることをやってからですよ」

「うん、もちろんだよ。ありがとうセイ、大好き!」

「分かりました、分かりましたから暑いので引っ付こうとしないでください!」

「姉妹のスキンシップなんだから照れなくても」

「別に照れてなどいません。単純に鬱陶しいだけです」

第33話 「王さまと一緒に」

ブレイブデュエル正式稼働後初の大型イベント《ブレイブグランプリ》の開催は日に日に近づいてきている。まだ時間的には余裕があるけど、優勝候補はデュエリストの筆頭であるシユテル達のチーム《ダークマテリアルズ》だろう。

私達もアマタさん達との特訓のおかげで力量は付いてきてる。でも私達は常に全力全開でデュエルに臨んでる。多分はたから見た場合、シユテル達みたいに余力があるわけじゃない。ヴィーチャちゃんが率いる八神堂の人達も強者揃いだし……今のままじゃきつと優勝には届かない。

「うーん……どうやったたら今よりももっと上手くなれるかな」

私のアバターカードはシユテルと同じセイクリッドタイプ。他のアバターよりも火力と防御力に優れてる。そこを活かせるように日々デュエルに励んではいるけど……最近は何となく気がする。みんなと比べるとあまり成長出来てない気がする。

フェイトちゃんやアリシアちゃんは前から頼りになる存在だったし、私よりも経験があるから実力が上でも不思議じゃない。でもアリサちゃんやすずかちゃんとは同じ日に始めた。だけどここ最近のふたりの成長は……特にアリサちゃんの成長の速さはタイプの違う私から見ても目を見張るものがあるんだよね。

聞いた話じゃ頼れる先輩に面倒を見てもらってることだけど……それって絶対シユウさんのことだよ。私達の周りでアリサちゃんと同じフェンサータイプってシユウさんくらいだし。それにシユウさんの実力なら的確なアドバイスをしてくれるだろうからアリサちゃんの成長速度も納得できる。

「……………何かもやもやする」

チームメイトとしてアリサちゃんの実力が上がるのは喜ばしいことだ。

でも……その何ていうか……アリサちゃんだけじゃないかな。私だってシユウさんとデュエルしたいし、手取り足取り教えてもらい

たいのに。

——って別に手取り足取りといっても別に変な意味じゃないからね。そそのその丁寧に教えてもらいたいって意味であって直に触れ合いながらみたいなことでは全くなく……！

「……何を百面相しとるのだ？」

「にやツ！」

聞こえた声に反射的に反応すると、そこにはどことなく呆れた顔をしたディアーチェの姿があった。日頃は制服姿を見ることが多いけれど、今日の服装は落ち着いた感じの私服だ。だけど今の私はそんなことを気にしている暇はなく……

「デデディアーチェ、いつからそこに!？」

「今しがただが……何をそんなに慌てておるのだ？ 顔が赤いようだがもしや熱でも……」

「ううん、大丈夫！ 大丈夫だから心配しないで！」

シヨウさんとあんなことやこんなことをしたいな、みたいに考えてたとか言ったら絶対にディアーチェから真昼間から何を考えておるのだ！ って怒られる。というか、それ以前に恥ずかしすぎてそんなこと言えるわけがない。

「なら良いが……本当に大丈夫なのだな？」

「う、うん」

「そうか、ならばこれ以上は何も言わぬことにしよう。だが今後外出中に体調が悪くなったなら迷わず周りを頼るのだぞ。貴様が倒れた方が周囲の者は心配するのだからな」

私達と比べると尊大な口調で話すディアーチェが王さまといった愛称で呼ばれて慕われるのは、きつと今みたいに周囲のことを気遣うからなんだろう。

素直じゃなさそうな一面があるように思えるけど、こういうときはアリサちゃんと違ってすんなりと言えるんだ。アリサちゃんだったら別にあんたのためじゃないんだから、とか顔を赤らめながら言いそうだし。

「今度は何を笑っているのだ？」

「ううん、別に何でもないよ。ディアーチエは優しいなって思っただけ」

「な、何を言っているのだ貴様は。別に我は優しくなどしておらぬ。優しいというのは貴様のことをいつも心配しておるくろひよこのよな者のことを言うのだ！」

くろひよこって確かフェイトちゃんのことだよ。確かにフェイトちゃんはいつも自分よりも周りを気遣うから優しい。

でもディアーチエも優しいと思うんだけどな。アマタさん達の特訓だつてディアーチエがお膳立てしてくれたからスムーズに進んだようなものだし。けどこれ以上言うとな怒りそうだからやめておこう。

「確かにそうかも……そういえば、ディアーチエがひとりって珍しいね。何か用事でもあるの？」

「いや別に用事と呼べるようなものはない。今日は単純にひとりの時間を過ごしておるだけだ。同じ場所に住んでおったり、同じ学び舎に通つてはおるが、我らにもそれぞれの付き合いや趣味といったものがあるからな」

「そっか、それもそうだね」

「貴様こそ何をしておるのだ？ そちらも珍しくひとりのようだが」
「まあ……簡単に言えばディアーチエと同じかな。アリサちゃんやすずかちゃんは習い事があつたりするし、フェイトちゃん達はお店の手伝いがあつたりするから。だから私は翠屋に行つてまつたりと過ごしながら今日の予定を考えようかなつて」

自分の家で考えてもいいけど、家に居るとお兄ちゃんやお姉ちゃんが剣の修行をしないかかって誘つてきたりする。昔から度々教わってきたから嫌ではないけど、今は迫りつつあるブレイブグランプリのことを優先して考えたいのが素直な気持ちだ。

とはいえ、翠屋が忙しそうなら手伝おうかなとは思うけど。翠屋の手伝いをするのは嫌いじゃないし、翠屋の娘でもあるしね。今はまだはつきりとは分からないけど、将来的に翠屋を継ぐことは十分にありそうだから手伝いをして損はないから。

「貴様も翠屋へ行くのか。ならば我と同じだな」

「え……ディアーチェも？」

「その意外そうな反応は何だ？ 我とて喫茶店のひとつやふたつ行くことはある。まあ行くとしても翠屋ばかりだがな。桃子殿の作るお菓子はこの街でも別格の美味さ故……」

そういう風に言ってもらえるのは娘として嬉しく思うけど、他にも美味しいお店はたくさんあると思うんだけどな。まあディアーチェはグランツ研究所の台所を任せられてるし、それに見合った腕前があるから味覚も私より優れてるのかもしれないけど。

「じゃあ一緒に行かない？」

「貴様とか？」

「だってあんまりディアーチェとこうして話したことってないし、せっかくの機会だから色々と話してみたいんだけど……ダメかな？」

「む……まあ目的地も一緒だからな。別に構わん……こやつ、シユテルとはあまり似ておらぬと思っておったが、頼みごとをする時の目遣いは似ておるのだな」

「何かブツブツ言ってるみたいだけど？」

「気にするな。ひとりで過ごそうと思っておった心を切り替えておっただけだ。他意はない」

ディアーチェの場合、別に自己暗示みたいなことしなくても気持ち切り替える気がするけど……本人が他意はないって言ってるんだから信じるべきだよな。陰口を叩くようなことをした覚えはないし、ディアーチェは陰口を叩くような性格でもないんだから。

そう思った私はそれ以上ツツコむことはせず、ディアーチェと一緒に歩き始めた。制服姿ばかり見てきたので私服姿のディアーチェはやっぱり新鮮に思う。でも何ていうか、はやてちゃんが着てそうな服だから見慣れてると言えば見慣れているような……。性格はともかく、ふたりって見た目はそっくりだよな。

「先ほどから何やらこちらを見ているようだが、我の顔に何か付いておるのか？」

「う、ううん……制服着てる印象が強かったからちよつと」

「ふむ。別に制服でも良かったのだが……まあ偶にはな」

「偶について……学校がない日は制服は着なくてもいいと思うんだけどなあ。ディアーチエだって可愛い服着たいと思うでしょ？」

「べ、別に可愛くなくても……まあ周囲の目を気にしないわけでもないが。とはいえ……私服で街をうろついて小鴉にでも会おうものなら」

目に見て分かるほどげんなりするディアーチエを見てみると、彼女の考えていることが嫌でも想像できてしまう。

はやてちゃんって私とかにはそうでもないけど、一部の人にはお茶目な一面を出すよね。具体的に言えば、ディアーチエとか……あとはショウさん。……前から交流があるのは分かるけど、あの距離感で話すのは女の子としてどうなのかな。兄妹みたいなものだって考えれば納得できなくもないけど、はやてちゃんを見ている限りお兄ちゃんとして見てる気はあまりしないし。

「あはは……はやてちゃんもディアーチエともっと仲良くなりたいたいだと思うよ」

「それは分かっておる……が、あやつの接し方は過程を飛ばし過ぎであろう。この国には親しき仲にも礼儀ありという言葉があるのだから、もう少し段階を踏んで距離を詰めるべきなのだ」

「言うとおりだとは思うけど……」

はやてちゃんも八神堂の店長をしているとはいえ、年齢的には私とそう変わらないんだよね。

だから誰かに甘えたいとか、スキンシップを取りたいという気持ちは分かるわけで……私も割とみんなとの距離感近い気がするし。まあはやてちゃんみたいに突発的に抱き着いたりはしないけど。

このままディアーチエの愚痴を聞いてあげてもいいけど、せっかく一緒に居るんだからもっと別なことを聞きたいな。例えばブレイブデュエルのこととか……あとはショウさんのこととか。昔から付き合ひがあるらしいし……よし、それとなく話を逸らして行こう。

「えつと……聞いてて思ったけど、ディアーチエって私よりも日本語にうるさいというか詳しくそうだね。私とか親しき中にも礼儀あ

りって言葉は知ってても、すんなりと口から出てくることはあまりなさそうだし」

「私もあまり使おうとは思わんがな。四字熟語やことわざを頻繁に使って話す者を好む者はそうはおらんだろうし。まあ貴様よりも日本語に詳しいのは認めるがな。飛び級しておるとはいえ、我は中学生だ。小学生の貴様より詳しくなければ笑われてしまう」

確かに小学生よりも勉強ができない中学生というのは一般的にはいないだろう。ただ年々勉強する範囲とか変わってるらしいし、一部分なら話は違ってくるのかも。

ただ……たとえばディアーチエと同じ学年だったとしてもテストで勝てる気はしないかな。理系はともかく文系はあまり得意じゃないし。

「それもそうだね……でも確かディアーチエとかシユテル達って留学生なんだよね？ 会った時から今の感じだったから疑問に思わなかったけど、改めて考えると日本語上手だよな」

「まあ我やシユテル達は幼い頃はショウウの叔母君……レーネ殿というのが……その方に色々と教わって育ったからな。今ではないに等しいが……あの頃はレーネ殿が空いておらぬ時はショウウにもあれこれと聞いたものだ。最も聞いておったのはシユテルだったような気がするが……何だその顔は？」

「え、いや……その、ちょっと羨ましいなと思って。お母さんから聞いた話なんだけど、私も小さい頃にショウウさんとかショウウさんのご両親に会ってたらしいんだけど、そのときの記憶が全くなくて」

「それは無理もない話であろう。我とて覚えておるのは物心をついてからのことだけだ。それよりも前に会ったと聞いたことはあるが我の記憶にはない。ショウウならば覚えておるかもしれんが……物心をつく前の話なぞ聞いても恥ずかしい思いをするだろう。聞こうとは思わん」

た、確かにお母さんから聞いた話だと私はショウウさんのお、お嫁さんになるとか言ったららしいし……ショウウさんとの年齢差を考えると、下手したらまだオムツとかしてる時の私を見られてる可能性もあ

るんだよね。そのときの話なんて聞いたらその場に留まっていられる自信ないよ。

「うん……とは言っても個人的に気になりもするんだけどね。シヨウさんとはなんだかんだで顔を合わせる機会もあるわけだし。昔の話をされたときに分からないのもね……どうせ話すのなら楽しく話したいし。それに……みんなの居る前でお母さんとかから突然バラされる慌てそうだから」

「ふむ、一理ありはするが……それにしても、貴様は……その、なんだ」「何?」

「い、いや……別に何でもない。気にするな」

「えー、そういう風に言われると逆に気になっちゃうよ」

これがシヨウさんに絡んでる時のシユテルやはやてちゃんだったら……触らぬ神に祟りなしということに気にしないでおく。

でもディアーチェって一部を除けば割と何でも言いそうな感じがするし、言い淀まれると気になるのは当然だよ。言い淀むってことは人を喜ばせるような言葉ではない可能性もあるけど……

「ええい、なぜ抱き着いてくるのだ。我はちびひよこやくろひよこではないぞー!」

「にやはは……ごめん、つい」

「つい、ではない。まったく……人懐っこいことは悪いことではないが、もう少し相手を選ばぬか。……もしや貴様、異性にもそのような振る舞いをしておるのではなからうな?」

「し、してないよ! シユテルやはやてちゃんみたいにシヨウさんに抱き着いたりできないもん。……恥ずかしいし」

その……してみたくないのかと言われたらしてみたいとは思っちゃうけど。シユテルやはやてちゃん達が抱き着いてるところを見たら何ていうかもやつとした感じがしたり、羨ましいみたいな気持ち芽生えなくもないけど。

でもシヨウさんとは顔を合わせるだけで緊張するときはあるし、優しくされたりすると顔が凄く熱くなるのが現状。触れ合ったりしたら……考えただけで恥ずかしくて死にそうだよ。嬉しくもあるけど。

「……誰もシヨウとは言っておらんのだが？」

「え、いや、その……!?!」

「貴様……前々から思っておったが、シヨウのことをす、すすす……好いておるのか？」

「ななな何言ってるの!? ベ、別にシヨウさんのことをそんな風に思ってるなんか……ブレイブデュエルを教えてくれた人だから身近な人ではあるし、好きかと言われたら好きではあるけど。そういうディアーチエだつてシヨウさんのこと好きなんじゃないの？」

「なっ——貴様の方こそ何を言っておるのだ!? 別に我はシヨウをそのような目で見ておらぬ。昔から付き合いがあるが故に親しいのは認めるが、断じて勘繰られるような仲ではない」

「いやいや、勘繰られる仲だと思っただけ。割かし言動にシヨウさんのこと分かってますよ感があったりするし。まあ昔から付き合いがあるから性格を分かっているだけかもしれないけど……どうでもいい相手のことを考えて顔を赤くしたりするかな。」

「何だその疑っておるような目は。仮に、仮にだがもし貴様の思うようなことが現実であったとしても貴様には関係のない話であろう。別にシヨウのことをどうとも思っていないと言っただけだからな!」

「それは……! ……そうだけど。………ねえディアーチエ、これ以上この話をしたところでお互い得はしないし、翠屋も見えてきたから別のことを話そうよ」

「うむ……せつかくシユテルや小鴉らがおらんだ。ゆっくりとした時を過ぐすとしてよう」

第34話 「憧れの人」

「……何度食べても素晴らしい味だ」

と、目の前に座っているディアーチエが口にする。

ここに至る経緯を説明すると、私とディアーチエは翠屋に到着してそれぞれ注文をした。まあ飲み物が違うだけで頼んだのはお互いシュークリームなんだけど。お母さんのお菓子は何でも美味しいけど、やっぱりシュークリームが1番だし。

「ディアーチエもそんな風に頬を緩めて食べるんだね」

「む、人の食べている姿をあまり見るでない……というか、貴様は私の事を何だと思っておるのだ。確かに同年代よりは料理ができると自負はしておる。故にそれなりに味覚も優れているとは思うが、我よりも優れた腕を持つ人間は世の中に五万と居るのだ。まあこれほど美味なシュークリームを作れるパティシエはそうは居らんだろうがな」

「そこまで褒められると……何か娘として恥ずかしいね」

「何を恥ずかしがることがある。桃子殿は母親としてもパティシエとしても優れたお方ぞ。誇っても良いくらいだ……私の母君もあのような方であつたなら」

何だか頭を抱えてるけど……ディアーチエのお母さんって悪い部分でもある人なのかな。ディアーチエの性格的に言葉遣いはあれかもしれないけど、良いお母さんな気がするんだけど。

「会ったことはないからあれだけど、私としてはディアーチエのお母さんなんだから良いお母さんな気がするよ」

「いや、まあ……良い母君ではありはするのだが。その、なんだ……意外とユーモアに溢れる人だな。顔を合わせる度にシヨ、シヨウとの関係は進んでおるのかなどと聞いてくるのだ」

「それは……うん、大変だね。私も何となく分かるよ。私のお母さんもたまにだけどそういうこと言ってくるし」

「ふむ……母親というのはどこも似たようなものなのかもしれないな。子供の恋愛にすぐ首を突っ込みたがる」

まあ義理とはいえ将来的に自分の子供になるわけだから気になる

のは分かるけどね。ただ私達はまだ結婚とかできる年齢でもないんだから首を突っ込むのは早いと思う。

その……誰かと付き合い始めたりしたらアドバイスとかほしいけど。その前に仲良くなるためにどうしたらいいのかって相談に乗ってほしいとも思うけど。

「そうだね。でも……私はお母さんみたいになりたいって思ったりもするよ」

今言っていたように子供の恋愛に首を突っ込むような発言をする親にはなりたくないとは思わないけど。でも自分が母親になつたりしたら気持ちにも変化はある気がするし、そのときになってみないと分からないかな。まあまだ時間はあるんだし、今は深く考えないようにしよう。

「まあ子供が親に憧れるのは無理もない話だからな。基本的に良い親であれば尚更……我には母君以外にも目標としたい方が居たりもするが」

「え、だれだれ?」

「そこまで食いつかれると逆に話にくいのだが……まあいい。我が母君以外に目標としておるのは明華殿だ。貴様は昔の記憶はあまりないと言っておったから補足するが、明華殿というのはシヨウの母君だ」

シヨウさんのお母さん? ……小さい頃にシヨウさんだけうちに来るってことはないだろうし、多分会ってるんだだろうな。シヨウさんとの記憶も忘れてるだけに明華さんって人の顔もまったく分からないけど。

「へえ……ねえディアーチェ、シヨウさんのお母さんってどういう人なの?」

「簡潔に言ってしまうば……」

そのとき、店内に客の来店を知らせるベルが響いた。別におかしなことじゃないので私は気にしなかったけど、向かい側に座っているディアーチェは入口の方を見たまま固まっている。

シユテルやはやてちゃんでも来たのかな、と考えもしたけど、ディ

アーチエの顔を見る限りそのふたりではないようだ。もしもそのふたりならここまで驚いた顔はしないだろう。

振り返って確認してみると、そこにはひとりだけの女性の姿があった。肩に掛からない程度に整えられた綺麗な黒髪、作り物なんじやないかと思うほど整った顔立ちと鋭さのある目は人の目を惹きつけるのと同時に近寄りがたい雰囲気を出している。背丈は長身ですらっとしていて、女性の象徴的な部分はきっちり出ている。黒のジャケットとパンツスタイルということもあって、女性だけど実にカッコいいと思える人だ。

「あまり人が居なさそうな時間帯に顔を出したつもりだが、そこそこ繁盛しているようだな……ん？」

こちらの視線に気が付いたのか、黒髪の女性の視線が私達の方へと向く。睨まれるのではないかと思っただけの間、彼女は逆に優しい気な笑みを浮かべた。クールな外見も相まって破壊力抜群である。きつとギャップというのはこういうことを言うに違いない。

「誰かと思えばディアーチエか。こうして顔を合わせるのは久しぶりだが……やはり子供の成長というのは早いものだ。前に会った時よりも綺麗になった」

「え、えっと……きよ、恐縮です」

「何をかしまっているんだ。他人行儀な間柄でもないだろうに」

そう言って女性はディアーチエの頭を撫でる。私の知るディアーチエなら恥ずかしがってやめてほしいと騒ぎそうどころだが、今回に限っては赤面はしてるけどされるがままになっている。いったいこの人は誰なんだろう？

「おや……ああ、なのはちゃんか。久しぶりだね」

「えーと……あの」

「その様子だと覚えてはいないか。まあ無理もない、私がなのはちゃんに会ったのはずいぶん前のことだからな。私は夜月明華、よろしく」

「あ、高町なのはです。こちらこそ、よろしくお願いします」
頭を下げるのと同時にある考えが頭を過ぎる。

あれ……明華って名前どこかで聞いたような。それもほんの少し前に……それに夜月。もしかして……もしかしてだけど、この人って……。

「まままさか、シヨウさんのお母さん!？」

「うん? 確かに私にはシヨウという息子がいるよ」

「あ、あの……いつもシヨウさんにはお世話になってます!」

なななんてこんなところにシヨウさんのお母さんが居るの!？」

いやいや、前にシヨウさんがシヨウさんのお母さんは私のお母さんと友達だ……みたいに言ってたよね。って、冷静な自分が居るのがまだ救いと言いますか……。

というか、シヨウさんのお母さん綺麗過ぎるよ!

シヨウさんはディアーチエ達みたいに飛び級してないはず。……これが中学生の子供が居る母親なの? 私のお母さんもいつまでも変わらないね、とか言われるし、フェイトちゃん達のお母さんとかも若いけどさ。シヨウさんのお母さんはその中でもトップなんじゃないかな。シヨウさんを産むのが早かっただけかもしれないけど。それにしても……何でか直視できない。

緊張してるのはあるけど、それ以上に顔立ちとかにシヨウさんと似てるところがあるせいとか何とも言えない気持ちになる。それを抜いても普通にカッコいいし。カッコよさがなくても綺麗というか……自分が何を考えてるのか分からなくなってきた。

「ふふ、そんなに固くならなくて構わないよ。まあ礼儀正しい子は嫌いじゃないがね」

そう言っつて明華さんは私の頭を優しく撫で始める。お母さんとかに頭を撫でてもらうことはあるけど、それとは違って……でもどこか似てて気持ちが悪く落ち着く。明華さんもお母さんもパティシエだから香りが似ているのかもしれない。

「あら……明華じゃない。久しぶりね、急にどうしたの?」

「久しぶりだな桃子。どうしたと言われてもな……仕事でこっちに來ているんだが、少し時間が空いたから立ち寄っただけさ」

フロアに顔を出したお母さんが会話に入ってきたこともあって、明

華さんの手は私の頭から離れる。名残惜しい気持ちがないわけじゃないけど、明華さんが会いに来たのはお母さんだろうし、私には私のお母さんが居るんだから何も言ったりしない。

というか……いま口に出したりしたらお母さんがいじけるか、もしくははからかってくるに決まってる。ただでさえ、最近はずぐシヨウさんの名前を出してなのはのこを弄ってくるし。あまり自分からボ口を出さないようにしないと。

「そうなの。ふふ、たまに電話とかで話してはいるけど顔が見れて嬉しいわ。……ちよつと？せたんじやない？」

「瘦せたんじやなく引き締めたんだ。前よりも自分の時間が持てるようになったから、昔ほどではないが暇を見つけて少しやっているからな」

「ならいいんだけど……やり過ぎて昔に逆戻りしないようにね」

「私も昔ほど若くはないし、今や中学生の息子が居る母親だ。そのうえ仕事だつてあるんだから逆戻りできるほど体は苛められんさ」

お母さんや明華さんは普通に話してるだけなんだろうけど……何ていうか、私の目からすると明華さんともかくお母さんはいつもより若く見えるような。雰囲気的にお母さんって感じよりも明華さんの友達つて感じが強い気がするし。

「本当かしら？」

「疑われるのは少々心外だな」

「そう言うけど、シヨウくんは今こっちでレーネさんと暮らしてるでしょ。明華の旦那さんがどういう人か知ってはいるけど、明華の能力を考えると彼ひとりくらい問題ない気がするし……まあそんなことよりシヨウくんとの仲の方が心配なんだけど」

え……シヨウさんと明華さんの仲って悪いのかな。前にシヨウさんが明華さんの話をしてた時はそんなに嫌そうな顔はしてなかったというか普通に話してたと思うけど。

「シヨウくんとはもう会ったの？」

「いや会ってはないし、会う予定もない」

キツパリ言っちゃった!？」

私はシヨウさんのこととか明華さんのこととかまだまだ知らないところはたくさんあるけど、でも普通離れて暮らしてる子供とは会いたいと思うのが親なんじゃないのかな。明華さんの表情まったく変わってないというか、至って冷静なんだけど。

「あなたね……こつちに顔を出してくれるのは嬉しいけど、昔と違って今は別々に暮らしてるんだから時間があるなら会いに行くべきでしょう」

「桃子の言うことも一理あるが……日本でレーネと暮らすと決めたのはあの子だ。それにあの子ももう中学生、他の同年代よりは反抗的な性格はしていかないと思うがそれでも年頃だ。あまり構い過ぎるのはかえって煙たがれるだろう」

「それは……」
「心配するな。今度またこつちに來るつもりだ。そのときは今回と違ってゆつくりと出来るはずだ。あの子とはそのときにちゃんと話すさ」

明華さんの浮かべたクールだけど優しい笑みを見れば、シヨウさんのことを大切に思っているのは十分に理解できる。お母さんも安心したのか、時間があるのならゆつくりして行ってと言って仕事に戻って行った。

「さて……なのはちゃんにディアーチエ」

「は、はいー」

「な、何でしょう？」

「私は今日中に飛行機に乗らなければならぬわけだが、それもまだ時間がある。ひとりでも過ごしても良いのだが……最近の息子のことも知っていきそうなふたりとこうして出会えたわけだ。よければ相席させてもらいたいんだが？」

私としては断る理由もない。むしろ私の知らないシヨウさんのこととかを聞けるチャンスでもあるし、今後また顔を合わせることもあるだろう。

ディアーチエも同じ判断に至ったのか、私達は顔を見合わせるのと同時に視線を明華さんに戻して肯定の返事をする。明華さんは笑顔

でありがとうと言いなながら空いている席に腰を下ろした。

「何やらふたりともずいぶん緊張しているようだが……まあ無理もないか。私は桃子のように話しやすい大人ではないからな」

「い、いえ別にそのようなことは。その……急だったもので何を話したら良いのかとあれこれ考えているだけです」

「私も……何を話したらいいのかなと思っっているといえますか」

「それもそうか……と言っても、さすがに私と君達とでは普段話す内容も違うだろうからな。私達の共通の話題となると……真っ先に浮かぶのはシヨウか」

シヨウさんの名前が言われた瞬間、私の顔は一気に熱くなった。ディアーチェの顔も赤くなっている。

た、確かに共通の話題ではあるけど、いくら何でも直球過ぎるとい
うか……シヨウさんのお母さんに話せるほどシヨウさんと何かした
覚えもないよ。シヨウさんとしたことなんてブレイブデュエルとか
ブレイブデュエルとかブレイブデュエルとか……ブレイブデュエル
に関する事しかやつてる気がしない!?

「ああ明華殿、シヨウの話は……その、本人から聞けば良いではないで
すか」

「そのとおりではあるし、実際にちよくちよく電話はしている……が、
あの子は必要以上のことを言おうとはしないからな。別視点からの
話も聞いてみたいと思ってもおかしくないだろう？ 特に君達ふた
りの話は個人的に興味があるからね」

「どういう意味です?」

「簡潔に言えば……ディアーチェはシヨウの許嫁にという話が出てこ
とがあるし、なのはちゃん小さい頃にシヨウのお嫁さんになると
言っていたからかな」

さらりとだけ強烈な一撃に私とディアーチェの顔は爆発的に赤
味を増す。シヨウさんもさらりと何かしら言うことがある人だけど、
明華さんは大人の余裕もあるせいかシヨウさんよりも格段に鋭い。

「そそその話はすでになかったことになっているではありませぬか。
べ、別に我はあやつのことなど何とも……というか、貴様はそのよう

なことを言っておったのか！」

「何でここで私の振るの!? わ、私の場合は今よりもずっと小さい頃の話だし、小さい時って誰かのお嫁さんになるって割かし言うよ。そもそも私はそのときのこと覚えてないし！ あ、明華さんも急に変なこと言わないでくださいよ！」

「ああ、そうだね。すまないことをした」

本当にそう思ってるのかな。何だか笑ってるような気もするし、内心ではあれこれ考えてるんじゃないか……突いたら余計に大変なことになりそうだからこれ以上は言わないでおくけど。

「あの子のこと以外で話すとすると……うーん、私はあまり話題が多くない方だからな」

「えーと、じゃあブレイブデュエルのこととか」

「ブレイブデュエルか……話せなくはないが、私は開発に関わった人間でもないからね。実際にしてみたこともない。まあ機会があればしてみようとは思いますが」

「ではお菓子のことなどはどうでしょう？ 我は料理や菓子作りをしておる身ですし、こやつも翠屋の娘なら手伝いをするということもあるはず。機会があれば菓子を作ることもあるでしょうし」

「それは構わないし私としても話しやすい内容ではあるが……デイーチエはともかく、なのはちゃんにあれこれ教えると桃子からあとで小言を言われなにか心配になるな。私と桃子とでは作り方が違うものもあるだろうし」

「大丈夫です、私あんまりお菓子作らないので！」

「あのな……それは力強く言うことではないぞ」

第35話 「真夏のデート？」

はくい、皆さんごきげんよう。

グランツ研究所の美人姉妹の妹ことキリエ・フローリアンよ。長いこと出番がなかったけど、別にサボってたわけじゃないからね。私はなのはちゃん達と違って高校生だし、グランツ研究所のお手伝いとか色々あるの。そう色々ね♪

さてさて、冗談はこのへんにして話を進めましょうか。

今日はとある休日、ブレイブデュエルが本格稼働してから初めての大型イベント《ブレイブグランプリ》も日に日に迫ってきてるわ。真夏の暑さにも負けないくらいに多くのデュエリストが今日も来るべきその日のために腕を磨いてるに違いないわね。

け・れ・ど……今日はグランプリの話じゃないの。だって私は今日はシヨウ君とデートなんだもの。まあお姉ちゃんもいるんだけど、そのへんは気にする必要はないわ。だって私はお姉ちゃんと違って欲望に素直だから！

「ねえシヨウ君、お姉さんアイスが食べたいんだけど〜」

「なっ……何をやっているんですかキリエ！」

「見ての通りシヨウ君の腕に抱き着いてるだけよん」

もうお姉ちゃんったら自分が抱き着いたわけでもないのに顔を真っ赤にしちゃって可愛いんだから。もっといじめたくなっちゃう。

それにしても……あんなに小さかったシヨウ君がこんなに大きくなるなんてね。今じゃ私が見上げないといけなくなっちゃったわ。まあ私としては小さくて可愛い子も良いけど見上げる方が好きかしら。背伸びしながらキスとか乙女として憧れちゃうし……

「そんなの見れば分かります。いいから離れてください！」

「もう、そんなに怒ってるとしわが増えるわよ」

「え、そうなんですか!? ……って、誰が怒らせてると思ってるんですか！」

そんなの私に決まってるんじゃない。けれど私としてはシヨウ君の彼女でもないお姉ちゃんからあれこれ言われる筋合いはないと

思うのよね。まあ私もショウ君の彼女じゃないんだけど。だからショウ君から言われるのは仕方ないわ。言われても素直に聞くとは限らないけどね。

「アミタ、周りには人も居るんだから大人しくしてくれ」

「え、私が悪いんですか!?!」

「いや、悪くはないけど……アミタが反応すればするほどキリエが面白がるだけだから」

さすがはショウ君、お姉さんのことよく分かってるわ。お姉さん嬉しくなっちゃう。だから……もつと強く抱き着いてみたり

「なあキリエ」

「何かしらん?」

「何でさつきよりも引つ付くんだ?」

「それは、ショウ君がお姉さんのことよく理解してくれてるからそのお礼みたいな」

ショウ君だって年頃の男の子なんだから嬉しいくせに。自分で言うのもなんだけど私って可愛いし、スタイルだって良いんだから。つまりW・K・S……うん、そろそろ引かないと危険ね。ショウ君の目が段々冷たくなってきたし。正直に言うところとちよつとゾクゾクもしちゃうんだけど、さすがに嫌われる方が嫌だから。

「まったく……ショウ君も恥ずかしがり屋さんね。男の子なら嬉しい状況でしょうし。ちゃんとある胸だって当たってるんだから」

「一般的にはそうだろうがキリエみたいに毎度の如くされると何も感じなくなるんだよ。人間は慣れる生き物だからな」

「うん、ちよつと待つてくれるかしら。何だかその言い方だと私がする行為が良いものじゃなくて悪いものみたいに聞こえるんだけど」

「良いか悪いかで言えば悪いだろ」

「バツサリ!?!」

ひ、ひどいわ……私がただショウ君のことを誘惑してるように見せかけてお姉ちゃんが反応するのを楽しもうとしているだけなのに。でもこの程度で挫けるキリエ・フローリアンじゃないわ。

「もうひどいわねん、確かに周囲への配慮とか道徳的に悪いかもしれ

ないけど……男としては悪くないでしょ？」

「いや悪いけど」

「そ、即答!」

え、な、何で……私って美人だし体って十分に魅力的よね。あんまり自分でそういうこと言うのも正直なところどうかと思ってるけど、周囲からは可愛いだとか綺麗って言われたりすることもあるわけだから多少なりとも自信を持っていいはず。なのにどうしてシヨウ君からは不評なのかしら……

いったい私の何がいけないのかしら……確かに普段はふざけてばかりだけど、この前シヨウ君は私に私の良いところはそれなりに知ってるとか言ってくれたわよね。それに毎度の如く抱き着いたりしても本気で嫌そうにはしないというか、なんだかんだで相手はしてくれるわけだから嫌われてはいはず。

なのはどうして……単純に私がタイプじゃない？

うーん……何故かしら心がズキズキと痛むわ。まるで昔可愛がっていた男の子から「もう子供じゃないんだからお姉さんぶんなよな」って言われたみたい……例えてみたけど、これは何か違うわね。冷静に考えるとこの子も思春期を迎えたんだ、とか私のこと異性として見てるのねって思いそうだし。

「お姉さん悲しい……そんな風にシヨウ君を育てた覚えはないのに」

「育てられた覚えはないからな」

「ガク……ねえシヨウ君、せっかくのデートなんだし手くらい繋ぎましょうよ。ね?」

「ななな何を言ってるんですか!? い、いいですかキリエ、そういうのはこ、恋人同士がすることです。シヨウさんとキリエはそういう関係じゃないんですからするのは風紀的にもよくありません!」

はあ……我が姉ながらこの純情ぶりは可愛さを通り越して呆れてくるわ。本当は自分だってシヨウ君と手を繋いだり、腕を組んだりしたいくせに。顔の赤さから考えるとそこを通り越して昼間から考えちゃいけないレベルまで到達してる可能性もあるけど。

やれやれ、基本的に素直なくせに何でシヨウ君への想いは素直に言

えないのかしら。これじゃあ、いつまで経っても進展しないって言うのに。

私の見立てが正しければ、お姉ちゃんがショウ君を好きになったのは今に始まったことじゃないわ。あれは遡ること10年ほど前、ショウ君がまだ物心ついた頃の話。ショウ君と私達姉妹は一緒に遊ぶとどうか、私達がショウ君の面倒を見ていたわけだけど、そのときにお姉ちゃんはこう言ったわ……

『わたし、おおきくなったらショウくんのお嫁さんになります!』

正直私も小さかったからどうという経緯でそんなことになったのかは覚えていない。ただ主動だったのは私達姉妹でしょうからおままごとでもやっていたんじゃないかしら。それで1日中遊んでてショウ君のことが好きになってしまったお姉ちゃんはそういうセリフを口にしたんだと思う。

まあここだけ聞けばよくある昔話になるわけだけど……お姉ちゃんは今でもそのときのことを鮮明に覚えているというか、あの頃からずっとショウ君のことが好きなのよね。前にそのことに触れたら過敏に反応してたし。

ああ……何て純情なお姉ちゃん。純情すぎて高校生とは思えないわ。なのはちゃんやフェイトちゃん達にこの手の話をしたときくらい大人としての余裕がないし。今まで事あるごとに背中を押してきたけど全く効果がないのよね。私のやり方が悪いのかしら……仮にそうだとしても8割くらいはお姉ちゃんに責任があるはずだわ。

「キ、キリエ……急に黙っちゃいましたけどどうかしましたか? もしかしてお腹でも痛いんですか?」

さつきまで怒っていたのに何て優しいお姉ちゃんなの……やれやれ、もういつそのことショウ君から告白させるように動こうかしら。お姉ちゃんは私と違って真面目だからショウ君も邪険にはしないし、好きか嫌いかで言えば好きな方でしょうから。

というか、お姉ちゃんはこんだけ分かりやすいんだからショウ君に察しなさいと言いたい気分ね。でもショウ君は別に鈍い子じゃないしお姉ちゃんの気持ちに気が付いてるんじゃないや……それで知らない振

りをしているとしたら、もしかして好きな子が居るということ？

……ありえない話じゃないわね。不思議なことにシヨウ君の周りには美少女が揃っているし。まあその大半は年下なんだけど……もももしかしてシヨウ君は年下好きなのかしら。でも大体の子は小学生だし、それが好きということはロリコンということに。

でもそう考えると私やお姉ちゃんに見向きもしない理由の説明は出来るわ。単純に昔から馬鹿やってきたせいで私達を異性として見ていないだけという可能性ももちろんだけど。くっ……お姉さんをこんな迷惑させるなんてシヨウ君あなたって子は何てひどい子なの。

「大丈夫よお姉ちゃん、このあとのデートプランを考えていただけだから」

「なっ……私も居るんですからこ、これはデートなんかじゃありません。というか、何でそうあなたはいつもいつもそうなんですか。私の心配を返してください！」

「そっちが勝手にしたのに返せだなんて横暴ね。大体お姉ちゃんは頭が固すぎるわ。年頃の男女が一緒に出掛けているんだからこれはデートでしょ。ただシヨウ君が両手に華ってだけで……お姉ちゃんだってデートって思った方が楽しいでしょ？」

「そそそれは……い、いえでもデートとは本来1対1で行うものであって。……しかし、私達は知らない仲でもないですし、何より自分の中でそのように思うのは自由。ということとは……ああでもー」

ほんと……お姉ちゃんは可愛いわね。お姉ちゃんを見ているシヨウ君は「今日もアミタは元気だな」くらいの顔しかしてないから可哀そうにも思えてくるけど。

というか、お姉ちゃんはシヨウ君のどこに惚れたのかしら。今では背も高くなってるし、顔立ちも男らしくなってそこそこにイケメンだとは思うけど……お姉ちゃんが好きになったのは私達よりも小さい頃。今と違って素直で可愛かったのは認めるけど、気持ちとしては弟に向けるそれになるのが普通じゃないかしら。我が姉ながら不思議だわ……

「キリエ、アミタが好きなのは分かるがあまりからかってやるなよ」
「それは無理な相談かしらん。だってこれが私とお姉ちゃんのスキンシップだから。というか、あんまりストレートにお姉ちゃんが好きとか言われると私がシスコンみたいに聞こえるから遠慮してほしいわね」

「シスコンの気はあると思うんだが……」

「な、何を言ってるのかしら。そんな根拠……」

……………

……………あれこれ見られてきただけには言えないわね。よくよく考えてみると、私ってシヨウ君に結構恥ずかしい姿を見られてきてるんじゃないかしら。

お姉ちゃんとケンカしちゃってなかなか仲直りできずに泣いちやった時とか……熱を出したときに人恋しくなって寝るまで手を繋いでとこ言っちゃった時とか。それに……

『何でキリエは花を育ててるの?』

『それはわたしの担当だからよん。正直面倒臭かったりするんだけど……………』

『そっか……………でもずっとやってるんだからキリエは偉いよね。それに……………おれはキリエは育てた花好きだよ』

『え……………』

……………何であの時のことを私は思い出しちゃってるわけ!?

いや確かにあの時のことは私とシヨウ君だけの思い出ではあるけど、まだシヨウ君が小さい頃の話なのよ。身長だつて私だつて低いし。なのに何であの時の私はD・T・M——ドキドキでトキメキがマックスなの!?

というか、何で今ドキドキしてきているの。落ち着け、落ち着きなさいキリエ。あなたは妖艶さが売りなお姉さんでしょ。年下の男の子に負ける女じゃないわ。

「キリエ? ……何だか妙に顔が赤いが」

「な、何でもないわ。夏空の下、外に出てるんだから体温が上がってるだけよん!」

何で見透かしたかのように優しくしてくるの。普段は冷たいというか、無関心を決め込んだりするくせにこういうときだけ……昔から居てほしい時には居てくれる子だったけども。

ああそうよ、そうですね……あれこれ何でお姉ちゃんが惚れた理由が分からないとか言っただけど、どこに惚れたのかなんて分かってるわ。私にとつても最も付き合いの長い男の子なんだし……

でも……私の中にあるこの気持ちはお姉ちゃんのと違う。

シヨウ君は私にとつて弟みたいな子……それは今も昔も変わらないう。どんどん男らしくなっていくてるから私自身もその変化に戸惑ってるだけ。決してお姉ちゃんと同じ気持ちなんかじゃないわ……そう、決して。

だって私はお姉ちゃんをシヨウ君とくつつけようと考えるんだから。まあシユテル達でも良いかなって思ったりすることもあるけど、やっぱりお姉ちゃんは血の繋がった家族だしそこは鼻負しないとね。

「本当か？」

「本当も本当よん。というか、そんなに女の子の顔を覗き込むのはどうなのかしら。あんまり覗き込むようだとお姉さんが君の唇を奪っちゃうわよ♪」

「だ〜か〜ら〜あなたは何を言っているんですかキリエ！ 私はあなたをそんな風に育てた覚えはありませんよ。というか、私の目が黒いうちはそういうことは許しません！」

「じゃあお姉ちゃんがする？」

「ななななな……し、しませんよ！ 人の目だってあるんですから！」

「あらん、それは周りに人がいなかったらすることかしら？」

「——っ!? キリエ、いい加減にしないと怒りますよ！」

あのねお姉ちゃん、理解が追いついていないようだから言っただけで怒ってるわよ。

まったく……さっきから風紀を気にするような発言をしてるのにそれじゃダメじゃない。風紀お姉ちゃん《あみたん》の称号が泣くわよ。この場合は称号じゃなくて愛称かもしれないけど、まあ細かい

ところは置いてきましょ

「怒ると可愛い顔が台無しよん」

「怒らせてるのはあなたじゃないですか。それにキリエから言われてもあまり嬉しくありません！」

「あまりってことは少しは嬉しいのね……仕方ないわ、ならシヨウ君から言ってもらうことにしましょう」

「おい、さらりと人を巻き込むな」

「あら、その程度でそんなこと言っていると今日1日持たないわよ。だって今日は水着だつて買いに行く予定なんだから」

「え……ちよつ、キリエそんなこと私は聞いてませんよ!? そもそも、今日の予定は買い出しのはずですよ！」

「夕方までに戻ればいいんだから色々と回れるじゃない。今は夏なんだし水着を使う機会はあるでしょ。それ……お姉ちゃんだつて新しい水着ほしいんじゃない?」

「う……それは」

ここで言葉を詰まらせたあたり、私の見立て通り去年よりも大きくなってたみたいね。まあ私が大きくなってんだからお姉ちゃんが大きくなるのは必然とも言えるんだけど。え……どこがかって?

やくん、そんなの胸に決まってるじゃない♪

「というか、お姉ちゃん考えてみなさい。今日は合法的にシヨウ君を連れ回せるのよ。お姉ちゃんだつてシヨウ君と水着を選んだりしたいでしょ?」

「そ、それは……でもとても恥ずかしいです」

「まったく……見せたいくせにへタレなんだから。まあ水着は別としても服とかだつて一緒に見て回れるんだから色々やれることはあるのよん」

「な、なるほど」

「というわけで……今日のシヨウ君とのデート、一緒に楽しみましょうね」